Takaoka
National
College

22th
anniversary

高岡短期大学二十二年の歩み

第2部　資料編 ー創設から芸術文化学部の開設までー　国立大学法人 高岡短期大学

高岡短期大学
二十二年の歩み

第2部　資料編

ー創設から芸術文化学部の開設までー

22th
anniversary

2005年

国立大学法人 高岡短期大学

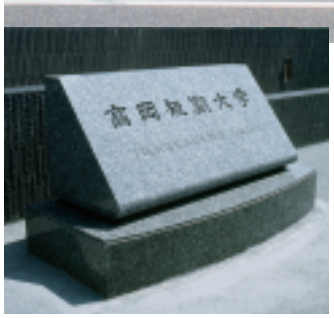
高岡短期大学二十二年の歩み

TNC

題字　西頭徳三学長

大学全景（西方から望む）

大学正面



講堂

TSUMAMA-HALL（エントランスホール）

大学正面

中庭

図書館

体育館

洗心苑

■教育・研究施設(1)

LL 教室

映像利用室

自習・教材作成室

CG ルーム

メデイアルーム

鋳造実験室

漆実技室Ⅰ

木工機械室

デザイン実験室(1)

■教育・研究施設(2)

全自動X線回折装置

EDS付き走査型電子顕微鏡

スパッタリング表面加飾装置

NMR

材料強度試験機

オートグラフ

■屋外施設

多目的グラウンド

テニスコート

■モニュメント

噴水モニュメント「玄黄」

開学10周年記念モニュメント「堯」

■福利・厚生施設

談話室

売店

食堂

厨房

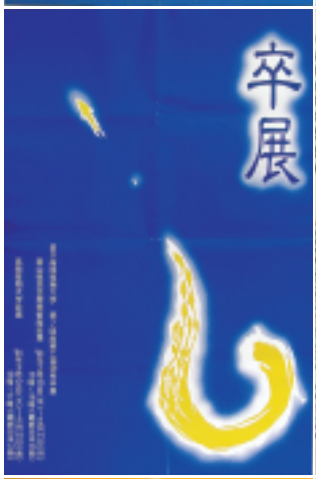
■卒業・修了制作展ポスター（第19回、第１回～第18回…次頁に続く）

第三回
卒展
国立高岡短期大学

SOSSUTSEIRI
第4回卒業制作展

卒展
GRADUATION WORKS
vol. 5
国立 高岡短期大学

卒展


卒展

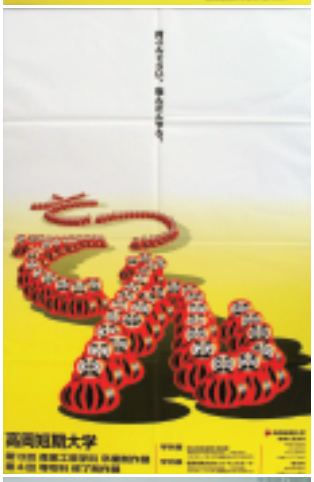
第八回
そうてん
国立高岡短期大学

第9回高岡短期大学卒業制作展

卒展
高岡短期大学

卒展

第十二回
卒業制作・修了制作展


高岡短期大学

卒展
高岡短期大学

卒展

卒展

■管理運営部門

学長室

副学長室（応接コーナー）

■事務部

事務部長室

庶務課

会計課

学生課

事業課

巻頭言

数値の背後に、
高岡短期大学の生き様をみる
―第２部資料編の発刊に当たって―

国立大学法人　富山大学
高岡短期大学部学長　西頭徳三

高岡短期大学創立22周年の記念誌発刊に当たり、二つの狙いがあった。ひとつは、高岡短期大学の関係者のみならず、誰もが「楽しく読める」ものにすること。もうひとつは、22年間の歩みに関する「資料」を出来るだけ収集すること、の二点であった。

前者に相当する『高岡短期大学二十二年の歩み―第１部回想編　二上キャンパスへの想い―』は、執筆者各位のご協力により、「当時を楽しく振り返られる」充実した内容となった。私自身も、高岡短期大学創設時の困難な状況やその後の血の滲むような努力については推測の域を出なかった。ところが、この歩みを読んで、往時の苦労を詳細に知ることができた。ここであらためて、執筆者の方々に感謝したい。

もうひとつの狙いである記念誌『高岡短期大学二十二年の歩み－第２部資料編―』は、文字どおり関係資料の集大成である。大学の変遷を前期と後期に大別して、できるだけ当時の資料を発掘・収集し、解説を加えたものである。その内容は22年間にわたる教育活動、カリキュラム編成、研究活動等、さらに庶務課から事業課までの「縁の下の力持ち」的役割まで非常に多岐にわたっている。

高岡短期大学の歴史には、大きく三つの画期がある。第一の画期は昭和41年５月の「富山大学評議会における工学部移転決議」であり、第二のそれは、昭和58年10月１日の地元の熱意が結実した「高岡短期大学の開学」である。そして、第三の画期は、平成15年５月の「富山県内国立三大学の再編・統合の合意」である。その結果、平成17年10月１日、高岡短期大学は４年制の「富山大学芸術文化学部」に衣替えして、新しい富山大学の最も特色ある学部として出発した。私は本誌に収められた数多くの数値を追いながら、その背後に教員・職員の弛まぬ努力や数多くの学生たちの生き様を想起した。是非、皆様にも、第一部と第二部を合わせ読むことで、高岡短期大学の果たしてきた役割を振り返っていただきたい。

このような教育・研究成果を挙げ得たのは、高岡短期大学の設立、それ以降の大学運営にご協力を賜った、富山県・高岡市など地元関係者、高岡短期大学に在職した教職員、そして卒業生・後援会の皆様のお陰である。ここに深謝申し上げたい。また、二冊の記念誌の発刊に当たり、編集に心血を注がれた横田勝教授をはじめ編集委員の皆様にもお礼を申し上げたい。

記念誌「高岡短期大学二十二年の歩み」
第２部　資料編－創設から芸術文化学部の開設まで－

目　　次

巻頭言　国立大学法人　富山大学　高岡短期大学部学長　西頭徳三 …… 9

1.　大学の変遷・前期

1.1　創設までの経緯 ……14
- 1.1.1　本学設立の趣旨
- 1.1.2　高岡地域大学設立協議会の設置
- 1.1.3　文部省に「短期高等教育機関設置(高岡市)に関する調査会」の設置
- 1.1.4　富山大学に「短期高等教育機関(高岡)の創設準備調査室」の設置
- 1.1.5　富山大学に「短期高等教育機関(高岡)創設準備室」の設置
- 1.1.6　文部省で「富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備会議」の開催

1.2　創設後の経緯 ……19
- 1.2.1　大学キャンパスの決定
- 1.2.2　高岡短期大学開学の準備
- 1.2.3　高岡短期大学の誕生
- 1.2.4　創設期の組織体制整備
- 1.2.5　初めて迎える新年度
- 1.2.6　最初の入学試験に向けて
- 1.2.7　第１期生の受入れ

2.　大学の変遷・後期

2.1　教育体制の変遷 ……24
- 2.1.1　学科の変遷「２学科から３学科に再編改組」
- 2.1.2　学科(本科)カリキュラムの編成
- 2.1.3　専攻科のカリキュラム改定
- 2.1.4　専攻科の変遷「１年制１専攻科から２年制３専攻科に再編改組」
  - 2.1.4.1　学科及び専攻科のカリキュラム改善検討
  - 2.1.4.2　専攻科再編改組とカリキュラム
  - 2.1.4.3　学士の学位取得
  - 2.1.4.4　専攻科学生の受入れ
  - 2.1.4.5　専攻科棟の新営

2.2　富山県内国立３大学の再編・統合 ……32

2.3　法人化への変遷 ……35
- 2.3.1　法人化準備の要点事項
- 2.3.2　中期計画・中期目標
- 2.3.3　基本組織、就業規則

2.4　教育活動 ……36
- 2.4.1　入学試験の変遷
  - 2.4.1.1　入学生募集要項の基本的概要
  - 2.4.1.2　入学試験の幾つかの変革
  - 2.4.1.3　私費外国人留学生入学試験の変遷
  - 2.4.1.4　専攻科入学試験の変遷
- 2.4.2　大学説明会・オープンキャンパスの変遷
- 2.4.3　高等学校と高岡短期大学との入学試験に関する懇談会の実施
- 2.4.4　高等学校訪問の実施
- 2.4.5　高岡短期大学生の動向調査報告ワーキンググループの発足と結果報告
- 2.4.6　入学志願者数および入学者数

2.5　歴代教職員と平成17年度における教員とその担当科目 ……39

2.6　現カリキュラムの紹介と変遷 ……41
- 2.6.1　基礎教育科目
- 2.6.2　過去の基礎教育科目の変遷
- 2.6.3　現カリキュラムの紹介と変遷
  - 2.6.3.1　産業造形学科
    - 2.6.3.1.1　金属工芸コース
    - 2.6.3.1.2　漆工芸コース
    - 2.6.3.1.3　木材工芸コース
  - 2.6.3.2　産業デザイン学科
  - 2.6.3.3　地域ビジネス学科
    - 2.6.3.3.1　経営コース
    - 2.6.3.3.2　情報コース
    - 2.6.3.3.3　国際・英語コース
    - 2.6.3.3.4　国際･中国語コース
  - 2.6.3.4　専攻科のカリキュラム
    - 2.6.3.4.1　専攻科の目標
    - 2.6.3.4.2　専攻科の歴史
    - 2.6.3.4.3　専攻科の開設授業科目

2.7　研究活動 ……61
2.7.1　科学研究費補助金および奨学寄付金
2.7.1.1　科学研究費補助金
2.7.1.2　奨学寄付金
2.7.2　民間等との共同研究および受託研究
2.7.3　文部科学省在外研究員･内地研究員､文化庁芸術家在外研修員、海外研究開発動向調査
2.7.4　高岡短期大学紀要の発行

2.8　学外教育活動、インターンシップ ……62
2.8.1　課外活動
2.8.2　インターンシップ

2.9　大学間友好協定国際交流 ……64
2.9.1　中国、大連外国語学院との交流
2.9.2　フィンランド､ラハティポリテクニクとの交流
2.9.3　アメリカ合衆国、ウェスタンオレゴン大学との友好協定

2.10　社会貢献 ……68
2.10.1　高岡短期大学開放センター
2.10.2　地域活動

2.11　図書館 ……69

2.12　保健管理センター ……71

2.13　その他 ……73
2.13.1　草創期の主な出来事
2.13.2　校友会
2.13.3　入学式・新入生合宿研修挙行日の変遷

3.　資料集

3.1　高岡短期大学前期の年表 ……76

3.2　庶務課 ……78
3.2.1　組織・機構
3.2.2　委員会
3.2.2.1　委員会等の名称および設置年月日
3.2.2.2　主な旧委員会の名称および廃止年月日
3.2.3　歴代役職員および教職員
3.2.3.1　歴代役職員
3.2.3.2　歴代教員
3.2.3.3　歴代事務職員
3.2.4　教職員数
3.2.5　図書館
3.2.5.1　蔵書数
3.2.5.2　利用者数
3.2.6　入学式および卒業式(後期)
3.2.7　国立大学法人化
3.2.8　富山県内国立３大学の再編・統合
3.2.9　年表(後期)

3.3　会計課 ……99
3.3.1　決算額
3.3.2　施設の概要
3.3.3　建物の平面図
3.3.4　年表(後期)

3.4　学生課 ……103
3.4.1　大学説明会およびオープンキャンパス参加者数(後期)
3.4.2　入学志願者及び入学者
3.4.2.1　学科
3.4.2.2　専攻科
3.4.3　学生定員及び現員(後期)
3.4.4　出身地別学生数(後期)
3.4.5　授業料免除および奨学金(後期)
3.4.5.1　授業料免除許可者数
3.4.5.2　日本育英会･日本学生支援機構奨学生採用数
3.4.6　卒業生・修了生の進路(後期)
3.4.6.1　本科
3.4.6.2　専攻科
3.4.6.3　専攻科修了者「学士」学位取得状況
3.4.7　インターンシップ一覧
3.4.8　留学生の交流状況
3.4.9　学科教育課程
3.4.10　専攻教育課程
3.4.11　入試日程(後期)
3.4.12　行事日程(後期)

3.5　事業課 ……119
3.5.1　公開講座(後期)
3.5.2　施設開放状況(後期)
3.5.3　展示公開事業(後期)
3.5.4　テレビ公開講座
3.5.5　民間との共同研究
3.5.6　研究員等の派遣(後期)
3.5.6.1　文部省・文部科学省在外研究員
3.5.6.2　文部省・内地研究員
3.5.7　科学研究費補助金(後期)
3.5.8　奨学寄附金受入状況一覧(後期)
3.5.9　年表(後期)

補遺　学部長就任の挨拶にかえて　富山大学　芸術文化学部長　前田一樹 ……135

編集後記 ……136

第１章
大学の変遷・前期

本学の開学から10周年を迎えた平成５年10月１日までの大学の変遷は、記念誌「高岡短期大学十年史」に詳しく掲載されている。今回発刊した記念誌「高岡短期大学二十二年の歩み」では平成５年10月１日までの期間を高岡短期大学の前期とし、それ以降、現在に至るまでの12年間を高岡短期大学の後期と区分けすることにした。したがって本書では「高岡短期大学十年史」に掲載された資料のうち、重要と思われるものを本書の「3.資料集」に再掲するとともに、本学の創設前後における重要な事項を抜粋してここに掲載した。

1.1　創設までの経緯

1.1.1　本学設立の趣旨

本学は、地域の多様な要請に積極的に応え、広く地域社会に対して「開かれた特色ある短期大学」を志向し、今後の我が国短期大学の運営及び教育研究の改善に資することを目的として設置された。本学では、第１に職業に必要な能力を育成すること、第２には職業人の再教育や生涯教育に対してメニューを提供することを目的としている。それには地域社会との密接な関連、職業人の再教育、生涯教育の機会の提供、地域の文化事業、社会・体育事業への開放と協力などを行う。これらを基礎とする本学の特色としては、次のような点が挙げられる。

⑴地域の要請に応える学科構成
⑵社会人の積極的受入れ
⑶履修方法の弾力化
　①　単位の互換性
　②　専修学校との相互乗入れ
　③　社会体育の学習を容認
　④　企業の実務を学習
　⑤　学科の充実をまって昼夜開講し、学生の受講弾力化
⑷優秀な実務家等の教官への任用
⑸地域との連携の推進

1.1.2　高岡地域大学設立協議会の設置

種々の曲折を経て国立の４年制大学の設置は、極めて困難との判断により、いわゆるコミュニテイーカレッジを設立するため「高岡地域大学設立に関する陳情書」が昭和52年12月に富山県知事中田幸吉、富山県議会議長伏脇松太郎、高岡市長堀健治、高岡市議会議長林延の連名で文部省に提出された。その内容は、「高岡地域大学設立協議会を設置し、検討を進めているので、昭和53年度文部省予算において設立準備費の計上をお願いしたい」というものであった。

当時、文部省に提出された陳情書は次のとおりである。

高岡地域大学設立に関する陳情書

富山県高岡地域は、古来より商工業及びそれに関わる文教都市として発達し、第３次全国総合開発計画で企図された定住圏の中核都市として、今後も本県西部地域の発展を担う重要な機能を果すことを期待いたしております。

このような観点から、近時新しく開かれた大学として、わが国高等教育において特異な役割を果たすことが期待されている、いわゆるコミュニティ・カレッジを伝統工芸や経営実務など、この地域に相応しい内容をもって設立するため、52年度において調査を実施のうえ、53年度予算において設立準備費を計上されるようお願いいたします。なお、その内容につきましては、現在県内関係各界を網羅した「高岡地域大学設立協議会」を設置し、検討いたしておりまして、成案を得次第更に御要望申し上げたく存じておりますので、何卒宣しくお願いいたします。

昭和52年12月22日
富山県知事　　中田幸吉
富山県議会議長　伏脇松太郎
高岡市長　　堀　健治
高岡市議会議長　林　延

53年３月に「高岡地域大学設立協議会」の成案が成り「国立高岡産業短期大学設立に関する陳情書」が文部省に提出された。その内容の全文を次に示す。

国立高岡産業短期大学設立に関する陳情書

富山県高岡地域は、古来より商工業及びそれに関わる文教都市として発達し、第３次全国総合開発計画で企図された定住圏の中核都市として、今後も本県西部地域の発展を担う重要な機能を果たすことを期待しております。

このような観点から、近時新しく開かれた大学として、わが国高等教育において特異な役割を果たすことが期待されている。いわゆるコミュニティ・カレッジを伝統工芸や経営実務など、この地域にふさわしい内容をもって設立されることにつきましては昨年末陳情申し上げましたところでございます。

その後、地元におきましては、その実現方に非常な関心が寄せられ、県及び高岡市をはじめ各界を網羅した「高岡地域大学設立協議会」を設置し、その内容につきまして検討いたしましたところ、別添構

想を得ましたので、54年度予算において、創設準備費を計上されるよう、何とぞよろしくお願いいたします。

昭和53年３月23日
富山県知事　　中田幸吉
富山県議会議長　笹島太一
高岡市長　　堀　健治
高岡市議会議長　林　　延

上記の陳情書に添付された「国立高岡産業短期大学構想」の書面は次のとおりである。

国立高岡産業短期大学構想

1. 名　称
「国立高岡産業短期大学」と称する

2. 設置の目的
本学は、教育基本法の精神に則りつつ、かつ、所謂コミニュティ・カレッジとして高岡地域のニーズに応え、本地域の産業、福祉、文化の向上発展に寄与することを期待し、必要とされる専門的知識をもつ高度な実務家と人間性豊かで、科学的素養をもつ高度な知識人の育成を目的とし、併せて、本県内における高等教育の一翼を担うものとする。

3. 基本的性格
地域自体が期待する産業、福祉、文化に関する諸要求と地域住民の高等教育に対する多様な生涯教育的な諸要求の双方に対応できるような機能をもち、かつ開かれた短期大学とする。

4. 内　容
⑴学系（又は学科）について
① 学系としては、地域の産業、福祉、に寄与する実学中心の学系として、美術工芸系．経理経営系、法律系、社会福祉系及び外国語系の５学系をおき、一般教養の習得を重点とする学系としては、教養系を設ける。
② 各学系には、必要に応じて、学習コースを設定するが、コースの内容については、更に検討を進める。
⑵４年制大学編入について
① ４年制大学の３年への編入の方途を講じ進学を希望する者については、進学希望大学の定める学科の単位の習得や編入試験に応じ得る学力の習得などについて、必要により、特別の配慮を加えることができることとする。
② ４年制大学の３年編入についての協力大学の設定、特に富山大学、金沢美大などの協力を求める。
⑶生涯教育の便宜について
① 実社会で働く者が、再び復学して学習する場合や、一般主婦の余暇利用学習など、所謂生涯教育を希望する者については、必要により特別の配慮を加えることとする。
② 聴講生制度を活用し、開設科目の一部履習を認め、その認定を行うことにより、再教育、卒業資格の付与等多様な教育の要請に応じうることとする。
⑷学習の選択について
① 学習の選択に当たっては、必須単位を最低限度にとどめ、残余の単位については、その属する学系、学習コースの枠を越えて他の学系・学習コースの教科を選択することもできることとする。
② 学習の選択に当たっては、綿密なガイダンスに基づく、専任のカウンセラーによる指導を受けることができるものとする。
⑸入学について
① 「開かれた大学」を指向するが、原則として、基礎入学資格としては、高等学校卒業或いは、それと同等程度以上の学力を有する者とする。
② 高等学校職業科からの進学には、むしろ優先的に、これを受け入れられることを検討する。
⑹教官について
実務的教科については、地元の実務家を教官として活用する方途を考慮する。
⑺夜間部の設置については夜間部の設置を検討する。

なお、協議会の構成メンバーは21名で、次のとおりであった。

高岡地域大学（仮称）設置協議会構成メンバー
１．地域振興
全県的　富山県総合開発審議会会長（富山県商工会議所連合会会長）　金井久兵衛／地域的　富山経済同友会常任理事　金森伊平

2．卒業者受入

産業界　高岡商工会議所副会頭(商業)　志甫良一／高岡商工会議所副会頭(工業)　嶋津信一／富山県商工会連合会会長　柚木栄吉／伝統工芸　伝統工芸高岡銅器振興協同組合専務理事　大寺幸三郎／協同組合高岡漆器センター理事長　国本一吉／井波木彫刻協同組合理事長　岩倉重盛／福祉　富山県社会福祉協議会会長　横山良一

3．高卒進学先

富山県教育委員会教育委員長　中川秀幸／富山県産業教育審議会会長　中田　保

4．学識経験者

富山大学長　林　勝次／富山女子短期大学長　近藤鋭一／元富山県教育委員会教育委員長　金岡幸二／高岡商工奨励館館長　可西泰三

5．マスコミ

北日本新聞社社長　藤井勇見／富山新聞社代表　三ツ野真三郎／読売新聞社北陸支社長木村一義

6．地方自治体

富山県副知事　森岡政治／高岡市長　掘　健治／高岡市議会議長　林　延

1.1.3　文部省に「短期高等教育機関設置(高岡市)に関する調査会」の設置

昭和54年度文部省予算に「短期高等教育機関(高岡)設置調査経費154万2,000円」が計上され、54年４月17日「短期高等教育機関設置(高岡市)に関する調査研究について」(文部事務次官裁定)が制定された。これに伴い、文部省は、「短期高等教育機関設置(高岡市)に関する調査会」(この調査会は、55年度には「短期高等教育機関(高岡市)に関する創設準備調査会」に、56年度には「短期高等教育機関(高岡市)に関する創設準備会議」となり、58年３月31日まで設置された。) を設置し、高岡市に短期高等教育機関を設置することについて、その目的と役割、基本構想、設置の形態などの調査研究を開始した。その結果、54年９月に以下の調査研究の検討状況が報告された。

同調査会は同年５月12日の第１回会議に始まり、同年９月19日開催の第５回会議で基本構想が一応の合意に達した。

その調査研究内容を以下に示す。

短期高等教育機関設置(高岡市)に関する調査研究の検討状況について

昭和54年９月19日
短期高等教育機関設置(高岡市)
に関する調査研究会議

これまでの調査研究における検討の状況は、おおむね次のとおりであった。

1．高岡市に所在する富山大学工学部を富山市に移転し、富山大学の統合キャンパスにおいて整備することを契機として、地元の要請等をも考慮し、高岡市に国立の短期大学を設置することとする。

2．当該短期大学については、大学設置計画分科会のいわゆる後期計画にかかる中間報告の趣旨を参考として、次の点に留意するものとする。

⑴専門分野の構成、入学者選抜方法、履修方法等に工夫を加え、とくに、夜間教育、昼夜開講制の実施を検討する。

⑵短期大学の卒業を目的とする正規の学生のほか、特定の科目あるいは科目群を選択的に履修しようとする学生を受入れることを検討する。

⑶大学公開講座を積極的に実施するとともに、できるかぎり、体育施設等についても公開し得るよう配慮する。

⑷卒業者の四年制大学への編入学の実現、教育研究に対する協力交流の推進等について、富山大学はじめ近隣大学の協力を得るよう配慮する。

3．当該短期大学においては、次のような専門分野について教育課程を編成するものとする。

なお、学生数の規模については、現在の富山大学工学部の規模を目途とするものとする。

⑴伝統的工芸品産業の発展に寄与する美術工芸家の養成に資するもの

⑵実務的な経理・経営の知識・能力の育成に資するもの

⑶職業人に必要な実用的な法律の知識・能力の育成に資するもの

⑷実際生活に必要な外国語の能力の育成と国際問題に関する知識の向上に資するもの

⑸社会人としての教養の向上に資するもの、また、この短期大学の修業年限は原則として２年とするが、夜間課程を設ける場合等は、３年とすることも検討する。

4．当該短期大学の教官には、この大学にふさわしい優秀な人材を求める必要がある。とくに、それ

ぞれの専門分野の教育研究の成果を上げるためには、専任教員のほか、広く他大学の教員や民間企業の実務家等の参画を求めることが必要であり、このため、客員教員の制度の活用を図ることについて検討する必要がある。

5．この短期大学が富山大学工学部の移転を契機として設置されることにかんがみ、富山大学とくに同大学短期大学部との関係のあり方については、別途検討するものとする。

6．この短期大学の着実な発展を期するため、短期大学の設置にあたっては、適切な年次計画を策定し、漸進的に整備充実を行うものとする。

なお、短期高等教育機関(高岡市)に関する創設準備研究協力者は、次の９名であった。

喜多村和之(広島大学教授)／幸田三郎(フェリス女学院長)／酒向　誠(立教女学院短期大学長)／○主査　佐野幸吉(前名古屋工業大学長)／志茂主税(千葉大学教授)／中沖　豊(富山県知事)／堀健治(高岡市長)／村山松雄(日本育英会理事長)／柳田友道(富山大学長、短期高等教育機関(高岡)創設準備室長)

1.1.4　富山大学に「短期高等教育機関(高岡)の創設準備調査室」の設置

54年12月に昭和55年度文部省予算として「短期高等教育機関(高岡)創設準備調査費592万2,000円及び創設準備調査要員(教授１名)」が計上された。

55年４月、文部大臣裁定「短期高等教育機関(高岡)の創設準備調査室設置要項」が制定され、文部省大学局長から富山大学長に対し関係事務の取り進めこついて依頼があり、富山大学に創設準備調査室が置かれた。同年６月柳田同大学長は、創設準備調査室長を併任し、調査会と共同して伝統的工芸関係分野並びに実務的な法律・経営等及び外国語、国際関係分野に係る具体的な学科構成、教育課程などについて調査研究し、その試案のまとめを開始した。同年７月８日の創設準備調査室の会議で「当面、教育課程の検討を行うこと、そのため、専門的知識を有する学識経験者の参加を得て個別に検討を行うこと」が了承された。同年７月下旬、創設準備調査会議佐野幸吉主査から、柳田友道委員(富山大学長・創設準備調査室長)に対し、「伝統的工芸品産業の発展に寄与する美術工芸家の養成に資する専門分野」について、教育課程等の試案の策定が委嘱された。柳田委員は創設準備調査室長として、次の方々の伝統工芸に関する学識専門家に対して協力を委嘱し、取りまとめを行った。

小倉玄吾　富山大学教授(漆芸、デザイン)／可西春三高岡市商工奨励館館長(鋳金、デザイン)／小池岩太郎　東京芸術大学名誉教授(デザイン)／鈴木信一　東京芸術大学教授(鋳金)／三井安蘇夫東京芸術大学名誉教授(鍛金、彫金、象嵌)／宮崎辰児　井波彫刻家、富山県美術連合会会長(彫塑)／○柳田友道　短期高等教育機関(高岡)創設準備調査室長、富山大学長

(○印は教育課程等検討協力者主査)

55年10月には「伝統的工芸品産業の発展に寄与する美術工芸家の養成に資する専門分野に係る教育課程等の試案について」が取りまとめられ佐野主査に報告された。また、この取りまとめを行うのに先立ち、同年８月21日には高岡市において、高岡市周辺の伝統工芸産業界の関係者15人と懇談し、意見の聴取も行われた。

業界代表者は次の方々であった。

部門

銅器(卸)　伝統工芸高岡銅器振興協同組合専務理事　大寺幸三郎／銅合金(製・卸)　高岡銅合金協同組合理事長　嶋　朝春／漆器(卸)　協同組合高岡漆器センター理事長　国本一書／商工(工業)高岡物産振興協会会長　嶋津信一／商工(商業)高岡商工会議所副会頭　志甫良一／銅器(卸)　高岡銅器金物卸業協　相談役　竹中志行／経済関係　富山経済同友会常任理事　金森伊平／彫金　金森映井智

漆芸(勇助塗)県文化財委員　彼谷芳水／漆芸　村田吉生／鋳物　麻生三郎／染色(図案)　野上　隆／鋳物　富山県鋳物技能士会会長　三好外栄

彫刻　井波彫刻協同組合理事長　武部　豊／彫刻井波彫刻協同組合常務理事　花島勇作

1.1.5　富山大学に「短期高等教育機関(高岡)創設準備室」の設置

55年12月に昭和56年度文部省予算として「短期高等教育機関(高岡)創設準備費623万4,000円及び創設準備要員(教授１名)」が計上された。

56年４月、富山大学に創設準備室が設置され、同室長に柳田富山大学長が併任発令された。これに伴い、55年６月に設置された創設準備調査室は廃止され、富山大学庶務部庶務課課長補佐、同課企画係が中心となって、新

たな体制で関係事務を進めることになる。また、短期高等教育機関に関する重要事項を審議するため、富山大学に短期高等教育機関(高岡)創設準備委員会を設置した。

その構成委員は、次の方々であった。

○　富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備委員会(57.3.5現在)

学長　柳田友道／室長(学長兼務)／人文学部長　本田弘／教育学部長　大澤欽治／経済学部長　山崎佳夫／理学部長　竹内豊三郎／工学部長　大井信一／教養部長　梅原隆章／事務部長　長谷川登(規則第２条第４号委員)

56年７月、高岡産業短期大学(仮称)創設費の概算要求を行った。これに対し、文部省は大蔵省に対し短期高等教育機関の創設準備として創設準備費1,019万7,000円の概算要求を行った。

同年11月、富山県知事は、文部省大学局長に対し高岡産業大学(仮称)の創設及び工学部の移転統合の早期解決を図るため「高岡産業短期大学(一仮称)の創設準備の取り進めについて」の文書を提出した。

57年３月、富山大学の教官の協力を得て、創設準備委員会専門委員会を設置し、地域社会の要請に応えるため法律、経理・経営及び外国語、国際問題関係分野に係る教育課程の再編成の検討に入った。

専門委員会の構成委員は、次の方々であった。

○　富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備委員会専門委員会(57.7.28現在)

教授　(人文学部)　平田　純　英語学／〃　(〃)　三宝政美　中国文学／〃　(〃)　長沼忠兵衛　西洋史学／〃　(経済学部)　吉原節夫　財産法／〃　(〃)　森薗英輔　管理会計／助教授　(〃)　角田勝　経営実務論　／〃　(〃)　小郷直言〃／教授　(教養部)　鍛田邦夫　経済学

1.1.6　文部省で「富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備会議」の開催

56年12月、前年度に引き続き昭和57年度文部省予算として「短期高等教育機関(高岡)創設準備費1,080万円及び創設準備要員(教授２名)」が計上された。

57年５月１日、麻生三郎助教授(金工)が短期高等教育機関(高岡)創設準備室の初の専任教官として採用された。

同年８月31日、文部省の短期高等教育機関(高岡市)に関する創設準備会議で「短期大学(高岡)の基本構想」が了承された。

58年２月、文部省の短期高等教育機関(高岡市)に関する創設準備会議で「高岡短期大学(仮称)の基本構想」の一部修正が了承され、２学科７専攻コース、入学定員200人の規模の短期大学となった。

文部省に提出された最終の「高岡短期大学の基本構想」全文は次の通りである。

高岡短期大学の基本構想

昭和58年２月14日
短期高等教育機関(高岡市)
創設準備会議

１．趣　旨

地域の多様な要請に積極的にこたえ、広く地域社会に対して開かれた特色ある短期大学として創設し、今後の短期大学の運営及び教育研究の改善に資するものとする。

２．教育研究組織

⑴学　科

伝統的工芸品産業の発展に寄与する工芸技術、実務的な経理・経営及び情報処理、並びに外国語及び国際問題等の分野における職業に必要な能力を育成することを目的とし、次の学科を置く。

学　　科	入学定員	指 定 員
産業工芸学科	75人	150人
金属工芸専攻	(20人)	(40人)
漆工芸専攻	(15人)	(30人)
木材工芸専攻	(15人)	(30人)
産業デザイン専攻	(25人)	(50人)
産業情報学科	125人	250人
経営実務専攻	(40人)	(80人)
情報処理専攻	(40人)	(80人)
ビジネス外語専攻	(45人)	(90人)
英米コース	(30人)	(60人)
中国コース	(15人)	(30人)
計　２学科	200人	400人

⑵専攻科

学科の充実をまって専攻科を設置する。

⑶センター

教育研究活動の効率的な推進に資するため、

次のセンターを置く。

短期大学開放センター

語学センター

保健管理センター

(注)短期大学開放センターは、地域の社会人を対象とした公開講座の実施、地域の伝統工芸関連企業等との共同研究、さらに地域の社会教育・体育、文化事業等に対する積極的な協力を通じて、短期大学教育を広く地域社会へ開放していくための諸業務を行う。

(4)教員組織

本学の教官には、この短期大学にふさわしい優秀な人材を求める必要がある。特に、それぞれの専門分野の教育研究の成果を上げるためには、専任教員のほか、広く他大学の教員や民間企業の実務家等の参画を求めることが必要であり、客員教員及び外国人教員の制度の活用を図ることとする。

3．履修方法等

ア　地域の民間企業等において学外実習を行うなど実務訓練を重視し、実践的技術を体得させる。

イ　富山大学はじめ近隣大学の協力を得て、単位の互換を積極的に進めるとともに、卒業者の4年制大学への編入学の実現、教育研究に対する協力交流の推進を図る。

ウ　専修学校における特定分野についての履修を単位として認めることについて検討を進める。

エ　社会人である学生の場合、社会体育による学修を単位として認めることについて検討を進める。

オ　学科の充実をまって昼夜開講をし、学生の受講の弾力化を図る。

4．入学者選抜方法

ア　入学試験は、学科及び専攻の目的、特色、専門分野に応じて重視される能力、適性の程度を判定することに留意する。例えば・産業工芸学科における実施に当たっては、デッサン又は立体造形を課すとともに、作文及び面接を行うことを考慮する。

イ　事業所等から推薦を認めるなど推薦入学制度を積極的に活用し、地域の社会人等を受け入れる。

5．学校開放

ア　地域の社会人等を対象として、公開講座を実施するとともに、聴講生、研究生の受入れを積極的に行う。

イ　教育研究に支障のない範囲で地域住民に積極的に学校施設を開放する。

ウ　受託研究員制度の導入を図り、地域の民間企業の技術者に対し、研究の機会を与える。

6．管理運営

ア　本学の機能的な運営を確保し、円滑かつ効率的な教育研究活動を推進するため、学長を補佐する副学長を置く。

イ　学外の有識者の意見を短期大学の運営に資するため参与を置く。

7．施設・設備

ア　校地、校舎の施設・設備は、短期大学の目的・使命が十分に達成されるよう整備する。

イ　キャンパスは、周辺の景観等を考慮した環境整備を図っていくものとする。

1.2　創設後の経緯

1.2.1　大学キャンパスの決定

56年3月、富山県副知事は、富山大学長に短期大学を高岡市二上地区に設置するよう要請した。

同年5月、富山県及び高岡市関係者が文部省において、二上地区に短期大学を設置するよう陳情し、同地区の状況について説明した。

同年11月、富山県知事及び高岡市長から文部大臣あてに「短期高等教育機関(高岡市)候補地調査表等」が提出された。これを受けて、文部省大学局佐藤技術教育課長ら4名が、高岡市二上地区及び富山大学工学部を視察された。その結果、富山大学工学部の移転した跡地につ

いても検討されたが、用地の状況、周辺の環境、道路事情及び経費の見込み等が総合的かつ慎重に検討され、57年８月国立大学統合整備等連絡協議会で、短期高等教育機関(高岡)を高岡市二上地区に設置することが決定された。

1.2.2　高岡短期大学開学の準備

58年３月、「国立学校設置法の一部を改正する法律」(昭和58年法律第14号)が公布され、58年10月１日に高岡短期大学が設置され、61年４月に学生を受入れることが決定された。

この段階で大学名称を国立高岡産業短期大学(案)として進められてきたが正式名称として国立の「高岡短期大学」に決定された次第である。

58年８月１日、富山大学高岡短期大学創設準備室長に大阪大学教授　横山保が併任発令された。

同年８月31日には本学創設事業に全面的に協力し、もって学術、文化及び産業等の振興を通じて本県の発展に寄与することを目的として財団法人高岡短期大学協力会が設立された。設立発起人代表者には富山県知事　中沖豊、設立発起人には県内の政界、経済界、教育界の代表者19名の協力があった。

1.2.3　高岡短期大学の誕生

58年10月１日、高岡短期大学はめでたく法制上の開学を迎えることになった。既に富山大学高岡短期大学創設準備室長の併任発令を受けていた大阪大学経済学部教授　横山保が、直ちに初代学長として文部大臣から発令を受けた。以降、学舎の建設・設備の充実などハード面と、教官・事務官組織の充実、カリキュラム整備などのソフト面とを合わせて学生受入れの準備が横山学長を中心として進んでいくことになる。

富山市五福の富山大学構内の事務室の一隅を借りて準備作業が行われることになったが、この段階での主なスタッフは次のとおりである。

学　長　横山　保／助教授　麻生三郎／事務部長　江田晴夫／総務課長　小林　武

いずれも関学以前から創設準備室に所属し、開学に当たっての繁雑な準備作業を着々と積み重ねてきたメンバーである。

1.2.4　創設期の組織体制整備

独立した短期大学として活動を始めた本学の意思決定機関として、運営委員会が設けられ、昭和58年11月５日に第１回の委員会が開催された。これが教授会の前身に当たるわけだが、そのメンバーは、次のとおりである。

阿部　統(東京工業大学工学部教授)／小倉玄吾(前富山大学教育学部教授)／楠瀬　勝(富山大学人文学部長)／小池岩太郎(東京芸術大学名誉教授)／柳田友道(富山大学長)／横山　保(高岡短期大学長)

この運営委員会の中に三つの専門委員会が置かれ、学生受入れに向けての詳細な検討が進められることになった。専門委員会の名称と顔ぶれは、次のとおりである。

教育課程専門委員会　小郷直言(富山大学経済学部助教授)／三宝政美(富山大学人文学部教授)／平田　純(富山大学人文学部教授)／森薗英輔(富山大学経済学部教授)／屋敷平州(富山大学教育学部教授)／麻生三郎(高岡短期大学助教授)

施設・設備専門委員会　五十嵐直雄(福井大学名誉教授)／小郷直言(富山大学経済学部助教授)／平田　純(富山大学人文学部教授)／麻生三郎(高岡短期大学助教授)

管理運営専門委員会　大井信一(富山大学工学部教授)／豊田文一(金沢大学名誉教授)／吉原節夫(富山大学経済学部教授)／麻生三郎(高岡短期大学助教授)

1.2.5　初めて迎える新年度

開学後半年で新年度(昭和59年度)を迎えることになり、受入れへの準備も更に本格化することになった。

同年４月１日には会計課が新設され、会計課長に吉田勝行が発令された。

既に創設準備室時代に着任していた麻生助教授に次ぐ２人目の専任教官として、やはり４月１日に黒岩靖司教接が着任し、運営委員会並びに教育課程専門委員会に加わった。

それ以外にも新年度の運営委員会は、顔ぶれが若干変更になった。

阿部　統(琉球大学教養部教授)／楠瀬　勝(富山大学人文学部長)／小池岩太郎(東京芸術大学名誉教授)／柳田友道(富山大学長)／西　大由(東京芸術大

学学生部長)／藤澤俊男(大阪大学基礎工学部長)／横山　保(高岡短期大学長)／黒岩靖司(高岡短期大学教授)

昭和62年度の国立大学優秀施設として、建物を中心としたキャンパス全体が文部省の表彰を受ける。

62年９月には大学設置審議会大学設置分科会常任委員会で、本学の教育課程、基本構想等が了承され、学生を受入れて大学事業を実質的にスタートする段階への動きに一段と弾みがついた。

運営委員会に新たに人事専門委員会が置かれ、具体的な教官の選考に入った。委員は、次のとおりである。

西　大由(東京芸術大学美術学部教授)／平田　純(富山大学人文学部教授)／藤澤俊男(大阪大学基礎工学部教授)／森薗英輔(富山大学経済学部教授)／徳平　滋(高岡短期大学副学長)

運営委員会の管理運営専門委員会は、前年度の委員はほとんど留任されたが、本学の麻生助教授に代って黒岩教授が加わった。

60年４月１日には、既に着任していた麻生助教授(金属工芸専攻：同日付けで教授昇格)、黒岩教授(産業デザイン専攻)に加えて、次の５名が教官として着任し、４月５日に第１回の高岡短期大学教官会議を開催した。

中川　宏(木材工芸専攻：教授)／澤本正巳(経営実務専攻：教授)／木村幸信(情報処理専攻：教授)／石井栄一(ビジネス外語専攻：教授)／三船温尚(金属工芸専攻：講師)

教官会議は、運営委員会の補助機関として、この年度限り設置されたものであるが、学内規程の整備から教育内容の検討、第１回入学試験の実施方法、設備・機器の選定や図書館購入図書の選定作業に至るまで用務が多く、開催は16回に及んだ。

事務部門では、総務課長に輿那原進が発令され、新たに設けられた事業課の初代課長に平岡幸一が発令された。

この年度の運営委員会は、専任教官の増加に伴い、次のようなメンバーに移行した。

西　大由(東京芸術大学美術学部教授)／藤澤俊男(大阪大学基礎工学部教授)／柳田友道(富山大学長)／横山　保(高岡短期大学長)／徳平　滋(高岡短期大学副学長)／麻生三郎(高岡短期大学教授)／中川　宏(高岡短期大学教授)／黒岩靖司(高岡短期大学教授)／澤本正巳(高岡短期大学教授)／木村幸信(高岡短期大学教授)／石井栄一(高岡短期大学教授)

なお、９月に開催された第２回運営委員会からは、富山大学長を任期満了された柳田委員に代って、大井信一富山大学長が出席した。

1.2.6　最初の入学試験に向けて

教官会議のメンバー全員が入学試験委員を兼ねることになり、選抜方法等を検討する入試専門第１委員会(委員長：石井栄一)と、試験会場や監督者の配員など実施方法を検討する入試専門第２委員会(委員長：中川　宏)が設けられ、具体的な審議が繰り返し行われた。

また、本学において富山県高等学校長協会長と懇談した。進学県と言われる富山県においては、短期大学とはいえ国立の高等教育機関である本学に対する期待は高く、それだけに厳しい要望も出された。

60年６月には第１期生受入れに係る「昭和61年度高岡短期大学入学者選抜に関する要項」を発表し、７月には昭和61年度入学者選抜試験(推薦入学・帰国子女特別選抜、社会人特別選抜、一般選抜)の学生募集要項を発表した。

同年10月３日には、推薦入学、社会人特別選抜を行った。この時期には富山大学工学部の富山市への移転が全面的に完了していたので、試験会場は、取り壊しを目前に控えた工学部旧校舎を全体的に利用して行われた。

小論文の審査及び面接は、その時の教官７名では到底足りないので、明年４月着任予定者で近辺に居住している教官の応援を頼む形で行わざるを得なかった。

地域社会に開かれた大学としての新しい試みである社会人特別選抜も予想以上の受験者を集め、18名の受験老中12名を社会人学生として受け入れることになった。各高校からの推薦による受験者も140名に達し、57名を合格させたが、推薦入試としては異例の高い競争倍率になったわけである。

明けて61年、いよいよ学生を受入れ、大学の教育活動が始まる年を迎えた。

61年２月23日には昭和61年度の入学者選抜試験(一般選抜)の学力検査を高岡市立志貴野中学校で、翌24日には産業工芸学科の受験者に対する実技検査を富山大学工学部構内(高岡市中川園町)で行った。1,258名の受験者を迎えて、学力検査の監督者が到底足りず、赴任予定の教官に加え、富山大学の教職員の応援まで仰いでなんと

か実施できた。

61年３月２日、建物だけは完成している二上の新学舎で合格者の発表が行われたが、我々の予想外の事態も起った。それは、４年制大学との併願者が(特に産業情報学科では)多数を占めたことで、富山大学等の入試合格者の発表が進むにつれて、せっかくの本学合格者の中から入学辞退者が続出したことである。いわゆる定員割れの状況になることが確定した段階で、急遽追加募集を行い、年度末ギリギリの３月31日に入学者選抜試験(第２次)を実施した。

1.2.7　第１期生の受入れ

いよいよ真新しい建物での大学の業務がスタートした。従来７名だった教官に多数の新しい顔ぶれが加わった。

尾崎秀男(一般教育科目等保健体育科目教授)／加藤敏弘(一般教育科目等保健体育科目助手)／林　暢夫(一般教育科目等外国語科目教授)／須賀正佐(金属工芸専攻教授)／後藤義雄(漆工芸専攻教授)／辻賢三(漆工芸専攻助教授)／宮崎雅司(漆工芸専攻助教授)／谷口義人(木材工芸専攻教授)／小松研治(木材工芸専攻講師)／小関利紀也(産業デザイン専攻教授)／安達博文(産業デザイン専攻講師)／中村　茂(経営実務専攻教授)／金井繁雅(経営実務専攻助教授)／佐藤孝紀(情報処理専攻教授)／久保欣五(情報処理専攻助教授)／平田道憲(情報処理専攻助教授)／中野清治(ビジネス外語専攻(英米)助教授)／村上恭子(ビジネス外語専攻(英米)助教授)／伊原大策(ビジネス外語専攻(中国)講師)／磯部祐子(ビジネス外語専攻(中国)講師)

こうした教官組織の運営のため、前年度着任していた中川宏教授が産業工芸学科主任に、同じく澤本巳教授が産業情報学科主任に、それぞれ発令された。

事務部門では、昭和61年４月１日付けで総務課が庶務課に改称され、学生課が新設された。総務課長であった輿那原進が庶務課長に、竹内利栄が学生課長に、それぞれ発令された。

61年４月５日に短期大学開放センターが設置され、同16日に２代目副学長として国立科学博物館次長島田治が発令された。副学長は、官職指定で開放センター長を務めることになるが、学生受入れの初年度から、公開講座、作品展示、共同研究という開放事業が積極的に企画・実施されて、本学と地域との連携を深めていくことになる。

４月９日に高岡短期大学の第１回教授会が開催された。

４月15日の入学式、その直後からの新入生オリエンテーションが済み、４月17日から授業が開始された。

(横田　勝)

第２章
大学の変遷・後期

2.1　教育体制の変遷

2.1.1　学科の変遷「２学科から３学科に再編改組」

○　学科の再編・改組の検討

平成９年２月予てより検討課題であった学科等組織の再編改組について、２学科(本科)を３学科にすると共に、学科の専攻枠を原則として取り外し、新たにコース制を導入することを再編改組の基本方針とすることが教授会で決まり、ワーキング・グループが発足した。

平成９年６月学科の再編改組を概算要求するに当たり、「学科の再編改組に関わる自己点検・評価報告書を作成し、文部省に提出することとなり、平成９年７月報告書を文部省に提出した。ついで、平成９年９月学科再編改組に関する構想について、企業及び高等学校の意見を求めるアンケート調査を実施することの提案があり、平成９年10月過去５年間本学に入学実績のある高等学校と、過去３年間本学卒業生の採用実績のある企業を対象にアンケート調査を行い、有益な意見が多数寄せられた。これら学内外の多くの意見をまとめて、平成11年１月蠟山新学長より「論点整理：これからの高岡短期大学を考えるにあたって」「同第２版」と「これからの高岡短期大学：改革の基本方針」に基づいて教官会議を開催し、改革の基本方針に関する学内の合意形成が行われた。合意形成された主な論点は、つぎの通りであった。

①２＋２の大学＋社会教育

短期(２年間)高等教育機関としての機能を維持する。当初の２年を前期課程(学科(本科)、後の２年を後期課程(専攻科)と仮称する。

②学科の改組

専攻科の産業造形、産業デザイン、地域ビジネスの３グループを教員組織とし「学科」とする。この３学科に加えて開放センターを仮称：社会教育センターとして、３学科＋１センターの教員組織とする。

③カリキュラム改革の基本

前期課程１年では、学生の所属学科いかんによらず、共通の授業・演習を提供し、社会に出てから応用のきく基礎能力の涵養を行う。前期課程２年では、学科に分かれ、それぞれの分野に特化した教育を行う。後期課程では２年間を通して各自が追求すべき課題に挑戦させるが、同時にそのために必要な考え方、技法、手法を教育する。

④入学者選抜制度

前期課程では、入学時からの定員細分化を廃止する。推薦入学制度の活用で、明確な勉学目的を有する者の選抜とする。後期課程では、社会人を積極的に歓迎する。そのために昼夜開講制の活用や公開講座との相乗りを促進する。

⑤運用組織の再編

各組織の役割分担をはっきりさせ、各種委員会の整理・統合を行う。また、執行機関(学長・副学長・総務会)と審議機関(教授会)とを区分する。などの論点がまとめられた。

ついで、各学科の名称、内容及びカリキュラムついてワーキング・グループを設置し検討がはじまった。

○　学科再編・改組による教員配置と各種委員会の整備・統合

平成11年９月平成12年度概算要求に当たって学科再編改組の骨子が定まった旨の報告があった。その報告の概要は、つぎの通り。

①現行の「産業工芸学科・産業情報学科」の２学科構成から「産業造形学科・産業デザイン学科・地域ビジネス学科」の３学科構成に再編改組し、教員組織は、一般教養科目担当教員を学科に所属させた学科単位とする。

[学科名等]

(現行)	(再編改組後)	教授	助教授	助手	計
一般教養科目等	産業造形学科	13	7	3	23
産業工芸学科	産業デザイン学科	5	3	2	10
産業情報学科	地域ビジネス学科	13	7	3	23
短期大学開放センター	短期大学開放センター	1			1

②学科専攻毎の学生定員を廃止し、学科単位とする。カリキュラム上は、学科にコース(履修コース)を設置し、入学者選抜の段階から入学志願者に選択させることもできる。(各学科の学生定員については３.資料集、3.3.3を参照)

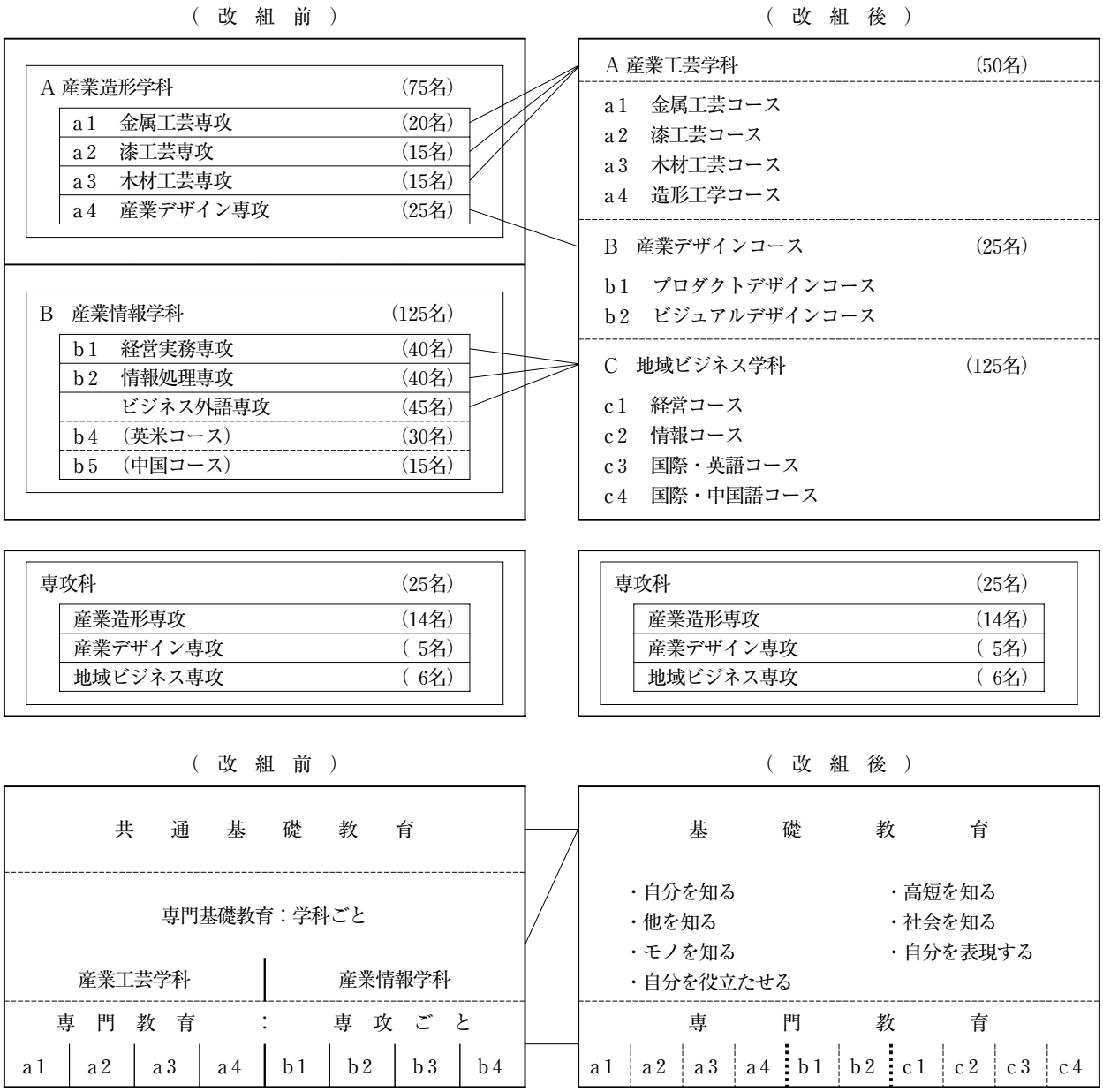
③カリキュラム上は、専門分野に応じた履修指導上のコース(履修コース)を設けることとし、また、主たる専門分野以外の専門分野をも履修させること(いわば「融合教育」) を重視した教育組織コース(履修コース)の授業科目に基づく教員の配置を確立する。

この概要(骨子)に基づいて、３学科と専攻科の３専攻(産業造形専攻、産業デザイン専攻、地域ビジネス専攻)がそれぞれ対応(整合)することとなり、２年制の学科とその上の２年制の専攻科を合わせた４年間における計画的な学修が可能となった。

この再編改組は関係法令の制定と政府予算の成立をまって３学科構成が確定する。しかしながら、３学科入試の初年度となる平成12年度の学生募集に当たっては、移行に伴う手続きが必要となった。そこで、平成11年12月３学科による「平成12年度高岡短期大学入学者選抜募集に当たっての留意事項」が、教授会で審議・承認された。これによって、平成12年度の学生募集については、改組前の対応する専攻の募集人員により行い、入学時に改組後の各学科に所属することとなった。

平成11年12月には、２学科を改組し、３学科構成となるに先立ち、教員配置についての検討が進められた。平成11年11月と12月「３学科改組に伴う教員配置について」で新しい３学科体制のもとでも既存の専攻科グループ(産業造形グループ、産業デザイングループ、地域ビジネスグループ)分けを人員配置の基本とすること

【再編改組及び教育体制の概要】



が教授会で審議され承認された。

つづいて、教員配置に伴う新体制のもとでの学科長を含めた各種委員会の規定の整備、委員会構成を含めた委員会の見直しが開始した。平成12年１月から平成12年３月にかけて、学科改組及び国立学校設置法の一部改正による学内各種委員会等の整備・統廃合と、学則等規則の改正が進められた。

⑴学内各種委員会等の整備・統廃合

平成12年１月学科改組及び国立学校設置法等の一部改正による学内各種委員会等の整備・統廃合及び委員構成について教授会の承認が得られた。主な改正点は、次の通りであった。

・学科名称及び授業科目区分の変更と、運営諮問会議及び運営会議の設置に伴う学則の関係条項の整備。
・20の各種委員会を９の各種委員会に整備・統廃合。（３.資料集、3.1.2を参照）
・従来の学科等会議及び専攻科専攻グループ会議を整備・統合し、規則を制定して学科会議とする
・学科長については、従来学長が指名していたが、学科に所属する教授の中から学科会議において選出し、学長が指名する。

などであった。

⑵学則等の一部改正

平成12年２月の教授会で、学則の一部改正が審議され承認された。主な改正点は、次の通りであった。

・学則第３条（学科及び専攻科）では、学科を３学科、学生定員を学科毎とした。学則24条（授業科目）及び学則37条（専攻科の授業科目）では、開設授業科目、授業の方法及び単位数等を別表に付加した。学則28条（第１年次入学者の既修得単位の取扱い）と第29条（本学以外で修得した単位の本学における単位の限度）を、学則第28条（入学前の既修得単位等の取扱い）まとめ改正した。
・学則第32条（卒業及び準学士）の卒業に必要な単位数（64単位以上）を基礎教育科目30単位以上、専門教育科目34単位以上とした。

などであった。

⑶学科及び専攻科の履修規程の一部改正

平成12年３月の教授会で、教務委員会と専攻科運営委員会の承認を得て、学科及び専攻科の履修規程の一部改正についての報告があり承認された。主な改正点は、次の通りであった。

［学科履修規程］

・学科の専攻・コースを廃止し、各学科に専門分野に応じた履修コースを設けた（第３条関係）
・授業科目の区分を基礎教育科目及び専門教育科目とし、卒業に必要な単位数を基礎教育科目30単位以上、専門教育科目34単位以上の合計64単位以上とした（第５条関係）
・学科再編改組に伴い授業科目、授業の方法及び単位数を改正。（第６条別表関係）

［専攻科履修規程］

・学科の授業科目の単位について、他専攻の授業科目と同様に６単位までに限り、当該専攻の修了所要単位として認める。（第８条関係）
・他大学で修得した単位を専門科目については、従来の８単位から22単位を限度とした。（第14条関係）

などであった。

2.1.2　学科（本科）カリキュラムの編成

平成11年１月の「これからの高岡短期大学：改革の基本方針」の学内合意形成に基づき各学科の系（コース）の名称、内容及びカリキュラムについてのワーキング・グループが設置され検討が進められた。平成11年12月ワーキンググループ作成の教育課程改善等を基礎に、教務委員会で学科及び履修コースの教育目標、卒業所要単位数について教授会で承認された。

⑴新３学科の概要

①産業造形学科

金属工芸、漆工芸及び木材工芸の各分野において、背景となる日本の伝統文化を踏まえて、それぞれの分野における専門的な知識・技術を習得させるとともに、感性・企画力を養成し、社会の変化、ニーズの変化に対応した現代的な制作活動ができる、創造性豊かな人材を育成することを教育目標とした。

各専門分野に応じて、金属工芸コース、漆工芸コース、木材工芸コース及び造形工学コースの４つの履修コースを設置した。

②産業デザイン学科

デザインを、「人ともの・空間・情報との関係を改善する行為」ととらえ、人にやさしく、使いやすく、分かりやすいデザインを生み出す力を養成し、個人・企業・地域社会などさまざまな対象に対して、それぞれに相応しい新しいライフ・スタイルを提案する能力や説得力を有する人材を育成することを教育目標とした。

専門分野に応じて、プロダクトデザインコース、ビジュアルデザインコースの２つのり履修コースを設置した。

③地域ビジネス学科

現代の企業人には、企業経営全般にわたって幅広い知識・技術が必要とされる。このため、地域の企業に必要とされる、経済・経営に関する基本的な知識の修得を図り、情報技術の基礎・コンピュータ活用能力の養成に努める。また、実用的な外国語活用能力の伸張・強化を通して豊かな国際感覚を養成し、急速に国際化する地域企業・社会に貢献できる人材を育成することを教育目標とした。

専門分野に応じて、経営コース、情報コース、国際・英語コース、国際・中国語コースの４つの履修コースを設置した。

⑵カリキュラムの概要

授業科目には、基礎教育科目及び専門教育科目の区分が用意され、授業科目ごとに単位が設定された。また、授業科目には修得方法により、必修科目、選択科目及び選択科目に分類された。

①基礎教育科目

学科を問わず、すべての学生が幅広い教養を身につけるためのものと、専門教育の基礎となるものとが含まれ、「自分を知る」、「高短を知る」「他を知る」等のねらい別の授業科目群を開設した。卒業要件をみたすには、必修科目を含めて30単位以上を必要と定めた。

②専門教育科目

各学科各履修コースに係わる専門知識、技術を修得するための科目を開設した。卒業要件をみたすには、必修科目を含めて34単位以上を必要と定めた。

「授業科目」については、基本的に現行(平成17年度)のものと同一である。(３.資料集、3.3.9を参照)。また卒業所要単位数についても現行と同一である。(３.資料集、3.3.9を参照)

2.1.3　専攻科のカリキュラム改定

３学科への再編改組に伴う学科カリキュラムの全面改訂が行われたことで、平成12年６月には、学年進行に従った専攻科の「カリキュラム」見直しと改定が必要となり検討が開始した。平成12年９月「専攻科カリキュラム改定にあたっての留意事項」と「専攻科カリキュラムの見直しに際しての留意点」で、学科再編後の平成12年度入学生が平成14年度に専攻科に進むことに留意して、学科カリキュラムとの整合性を図るための平成13年度の専攻科カリキュラムを改訂するための留意事項が提示された。教務委員会からの主な改訂の留意点は、つぎの通りであった。

「改定に当たっての留意点」

・４年間を通した一貫性のあるカリキュラム
・「大学改革」の最重要課題である「融合教育」の理念に則り、学科の各コースから進学した学生を融合する。また、他学科学生へも門戸を開放する。
・「経営学士」の取得に障害がでないように配慮する。
・将来目標である「独自に学位授与ができるような体制作り」に配慮する。

などであった。

「見直しに際しての留意点」

・学科と専攻科のつながりによる授業科目名称の見直し
・指導教員制の見直しと授業科目名称及び配当の見直し
・通年開講科目の見直し(前期・後期各２単位とした場合の科目名称等)
・学士の区分に合わせた新規授業科目の追加
・産業デザイン専攻における開講科目の充実
・地域ビジネス専攻における開講科目の充実

などであった。

学科と専攻科のカリキュラムの全面的な改訂に対応して、平成13年２月教務委員会より学科履修規定及び専攻科履修規定の一部を改定したとの報告があり了承された。

改訂の要点は、つぎの通りであった。

「履修方法の柔軟性」

・他専攻、他学科および公開講座の授業科目の履修。それぞれで６単位まで修了要件の単位として認定する。学科及び他専攻と同一科目を専攻科の科目として開講でき、開講した科目はすべて自専攻の正規の科目として取り扱う。
・他大学等で修得した単位の取扱いは、基礎科目８単位、専門科目22単位まで、修了要件の単位として認定する。

「地域ビジネス専攻指導教員の範囲拡大」

・地域ビジネス学科の教授、助教授全員に拡大する。

などであった。

⑴専攻科の概要

①産業造形専攻

「生活の中での工芸」に関する造形と工学の知識と技術を産業的観点から考察し、従来の工芸作品を超えて、現代のライフスタイルをより豊かにする生活空間を構成し得る造形品の創作及び研究が可能な人材養成を教育目標とした。

②産業デザイン専攻

産業デザインにかかわる企画・立案・製作・評価のための理論と実務を学び、生活・環境・歴史・文化に根ざ

した人間理解を基礎に、産業デザイナーの要請を教育目標とした。

③地域ビジネス専攻

21世紀の地域企業は、地域振興への貢献から始めて、世界の産業発展へも直接に貢献する存在となる。この役割を担える資質をもつ企業人を育成する。そのために、経済・産業・地域社会への理解、企業経営の主要概念と経営手法、情報システム活用の諸技術、異文化理解と国際コミュニケーションの素養をあわせて学ぶことを教育目標とした。

⑵カリキュラムの概要

授業科目は、基礎科目及び専門科目に区分され、それぞれの授業科目ごとに単位が定められた。授業科目に単位の修得方法により、必修科目と選択科目に分類された。

専攻科修了に必要な最低修得単位数は、基礎科目16単位以上、専門科目46単位以上、合計で、62単位以上が必要と定められた。

「授業科目」については、基本的に現行(平成17年度)のものと同一である。また卒業所要単位数についても現行と同一である。(３.資料集、3.3.10を参照)

2.1.4　専攻科の変遷「１年制１専攻科から２年制３専攻科に再編改組」

2.1.4.1　学科及び専攻科のカリキュラム改善検討

平成３年５月発行の「大学の多様な発展を目指してⅠ－大学審議会答申集」(高等教育研究会編集)Ⅱ短期大学教育改善のための方策、および、短期大学設置基準の改正に呼応して、平成４年から将来構想委員会で、教育課程の見直し・改善についての検討が始まり、平成４年10月「カリキュラムの改善と検討について」と題する文書に基づき、専攻科等の改革問題へのワーキング・グループによる取り組みが開始した。

検討事項の要点は、「各本科専攻・コースの現在のカリキュラム(２年制)を基盤として、その上に専攻科(２年制)を積み上げると想定してその２年制のカリキュラム(62単位程度)を検討してとりまとめる。その場合、必要があれば基盤の本科２年のカリキュラム(現在64単位以上)の改善を行う。また現在の専攻科(１年制)のカリキュラムと必ずしも関連づけを要しないとの検討指針が提示され、本科と専攻科を対象にした全カリキュラムの見直し・検討を始めた。

見直し・検討活動は、各専攻で本科(２年制)と専攻科(２年制)を想定したカリキュラム案が作成された。それぞれの案が揃った時点で、平成５年２月授業科目の分類についての原則的な確認で、①共通基礎科目(全学に共通するもの)、②専門基礎科目(各学科で共通のもの)、③専門科目(専攻ごとに設定する。ただし、他専攻の②③を活用することも可能である)との３分類に従った科目分類が提示された。この科目分類にしたがって、各専攻で具体的な科目名と単位数の検討と提案を繰り返した。

平成５年６月の教授会で、専攻科の再編改組の基本方針「１年制１専攻「専攻科地域産業専攻」から２年制３専攻「産業工芸専攻、産業デザイン専攻、産業情報専攻(後に「地域ビジネス専攻」と改称)」と指導教官制度が承認され、ついで、専攻科の再編改組を文部省に概算要求することが決定された。平成５年９月：カリキュラムがほぼ確定となるに伴い専攻科再編改組のガイドラインの検討がはじまった。平成５年11月には「本科教育課程の改革案」が固まり教授会の承認を経て、教務委員会へ付託された。

平成５年11月再編改組する専攻科のガイドライン「ア.「学士」号の取得を目指すため、学位授与機構に認定される教育課程とする。イ．本科２年の教育よりも、より専門性の高い教育課程とする。ウ．必要に応じ、本科の授業科目をとらせるなど、弾力性のある教育課程とする」が決まり、専攻科の教育課程を検討する専攻科ワーキンググループを設置した。

2.1.4.2　専攻科再編改組とカリキュラム

平成６年３月「新専攻科開設科目教科内容(案)」が教授会で承認された。つぎに、平成６年４月文部省への「専攻科再編改組の計画概要」提出・説明を経て了解が得られた。

⑴新３専攻・コースの概要

２学科３専攻科の概要は次のとおり。(以下、自己点検・自己評価報告書より)

①産業工芸学科

金属工芸専攻、漆工芸専攻、木材工芸専攻及び産業デザイン専攻の４専攻を置き、それぞれに必要な基礎的理論と技術・技法を十分に修得することを目標とした。また、各専攻とも産業製品の企画、設計及びデザイン等に必要な発想力や造形感覚を十分に養うようにするとともに、製品計画、生産管理及びマーケティング等の授業も課し、経営面に通じる教育にも配慮した。

②産業情報学科

経営実務専攻、情報処理専攻及びビジネス外語専攻(英米コース及び中国コース)の３専攻を置き、産業や企業活動についての基礎理解、情報・通信システムに関する知識の修得、さらに外国語を通じての国際コミュニケーション能力の向上を目標とした。合わせて、現代経済社会の情報化や国際化を背景に、特に地元産業の企業活動を支える産業人の育成を目指した。

③専攻科

短期大学２年間の教育の基礎の上に、さらに２年間、産業造形専攻、産業デザイン専攻及び地域ビジネス専攻の３専攻を置き、指導教官制の下、緻密なカリキュラムと学習目標を明確に自覚した自主学習により、高度な知識と技能・技術を修得させ、我が国とりわけ地域の産業の発展に、積極的に貢献できる人材を育成することを目標とした。

「産業造形専攻」では、「生活の中での工芸」に関する造形と工学の知識と技能を産業的観点改めて考察し、従来の工芸作品を超えて、現代のライフスタイルをより豊かにする生活空間を構成し得る造形品の創作・研究が可能な人材の養成を図ることを教育目標とした。

「産業デザイン専攻」では、デザインに係わる企画・立案・製作・評価・シミュレーションのための理論と実践を学ばせ、生活・環境・歴史・文化に根ざした人間理解を基礎におく産業デザイナーの養成を図ることを教育目標とした。

「地域ビジネス専攻」では、地域産業をも含む地域の諸企業において活躍しうるよう、企業経営のマネジメントサイクル(Plan・Do・See)の概念と実務、とりわけ意思決定と業務遂行のために不可欠な知識や技法を習得させることに主眼を置くが、さらに情報処理技術や国際的な社会事情をも学ばせ、多様な側面から地域ビジネスの発展に貢献しうる人材の養成を図ることを教育目標とした。

⑵カリキュラムの編成(以下、自己点検・自己評価報告書を参考にした)

専攻科の再編改組を視野に入れながら、平成５年年２月から学科のカリキュラムを検討するワーキンググループを設置し、討議が重ねられた。この新しいカリキュラムは平成７年度入学の学生から実施された。

学科の教育課程改正の骨子は次の通りであった。短期大学設置基準の大綱化の趣旨に沿って、学科に係る専門の学芸を教授し職業又は実際生活に必要な能力を育成するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を養い、豊かな人間性を涵養するよう配慮して、次のような基本方針の基に改正された。

⑴短期大学卒業生として身に付けるべき基礎的な知識・技能を確実に修得させるため、従来の一般教養科目と専門科目の区分を廃止し、共通基礎科目、専門基礎科目及び専門科目の３区分に改めるとともに、これまでの教育経験・実績を踏まえ、体系的な授業科目の編成を行った。

①共通基礎科目(必修14単位、選択６単位、計20単位以上を卒業所要単位数とする。) 全学生を対象とする。

②専門基礎科目(必修６～８単位、選択６～８単位、計14単位以上を卒業所要単位とする)各学科ごとの学生を対象とすることとなった。

③専門科目(必修16～26単位、選択４～14単位、計30単位以上を卒業所要単位とする)各専攻・コースごとの学生を対象とすることになった。

「授業科目」については、基本的に現行(平成17年度)のものと同一である。また卒業所要単位数についても現行と同一である。(３.資料集、3.3.9を参照)

⑵学科・専攻の枠を超えた学生間の交流を推進するため、共通基礎科目のうち、必修の授業科目(スポーツ健康科学Ⅰ、スポーツ健康科学Ⅱ、英語Ⅰ、英語Ⅱ、情報処理基礎Ⅰ、情報処理基礎Ⅱ、及び本学の特色としての、産業工芸論、産業情報概論)は、学科・専攻・コースの枠を外した横断的クラス編成を行った。

⑶幅広い教養と専門知識を身につけ、多様な社会情勢に対応できる人材育成を図るため、従来の(人文科学、社会科学、自然科学)という枠組みや、(物理学、化学)などと言った一般的な授業科目は廃止し、総合科目に相当する次の授業科目を共通基礎科目として開設した。

(共通基礎科目)

「法と生活」、「経済システム」、「比較文化」、「人間科学」、「地球環境と人間」、「技術と産業」、「中国語」、「体育」

⑷情報社会に対応して、必修授業科目として「情報処理基礎Ⅰ」及び「情報処理基礎Ⅱ」を新たに設けて、全学生を対象とした情報処理教育を行うこととした。その際、１年次前期の「情報処理基礎Ⅰ」は全学共通で、１年次後期の「情報処理基礎Ⅱ」は、学科別の教育課題を編集して行うこととした。

⑸授業時間を100分４時限制から90分５時限制とした。

⑶クラス編成

学生の履修科目のうち「共通科目」については、全学生を対象とする必修科目として、「産業工芸概論」、「産業情報概論」、「情報処理基礎Ⅰ」、「英語Ⅰ」及び「スポーツ健康科学」を開設した。この５科目については、クラス編成も40人を１クラスとし、それぞれに各専攻の学生による混成のクラス編成により、他学科の学生や他専攻の友人との交流と理解を深めることができるようになった。

2.1.4.3　学士の学位取得

平成５年11月の専攻科のガイドライン「ア.「学士」号の取得を目指すため、学位授与機構に認定される教育課程とする。」に対応した検討が始まった。平成６年３月「新専攻科開設授業科目教科内容」が教授会で承認された。平成６年４月には文部省への「専攻科再編改組の計画概要」の提出・説明と同時に、平成７年度概算要求に３専攻への再編改組と専攻科棟新営が盛り込まれた。その間、学位授与機構との折衝で、学位の取得は、専攻科２年次10月「専攻科修了見込み」を学位授与機構へ申請することにより、翌年３月末までに「学士(芸術学士、芸術工学士、経営学士)取得の可否」判定との手続きが確認された。(以下、自己点検・自己評価報告書より)

平成７年年度に学位授与機構から、学位規則に定める要件を満たす専攻科として認定され、本学の専攻科で修得した単位は、学士の学位授与の要件の一つとして申請できることとなった。なお、学位授与機構による学位取得方法は、2.1.4.3－1に示す通りである。

学士の学位の取得を希望する学生は、本学専攻科において所定の単位を修得し、これに加えて大学の科目等履修生として単位を修得するなどして所定の16単位を積み上げた場合、学位授与機構の審査により学士の学位を取得できることとなった。本学の専攻科では、在学中に本学で放送大学の授業が受けられ、大学において修得すべき16単位を修得することが出来ることとなり、指導教官及び学生課と相談の上、履修計画を立て必要な単位を修得することが可能となった。

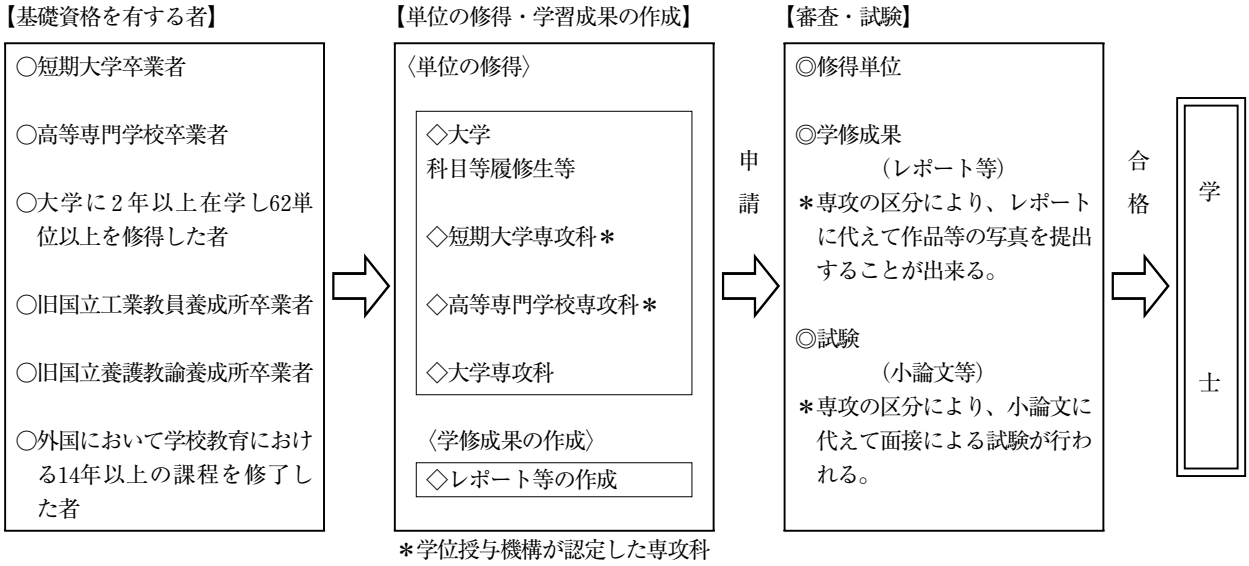
平成９年４月新専攻科第１回の卒業式が行われた。(学士取得者の年次状況は３.資料集、3.3.6.3を参照)

2.1.4.4　専攻科学生の受入れ

平成５年11月専攻科のガイドラインが決定したことに伴い、在学生や学外者を対象としたアンケート調査の検討が始まり、平成６年２月「新専攻科に関するアンケート調査」が行われた。このアンケート調査に基づき、専攻科の定員を、産業造形専攻14名、総合デザイン専攻(後に産業デザイン専攻と改称)５名、地域ビジネス専攻６名とする方針が決まった。平成６年９月「新専攻科の入試試験方法」「新専攻科の案内」「新専攻科進学調書」が教授会で承認され、学科２年生を対象にした「新専攻科の説明会」が実施され、33名が進学を希望した。

平成７年２月10日新専攻科第１回入学試験が実施され、産業造形専攻17名(定員14名)、産業デザイン専攻６名(定員５名)、地域ビジネス専攻５名(定員６名)が合格した。そして、平成７年４月には、学位授与機構が定め

2.1.4.3―1　学位授与機構による学位取得方法



2.1.4.3—2

芸術学士

<table>
<tr><th>専攻の区分</th><th colspan="6">授業科目の区分及び修得すべき単位数</th><th>専攻分野の名称</th></tr>
<tr><td rowspan="12">美　術</td><td rowspan="11">専攻に係る科目</td><td rowspan="11">62単位以上・内31単位以上は短期大学卒業後に修得</td><td rowspan="3">専門的科目</td><td>美術制作に関する科目</td><td colspan="2" rowspan="3">3区分にわたり40単位以上</td><td rowspan="12">美術学</td></tr>
<tr><td>美術理論・美術史に関する科目</td></tr>
<tr><td>美術教育に関する科目</td></tr>
<tr><td rowspan="8">専門関連科目</td><td>文化史に関する科目</td><td rowspan="8">4単位以上</td><td rowspan="9">24単位以上</td></tr>
<tr><td>哲学に関する科目</td></tr>
<tr><td>外国語に関する科目</td></tr>
<tr><td>民俗学に関する科目</td></tr>
<tr><td>社会学に関する科目</td></tr>
<tr><td>情報科学に関する科目</td></tr>
<tr><td>心理学に関する科目</td></tr>
<tr><td>言語学に関する科目</td></tr>
<tr><td>演劇学に関する科目</td><td></td></tr>
<tr><td>生態学に関する科目</td></tr>
<tr><td colspan="5">専攻に係る科目以外の科目(必ず外国語を含む)</td></tr>
</table>

＊大学において16単位以上、うち原則として８単位以上は専攻に係る単位を修得

芸術工学士

<table>
<tr><th>専攻の区分</th><th colspan="6">授業科目の区分及び修得すべき単位数</th><th>専攻分野の名称</th></tr>
<tr><td rowspan="4">芸術工学</td><td rowspan="3">専攻に係る科目</td><td rowspan="3">62単位以上・内31単位以上は短期大学卒業後に修得</td><td rowspan="2">専門的科目</td><td>【A群(講義・演習課目)】(20単位以上)
○生活機器・環境デザインに関する科目
○画像・音響デザインに関する科目
○デザインの基礎となる工学に関する科目</td><td colspan="2" rowspan="2">左のA群の区分の内から「デザインの基礎となる工学に関する科目」の区分を含む2区分以上にわたること及びA群B郡合わせて10単位以上</td><td rowspan="4">芸術工学</td></tr>
<tr><td>【B群(実験・実習科目)】(10単位以上)
○生活機器・環境デザインに関する実験・実習科目
○画像･音響デザインに関する実験･実習科目</td></tr>
<tr><td>専門関連科目</td><td>美術・デザインに関する科目
音楽に関する科目
工学の基礎となる科目
工学及び周辺技術等に関する科目</td><td>4単位以上</td><td rowspan="2">24単位以上</td></tr>
<tr><td colspan="5">専攻に係る科目以外の科目(必ず外国語を含む)</td></tr>
</table>

＊大学において16単位以上、うち原則として８単位以上は専攻に係る単位を修得

経営学士

<table>
<tr><th>専攻の区分</th><th colspan="6">授業科目の区分及び修得すべき単位数</th><th>専攻分野の名称</th></tr>
<tr><td rowspan="11">経営学</td><td rowspan="10">専攻に係る科目</td><td rowspan="10">62単位以上・内31単位以上は短期大学卒業後に修得</td><td rowspan="9">専門的科目</td><td>経営学・経営学史に関する科目</td><td colspan="2" rowspan="9">4区分以上にわたり40単位以上</td><td rowspan="11">経営学</td></tr>
<tr><td>企業論に関する科目</td></tr>
<tr><td>経営管理論に関する科目</td></tr>
<tr><td>人事管理論に関する科目</td></tr>
<tr><td>国際経営論に関する科目</td></tr>
<tr><td>経営情報論に関する科目</td></tr>
<tr><td>経営史に関する科目</td></tr>
<tr><td>会計学に関する科目</td></tr>
<tr><td>マーケティングに関する科目</td></tr>
<tr><td rowspan="3">専門関連科目</td><td rowspan="3">経済学に関する科目
商学に関する科目
法学に関する科目</td><td rowspan="3">4単位以上</td><td rowspan="4">24単位以上</td></tr>
<tr><td></td></tr>
<tr><td></td></tr>
<tr><td colspan="5">専攻に係る科目以外の科目(必ず外国語を含む)</td></tr>
</table>

＊大学において16単位以上、うち原則として８単位以上は専攻に係る単位を修得

る要件を満たした専攻科として第１回入学式が行われた。

なお、平成８年度からの専攻科学生募集は、１次(10月)、２次(１月)の２回実施し、募集定員は、産業造形専攻14人、産業デザイン専攻５名、地域ビジネス専攻６名で、合計25名の募集定員を定めた。なお、２次募集に関してはそれぞれ若干名を募集定員とした。入学者選抜は、１次、２次ともに小論文、面接、志望理由書、論文(レポート)または作品とその説明、調査書及び健康診断書などを総合的に判断して決定すると定めた。

2.1.4.5　専攻科棟の新営（以下、学園だより H9,11,15より）

平成７年新専攻科の学生受け入れに伴い、教室不足を整備する必要性が表面化した。専攻科棟の新営は、平成６年４月の概算要求に盛込まれ、平成８年施工開始・平成９年竣工の予定であった。そこで、平成７年５月(財)高岡短期大学協力会の援助を得て、緊急避難的に100㎡(４間×８間)程度のプレハブ校舎を仮設することで対応が行われた。

平成８年８月より専攻科棟の新営工事が開始された。鉄筋４階で建築面積580.8㎡、延べ面積2,225.9㎡で、１、２階吹き抜けのデザイン実験室には移動式クレーン、注視点カメラが設置されるなど最新の装置類が取り入れられた。ついで、学科産業デザイン関係室の移転及び学科で不足している共通機器室等の整備も図られた。(専攻科等の平面図は３.資料集、3.2.3を参照)

(久保欣吾)

2.2　富山県内国立３大学の再編・統合

○遠山プランに先立つ高岡短期大学自己改革案の紹介

平成13年(2001年)６月11日、小泉首相が大学への競争原理導入を訴え、文部科学省は国立大学の再編統合を推進する「大学の構造改革の方針」(遠山プラン)をまとめました。これを受けて、同年８月24日の富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学の３学長が再編統合の検討を始める合意書案を提案、という形で富山県内３国立大学の再編統合協議が始まりました。この結果、平成17年(2005年)10月には新富山大学が誕生することとなり、高岡短期大学は新大学の『芸術文化学部』という形で再編統合されました。

しかし、遠山プランに触発された再編統合が動き出す２年前の平成11年(1999年)には故人となった蠟(ろう)山昌一前学長を中心に、高岡短期大学では自己改革基本方針案をまとめ、当時の２学科(産業工芸学科、産業情報学科)３専攻科体制を現在の３学科体制(産業造形学科、産業デザイン学科、地域ビジネス学科)３専攻科体制に改組しました。さらに、３大学の再編統合での協議過程では、この基本方針案に盛り込まれた『２＋２新構想の短期大学』を下敷きとして高岡短期大学としての新大学像を模索した経緯があります。

いま高岡短期大学の名が消えるにあたり、この改革基本方針案の一部を紹介し、蠟山昌一前学長を中心とした高岡短期大学がどのような未来像を描いたかを記憶にとどめたいと思います。

１．建学の趣旨を今日に生かすための改革

昭和53年(1983年)に創設された高岡短期大学の設立趣旨は「地域の多様な要請に積極的にこたえ、広く地域社会に対して開かれた特色ある短期大学として創設し、今後の短期大学の運営及び教育研究の改善に資するものとする」というものです。この趣旨に沿い、伝統的工芸品産業の発展に寄与する工芸技術、実務的な経理・経営及び情報処理、並びに外国語及び国際問題等の分野における職業に必要な能力を育成することを目的として２つの学科(産業工芸学科、産業情報学科)が置かれました。その後の時代の変化はいちじるしく、21世紀を目前にして高等教育機関に対する要請はいっそう多様なものとなり、これまでの自然な延長では応えられなくなったため、「本学は、⑴多様な専門分野を融合した教育サービスの提供とそのためのカリキュラムの全面的改定、および、⑵教育・研究・地域サービスという３つの機能の効果的な展開を担保する教員組織の改編の２つを軸とする改革を自らの手で積極的に推進し、本学の個性を光り輝かせなければならない」という改革案がまとめられました。

２．改革にあたっての留意されたこと

第１は、「本学における研究・制作の望ましいあり方を改めて確認する」ことでした。「学術研究や芸術制作は大学人ひとりひとりの知的・精神的作業によるものであるから制約ないし規制は行うべきでないが、これは研

究・制作さえしていればよいという研究・制作至上主義を意味しない。研究・制作の名において、学生に対する教育や地域へのサービス提供を怠るとすれば、それは許されない。つまり、教育、地域社会へのサービスの提供を十分満足ゆく形で、(すなわち、それらの受益者(学生、地域社会)のニーズを十分にくみ取り、満足させるように)研究・制作の質を高め、量を増す。このような研究・制作面での方向こそ、これからの本学に求められものである」とされました。

第２は、「教育、研究、地域サービスの３つの機能は、専門家集団としての高岡短期大学にとっての柱でなければならない」ことでした。「本学の教員ひとりひとりにこれら３つの分野での十分な貢献を要請することには無理がある。研究の面でも優れた業績をあげ、学生に対する教育も素晴らしく、地域にも大きく貢献する人材を多く集められれば、それに越したことはないが、それは理想である。現実は必ずしもそうではないことを直視すれば、教員の採用・昇進といった人事の面で、また、研究費等の資源の配分において、教員それぞれの個性(比較優位)を十分に考慮すると同時に、本学全体として「３本柱」が充実できるような判断・決定を行わなければならない。この点から過去を振り返ると、これまでの教員人事が研究・制作業績主義に偏しすぎていたことを、反省すべきである」とされました。

第３は、カリキュラム改定と教員組織の再編にあたっての融合教育の重視でした。「学生に対する教育サービスの供給の面では、需要の側に立った体系化が必要であり、他方では、教員組織の専門家集団としてのまとまりが欠かせない。この２つの要請を安易に結びつけると、どうしても「たこつぼ」型の(すなわち、専門分野の暫壕に閉じこもり、教育面では学生までをも囲い込む)カリキュラムになりやすい。このような悪しき傾向に陥らぬようにするには、教員組織の編成とカリキュラムの作成(そして、それにしたがっての教育の実施)とを切り離すしかない。教員組織の編成は、大学の多様な機能(３本柱)の確実な展開とその長期にわたる維持という観点から見て効果的な専門家の組織化・集団化という原則で行われるべきであり、カリキュラムの策定は、ひとりひとりの教員が提供できる教育サービスを大学全体の観点から整合的に体系化し、学生ないし社会の需要に応えるという考え方で行われるべきである」とされました。

また、「現在、全体の教員数は少ないながら多様な分野の専門家を擁し、それぞれの分野(金属工芸、漆工芸、木材工芸、産業デザイン、経営実務、情報処理、英米語、中国語といった分野)で有為な学生を育成してきた。今後、さらに優れた学生を世に送り出し続けるには、こうした分野のそれぞれで専門教育をより深め、それをもって「高岡短期大学らしさ」とするというのではなく、むしろ、一定の専門的能力を持ちつつも、同時に、いくつかの分野に理解力が高い学生、包容力のある学生を育てることに注力すべきである。キャッチフレーズとして例示的に言えば、「コンピュータに強いクラフト・パーソン」、「クラフトに強いコンピュータ屋」、「企画書の書けるデザイナー」といったことが、本学の目指す学生像ではなかろうか。要するに、本学は多様な分野を融合した教育サービスの提供という点で特色を発揮しなければならない」ことが強調されました。

３．高岡短期大学の未来像『２＋２の新構想短期大学』

未来像として、「短期の高等教育機関とは、要する２年の高等教育課程をワンセットとして体系的な教育サービスを提供する組織を指し、いくつのセットを持つかが問われる。ひとつだけであれば従来の短期大学であるし、ふたつであれば、学科と専攻科からなる２＋２の新構想短期大学である。さらに、この上にもうひとつ２年の課程を有する２＋２＋２の新々構想短期大学も考えられる」ことが検討されました。そして、「２＋２の新構想短期大学の範囲で、その充実を図ることを改革の目的とする。しかし、高岡短期大学の将来像としては新々構想短期大学を目指すべきである」とされました。この高岡短期大学の未来像を図示したのが図１、２であり、以下のように説明されています。

ちょうど大学院博士課程が前期課程と後期課程に分かれるように、高岡短期大学には２年間の教育課程が２つ存在し、前期課程・後期課程それぞれが連携を保ちつつ、それなりに完結した教育を実現する。現行制度との対比で言えば、前期課程が学科、後期課程が専攻科に対応する。

前期課程：社会人として必要な知的活動を実現できる基礎能力の育成を図ることを中心に、それぞれが選択した専門分野（「系」）の基礎の学習に当て、さらに、基礎能力の試験的応用を経験させる。主たる勉学の分野を「系」として、そこに集中させる。

後期課程：本学が提供可能な分野を大別した「系」に応じて、専門的能力を高める。「系」は、カリキュラム上の概念であり、あくまでも教育を受ける学生から見ての分類である。教員の分類ではない。後期課程の学生は「系」のなかから主たる分野と従たる分野を選択可能とし、幅広い応用力の養成を図る。すなわち、主分野では徹底的な少人数教育を行う。従分野では比較的多人数の講義に加え、放送大学との関連を強化する。

(注)当時想定された学科は、産業造形、産業デザイン、地域ビジネスの３学科であり、「系」は金属工芸系、漆工芸系、木材工芸系、工芸工学系、プロダクト・デザイン系、ビジュアル・デザイン系、経営系、情報系、国際系：英語、国際系：中国語の10系統です。

このように前期課程・後期課程の２課程を設けることは、４年制大学教育課程を単に２分化することではありません。「このことは後期課程の入学者を考えてみれば直ちに判明する。後期課程入学者は、前期課程卒業時において就職するか、他大学へ転入するかの選択肢をも有していた。したがって、後期課程にそれなりの魅力がなければ、入学者の確保は難しい。こうした競争的環境にさらされているということが、２つの課程の設置を単なる２分化ではなくしているのである。逆に言えば、これは競争的環境が教育内容によりよく反映される仕組みに他ならないのである」からです。

一方、入学者選抜の段階では、「入学志願者に希望する学科および「系」を選択させることが必要であろう。したがって、入学時には学生がどの学科・「系」に所属するか確定していることとなる。もちろん、入学後に若干の調整(転系あるいは転科)は可能とすることが望ましい」とされました。

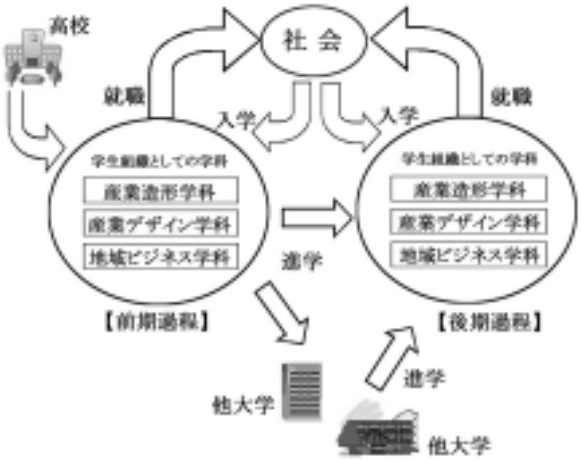


図２　短期の高等教育サービス

４．新大学への提案

このような『２＋２新構想』は、「新大学における準学士制(２＋２制)の導入」として３大学再編統合協議の場(平成14年(2002年)４月)で「富山総合大学(仮称)の基本構想：高岡短期大学からの提案」として提案されました。このときの資料から「準学士制の意義」の記述を抜粋したのが次の文章です。

(1)大学教育面の効果

・短期集中的かつ目標指向的な教育による学習効果の向上
・リカレント教育の推進―学習期間の弾力化
・職業選択の機会を早期にもたらすことで、大学のモラトリアム化を防止―学生の自立意識を向上

大学(短期大学)

短期の高等教育機関としての独自の形態
・２年の高等教育課程をワンセットとして、いくつのセットを持つか。
　新構想は２年＋２年のセットとする。
　将来的には２年＋２年＋２年の新々構想とする。

新構想：当面の目標
・前期課程と後期課程を同一系統とし、４年間での教育をも視野に入れる。
・他学科の後期課程へも進学できるよう多様なカリキュラムを構成する。

前期課程(２年間) ・基礎能力の育成 ・基礎能力の試験的応用	＋	後期課程(２年間) ・幅広い応用力の養成

新々構想：将来の目標

前期課程	＋	後期課程	＋	修士課程(２年間) ・学術の理論及び応用の研究
学位：準学士		学位：学士		学位：修士

図１　新構想・新々構想の短期大学

⑵学生側のメリット

・求人先のニーズに対応した高等教育を選べることによる就職活動における優位性
・２年間でも卒業できること及び一旦社会に出てからの再入学が容易となることによる教育費の負担軽減
・２年間で準学士取得を義務づけることにより、就学期間中の緊張感を持続
・２年の短い期間に自己の目標を設定し、次への展開を建設的に考える契機とすることが可能
・前期２年の中でかなりの程度専門の基礎を踏まえた上で後期２年の履修コース・履修科目が選択可能（従来は専門について充分に内容が分からないまま３／４年生の履修科目等を選択してしまうことがあった。）
・４年一貫ではなく２年で区切りをつけ、卒業／進学／転学／転学部／転学科を選べることにより、『試行錯誤の許される大学』とすることが可能
・上記の点を背景に、２年間の高等教育に対する社会（学生）側のニーズに対応
・準学士レベルでの卒業・就職者が生じることにより、３／４年生の定員に余裕が生じ、かなりの数の準学士レベル編入学生が受入可能

⑶社会のメリット

・企業側の多様なニーズに対応
・富山県・北陸地方の社会が求める知識よりも実務感覚に優れた若い人材の供給可能
・かなりの数の編入学生を受入可能とすることで、高専卒業者には存在する（長岡／豊橋技術科学大学等）が文科系大学では不十分であった短期大学卒業者の国立大学の進学先が確保可能

⑷新大学としてのメリット

・国立大学としては最初の準学士レベル学生の供給先として他大学との差異化が可能
・これまで例のない画期的な制度を導入することで、新大学が単なる寄せ集めではない、『大学の変革』を社会にアピール可能

（堀江秀夫）

2.3　法人化への変遷

2.3.1　法人化準備の要点事項

高岡短期大学の法人化に際し、作成しなければならない事項として、大きくは以下の３つの要点があった。

１）中期目標・中期計画
２）高岡短期大学運営の基本組織
３）就業規則

2.3.2　中期計画・中期目標

平成14年10月、法人化準備委員会が設置され、早速に第１回委員会が開催された。委員会メンバーは、学長を委員長に、副学長、各学科長、各学科の代表委員各１名、事務部長、各課長で構成され、事務部内に法人化準備室が設置された。

第１回委員会以降、平成16年３月まで法人化準備に係る審議は続けられ、特に平成15年９月に至るまでの計13回の委員会では、その全てにおいて中期目標・中期計画の審議・作成が集中的に行われた。当初は、富山県内国立３大学の再編・統合計画が現実化しておらず、法人化後の恒久的な高岡短期大学単独運営という深刻な事情を踏まえた議論が進められ、平成７年の専攻科再編改組、平成12年の３学科体制への再編改組に続く、第３の歴史的な組織改革の色合いが濃かった。したがって初期案では、２学科への再編改組、学科定員の減と専攻科定員の増、教員組織の一本化、別科の設置など、大幅な改変が検討されていた。その後、富山県内国立３大学の再編・統合が現実的な計画となることで、芸術文化学部への移行を踏まえ、高岡短期大学としての法人化後の組織運営は、従来の形態を概ね踏襲することとなったが、この時期の議論の過程において、「教員の所属は学科とせず、１つの組織に全員が所属する」「教員は各自、地域への貢献領域により、文化・生活・産業の３領域に分属する」などといった、その後の芸術文化学部の根幹的理念へと受け継がれる有益な意見があった。中期計画・中期目標（案）は、平成16年３月に教授会において審議・了承されることとなった。

2.3.3　基本組織、就業規則

法人化後の大学運営に係る基本組織、ならびに就業規則等については、平成15年10月より平成16年３月の期間に、計11回の法人化準備委員会によって審議された。管理運営組織については平成16年１月の教授会において審議・了承され、同年２月に開催された「第１回法人化に関する説明会」において、全教職員を対象にその説明が行われた。またこの時点まで審議してきた就業規則(案)と各規程(案)についても説明がなされ、就業規則については、労働基準法等関係法令に基づくことを前提として、給与法、人事院規則等の内容を取り込んだものを作成する方針であること。今後検討する給与関係規程は、従来の内容を基本とすること。裁量労働制を導入すること。また、兼業として非常勤講師に従事する場合、大学業務への充足を徹底することなどが提示され、質疑応答が行われた。同年３月に「第２回法人化に関する説明会」を開催し、第１回説明会の後、委員会において審議した就業規則(案)、労使協定(案)、安全衛生管理体制、会計制度の概要について説明がなされた。説明会の後、法人化準備委員会において就業規則に関する最終的な審議が行われ、同月の教授会において、審議・了承された。なお、法人化準備委員会は平成16年３月をもって終了し、法人化施行年度となる平成16年４月からは、新たに開設された計画評価委員会において、中期目標・中期計画・年度計画と、自己点検・評価を合わせて、引き続き検討していくこととなった。

（沖　和宏）

2.4　教育活動

2.4.1　入学試験の変遷

2.4.1.1　入学生募集要項の基本的概要

昭和61年度に本学第一期生を迎え入れた入学試験以来、平成17年度の最後の入学生(第20期生)入学に至るまでの入学試験の内容は、細部で幾つかの変革があったが、基本的な枠組みは一貫して踏襲されてきた。その基本的枠組みとは、次の通りである。

・推薦入学試験(帰国子女特別選抜試験［各学科定員２名］と社会人特別選抜試験［各学科定員５名］を同時に実施)と一般選抜試験(平成８年度より私費外国人留学生試験が開始される)の２回の入学試験で入学者を決定する。
・推薦入学試験合格者数は、昭和62年度より今日まで入学定員の40%としてきた(昭和61年度のみ30%であった)。
・推薦入学試験では、産業造形学科と産業デザイン学科(旧産業工芸学科、以後省略)の２学科では、小論文(100点)、面接(100点)、実技検査(100点)の成績、調査書及び健康診断書から総合的に判定した。地域ビジネス学科（旧産業情報学科、以後省略）では、小論文(100点)と面接(100点)の成績、調査書及び健康診断書から総合的に判定した(平成16年度より健康診断書の提出は不要となる)。(推薦入学、帰国子女、社会人特別選抜試験および一般選抜試験の配点については３.資料集、3.3.9を参照)
・推薦入学試験と一般選抜試験の両方で、産業造形学科と産業デザイン学科志望の受験生は両学科、他コース(旧専攻)を第２次志望として併願できる。地域ビジネス学科の場合は、一般選抜試験のみで他コース(旧専攻)を第２次志望として併願できた(ただし、平成17年度のみ、推薦入試においても他コースを併願できるようになった)。
・一般選抜試験では、産業造形学科及び産業デザイン学科の場合、国語、数学、外国語の３教科から１教科選択(100点)、実技検査(100点)、面接(100点)の合計300点配点によって合否を判定してきた。(資料集を参照)また、地域ビジネス学科の場合は、国語、数学、外国語の３教科から２教科を選択(各々100点で合計200点)と面接(100点)の合計300点の配点によって合否を判定した。
・推薦入学試験及び一般選抜試験の両方において面接を全学科で実施しており、本学での勉学の意欲や適正を審査し、合わせて調査書の内容を総合的に評価して、採点してきた。このやり方は、開学以来、本学の大きな特徴となっていたと言える。

2.4.1.2　入学試験の幾つかの変革

・学力試験の時間と方法の変革

平成10年度まで学力検査の時間は、各教科90分配

分で、受験者は予め受験教科を選択しておく方法をとっていた。しかしこの方法を採ると、学力検査、面接、実技検査を受けるために、学生によっては試験日が３日間に及び、遠方から来る受験者にとって負担が大きかった。この負担を軽減するために、平成11年度から学力検査で１科目を受験する者は75分の時間配分に短縮した。また２教科を選択する者は、試験問題配布後に自由に２教科を選択し、150分の時間内で解答する方式に変革された。

・産業造形学科及び産業デザイン学科の造形実技検査の時間と課題の変革

両学科の実技検査は、開学時以来「鉛筆デッサン」（３時間）と「立体構成」（３時間）の２つの検査を実施してきた。一時期「鉛筆デッサン」は「鉛筆淡彩」に変わったが、その後「鉛筆デッサン」、「立体構成」に復帰した。ただし平成７年度より検査時間は、両課題合わせて４時間となった。また、平成15年度から、推薦入学試験では両学科ともに実技は「鉛筆デッサン」（２時間）のみとなった。しかし、一般選抜試験では産業造形学科志望者は「鉛筆デッサン」（３時間）のみであるが、産業デザイン学科志望者は「鉛筆デッサン」と「デザイン選択課題」（立体構成、色彩構成、構成表現から１分野選択、３時間）の２科目の実技課題を課すことになった。

2.4.1.3　私費外国人留学生入学試験の変遷

平成８年度から私費外国人留学生特別選抜試験が開始された。入学者の選抜は、日本語能力試験１級（100点）、本学が実施する面接（100点）、小論文（100点、産業情報学科のみ）、造形実技（100点、産業工芸学科［新産業造形学科、産業デザイン学科］のみ）、最終出身学校等の成績及び健康診断の結果を総合して判定した。募集人員は各学科各コースで若干名である。平成15年度より日本語能力試験は日本留学試験（日本語）に変わった。また一般選抜試験の造形実技課題の変更に合わせて、産業造形学科の実技検査は鉛筆デッサンのみとなり、産業デザイン学科は鉛筆デッサンとデザイン選択課題の２科目となった。平成16年より地域ビジネス学科の試験の小論文が廃止され、面接時に口頭試問（50点）が課せられることとなった。

2.4.1.4　専攻科の入学試験の変遷

・昭和63年度に地域産業専攻科（修業年限１年）が発足されることとなり、それに合わせて同年に専攻科入学試験が実施された。出願資格は短期大学卒業以上の者で、募集人員は10人（社会人を積極的に受け入れる）、選抜方法は小論文、面接等であった。

・平成７年度から専攻科は１年制１専攻から２年制３専攻に再編改組され、「産業造形専攻」（募集人員14名）、「産業デザイン専攻」（募集人員５名）、「地域ビジネス専攻」（募集人員６名）となった。選抜試験は秋期（11月）と冬期（翌年３月）の２回にわたって行なわれた。選抜方法は、１次、２次とも、志望理由書、論文（レポート、平成13年度より廃止）、又は作品の写真及び説明（地域ビジネスは除く、平成13年度より廃止）、調査書、小論文、面接及び健康診断書を総合して判定した。配点は全専攻ともに小論文100点、面接200点となっていた。その後、平成15年度には、産業造形専攻と産業デザイン専攻は秋期と冬期の試験実施、地域ビジネス学科は夏期（７月）と冬期に試験実施と第一次試験の実施時期がずれたが、平成16年度から全専攻の試験実施は夏期と冬期に統一された。

2.4.2　大学説明会・オープンキャンパスの変遷

・初期の大学説明会

平成元年度入学志望者向けの第１回目の大学説明会は昭和63年12月に開催された。高校生を対象として本学の設立の趣旨、教育内容等について十分に理解してもらうことを目的としていた。しかし、実際には高校生と教員が一緒に説明会に訪れた。参加者は大学側からの説明を受けた後、図書館、プログラミング演習室、映像作成室、デッサン室等の施設を見学し、各学科、専攻別の説明を受けた。第１回目には生徒151名、指導教諭23名、計174名の参加者があった。

平成２年度入学志願者向けの第２回大学説明会から７月に開催時期が変わった。この時には57校（県内40校、県外17校）から578名（教員46名）の参加者があり、一気に約３倍に人数が増えた。また、大学紹介ビデオ「学園生活あれこれ」が始めて上映された。その後、平成３年度向けの第３回目には62校、508名、平成４年度向けの第４回目には54校、435名、平成５年度向けの第５回目には54校、485名、平成６年向けの第６回目には52校、404名、平成７年年度向けの第７回目には48校、349名、平成８年度向けの第８回目は53校、286名、平成９年向けの第９回目には50校324名、平

成10年度向けの第10回目には51校、302名の参加者があった。年によって参加者の数にばらつきがあるが、おおよそ50校、300～400名の参加者が毎年あったと言えよう。

・大学説明会の名称をオープンキャンパスへ改正

平成12年度入学志望者への短大説明会は「オープンキャンパス」と名称を変え、主に高校生を対象とした短大及び専攻科説明会となった。この年の説明会は１回のみの開催であった。翌年平成13年度向けのオープンキャンパスから、毎年７月初旬、８月初旬、秋の大学祭期間中と３回実施されるようになった。内容も従来の全体説明とキャンパスツアーに加えて、進学相談、３学科ごとの模擬授業、在学生との交流など盛沢山の企画が実施された。例えば、体験制作として金属工芸コースはシルバーリングを、漆工芸コースはアクセサリーを、木材工芸コースはペーパーナイフを製作した。デザイン学科では、「プロダクト演習」と「ビジュアル演習」の授業が行なわれた。地域ビジネス学科の模擬授業は「インターネット入門」、「21世紀のビジネス社会」、「English for Communication」、「中国語・中国文化」であった。模擬授業の内容は毎年変え、本学の魅力を伝えられるように趣向がこらされた。なお、３回のオープンキャンパスでの高校生(教員も含まれる)の参加数は、平成13年度523名、平成14年度556名、平成15年度607名、平成16年度351名となっている。

2.4.3　高等学校と高岡短期大学との入学試験に関する懇談会の実施

平成11年度から平成17年度向け入学説明会に至るまで、高校生向けには「オープンキャンパス」、高等学校進路指導担当員向けには懇談会と２種類の入学説明会が実施されるようになった。第１回懇談会は平成11年７月に開催され、県内高等学校から38名、県外から８名の進路指導担当教諭が参加した。資料としては、過去の入学者選抜試験結果、入学者辞退者一覧、富山県と石川県の年度別・高校別の志願者・合格者・入学者一覧、取得可能な免許・資格等が配布された。学長を中心とした短大説明後の質疑応答では、入試に関する情報以外にも短大生の就職、編入学、本学専攻科入学者の状況や将来構想など幅広い質問が毎年活発に寄せられていた。説明会の後にキャンパスツアーが行なわれ、その後にお茶やコーヒー、果物、お菓子等を立食形式で取りながら、さらに自由に情報交換をする機会が設けられていた。

2.4.4　高等学校訪問の実施

平成９年度からは毎年、本学教職員が県内外の高等学校へ出向いて、本学入学試験の結果、就職状況及び翌年の入試の方針等を説明する高等学校訪問が実施されるようになった。この際には、本学入学試験等に対する要望を訪問校から直接聴くことにより、入学者選抜方法等の改善に役立てること、また、本学のPRを積極的に行なうことで志願者の増加を図ることも目的となっていた。訪問先の学校は下記のように年を追うごとに増加している。

訪問先／年度	富山県	石川県	福井県	合　計
平成９年度	21	7	2	30
平成10年度	22	10		32
平成11年度	26	16		42
平成12年度	36	19		55
平成13年度	42	28	13	83
平成14年度	43	29		72
平成15年度	43	30	10	83
平成16年度	42	33	12	87

2.4.5　高岡短期大学生の動向調査報告ワーキンググループの発足と結果報告

平成13年度の秋に、入試委員会において入試データベースを蓄積して今後の入試に役立てるべきであるという案が提出され、動向調査WGが結成された。グループ長は秦正徳教授、他教師陣７名、事務部４名、総勢12人のメンバーで作業が行なわれ、結果は翌年14年８月に冊子として報告された。データとしては、平成13年度入学者推薦入学試験、一般選抜試験を対象として、入学願書受付の際に集められたデータ、入試判定のための入力データ、基礎教育科目を主とした前期の学業評価データが利用され、これらの資料から可能な分析を試行し、入試のあり方を考察したものである。

まず、産業造形学科と産業デザイン学科の場合、両学科を総合しても不合格者が少ないため、合否判定特徴分析に役立たせるのが難しい側面があった。しかし、入試科目の相関を検討している。面接と学力、面接と実技、実技と学力における相関係数を検討したが、いずれも相関は見られなかった。地域ビジネス学科の場合、受験者が、推薦で106名、一般入試で263名おり、統計的な意味を持つデータを得られた。特に一般入試における辞退者のデータ、入学偏差値と前期基礎科目の学業偏差値との関係、調査書と学力との関係から、今後の学力検査、小論文、面接のあるべき姿について貴重な提言がなされていた。

2.4.6　入学志願者数及び入学者数

年度別本学入学志願者数及び入学者数については３.資料集、3.3.2.1を参照されたい。

（村上恭子）

2.5　歴代教職員と平成17年度における教員とその担当科目

歴代教職員については３.資料集、3.1.3.1、３.1.3.2および3.1.3.3を参照されたい。

平成17年度における現教員と担当科目は次のとおりである。

１）産業造形学科

横田　勝教授　金属学入門、金属材料、工芸材料、造形工学基礎、造形材料学(金属)Ⅰ、Ⅱ、造形材料実験(金属)Ⅰ、Ⅱ、造形工学実験、金属工芸研修、金属工芸演習、卒業研究・制作、修了制作・研究

小堀孝之教授　込型鋳造、鋳金加工法、金属工芸基礎加工、原型制作、生型鋳造、デザイン材料、金属工芸演習、造形工芸実習(金属)Ⅰ、Ⅱ、金属工芸研修、造形発想、卒業研究・制作、修了制作・研究

貴志雅樹教授　空間デザイン論、建築計画、特別講義(インテリアデザイン)、特別講義(談話室の家具デザイン)、住居論、空間デザイン実習、室内計画、人と空間、総合デザイン実習Ⅰ、Ⅱ、空間デザイン論、造形工芸実習(木材)Ⅰ、卒業研究・制作、修了制作・研究、特別研究

丸谷芳正教授　家具構法、木工機械での加工、家具の製造原価計算、姿勢保持デザイン、特別講義(CAD 入門)、特別講義(談話室の家具デザイン)、木材工芸制作法、室内設計製図、木材工芸演習、造形工芸実習(木材)Ⅰ、Ⅱ、卒業研究・制作、修了制作・研究

中村滝雄教授　彫鍛金加工法、鍛金、金属工芸演習、造形工芸実習(金属)Ⅰ、Ⅱ、造形入門、金属工芸研修、複合造形、造形発想、特別講義(溶接)、特別研究、卒業研究・制作、修了制作・研究

野瀬正照教授　金属表面処理、科学と技術、科学技術論、情報処理入門、造形工学基礎、金属加工法、造形材料実験(金属)Ⅰ、Ⅱ、金属工芸研修、造形工学実験、地域産業史、金属工芸制作法、金属工芸演習、卒業研究・制作、修了制作・研究

林　暁教授　漆塗装、漆工素地制作、蒔絵、螺鈿、漆工芸演習、造形工芸実習(漆)Ⅰ、Ⅱ、挽物、特別講義(日本の伝統木工)、CG 演習Ⅱ、卒業研究・制作、修了制作・研究

堀江秀夫教授　木材の性質、木材実験、加工機械の安全操作、造形工学実習(木材)Ⅰ、Ⅱ、工芸材料、造形工学実験、造形材料学(木材)Ⅰ、Ⅱ、家具の製造原価計算、造形材料実験(木材)Ⅰ、Ⅱ、接着、特別講義(CAD 入門)、特別講義(談話室の家具デザイン)、地域産業史、卒業研究・制作、修了制作・研究

小松研治教授　造形入門、手道具での加工、木材造形の基礎、家具制作、造形発想、木材工芸演習、造形工芸実習(木材)Ⅰ、Ⅱ、複合造形、木彫、特別講義(談話室の家具デザイン)、卒業研究・制作、修了制作・研究

三船温尚教授　金属工芸史、蝋型鋳造、造形入門、総合工芸演習、金属工芸演習、造形工芸実習(金属)Ⅰ、Ⅱ、原型制作、金属工芸研修、地域産業史、込型鋳造、卒業研究・制作、修了制作・研究

斉藤晴之助教授　螺鈿、造形入門、漆塗装、複合造形、造形工芸実習(漆)Ⅰ・Ⅱ、地域産業史、漆工素地制作、造形発想、漆工芸研修、漆工芸演習、卒業研究・制作、修了制作・研究

高橋誠一助教授　化学塗装、漆工技法・材料、造形工芸実習(漆)Ⅰ、Ⅱ、漆工芸制作法、漆工芸演習、変わり塗り、総合工芸演習、漆工素地制作、漆塗装、造形入門、卒業研究・制作、修了制作・研究

伊東多佳子助教授　美術概論、美術科教育法、西洋美術史、外国語文献講読 A、B、工芸のための英語、金属工芸研修、卒業研究・制作、修了制作・研究

村田　聡助教授　工芸材料、化学塗装、造形工学基礎、造形工学実験、造形材料科学(漆)Ⅰ、Ⅱ、造形材料実験(漆)Ⅰ、Ⅱ、卒業研究・制作、修了制作・研究

清水克朗助教授　装身具入門、生型鋳造、金属工芸演習、CG 演習Ⅰ、金属工芸制作法、造形工芸実習(金属)Ⅰ、Ⅱ、金属工芸研修、プレゼンテーション、蝋型鋳造、特別講義(金属加工機械の安全操作)、卒業研究・制作、修

了制作・研究

鳥田稔弘講師　彫金、金属工芸基礎加工、装身具入門、金属工芸研修、造形工芸実習(金属)Ⅰ、Ⅱ、金属工芸演習、卒業研究・制作

河原雅典講師　人間工学、色彩入門、造形入門、統計データ分析入門、総合工芸演習、姿勢保持デザイン、インターフェースデザイン、色彩学、造形工芸実習(木材)Ⅰ、特別講義(談話室の家具デザイン)、卒業研究・制作、

渡辺雅志講師　造形入門、図法と製図、手道具での加工、木工機械での加工、木材造形の基礎、挽物、木材工芸演習、プレゼンテーション、総合工芸演習、造形工芸実習(木材)Ⅰ、特別講義(談話室の家具デザイン)、卒業研究・制作

内藤裕孝助手　CG 演習Ⅰ、加工機械の安全操作、家具制作、卒業研究・制作

小川太郎助手　漆工制作法、変わり塗り、漆工芸研修

今淵純子助手　鍛金、金属工芸基礎加工、卒業研究・制作

橋本千毅助手　漆工制作法、蒔絵、CG 演習Ⅱ

2）産業デザイン学科

森田　力教授　製品デザイン、産業デザイン史、産業デザイン史特論、デザイン材料、プロダクト基礎表現、卒業研究・制作、総合デザイン実習Ⅰ・Ⅱ、特別研究

秦　正徳教授　構造設計、デザイン材料、造形工学、構造計画論、材料力学、インテリア材料学、空間デザイン実習、造形工学基礎、造形工学実験、卒業研究・制作、総合デザイン演習Ⅰ、Ⅱ、特別研究

長山信一教授　製品評価法、デザインリサーチ論、デザインの進め方、リビングデザイン、CG 入門、デザイン材料、プレゼンテーション、地域産業史、デザイン基礎表現、卒業研究・制作、総合デザイン演習Ⅰ、Ⅱ、特別研究

前田一樹教授　CI デザイン、CG 演習Ⅰ、パブリックスペース、特別講義(電子出版)、グラフィックデザイン論、卒業研究・制作、総合デザイン演習Ⅰ、Ⅱ、特別研究

立波　勝教授　スポーツ健康科学Ⅰ、Ⅱ、体育Ⅰ(からだ育て)、体育Ⅱ(からだ気づき)、デザイン入門、卒業研究・制作、総合デザイン演習Ⅰ、Ⅱ、特別研究

安達博文教授　スクリーン印刷、デザイン表現演習(平面)、平面表現演習、空間デザイン実習、造形観察・表現(平面)、デザイン基礎表現、色彩入門、特別講義(テンペラ画入門)、卒業研究・制作、総合デザイン演習Ⅰ、Ⅱ、特別研究

武山良三教授　グラフィックデザイン演習、画像情報処理実習、まちづくり、デザインプレゼンテーション、インタフェースデザイン、特別講義(電子出版)、タイポグラフィ、CG 演習Ⅱ、卒業研究・制作、総合デザイン演習Ⅰ、Ⅱ、特別研究

矢口忠憲助教授　図学、製図、CG 応用デザイン、形の発想法、形の発想とデザイン、デザイン材料、設計製図、形態発想特論、卒業研究・制作、総合デザイン演習Ⅰ、Ⅱ、特別研究

沖　和宏講師　デザイン入門、デザイン材料、デザインプレゼンテーション、ビジュアル基礎表現、広告デザイン、CG デザイン、特別講義(パソコンを活用したグラフィックデザイン)、卒業研究・制作

玉井泰子助手　デザイン基礎表現、特別講義(CAD 入門)、空間デザイン実習

澤　聡美助手　体育Ⅰ(からだ育て)、体育Ⅱ(からだ気づき)、スポーツ健康科学Ⅰ、Ⅱ、

○　開放センター

宮崎雅司教授　造形観察・表現(立体)、立体表現演習、デザイン表現演習(立体)、空間デザイン実習、プレゼンテーション、特別講義(造形研究Ⅰ・Ⅱ)、卒業研究・制作、総合デザイン演習Ⅰ、Ⅱ、特別研究

3）地域ビジネス学科

佐藤孝紀教授　コンピュータの基礎、コンピュータの処理機構、アルゴリズムとデータ構造、エンドユーザコンピューティング、経営情報システム、ビジネス入門、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

久保欣五教授　システム思考法、外国語文献講読 B、ビジュアルプログラミング基礎、ビジュアルプログラミング応用、知識ベース管理、ビジネス・エンジニアリング、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

吉田俊六教授　マーケティング、ライフスタイル、マーケティング・マネジメント、物流システム、地域企業経営論、社会環境と産業、ビジネス入門、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

村上恭子教授　英語の読み方、英語での表現、検定英語、英語音声演習上級、英語講読基礎、検定英語中級、英米文化研究、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

近藤　潔教授　情報処理入門、データベース設計、地域ビジネス、C プログラミング初級、C プログラミング中級、応用データベース、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

小林和子教授　英語の読み方、英語での表現、プレゼンテーション、英語講読基礎、英語講読上級、世界の英語、

英語によるアジア事情理解、外国語文献購読 A、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究、特別講義(英語海外研修)

渡邊康洋教授　英語の読み方、英語での表現、英語会話基礎、ビジネスライティング、インターネット利用のための英語、特定産業英語研究、ビジネス入門、特別講義(航空・旅行実務)、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

越野啓一教授　企業会計、簿記入門、企業分析、特別講義(初級簿記)、特別講義(検定簿記中級)、原価管理、ビジネス入門、財務会計、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

山田眞一教授　中国研究基礎Ⅱ、応用中国語 B、中国語表現初級、中国語理解中級、中国語表現上級、時事中国語、基礎中国語 C、プレゼンテーション、外国語文献講読 A(中国語)、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

磯部裕子教授　応用中国語 A、中国文化史、中国語理解初級、ビジネス入門、中国語海外研修、外国語文献講読 B(中国語)、総合中国語中級、中国研究基礎Ⅰ、国際コミュニケーション(中国語)、ビジネス中国語、中国語プレゼンテーション初級、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

藤田徹也助教授　情報処理入門、ビジネス情報処理入門、プログラミング基礎、インターネット技術、ビジネスプログラミング、統計データ分析入門、外国語文献講読 A、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

小松裕子助教授　情報処理入門、ビジネス情報処理入門、プログラミング基礎、ソフトウェア開発技法、応用ソフトウエア開発、外国語文献講読 A、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

クリストファー　R・コビー助教授　英語会話入門、英語会話基礎、英語会話中級、国際コミュニケーション(英語)、インターネット利用のための英語、欧米のニュービジネス理解、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

小柳津英知助教授　地域経済分析、流通経済、需要予測、応用ビジネス情報処理、統計データ分析入門、経済システム、地域産業史、地域経済、外国語文献講読 A、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

王　大鵬助教授　国際経済、中国経済、中国ビジネス概論、中国近代の歩み、中国研究基礎Ⅰ、中国語理解上級、地域ビジネス演習、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

高松朋史助教授　経営情報、経営システム、経営戦略、生産マネジメント、地域産業史、企業経営入門、経営情報システム、経営管理、現代の企業経営、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

上東正和講師　ビジネス情報処理、企業財務、中級簿記、管理会計、コンピュータ会計、財務官理論、特別講義(原価計算)、特別講義(上級簿記 A)、外国語文献講読 B、管理会計論、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

米川　覚講師　情報処理入門、プログラミング基礎、ビジネス情報処理入門、C プログラミング初級、情報ネットワーク、ビジネス情報処理、経営情報システム、プレゼンテーション、卒業研究、地域ビジネス演習、特別研究

深谷公宣講師　英語の読み方、英語での表現、プレゼンテーション、時事英語基礎、時事英語上級、時事英語研究、外国語文献講読 B、特別講義(英語海外研修)、卒業研究、地域ビジネス演習

ブルース・ウィルソン(外国人教師)　英語での表現、英語会話入門、英語会話基礎、英語会話中級、英語会話上級、英語音声演習基礎、英語作文基礎、英語作文上級、英米の社会と文化、ポップスと映画の英語

(村上恭子)

2.6　現カリキュラムの紹介と変遷

2.6.1　基礎教育科目

現在の基礎教育科目のカリキュラムは、平成12年度に蠟山学長の下で行われた第二次カリキュラム改革に基づいており、次のような特徴がある。

○　本学独自の７つの目標

教養科目は通常、自然科学、社会科学、人文科学の３本柱を置き、それぞれの系列に属する諸科目をバランスよく配置したカリキュラムを採用する学校が多い。しかし第二次改革においては、高岡短期大学ならではの特質を活かすためにオリジナルな７本の柱を据え、それぞれに適した具体的授業科目を設置した。基礎教育科目は資

料集、3.3.9に記されているように、７本の柱となる目標とは、「自分を知る」、「高短(高岡短期大学)を知る」、「他を知る」、「社会を知る」、「モノを知る」、「自分を表現する」、「自分を役立たせる」である。この中で、「モノを知る」、「自分を表現する」、「自分を役立たせる」の３項目は、産業造形学科、産業デザイン学科、地域ビジネス学科の３学科のそれぞれの基礎的実務科目が配置されている(平成12年度にそれまでの産業工芸学科、産業情報学科の２学科から現在の３学科へ移行)。これらはいずれも本学の教育方針の一つとなる職業又は実際生活に必要な能力の育成を目標としている。また、「他を知る」の項目に配置された英語及びコンピュータ関連科目は、現在の国際化・情報化社会に必要な知識・技能の育成を目的としている。さらに、「自分を知る」の科目では、「からだ育て」、「からだ気づき」といった副題を付けることで、単なるスポーツ健康科学や体育科目以上の視野を学生に持たせた授業を行なっている。「社会を知る」の項目に、その他の自然科学、社会科学、人文科学系の基礎科目が一括されている。

○　他学科、他コースの学生との交流の機会

基礎教育科目カリキュラムのもう一つの特徴は、入学定員200名という小規模な学校の利点を活かし、学生が所属学科、コース(平成12年度に、それまでの専攻制からコース制へ変更)の狭い枠組みに縛られず、授業を通して他専攻の学生と交流する機会を与えていることである。具体的には、全学科１年前期の必修科目となっている「体育Ⅰ」、「英語の読み方」、「情報処理入門」の授業において、全学科全コースの学生の混成クラスを５クラス作り、同時展開方式で授業を行なっている。さらに１年後期の地域ビジネス学科の「体育Ⅱ」、「英語での表現」、「ビジネス情報処理入門」の授業では、同学科全コースの混成クラスが作られている。また、産業造形学科、産業デザイン学科の場合は、両学科全コースの混成クラスとして「体育Ⅱ」、「英語での表現」の授業が１年後期に設置され、他コースの学生との交流が図られている。

また近年、重要性が特に高まってきた「プレゼンテーション」の授業は、１年生全員が１クラスに編成され、全学科の複数の教師の指導のもと、授業内容に合わせて全員が同じ場所で授業を行なったり、５クラスの教室に分かれて授業を展開することで、きめ細やかなな指導を行なっているが、この授業も他専攻との交流の場を提供している。

○　他学科の専門に関する理解を深める機会

学生が所属学科・コースの狭い知識・技能の習得だけにとどまらず、他学科に対する理解も深める工夫もなされている。これは、「高短を知る」の項目に配置された「造形入門」、「デザイン入門」、「ビジネス入門」の３科目の履修条件を学科別に変えることで実現されている。産業造形学科の学生は、「デザイン入門」及び「ビジネス入門」のいずれかを必修とし、他は選択科目として取り扱われる。産業デザイン学科の学生は、「造形入門」及び「ビジネス入門」のいずれかを必修とし、他は選択科目として取り扱われる。地域ビジネス学科の学生は、「造形入門」及び「デザイン入門」のいずれかを必修とし、他は選択科目として取り扱われる。このような形で本学の専門領域を幅広く理解する機会を与えているのである。

○　教養教育の重視と、3学科で異なる必修科目、選択必修科目、選択科目とその単位数

基礎教育科目の卒業所要単位数は、全学科共通に30単位以上、他方、専門教育科目の履修必要単位数は34単位以上となっている。基礎教育と専門教育の単位数の比率は約１対１で、専門教育に劣らず基礎教育を重視していることが単位数に表れている。

また、各学科の専門性を考慮して、学科ごとに多少異なる必修科目、選択必修科目、選択科目が決められており、それぞれの所要単位数も地域ビジネス学科では産業造形学科と産業デザイン学科とは異なっている。また「特別講義」の科目として、年度ごとに新たな授業科目を設置することも考慮に入れた柔軟性あるカリキュラムとなっている。

2.6.2　過去の基礎教育科目の変遷

１）　昭和61年度の最初の基礎教育科目

本学第一期生が入学した昭和61年度においては、記念誌、高岡短期大学十年史の42ページに記されているように、教養科目は「一般教育科目等」の名称で配置されていた。ここに属する科目は「一般教育科目」、「外国語科目」、「保健体育科目」の３種類に分類されていた。提供されている授業科目は全てで13科目、卒業所要単位数は12単位以上となっている。専門教育科目の卒業所要単位数は産業工芸学科が56単位以上、産業情報学科が64単位以上(当時は２学科体制)であり、専門教育の必要単位は教養教育のおよそ５倍となっている。現在の教養科目数(42科目)やその卒業所要単位数(30単位以上)と比較すると遥かに少なく、教養教育よりも専門教育の方に重点を置いていたことが分かる。また「一般教育科目」は、自然科学、社会科学、人文科学、これらの

総合系の基礎科目が設けられており、従来型の発想で分類されていた。外国語は、英語か中国語のいずれか一つを履修することが条件付けられているだけで、国際語としての英語学習も今ほど重要視されていなかった。

その後、教養教育の充実を図るため科目数が徐々に増えていった。昭和63年度には、自然科学系に、「化学」に加えて「数学」、「統計学」を新たに開設、平成３年度には「物理学」が追加された。総合系では、初年度は「情報と社会」、「地域社会と人間」の２科目が配置されていたが、昭和63年度に「技術と産業」、平成３年度に「環境科学」が追加されている。

２） 平成７年度の第一次カリキュラム改革

平成７年度に宮本学長の下で、初めて大幅なカリキュラム改革が行なわれた。それ以前のカリキュラムは、「一般教育科目等」と「専門教育科目」に２分類されていた。第一次改革では、産業工芸学科、産業情報学科の２学科共通の「共通基礎科目」以外に、各学科別の「専門基礎科目」と、各学科専攻別の「専門科目」の３分類方式に変更された。

「共通基礎科目」の卒業所要単位数は20単位以上と、それ以前より８単位増え、重要度がやや高まった。また当時の国際化・情報化社会を反映して、情報処理関係と英語の授業が必修科目として各々４単位ずつ指定された。

この時の改革で、他学科、他専攻の学生が授業を通して交流できる目的のクラス編成が初めて組まれた。現在の混成クラスは、この時の精神を受け継いだものである。具体的には、１年前期の必修共通基礎科目である「産業工芸概論」、「産業情報概論」、「情報処理基礎Ⅰ」、「英語Ⅰ」、「スポーツ健康科学Ⅰ」の５科目の授業を同時間帯に開設し、全学科全専攻の学生による５つの混成クラスで行なう形式を採った。また、１年後期の必修共通基礎である「情報処理基礎Ⅱ」、「英語Ⅱ」、「スポーツ健康科学Ⅱ」では、産業工芸学科の学生だけの混成クラス２つと、産業情報学科の学生だけの混成クラス３つを作り、各々の専門性を考慮した授業を展開した。いずれも必修科目に位置づけられており、本学として特に重点を置く科目が明確に示されている。

その他の自然科学系、社会科学系、人文化学系科目８科目は選択科目に属し、卒業所要単位数は６単位以上となっている。

（村上恭子）

2.6.3　現カリキュラムの紹介と変遷

2.6.3.1　産業造形学科

現産業造形学科の教育体制は、金属工芸コース、漆工芸コース、木材工芸コースの３コースからなり、それぞれのコースごとに、学生を募集し、教育している。その学生数は、一学年金属工芸コース20名程度、漆工芸コース15名程度、木材工芸コース15名程度、合計50名程度となっている。開学時は、産業工芸学科として、金属工芸専攻、漆工芸専攻、木材工芸専攻、産業デザイン専攻の４専攻を持つ学科であった。それが、平成12年に行われた教育体制の改革により、高岡短期大学は、産業工芸学科、産業情報学科からなる２学科体制から、産業造形学科、産業デザイン学科、地域ビジネス学科からなる３学科体制へと移行した。その改革に伴い、専攻制を廃止して、コース制をとることとなった。それにより、産業造形学科は現在の３コース制の教育体制となった。またその改革にさきがけて平成７年にはそれまで地域産業専攻１専攻で１年制であった専攻科を廃止し、新たに産業造形専攻、産業デザイン専攻、地域ビジネス専攻の３専攻、２年制の専攻科を設置する改革を行った。大きな教育体制の改革は、上記の二期にあるので、その改革時に焦点を当て、コースごとに現カリキュラムの紹介と変遷を述べる。

（高橋誠一）

2.6.3.1.1　金属工芸コース

金属工芸に関するコースは、本学の開学と同時にスタートし、当時は産業工芸学科・金属工芸専攻と称した。平成12年における産業工芸学科・産業情報学科の二学科体制から産業造形学科・産業デザイン学科および地域ビジネス学科の三学科体制への変更時に専攻制を廃止し、現在のコース制となった。

１．授業改革の歴史

授業改革は20年の歴史の中で、２度行われた。最初は平成７年度の２年制専攻科設置に伴う本科の授業改革である。２度目は平成12年度における上述の三学科体制への変更に伴う授業改革である。そこで、本学開設から１度目の改革直前までを第１期、平成７年度から平成11年度までの５年間を第２期、そして平成12年度以降を第３期と称することにする。授業内容の変遷を専門科目のなかで金属工芸関係に絞って比較してみる。

２．第１期(本学開設～平成６年度)

第１期では、授業は一般教育科目と専門教育科目に大別されていた。専門教育科目では専攻ごとに授業科目が定められており、その中にはもちろん他専攻の分野の科目も含まれていた。12単位中金属関係科目(金属材料学Ⅰ、工芸無機材料学、金属加工法)６単位が必修であった。他専攻分野の科目も６単位、すなわち３科目が卒業用件単位として認められ、さらにデザイン演習Ⅰ、Ⅱも必修であった。これらの事実は、「専攻」の独自性がかなり重視された中でも、比較的幅広い専門教育が試みられていたことの証左ではないかと考えられる。

３．第２期(平成７年度～11年度)

第２期では、授業が共通基礎科目、専門基礎科目、専門科目の３種類に分類されるようになった。共通基礎科目は第１期における一般教育科目に該当する。第１期の専門科目が専門基礎科目、専門科目に分割されたと考えても良いだろう。専門基礎科目は専門科目の中で各専攻に共通の内容、例えば「平面表現演習」「図学」「工芸材料学」などを中心とした科目群である。したがって、金属工芸専攻を特徴付ける科目は新しい「専門科目」にまとめられた。

第２期における金属工芸専攻の専門科目の特徴は３点ある。一つは専門科目一覧から漆工材料学や木材理学などの他専攻分野の科目が消えたこと。他の一つは、金属表面処理、英語文献購読などが新設されたことである。最後の一つは、金属工芸に係る演習・実習の必修科目が「造型演習」「込型鋳造」「彫金」「鍛金」の４科目から、第２期では「基礎工芸演習」「鋳金Ⅰ」「鋳金Ⅱ」「彫金」「鍛金」と１科目増え、さらに講義課目の「金属工芸加工法Ⅰ、Ⅱ」が必修化されるなど、専攻を特徴付ける課目の必修が増えたことである。つまり、第二期の特徴は専攻分野の強化といえるのではないだろうか。これはその後の授業改革の議論で一つの話題になった。

４．第３期

第３期では、授業が基礎教育科目と専門教育科目の二つに分類された。第２期における共通基礎科目、専門基礎科目および専門科目のごく一部(英語文献購読など)が全く新しいコンセプトの下に概ね基礎教育科目に再編され、専攻ごとに定められていた専門科目が学科ごとに専門教育科目として再編された。したがって、金属工芸コースのみの専門教育科目表は少なくとも形式上は存在せず、代わりにコースごとの必修・選択必修科目が指定されるようになった。同時に、２単位、４単位とばらばらであった実習科目も全て２単位に統一され、同じタイムテーブル形式の時間割に載るようになった為、理論上は他コースの実習科目も履修できるようになった。本科では、他コースの実習科目履修は実際上困難であったようだが、専攻科では、「複合造形研究」などの融合教育が徐々に進められるようになったことは特筆すべき点であろう。

第３期の特徴として、実習・演習の必修科目数が再び４科目に軽減されたこと、「金属材料学Ⅰ」が「金属学入門」に、「金属機械加工概論」が「金属加工法」に変わるなど、座学を中心により親しみやすい科目名や、具体的に内容が分かりやすい科目名に変更されたことなどが挙げられる。第３期の改革の趣旨は「融合教育の推進」にあったようだ。確かに、「融合教育」という言葉を耳にすることが多くなり、少なくとも学科内の融合は徐々に進んだようである。しかし、造形とデザインが別の学科に分離されたことにより、両者の隔壁は却って高くなったという印象を持っているのは筆者だけであろうか。

(野瀬正照)

2.6.3.1.2　漆工芸コース

１．現カリキュラムの紹介

本コースは、漆を東南アジア特産の増産可能な植物資源と考え、この貴重な資源を有効に、かつ新しい価値を生み出せる能力を養うことを目的に、カリキュラム編成をしている。漆工芸に携わるものとしての基本となるべき理念、技術、知識の習得に重点を置いたカリキュラムとしている。

具体的にカリキュラムの特徴としては、基礎教育科目では、必修科目は他コースと同じであるが、選択必修科目で、演習科目の「造形観察・表現(立体)」を、講義科目で、「英語会話入門」、「工芸材料」、「図法と製図」を指定していることにある。専門教育科目では、必修科目として、演習・実習科目で、「漆工制作法」、「漆工素地制作」、「漆塗装」、「蒔絵」を、講義科目では「漆工芸史」を課し、選択必修科目では、演習・実習科目で、「螺鈿」、「変わり塗り」、「化学塗装」、「スクリーン印刷」、「漆工芸研修」、講義科目は、「漆工技法・材料」、「化学塗料」、「加工機械の安全操作」を用意している。必修科目と選択必修科目を中心に１年半のカリキュラムをこなしていくと、演習・実習科目では、造形の基礎としての平面、立体表現から、漆工芸の用具の調整、制作、素地、塗装、加飾と漆工芸制作の流れを一通り体験できる。講義科目では、歴史、技法・材料から、高分子としての漆まで、多岐にわたった内容を履修することになる。その後、２年間の集大成としての必修科目、卒業研究・制作で、研

究対象の選定から、コンセプトの決定、素地の選択、制作、塗装、加飾まで一貫して行うことにより、これまで身につけてきた技術、知識をより確実なものとしている。

２．カリキュラムの変遷

漆工芸に関する専門教育は、開学時から産業工芸学科漆工芸専攻として用意されていた。開学時から漆工芸を専門とする教育カリキュラムの目的は一貫しており、漆工芸に携わるものとしての基本となるべき理念、技術、知識の習得に重点を置いたものとなっていた。

開学から現在に至る間にカリキュラムの大きな改訂が２回行われた。１回目は平成７年の２年制の専攻科の設置に伴う学科カリキュラムの改訂、２回目は平成12年の２学科体制から３学科体制への改革に伴う改訂である。

まず開学から１回目の改訂までの第１期は、産業工芸学科、産業情報学科の２学科体制で、産業工芸学科は、金属工芸、漆工芸、木材工芸、産業デザインの４専攻に分かれ、それぞれの専攻でそれぞれの専門教育科目のカリキュラムを組んでいた。漆工芸専攻の専門教育科目のカリキュラムは、必修科目30単位、選択科目40単位を用意していた。この頃のカリキュラムは、卒業所用単位の区分が、講義科目、演習科目、実習科目で分けられていた。講義科目は12単位以上、演習科目は10単位以上、実習科目は14単位以上、専門教育科目全体で52単位以上必要とした。基礎造形系演習科目８単位を必修とし造形の基礎をしっかりと身につけさせ、それを基として、漆工芸関連の演習・実習科目は卒業研究・制作を含めて16単位、講義科目は６単位を必修としていた。必修で足らない単位数は選択科目が、講義科目28単位、演習科目８単位、実習科目４単位が用意されそれぞれの学生の興味に応じて選択できるようになっていた。

１回目のカリキュラムの改訂は、２年制の専攻科の設置に伴うもので学科のカリキュラム編成で大きく変わったのは、それまで一般教育科目と専門教育科目の２区分だったものを共通基礎科目、専門基礎科目、専門科目の３区分としたことにある。そのことにより共通基礎科目は全学、専門基礎科目は学科、専門科目は専攻と区分がはっきりした。改定後の専門科目の特徴は、漆工芸の実習科目、特に加飾系科目の「蒔絵」、「螺鈿」、「彩漆」、「変塗」、「彫漆」を、再編して、「漆加飾Ⅰ」、「漆加飾Ⅱ」とし、全てを必修としたことにある。つまり専門実習科目を強化したことになる。もう一つこの改訂により専門科目に特別講義という科目が新設された。括弧の中はそれぞれの専攻が必要に応じて設定できる自由度の高い科目である。漆工芸専攻はこの科目で、特別講義(漆工史)を開講した。

２回目のカリキュラム改訂は、２学科体制から３学科体制への改革に伴うもので、産業工芸学科、産業情報学科の２学科体制が、産業造形学科、産業デザイン学科、地域ビジネス学科の３学科体制へと大きな組織の変革がなされた。それにより、専攻という単位がなくなり、各学科にそれぞれ２～４コースが設けられた。漆工芸の専門教育は、産業造形学科の漆工芸コースとして残り、現在に至っている。この改革の特徴は、各コースの定める必修科目、選択必修科目の数をできるだけ減らし、卒業研究・制作をのぞく全ての科目を２単位にして、専門コース以外の科目を履修しやすくした点にある。各専門の融合による教育を目指したもので、漆工芸コースも最低限の必修、選択必修の指定にとどめた。具体的には必修科目16単位、選択必修科目10単位である。この改編時に増設された漆工芸関連科目は、漆工芸史と漆工芸研修である。漆工芸史は前改編時に作られた特別講義で実施していた漆工史に続くもので必修とし、漆工芸研修は、非公式ながら恒例となっていた研修旅行を正式にカリキュラムに組み込んだものである。

（高橋誠一）

2.6.3.1.3　木材工芸コース

木材は持続的な再生産可能な材料であり、地球にもっとも優しい材料のひとつといわれている。古来より、日常生活用品から木造建築に至るまで、幅広く身のまわりで使用されている。このような木材の素晴らしい特質を生かすために、本コースでは技術的なアプローチ、芸術的(デザイン的)なアプローチ、科学的(工学的)なアプローチを融合させながらカリキュラムを構成してきた。

木材を理解し利用する新しい提案を自ら実践していけるような能力を養うことは、木材が生かされている分野である伝統工芸・クラフト製品、家具、インテリアデザインといった実践の場においても貢献できるであろうと考え教育を行ってきた。

１．現カリキュラムの紹介

具体的にカリキュラムの３つの流れを示す。

・技術的なアプローチ

１年「手道具での加工」「加工機械の安全操作」「木工機械での加工」

まず手加工技術を学びながら木材の性質を学習し、安全に留意しながら木工機械の使用方法を修得しデザインと技術の関係を学ぶ。

2年「挽物」「木彫」
より多彩な木工技術を学び、木工技術の奥深さと表現を身につける。

・芸術的(デザイン的)なアプローチ

1年「造形観察・表現(平面)」「木材造形の基礎」
対象物への観察力と平面表現を養い、木材造形の知識を多面的に学ぶ。

2年「インテリアデザイン」「家具制作」
室内空間の提案をとおして人と空間の関係を学び、家具を提案する中で生活と家具デザインの関係を学ぶ。

・科学的(工学的)アプローチ

1年「木材の性質」「木材実験」
木材の性質を概念だけでなく、実証的に学んでいく。
「図学」「室内設計製図」
伝達手段としての図面を学び、家具・室内・建築図面の基礎を身につける。

2年「家具構法」「建築計画」「室内計画」
家具のいろいろな構法を歴史的に学び、建築・室内計画の実際的な基礎を学ぶ。
以上のような教育の集大成として「卒業研究・制作」があり、学生ひとりひとりに合った研究テーマを選ぶことになる。ここでのテーマの多様さは卒業後の就職先にも反映される。(工芸作家・工房経営、家具製造・デザイン・販売、建築・インテリア関連会社など)

2．カリキュラムの変遷

木材工芸に関する専門教育は開学当初から現在まで基本的に変わらない。木材を理解し利用する新しい提案を自ら実践していけるような能力を養うことは、木材工芸の一貫した教育目標であった。それでも大学全体の体制の変遷とともに変化したことがわかる。専門(教育)科目を中心に3期に分けてその特徴を整理してみた。

第1期(開学から平成6年まで)

必修科目30単位、選択単位40単位(平成6年は36単位)を用意。卒業所要単位は講義科目12単位以上、演習科目10単位以上、実習科目14単位以上。専門教育科目全体で合計52単位以上必要であった。講義科目として「木材理学」「木材工学」「構造設計概論」「室内計画論」だけが木材工芸の必修科目となっている。また、「デザイン演習Ⅰ」が金属工芸、漆工芸、木材工芸、産業デザイン専攻の共通の必修科目であることは2学科体制の特徴をよく示している。

第2期(平成7年の専攻科設置から平成11年まで)

共通基礎科目(全学)、専門基礎科目(学科)、専門科目(専攻)の3区分になる。

専門科目「木材加工演習」が新科目として必修になり「室内計画論」が選択となる。

また「木材工学演習」が必修に「木彫造形」「挽物」が選択科目になった。

第3期(平成12年の3学科体制への移行から現在まで)

基礎教育科目、専門教育科目の2区分になる。
必修科目「指物法」が「家具制作」となり、新たに「家具構法」が必修科目で、「木材造形の基礎」「加工機械の安全操作」が選択科目で加わった。この頃から伝統的な工芸だけでなく一般的な家具へシフトしていったのがよくわかる。また、危険度の高い木工機械をより安全に使えるよう安全教育に重点をおいた授業もスタートした。
また平成15年度より「インテリアデザイン」(特別講義)が加わり空間デザイン分野の教育とCAD教育が導入された。融合教育のための演習実習タイムテーブルの導入の影響は大きく、5週間というスパンで全てが区切られた。 (丸谷芳正)

2.6.3.2 産業デザイン学科

プロダクトデザインコース、ビジュアルデザインコース

1．創設期～産業工芸学科産業デザイン専攻(昭和62年～平成12年)

創設準備期である昭和57年の創設準備室の資料を見ると、当時の時代状況を反映して、地場の伝統工芸産業に資する人材を育成するという観点が考慮され、1)工芸専攻とデザイン専攻の2専攻とし、工芸専攻では金属工芸、漆工芸、木材工芸を幅広く学ばせ、デザイン専攻では工業デザインと商業デザインを学ばせるといった案。2)専攻を区分せず大学側が多くのメニューを用意し、幅広く分野を横断した教育の後、2年次修了期に何か一つのコースを選ばせるといった案などが提案されていた。後者の案が物語るように、創設準備期から、高岡短期大学が、工芸とデザインの連携、芸術的教育と産業的教育の融合を教育目標としていたことがうかがい知れる。

産業工芸学科全体の科目構成の特徴は、1)地域で育成された工芸技術を深く学ぶための科目、2)産業製品の企画、設計、デザイン等に必要な発想力や造形感覚を養う科目、3)関連する素材及び加工技術の理論と実習を修得できる科目への配慮であった。これに加え、産業の経営面にも通じる商品分析やマーケティング、生産管

理等各専攻共通科目の充実を図ることにより、偏りのない産業人の育成を意図した体制となっていた。

創設から学科再編改組までの十数年にわたる産業デザイン専攻のカリキュラム編成は、その当初から教育の焦点を多岐にわたるデザイン分野の全般に置き、表現することと、提案すること、つまり造形・芸術的観点と生産や流通的観点の双方をバランス良く教育することをコンセプトとしていた。多面的分野に共通する基礎能力の養成に重点を置き、実社会に対応する専門的な基礎知識や技術等の総合的な学習の実践が行われていた。

具体的には２年制という限られた期間の中で、効果的な学習を進めるために、２年間を社会へつなぐ導入部と捉え、その基礎的段階、専門基礎的段階、専門的段階にそれぞれ目標を設定し、授業科目の位置づけを行った(記念誌、高岡短期大学十年史、付録、140ページ参照)。１年次初期の導入段階では、デッサン、色彩構成、立体造形等の幅広い造形感覚や表現力の基礎を学び、更にデザインに必要な図学、色彩の知識、モデリング技術、リサーチ能力、材料や加工技術、マーケティングや生産管理の基礎を学ばせた。１年後期から２年の前期は主に専門基礎の段階で、産業デザイン史、デザイン製図等を学び、２年前期では、形態発想の方法論、エルゴノミクス、デザインプロセスの効果的な展開等を学び、最後に学んだ成果を卒業研究・制作という形で、より専門的にまとめ上げるという流れであった。卒業研究・制作は、自己の研究テーマを自由に設定し、約５ヶ月の期間をかけて自発的に進められた。教員は形骸的な仕上げのデザインよりも、なぜそれが必要なのか？というコンセプトや生産・流通といった実現性に重点を置いて指導していくため、産業デザインのトータルな基礎能力が実社会へ旅立つ際の自信に結びつくものであった。

しかし、多岐にわたるデザイン分野の全般を俯瞰すると言いながらも、現実には科目の大半が工業デザイン系に傾倒した内容であったことも否めなかった。これは、産業工芸学科の科目構成上、他専攻との連携や地場への人材的貢献を考慮した自然な成り行きであり、また当時の配属教員の専門領域がプロダクトデザイン系に偏っていた人的実情に負うところがあった。事実、当時の受験生や高等学校の進路担当教諭の意識には、「プロダクトデザインの産業デザイン学科」というイメージが定着しており、ビジュアルデザイン系を志向する受験対象者は、本学を敬遠し、他大学を受験する傾向が強くあった。

２．専攻科産業デザイン専攻(平成７年～)

平成７年４月、これまで１年制・１専攻であった専攻科が、２年制・３専攻(産業造形専攻・産業デザイン専攻・地域ビジネス専攻)に再編改組された。これと共に、学位授与機構が定める要件を満たす専攻科として認定され、学位の取得が可能となった。

この再編改組まで、産業工芸学科産業デザイン専攻は２年次生に対して、専攻科進学を積極的に勧めない方針をとっていた。これは、実社会に対応する事を念頭に置いた２年間の集中的な幅広いデザイン教育と、デザインの現場で行われる就業教育とを、いち早く連携させる方針によるものであった。しかし学位取得を可能とした専攻科の誕生を期に、これまでの学科＋就業教育という流れに加え、学科＋専攻科＋就業教育という新たな流れでの修学コンセプトを構築することとなった。修学期間を４年間ではなく、２＋２年間というキーワードで捉え、１)学科卒業段階での進路の柔軟性、２)専攻科入学段階での受験対象者の専門性に対する規制緩和という２点を積極的に考慮した。１)については従来通り卒業後に就職する道、他大学へ編入学する道、そして引き続き専攻科へ入学する道を想定し、学科段階での教育過程が、どの進路を選んでも有効なものとなっているかを見直すこととした。また２)については、産業造形学科や他の美術系大学からの受験者のみならず、産業情報学科からの志望者をも受け入れることを念頭に置いたカリキュラム編成を目指すものであった。つまり既にこの時点で、産業デザイン専攻が異分野専門領域との融合教育を積極的に取り入れようとしていたことが伺える。(2.6.3.2－1参照)

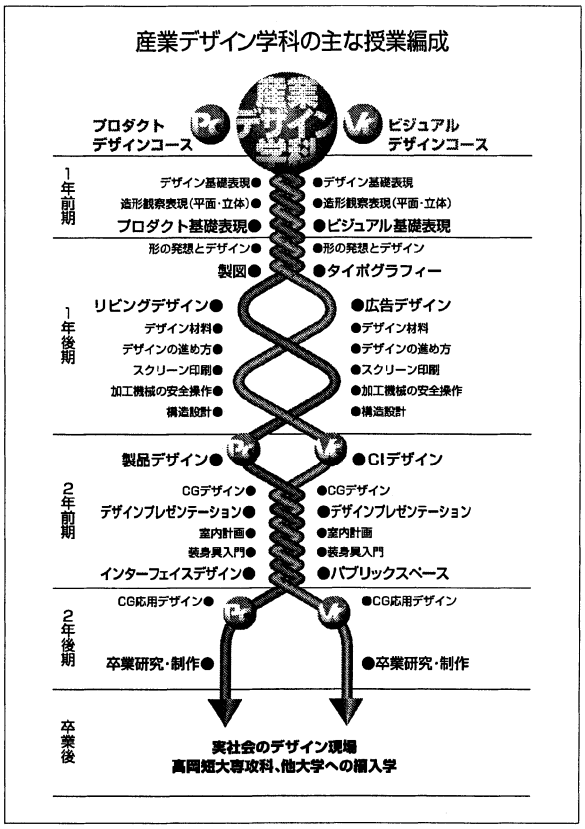
2.6.3.2—1

３．産業デザイン学科(平成12年～)

専攻科の再編改組は、産業デザイン専攻が目指す異分野融合教育をより明確な理念へと昇華させることとなった。もとより高岡短期大学全体の教育理念が、地場に根ざした工芸分野(産業工芸学科)と、社会的・産業的なビ

ジネスの分野(産業情報学科)を融合させるものであったため、産業デザイン学科の独立設置は、工芸系学科とビジネス系学科のつなぎ手的役割を期待されているものと認識されていた。

大学設置法によると、学科の開設には複数の専攻又はコースを有する必要があった。本来デザインの領域を俯瞰して捉え、総合的な基礎能力の学習が、卒業生の企業等での活躍と共に社会的評価の実を結んでいただけに、学科開設によってコースを特化しなければならないことは、本末転倒な問題であった。設置準備会議を重ねた結果、産業デザイン学科は2コース制とし、その内訳を、社会的に最も認知され、かつあらゆる多面的なデザイン分野を包括しやすいプロダクトデザインコースとビジュアルデザインコースで構成することとした。しかし産業デザイン専攻時代より培ってきた総合的なデザイン教育の理念と実績を継続して実施するため、まず入学試験時におけるコースの志望特定を廃止し、コース選択のタイミングを2年前期とした。またその選択も事務的なものに過ぎず、各コースが開設した必修科目を履修することで手続き上、所属コースが決定されるというものであった。したがって産業デザイン学科に入学した学生のほとんどは、特定のコースに所属している感覚をいっさい持たず、幅広いデザイン分野全般を学ぶという環境に順応していた。



2.6.3.2—2

カリキュラムの編成方針は、旧体制の優れた点を踏襲し、2年間を社会への導入部として位置づけ、基礎的段階と応用的段階に目標設定し、各コースの分野性が色濃い専門科目と、デザイン全領域に共通の専門科目をそれぞれの段階に位置づけていた。(2.6.3.2−2参照)

プロダクト基礎表現、製図、リビングデザイン、ビジュアル基礎表現、タイポグラフィー、広告デザインなど、分野性が強い科目はそのほとんどが選択必修、もしくは選択科目であり、1年次に集中する。必修科目は2年生前期の2科目のみとなっている。1年次、学生は自分にとって興味のある分野や就業を見越した適応性を探るために、各コースを横断する履修計画を立てることが出来る。2年次前期は各分野の専門必修科目として製品デザインとCIデザインがあるものの、それ以外は学科共通のデザインプレゼンテーションや、パブリックスペース、インターフェースといった広範な専門科目であり、基礎を経た学生がどの分野へ進んだとしても対応できる応用力を学ぶこととなる。2年後期は卒業研究・制作に全て当てられ、学生は以前にもまして自発的でジャンルに捕われることのない柔軟な研究と制作を行っていた。加えて、CGに関する授業が2年間を通してとぎれることなく網羅されていた。

またビジュアルデザインコースが新設されたことで、その専門教員が増強され、これまで手薄だった情報伝達系の科目が大いに充実した。これらの授業はその多くが地域と連携した形態をとっており、授業成果の学外発信などを積極的に行い、学生の成果品に対する社会的評価の導入を図ってきた。学生はいち早く社会の風を感じながら緊張感のある学習をし、地域の関係者は身近で有益な存在として大学教育の認識を深める結果となった。もはや「プロダクトデザインの産業デザイン」というイメージは完全に払拭され、「地域と連携する産業デザイン」という新しいイメージが定着してきたといえる。

(沖　和宏)

2.6.3.3　地域ビジネス学科

2.6.3.3.1　経営コース

1　「経営コース」設置の背景

現在の「地域ビジネス学科経営コース」(以下「経営コース」と略)の前身は、開学当初の「産業情報学科経営実務専攻」であり、2000年度(平成12年度)の改革で「地域ビジネス学科経営コース」に呼称を変えたものである。

高岡短期大学創設の主たる目的は、地域の産業振興に

必要な人材養成であり、このために、伝統工芸および産業実務にかかわる学科が要請された。工芸学科と産業情報学科の２学科体制がそれであり、経営実務専攻は産業情報学科の内部組織としてスタートした。当初は、学生の教育組織であるとともに、教員の所属組織でもあったが、2000年度(平成12年度)の改革で、教員は学科に属することとなり、「経営コース」は専ら学生の教育組織名となった。

「経営コース」の教育内容は、大別して、経営学系と会計学系に分かれる。取得を狙う資格等も、当初の紹介冊子では、簿記会計関係(簿記検定、税理士、公認会計士)と経営関係(社会保険労務士、旅行業務取扱主任者、中小企業診断士)の双方で難度の高いものが記載してあり、創設時の志の高さが伺われる。

第一期生向けの“履修の栞”より履修科目の特徴の説明を引用する。

「経営学概論、簿記原理や生産管理など経営実務に係わる多くの伝統的な学科目を履修するのはもちろんのこと、情報化社会をむかえる中で、将来経営の場でコンピュータを駆使して活躍できるように、情報処理概論、プログラミングやデータ・ベースなどの学科目をも履修することとしている。また、国際化が進展した社会への円滑な対応を考慮して、海外事情、外国語講読や会話なども設けている。」

ここで述べられた履修科目の特徴は、現在に至るまで引き継がれている。

「経営コース」では現在、必修科目を卒業研究だけに限定して、個々の学生が希望する将来像に必要と考える科目を自由に選択する余地を広げている。

現在の「経営コース」は、地域ビジネス学科の４コースの中で、必修科目の縛りが最も少ないコースという特徴をもっている。

２　学生の入学

地域ビジネス学科は１学年125名の定員枠であり、経営・情報の２コースは各40名、英語・中国語の２コース計で45名となっている。本学の入学者選抜は推薦入試で40％分、一般選抜で60％分の選抜を行っている。多様な機会を提供するために、若干名であるが、社会人特別選抜、帰国子女特別選抜、私費留学生選抜も用意している。

志願者の地域分布は、富山県ついで石川県の高校出身者が多く、概ね８割がこの２県といえる。ついで、福井県、岐阜県、新潟県という近県である。

なお、志願者の男女構成は、女子が９割以上と多く、男子は１割以下である。

受験(競争)倍率(推薦入試／一般選抜の合計志願者数の対定員割合)は、昭和61年度(第１期入学生)８倍から徐々に高まり、４年目の1989年(平成元年)の9.9倍がピークでその後は減少傾向となり、近年は約３～５倍を上下しながら低下に歯止めがかかっている。ピークからの低下は、大学への高学歴化志向と18歳人口の減少という構造的要因とみられる。この影響で全国短期大学の40％が定員割れという状況下で３倍以上を維持している理由は何か。

国立で教育費用負担が少いという理由に加えて、高岡短大は卒業生の就職が良い、とくに「経営コース」は良い、という実績が口コミで伝わっていったものと考えられる。

３　経営コースのカリキュラム

「経営コース」における教育上の育成像は、“有能な一般職”と言える。

“有能な一般職”とは、問題の把握・分析力と実務遂行力に優れた人材である。経営における経営上の問題を、把握理解する上では、個々の専門知識に特化せず広い基礎知識をもつことが必要である。また、問題解決や実務遂行のうえでは、具体的な実例にそくした実習や研究の経験が必要である。

このような視点で、「経営コース」のカリキュラムは、基礎から応用へ、また経済、経営、会計、統計、情報処理、卒業研究(ケーススタディ)と広い範囲で構成している。

カリキュラムの改革としては、平成８年度がひとつの節目である。この年より一般教育科目(教養に相当)なる分類を共通基礎科目と変えた。

また、経営実務専攻では専門基礎科目の必修に１年次：経営実務概論⑵、企業会計⑵、２年次：経営情報システム⑵を配置。専門科目の必修に１年次：商学概論⑵、簿記会計⑷、２年次：経営学概論Ⅱ⑵、コンピュータ会計⑵、経営分析⑵、および卒業研究⑷を配置した。

大きな改革は、平成12年度に行われた。前述のように、この年より、コースは学生にとっての履修上の科目群・科目体系をあらわす教育組織となった。「経営コース」はここで、前述のように、学生の自由な選択余地を広げて、専門科目の必修を“卒業研究”のみとする改革を行ったのである。この時点で、他学科や専攻科の科目を履修して、卒業単位とすることを可能とした。新入生が専攻科で開講の科目を履修することも可となったのである。

平成12年度のカリキュラムより、必修科目を例示する。基礎教育科目として、「造形入門」または「デザイ

ン入門」を選ぶ。さらに、体育、英語、情報処理が必修である。「地域産業史」および「プレゼンテーション」は全学的な必修科目である。

専門教育科目について、「経営コース」は卒業研究(４単位)のみが必修。選択必修科目(22単位)については、13科目(26単位分)の範囲から選ばせる。つまり事実上の必修科目となっているが、学生の自発的な選択の姿勢を問いかける仕組みとなっている。

経営コースの選択必修科目は「国際ビジネス」「企業分析」「コンピュータ会計」「需要予測」「ビジネス法」「社会環境と産業」「簿記入門」「経営管理」「現代の企業経営」「管理会計」「国際経済」「ビジネス情報処理」「英語会話基礎」である。

「経営コース」の“ゼミナール(演習)”について次に述べる。

新入生は、当初(１年次の４月)に“基礎ゼミ”に配属される。この際、１学年約45名が約５名の関係教員に９名ずつランダムに配属を決められる。

そして、「経営コース」におけるカリキュラムについて、履修選択の仕方について担当教員の助言を得る。基礎ゼミ指導教員は、生活面やクラブ活動の助言、進路相談など、キャンパス内外にまたがる相談の受け手となる役割である。

カリキュラムは教務委員、生活面やクラブ活動は学生生活委員、進路は進路委員が最も詳しく、関連事務部門も存するが、まず身近な何でも相談係りを設けたものである。１年次の前期に落伍者が出やすい時期であり、この時期にきめ細かい学生サービスをこころがけよう、という趣旨である。

ついで、“予備ゼミ”配属を１年後期(秋・冬)に行う。これは、１年前期の基礎ゼミに代わるもので、学生が指導教員を名指しで希望し、その教員が原則として担当者となる。“予備ゼミ”の役割は、“基礎ゼミ”の機能を引き継ぐが、ここでは、“進路指導”が最大の狙いとなる。２年春からの就職活動本番にむけて、１年次後期にどのような備えをすべきかについて、相談し対策を練ることが主眼である。ただし、２年次の卒業研究の選択を予備的に行い、２年生のゼミ活動を陪席で知り、“本ゼミ”選択の参考とする狙いも合わせて持っている

２年次の卒業研究(本ゼミ)への配分は、４月に決定する。学生の希望する指導教員への配属を基本とするが、教員間の指導学生数のアンバランスを是正するために、第２志望も提出し、学生と話合いで第２志望への調整も行う。

４　学生の進路

学生の進路としては、進学、就職、その他の３方向がある。１学年約45名の進路別構成は、進学10%、就職85%、その他５%が近年の姿である。その他は約２名で、家業(レストラン他)や結婚等である。進学は約５～６名で、他大学編入２名、専攻科(高岡短期大学)２名、専門学校１名が平均的な内訳である他大学としては、提携先の立命館大学と中央大学、あるいは県内の富山大学を選ぶものが多い。その他は信州大学などであり、少ない。

就職は、「経営コース」の場合、出身地で探す場合が多く、東京など大都市へ勤務する例は少ない。就職先は公務員と民間に大別されるが、公務員は10年前の約８名から、近年は約４名へと減少している。過去には、国が郵政職等で２名、県が学校事務を含めて４名、市町村が２名で合計８名が通例であった。近年は、国への就職はゼロが多く、富山と石川の県・市町村で各２名、計４名が公務員就職の姿である。

民間企業への就職では、「経営コース」の場合、金融業と流通業が多く、ついで、サービス業と製造業他である。

金融業では、日本銀行、政策投資銀行(旧開銀)、信託銀行(住友他)、都市銀行(三井住友他)、地銀(北陸、北国、富山第一、富山、第四、他)、信金(高岡、砺波、新湊、氷見伏木、金沢、能登、他)など多くに分散している。

流通業では、大和(香林坊、高岡、富山、他)、ジャスコ(旧北陸ジャスコ)、平和堂、書店(文苑堂、明文堂他)、薬局(フジイ、アオキ他)、自動車販売(日産、トヨタ、スバル他)、商社(YKKAP、三谷商事、一村産業、東洋物産、金森産業他)、運輸(トナミ運輸、伏木海陸、富山地鉄、日本通運、西日本 JR 他)など。

サービス業では、北陸電力、関西電力、高岡ガス、北国新聞、済生会高岡病院、ホテル(金沢日航、金沢全日空、富山全日空他)、ツーリスト(JTB トラベランド他)、会計事務所、オークス、米原商事、インテックなどの広がりがある。

製造業では、高岡地元の三協アルミと立山アルミが当初の多採用から減じた代わりに、中間期には YKK と村田製作所(富山、金沢)、また松下電工(富山、石川)、富山軽金属、タカギセイコー、スズキ部品富山、助野靴下も多かった。　近年も採用が続き、実績がある企業は、スギノマシン、立山科学、渋谷工業、高松機械他である。

建設業では、東洋建設、ニューハウス工業、オダケホーム、石友ホーム他に実績がある。

このように、富山県と石川県を中心に、福井県、新潟

県、岐阜県など多くの

地域、多分野の産業、多様な企業で「経営コース」の卒業生は働いており、高岡短期大学の目指す人材面での“地域貢献”を実現できたようだと思われる。

5　経営コースの先生たち

平成12年度の改革で、教員は「専攻」の所属を離れ「学科」の所属となった。しかし、「経営コース」の卒業研究を指導する教員群、また「経営コース」の授業を担当する教員群として、学生からみれば「経営コース」の先生たち、という認識がある。このような用語法で定義した教員について、当初からの教員群を一覧整理し、記録として残しておきたい。

昭和61年度の第１期生受入れ時点では、教授　澤本正巳(昭和60年４月～平成４年３月　定年退職、本学名誉教授)／教授　中村　茂(昭和61年４月～昭和62年９月　在任中に死去)／助教授　金井繁雄(昭和61年４月～平成２年３月：転出)の３名でスタートした。その後、昭和62年度に、助教授　小郷直言(昭和62年４月～平成５年３月：転出)、昭和63年度に、教授　久保脩治(昭和63年４月～平成３年３月：一般教育に配置換え)、平成２年度に、講師　田中晴人(平成３年１月～平成13年３月：転出)、平成３年度に、教授　石井榮一(平成３年４月ビジネス外語専攻より配置換え～平成７年３月定年退職、本学名誉教授)／講師　市川直樹(平成３年10月～平成８年３月：転出)、平成５年度に、教授　滝沢浩(平成５年９月～平成16年４月より理事・副学長)、平成６年度に、教授　鶴田彦夫(平成６年９月～平成12年３月：転出)、平成７年度に、教授　木村幸信(平成７年４月情報処理専攻より配置換え、～平成13年３月転出、本学名誉教授)、平成９年度に、教授　吉田俊六(平成９年９月～　現在に至る)／講師　上東正和(平成９年４月～　現在に至る)、平成13年度に、教授　越野啓一(平成13年４月～　現在に至る)／助教授　小柳津　英知(平成13年４月～　現在に至る)／助教授　呉在烜　(平成13年10月～平成16年３月：転出)、さらに、平成16年度に、助教授　高松　朋史(平成16年４月～　現在に至る)が着任した。つごう17名の先生方が着任され、平成16年３月末現在、滝沢理事・副学長および５名が在籍中である。平成12年を境としての交替が激しかった印象がある。

なお、今後、県内国立３大学の再編・統合により、上記の経営コース５教員のうち、４名が経済学部(五福キャンパス)に移り、芸術文化学部(高岡キャンパス)に残るのは、１教員となる予定である。

スピードが経営上のキーワードとなる今後において、多分野への鋭い触覚をもつことが重要である。人生のマネジメントについても同様と思われる。環境変化を素早く察知して、対応策を素早くまとめ実行に移す能力である。

デザイン・工芸分野とマネジメント分野の教員および学生が高岡キャンパスで交流を深めたことは、多分野への興味と理解力を高めたという意味で、学生にとっても教員にとっても、こんごの人生に有意義と思われる。

高岡キャンパスで学んだ「経営コース」出身者は、国際コミュニケーションと情報技術(IT)の基礎に加えて、感性と個性を重視する美術工芸の世界、またその分野を志向する人々に親近感を持った筈である。

未来の日本は、地理的なグローバル化だけでなく、分野を超えると言う意味でもグローバル化した発想をもつ人々が中心で発展すると期待できる。

「経営コース」は“マネジメント”を学ぶ場であったが、経営の知識や技術以上に、目に見えない素養・教養を高める場であったと思える。

高岡短期大学は、学生、教員、職員を問わず、かけがえのない貴重な体験を得られた最高の場であった、と感謝したいと思う。

(滝沢　浩、吉田俊六)

2.6.3.3.2　情報コース

1　情報コース設置の背景

本学は昭和58年に開学、61年に第１期生を受け入れておおよそ20年を経過しようとしている。今年(平成17年)は20期生の入学を予定している。この間平成５年に高岡短期大学十年史を発行し、ここに新に記念誌を編集することになった。そこで情報コース20年の歩みについて述べる。(なお後でも述べるが、開学当初は「産業情報学科情報処理専攻」と呼んでいた名称は、平成12年度の大学改革で「地域ビジネス学科情報コース」に変えた。以下では、区別する必要のある場合を除き後者を使用する。)　ここでは十年史に記載されている事柄を極力割愛し、その後について述べるが一部重複する事実も含まれている。

ある組織が創設され、それにどのような中身を持たせるかは時間的・地域的な要請で決まる。高岡短期大学の２学科の一つに産業情報学科を置き、その中に情報処理専攻を設置したのは、開学当時の企業等の経営組織高度化、情報化、国際化の進展が背景にあったものと考えられる。

わが国の情報教育(コンピュータのハードウェア、ソ

フトウェアに関する教育)は昭和40年代半ば以後、大学工学部が次々と情報工学科を設置したことから始まった。一般社会では当初、計算センターに設置されたコンピュータに処理を委託する方式(バッチ処理)での利用が多かった。その後、時分割処理(タイムシェアリングシステム、TSS)のOS(オペレーティングシステム)が開発されオンラインリアルタイム処理が可能となって、座席予約や銀行ATM、企業の生産システム、在庫管理など多様な分野でコンピュータ活用が進んだ。同時に、コンピュータの小型・低価格機種も用意されて、オフィスや商店など中小規模の事業体での利用や個人的な使用も広く行われるようになった。つまり、集中処理から分散処理の形態に発展した。

このようにコンピュータの利用範囲が広がるにつれてソフトウェア開発の人材不足が意識され、工学部の情報工学科だけでなく経済学部をはじめとする文科系学部でも情報教育が実施されるようになった。そんな折、本専攻(コース)もその任に当ることになった。

2　学生の入学

本学の入学者選抜は推薦入試と一般選抜が主なもので、これらの他に社会人特別選抜、帰国子女特別選抜、私費留学生選抜も用意している。(しかし後者の3選抜試験の志願者は毎年少数であるので、それらには言及しない。) なお、情報コースの学生定員が40名でることは開学以来変わっていない。

受験(競争)倍率(ここでは、推薦入試と一般選抜を合わせた受験志願者合計数の、学生定員に対する割合、で算出した)は、昭和61年度(第1期入学生)と翌年の昭和62年度では16倍前後となって高倍率の専攻となった。(61年度の一般入試では24倍であったことが十年史に書かれている。) その後、平成2年度(第5期入学生)頃までは10倍台の倍率であったが、徐々に低下して最近では3～5倍程度に落ち着いて低下傾向に歯止めのかかった状態にある。倍率が徐々に低下したのは、受験生の受験機会が増えたこと、18歳人口の減少等が大きな要因であると考えられる。一方、近年低下傾向に歯止めがかかり一定倍率をキープできているのは、当地域に短期の高等教育機関に対する一定の需要が存在しているため、と推測できる。

3　情報コースのカリキュラム

情報コースの教育目標は、一貫して、情報処理技術の急激な変化に柔軟に対応できる実践的な能力の育成と、表面的な変化に左右されない基本的な理解力を培うことであった。このコースでは、具体的には、中小規模のソフトウェアを設計できること、そのプログラムの作成・デバックを的確にできること、高度なSE(システムエンジニア)とエンドユーザとの間を仲介できること、など実務に対応できる人材の育成を目指してきた。高度な情報研究者や教育者あるいは大規模ソフト設計者の育成を目標としているわけではない。その点が工学部情報工学科や大学院での情報教育と本コースとの住み分け点である。資格試験に対応させると、情報処理技術者試験2種、基本情報処理技術者試験、初級システムアドミニストレータ試験、ワープロ検定などがこのコースのターゲットである。

そこで、「コンピュータの基礎」と「プログラミングの基礎」を情報コースのコア科目に位置づけている。前者は、「情報処理概論」、「コンピュータ科学」の名称を使った期間もあったが一貫して情報教育の理論的な入門科目の役割をもたせてきた。後者では構造化プログラミングの考え方をしっかり理解して、連続・分岐・反復処理を組み合わせた構造のプログラムを作成できる能力の開発を行なってきた。開学初期の頃は情報処理技術者試験の出題言語に対応するため、FORTRANとCOBOL言語を採用していた。その後、実業界ではシステム記述言語としてC言語が多用されるようになり、学内ではそのための教育環境も整ったことから、本コースではプログラミング導入言語としてC言語を採用することに改めた。この科目は後に続く科目「Cプログラミング初級・中級」の入門の役割を果たしている。

さらに科目「情報ネットワーク」、「データベース」を組み入れるなど、社会の要請に対応できるカリキュラムを工夫してきた。一方、この20年間で社会の情報化は進み、大型コンピュータの時代からパーソナルなネットワーク時代と変化し、コンピュータを利活用するための学習を希望する学生の割合が多くなってきた。こうした要請にも応えるべく、「ビジネスプログラミング」、「ビジネス情報処理」、「ビジュアルプログラミング」など、他コースとの融合をより推し進めた科目も用意してきた。

また、「卒業研究」では、年に2回～3回の発表会を学生自らが運営実施し、最終的に研究の成果は論文にまとめるなど、情報コースのカリキュラムは、実社会に柔軟に対応できる力をつける内容となっていることが特徴である。

4　情報環境

本学最初の教育用コンピュータは汎用中型計算機(NEC製ACOS610)と演習室のパソコン(55台)から構成され、TSSサービスを利用しFORTRANやCOBOL

のプログラミング、データベースや統計処理等の演習に活用した。この大型汎用計算機は、中央処理装置や磁気ディスク装置１つが「ジュースの自動販売機」を越えるほど大きく、性能は「演算速度：2.2MIPS、メモリ：16MB、磁気ディスク容量：３.9GB」であった。現在のパソコンの性能と比較しても時代の流れが感じられる。演習室のパソコンには、TSS 接続のためのソフトウェアの他、日本語・英語・中国語ワープロやカード型データベース、会計処理、２次元・３次元グラフィックス等のアプリケーションも導入され、スタンドアロン形式でも幅広い分野の演習や卒業研究等のレポート作成にも利用された。

平成８年度には、それまでの汎用計算機システムからワークステーションとパソコンによる分散型システムに移行した。同時に、ルータ・スイッチングハブ・情報コンセント等の学内 LAN システムを整備し、インターネット(学術情報ネットワーク)に接続した。このことによって、学内外との電子メールが可能になり学生への連絡、レポート提出、オフィスアワーや健康相談の予約などが手軽に行えるようになった。ほかに、求人情報の取得やエントリシ―ト提出など就職活動にも使用されて広範囲の学生生活を支援している。

さらに、この教育用コンピュータシステムは平成11年度および15年度に大規模なシステムの更新を行い、利用者の最新のニーズに応えている。主な二つの演習室(メディアルーム、CG ルーム)には Windows および Macintosh 端末が設置され、教師用端末の操作が参照できる学生端末間モニタが設置されているのが特徴である。このシステムは全学生を対象とした情報処理基礎教育やプログラミング、画像処理などの専門教育に有効に利用されている。

また、基幹ネットワークは平成14年度に更新され、光ファイバ幹線のギガビットネットワークとなり、併せて無線 LAN アクセスポイントも整備された。これによってエントランスホールや一般の講義室、演習室からネットワーク上の情報にアクセス可能となって各種デモンストレーションや講義、会議を効率良く実施できるようになった。

なお今後の拡張計画として、インターネット回線速度は当初の64kbps から1.5Mbps へ高速化し、平成17年には100Mbps となる予定である。この高速回線を活用することで、インターネットや遠隔ファイル、データベースへの高速アクセスが可能になる。さらに北陸３県内の６大学を結び遠隔授業による単位互換授業の開設が計画されている。県内３大学の再編・統合後には、学生の所属する学部キャンパスで他学部キャンパスの授業を受講できるようにすることなどの便宜提供も考えられている。同時に各種事務的会議、研修会、研究会などが他大学や他キャンパスへ出向くことなく、TV 会議で実施できるものと期待されている。

５　学生の進路

学生の進路は就職と進学に大別できる。後者はさらに、本学の専攻科への進学と他大学の３年生としての編入学に分けられる。進路指導は卒業研究の指導教官を中心に、コース進路委員・学生課担当職員と連携して指導にあたっている。学生には口頭・掲示による連絡の他に、電子メールにより最新の進路情報を配信している。

就職状況はバブル崩壊の影響もあり、求人環境は開学当初に比べると極めて厳しいものがある。しかし結果的には就職内定率は毎年ほぼ100％を達成することができた。主な就職先はコンピュータ系(プログラマ・オペレータ等)、金融系(銀行等)、事務系(メーカー、公務員等)、販売・サービス系の四つの分野が中心となっている。

専攻科への進学は、平成７年に２年制の専攻科が開設されたのに伴い、地域ビジネス専攻へ積極的に卒業生を送り出してきた。地域ビジネス専攻を修了して学位授与機構に申請できる資格は経営学士であることから、情報コース出身者の履修指導を工夫し、平成７年から平成16年までの10年間で地域ビジネス専攻への入学者総数55名のうち、情報コース出身者数28名(51％)を確保することができた。このように専攻科にコンスタントに進学者があり、地域ビジネス専攻科の運営を軌道に乗せることに貢献した。

専攻科地域ビジネス専攻の学生定員は６名である。学科では専攻科への進学希望者が少なく、長らく定員数をクリアすることに苦慮していた。当時は専攻科入学試験を１次は10月下旬、２次は１月下旬に実施していた。学生は進路を決めずに10月下旬を待つことに不安を感じている様子を知り、１次試験を夏期試験と名称を改め７月下旬に繰り上げた。これが功を奏し、その後は定員に穴があくことはなくなった。最近では定員オーバでも可能な限り多くの進学希望者の入学を認めるようにしているが、希望者全員を受け入れることは困難になっている。

また、例年２～３名程度富山大学をはじめとする四年制大学への編入者がある。

６　情報コースの先生たち

前にも述べたが平成12年度の改革で、「産業情報学科情報処理専攻」から「地域ビジネス学科情報コース」に名称を変えた。この改革で教員の所属が専攻から学科に

変わった。つまり、先生方はコースに所属するとの考え方がなくなった。そこで正確には「情報コースの先生」との呼び方は正しくないのだが、主に情報コースの学生教育に当った先生方に関するメモを記し、記録として残しておきたい。

昭和61年度の第１期生受入れ時点では、教授　木村幸信(経営工学)／教授　佐藤孝紀(情報工学、画像の生成と処理)／教授　久保欣五(システム工学、自然言語処理)／助教授　平田道憲(社会工学)の４名でスタートした。

本学は学生在籍２年間の短期高等教育機関である。昭和61年度は１年生のみの在籍であるため、いくつかの専攻では３分の２程度の教員だけが赴任し、残りは完成年度の62年に着任することが予定されていた。情報処理専攻は、フルメンバでのスタートとなった。その後、昭和63年度に、助教授　小松　裕子(ソフトウェア開発技法、地域情報化)、平成６年度に、教授　近藤　　潔(プログラミング、データベース)、さらに、平成７年度に、助教授　藤田　徹也(情報ネットワーク、ユーザインターフェース)／講師　米川　　覚(情報システム、教材の設計開発)が着任した。一方、木村教授と平田助教授のお二人は他大学へ転出された。つごう８名の先生方が着任され、６名が在籍中である。他コースと比較すると、先生の出入りが少ないチーム構成である。

学生の入学、授業内容の設定、使用機器(コンピュータ、ネットワークほか)の整備、進路指導(就職、専攻科、四大編入)などすべての業務をこのチームで分担して実施してきた。この文章も、それぞれの委員会委員が分担して作成したものを並べ替えてまとめたものである。(なお、先生方の職名は、途中での昇進・昇格があったが詳細を割愛し、在籍者は現在の、転出者はその時点のものを使ってある。)

大まかな計算になるが、各年平均して45名が入学し、20年間とすれば約900名が情報コースで勉強してくれたことになる。表面上はこの８名で900名の学生を教育したことになる。裏返せば、入学してくれた学生達が、私共８名に『教育するチャンス』を与えてくれたとも解釈できる。その意味で、卒業生および在学生達に心から感謝の気持ちを伝えたい。

なお、この文は平成17年２月にまとめたものです。

(佐藤孝紀)

2.6.3.3.3　国際・英語コース

１）現在のカリキュラム

現在の国際・英語コースのカリキュラムは平成12年度の改革で制定されたものである。この改革では、それまで学科におかれていた４専攻は４コースに変革された。それと同時に、各コースを対象とした科目以外に、学科内に開設された他コースの科目も幅広く履修することができ、その科目の単位も認定された。また他学科の専門教育科目や、専攻科の授業科目も、合わせて８単位まで卒業所要単位として認定できる制度となった。それに加えて、富山大学人文学部、経済学部と本学の学生が、「特別聴講学生」として相互の授業科目を履修し、習得した単位を規定の範囲内(上限30単位)で修得単位として認定する制度ができたため、富山大学に開設されている科目も履修でき、履修可能な科目数は大幅に拡大した(ただし単位互換の対象とならない科目もある)。

国際・英語コースの教育目標は、英語の実践的能力の伸長・強化を通して、豊かな国際感覚を養成するとともに、ビジネスに関する基礎的な知識・技能の修得をはかり、急速に国際化する企業や社会に対応できる人材の育成を目標とする。これはそれ以前の目標を踏襲したものであり、この目標に沿ってカリキュラムが作られている。

表(101ページ参照)が示すように、国際・英語コースにおいては卒業所要単位数が、必修科目22単位、選択必修科目４単位、選択科目が８単位以上と規定されており、他コースと比較して必修科目単位の占める割合は圧倒的に高い。必修科目は、卒業研究を除いて全て語学関係科目で、実用的語学力を修得するための措置である。

他の短期大学の英語系学科には、英語学、英米文学関係の科目が開設されている場合が多いが、本コースではこうした科目は置かれていない。その代わりに、「ビジネスライティング」、「時事英語基礎」、「時事英語上級」、「検定英語」(TOEIC テストを対象)、特別講義・「航空・旅行実務」(昭和15年度には、「航空・ホテル実務」と「旅行実務」の２科目)といった実務系英語科目を数多く開設している。学生の要望が高い英語会話の科目に関しては、すべて少人数制を採用して、教育効果を高めている。また、教員のなかに２人のネイティブ・スピーカーを配し、授業以外のオフィス・アワーなどの時間を利用して、彼らと学生が英語で話せる機会をできるだけ多くもてるように配慮している。さらに、「ポップスと映画の英語」や「英米の社会と文化」の科目は、本来の目標の異文化理解を深めると同時に、リスニング力の伸長を目指して、ネイティブ・スピーカーが英語で授業を行なっている。

２）ウエスタン・オレゴン大学の語学研修

平成15年度から、アメリカのウエスタン・オレゴン

大学との大学間友好協定に基づき、約４週間の短期語学研修制度が開始され、参加者には４単位が認定されることとなった。研修費がおよそ50万円かかることもあり、過去２年間の参加者は、毎年15～６名ほどとなっている。学生はウィークデイには、大学の寄宿舎に宿泊して、語学研修をおこない、ウィークエンドには大学周辺の家にホームステイをして、アメリカの家庭を中心とした文化・社会を理解する貴重な体験をしている。

３）各種の技能・検定試験および編入学試験対策

技能・検定試験および編入学試験対策は、学生の就職や将来等に役立つこともあり、授業以外で学生の要望に合わせて個別の指導をおこなっている。カリキュラムとしては、「検定英語」の授業が設置されている。この授業では TOEIC の問題の特徴とその出題傾向を学び、500点台得点(日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内での業務上のコミュニケーションができるとされる)の能力を養成することを目指している。しかし、授業での模擬テストでの受講生の平均点は500点弱となっており、さらなる強化指導が必要であると考えられる。他に語学関係としては、「実務英語検定試験(英検)」、「TOEFL」の個別指導が行なわれている。また、語学以外のものとしては、「秘書検定」、「国内旅行業務取扱管理者試験」(国家試験)、「宅地建物取引主任者」、「コンピュータサービス技能評価」等の検定・資格試験の指導を行い、毎年、若干名の合格者が出ている。

４）学生の進路

学生の大多数は卒業後、民間会社に就職しており、就職希望者の就職率はここ数年100パーセントと非常に良い成績を収めている。国際・英語コースに人気のある職種は、航空、旅行、ホテルのサービス部門である。例えば、平成16年度卒業生のうち、就職希望者25名のうち28%はこの部門に就職した。他の業種は特に偏ることなくおおむね均等化されている。主な就職先としては、観光・ホテル・航空関係では、JTB トラベランド、ツーリストエキスパーツ、ホテルニューオータニ高岡　富山全日空ホテル、金沢都ホテル、加賀屋、金沢レジャー計画、ホテル日航金沢、日本航空インターナショナル、富山地鉄サービス。金融・保険関係では、日本銀行、富山銀行、北陸銀行、北国銀行、三井住友銀行、東京海上火災。製造関係では、村田製作所、渋谷工業、立山科学工業、YKK、助野靴下。運輸関係では、西日本旅客鉄道、日本通運、トナミ運輸、ジャルコス。不動産関係ではアパグループ、富山空港ターミナルビル。電力・ガス関係では、北陸電力、高岡ガスがあげられる。公務員としては、数年に一度１～２人が採用される程度で、難関な部門となっている。

国際・英語コースの特徴としては、卒業後に他大学に編入学をする学生が他コースと比較して多いことである。最多のときは９名いたが、例年は２～４名ほどが他大学へ編入学をしていった。本学にも卒業後２年間学べる専攻科があり、学位授与機構から経営学士の学士号を取得できるシステムとなっている。しかし、国際・英語コースの学生は経営系の学問にあまり関心をもたないためか、専攻科進学者は皆無である。主な編入学先の大学は、山形大学人文学部、富山大学人文学部、立命館大学産業社会学部、中央大学経済学部、同志社大学文学部、立教大学観光学部、神奈川大学外国部学部、学習院大学文学部、法政大学人間環境学部、明治学院大学文学部等である。

５）過去のカリキュラムの変遷

〇昭和61年度の学生受入れ時

記念誌「高岡短期大学十年史」、付録、142ページで示すように、専門科目のなかで語学系科目は、英語と中国語があるため、両方を表す名称をもちいた。具体的には「外国語会話Ⅰ」、「外国語会話Ⅱ」、「外国語会話Ⅲ」、「外国語講読Ⅰ」、「外国語講読Ⅱ」、「外国語講読Ⅲ」、「外国語作文Ⅰ」、「外国語作文Ⅱ」、「英語概論」、「時事英語・商業英語」と合計10科目28単位が英語関連の科目であった。当時は、講義は週２時間で２単位、演習は週２時間と同じ時間数でも４単位と単位数が異なっていた。各々の科目ナンバーは、レベルの違いを示すとともに、対象領域の違いを表している。例えば、「英語会話Ⅲ」と「英語作文Ⅲ」は、ビジネス系の内容を対象としていた。

ビジネス外語専攻という名称が示すように、経営系や情報処理系の科目も大きなウェイトが置かれており、「経営実務概論」、「経営管理論」、「簿記原理Ⅰ」、「情報処理概論Ⅰ」、「プログラミング演習Ⅰ」の５科目10単位が必修なっていた。他にも選択科目として、数多くの経営・経済、情報処理、国際理解に関する科目が開設されており、幅広い職種に必要とされる基礎、専門知識の習得が可能となっていた。

また、本学全学科で共通しているが、２年次に週４時間４単位の「特別研究」があり、今日まで引き継がれている。この科目は、学生各自が関心のあるテーマを選び、そのテーマに詳しい教員のもとで１年間にわたり指導を受け、研究の成果を最終的に論文としてまとめることとなっている。短大で卒業論文を全員に課しているという点は、本学の一つの特徴といえよう。授業以外にも学習機会を増やすことを目的として、次の２つの便宜が図ら

れていた。

1．英語の視聴覚教育用のビデオ、カセットテープの貸し出し

視聴覚学習の場としては、LL 教室以外に、学生が空き時間を利用して個別的に視聴覚関連の勉強ができるように、語学個人実習室(ブース10台)及び図書館内の情報資料室がある。本学の視聴覚用ソフトは、カセットテープが約400本、ビデオテープが約300本ある。学校内だけでなく自宅でも利用できるように、学生に貸し出しを行なってきた。

2．タイプライターの講習

学生受け入れ時の頃は、パーソナルコンピュータがまだ今日ほど一般化していなかった。そのため英米コースでは、平成２年度からタイプの講習を開始した。講習は１年次前期に毎週１回１時間の講習で、合計10回行なってきた。１クラス15名の学生に対して、インストラクター２名が講習をおこなう少人数制の指導方式を採用した。数年後、英文タイプ・ソフトを購入して、パソコンを利用しての英文タイプ練習に変わった。しかし、これもすぐに廃止され、ワープロの学習は情報処理関係の授業の守備範囲となった。

○昭和63年度の幾つかのカリキュラム改正

いくつかの科目が、この年に改正、廃止、新設された。

(改正科目)

簿記原理Ⅰ→簿記会計Ⅰ　簿記演習→簿記会計Ⅱ、中国語概論→中国概論

時事商業英語(講義)→時事英語(演習)、英語講読Ⅱ(４単位)→英語講読Ⅱ(２単位)英語会話Ⅱ(４単位)→英語会話Ⅱ(２単位)

英語作文Ⅱ(４単位)→英語作文Ⅱ(２単位)、英語作文Ⅲ(２単位)

(廃止科目)

文化史、英語概論、原価計算、テキスト処理

(新設科目)

自然言語処理、語学演習Ⅰ、語学演習Ⅱ、地域経済学

(その後に新設された科目)

平成５年度　英米の社会と文化。平成６年度　英語作文Ⅳ、言語とコミュニケーション

○平成７年度の第一次カリキュラム改正

これまでの講義と演習の区別が撤廃されたため、各科目は全て週２時間となった。しかし英米コースでは、語学の学習時間を減らさないために語学系科目を一挙に18科目に増やし、多彩な内容を盛り込んだ。また、「ビジネス英会話」、「英米の社会と文化」、「言語とコミュニケーション」、「ビジネス・ライティング」、「クリエイティブ・ライティング」といった科目の名称が示すように、これまで以上に授業内容の焦点を明確に示し、専門化した授業を開設した。

６）英米コース関連の授業を主に担当した教員

石井栄一(昭和61年４月～平成２年３月[経営実務コースに配置転換])／林　暢夫(昭和61年４月～平成12年３月[定年退職]　昭和61年４月より平成２年３月までは、一般教育科目等所属の形で授業担当)／中野清治(昭和61年４月～平成14年３月[定年退職])／村上恭子(昭和61年４月～平成17年９月)／小林和子(昭和62年８月～平成17年９月)／クリストファー・コビー(平成５年10月～平成17年９月　平成５年10月～平成12年３月までは外国人教師として勤務)／入江識元(平成６年11月～平成16年３月)他大学へ転出／クリストファー・ロペズ(平成12年４月～平成16年９月)外国人教師／渡邊康洋(平成14年４月～平成17年９月)／深谷公宣(平成16年４月～平成17年９月)／ブルース・ウィルソン(平成17年４月～平成17年９月)外国人教師

(村上恭子)

2.6.3.3.4　国際・中国語コース

現在の地域ビジネス学科、国際・中国語コースは、高岡短期大学設立当初は、産業情報学科・ビジネス外語専攻(中国語)という名称であった。文学部や人文学部における、「アカデミック」な外国文化理解を志向するものではないことは言うまでもないことだが、従来、わが国の高等教育機関における語学教育は、外国語学部が担ってきたが、ビジネス外語においては、「ビジネス＋外国語」、という点が外国語学部における語学教育と大きく異なる点であった。外国語学部では「経営学」や「情報処理」関連の科目が必修科目として設けられることはないが、ビジネス外語専攻では、「経営実務概論」「経営管理理論」「簿記原理Ⅰ」といった経営学の基礎科目のほか、「情報処理概論Ⅰ」「プログラミング演習Ⅰ」といった情報処理の基礎科目が必修科目として設定されている。世界経済における中国のパフォーマンスが今日ほどクローズアップされていなかった、昭和61年当時に高岡短大にこのような実学志向の中国語関連の課程が設けられたのは、時代を先取りした先見性があったといえる。日本と中国の国交回復以前、両国間の経済交流を担っていた、LT 貿易の推進者であった、松村謙三氏の郷里(氏は福光町出身)に、中国語コースが設けられたことは、まことに意義深いものである。以下に、カリキュラ

ムの面から、設立以降現在までの中国語コースの特徴を概観してみよう。

⑴昭和61年度(創立当初)のカリキュラムの特徴

当時はビジネス外語専攻(中国語)という名称で、中国語および中国関連の科目としては、「外国語(中国語)講読Ⅰ」、「外国語(中国語)会話Ⅰ」、「特別研究」が必修科目で、選択科目として「地域研究」、「文化論」、「外国語(中国語)講読Ⅱ、Ⅲ」、「外国語(中国語)作文Ⅰ、Ⅱ」、「外国語(中国語)会話Ⅱ、Ⅲ」、「中国語概論」、「比較文化」、「文化史」、「時事中国語」、「海外事情」、といった選択科目が設けられていた。どの専攻にも共通することであるが、授業科目の中では「特別研究」が必修4単位と比重が大きく、2年間という短期間の学修期間の中で、4年制大学の「卒業論文」に相当する科目を設け、学習の目標意識を明確に持たせることを重視していることが伺える。昭和61年度から現在(平成17年度)まで数度のカリキュラムの改正を経ているが、この「特別研究」(平成7年度からは「卒業研究」に名称変更)と、「時事中国語」はどのカリキュラムにおいても一貫して設けられてきた科目である。いささか不備を感じるが、この点は昭和63年度のカリキュラムにおいて改善され、「外国語(中国語)作文Ⅰ」が、必修科目として設定されることになった。

⑵昭和63年度のカリキュラムの特徴

設立当初のカリキュラムで「外国語(中国語)作文Ⅰ」が必修科目でなかったことが、実学志向の語学教育という点からは、カリキュラム上不備な点であったが、昭和63年度のカリキュラム改正でこの点が改められ、「外国語(中国語)作文Ⅰ」が、「外国語(中国語)講読Ⅰ」、「外国語(中国語)会話Ⅰ」とともに、必修科目として設定された。科目名からは別々の内容に見えるが、この3科目は、同一教科書を使い、教員がオムニバス形式で行うものである。これは、初習外国語である中国語をより集中的に教育するようにとの考えからだが、教員間の連絡が相当綿密になされないと、効果があがらない。選択科目についても変更があり、「中国語概論」がなくなっている。ことばを客観的に見る目を養うことで、整理された意識的なことばの使い方が可能になるのだが、「中国語概論」を科目から削除したことは、語学教育に対する思慮が十分でなかったといわざるを得ない。語学的見地から「中国語」を見る目を養う科目として「中国研究基礎Ⅱ」ができるのは、平成7年度以降のこととなる。

⑶平成7年度のカリキュラムの特徴

平成7年度以降、ビジネス外語専攻が英米コースと中国コース、という2コースに分かれることがカリキュラム上も明確に示されることになる。平成7年度はカリキュラムが大幅に改正された年で、必修科目として「中国語基礎演習」、「LL・ワープロ演習」、「中国語作文Ⅰ、Ⅱ」、「中国語会話Ⅰ、Ⅱ」、「中国語講読Ⅰ、Ⅱ」、「卒業研究」が、選択科目として「中国研究基礎Ⅰ」、「中国研究基礎Ⅱ」、「中国近現代史」、「現代中国事情」、「東アジア文化史」、「時事中国語」が設けられた。

従来のカリキュラム上の不備を改善したのみならず、初習外国語である中国語の学習をより徹底して行うための「中国語基礎演習」や、社会に出て役立つという観点から、中国語ワープロを使った授業科目を設けるなど、より実学志向の科目が設けられた。

さらに、選択科目に「特別講義」を設け、固定的なカリキュラムとは違い、教員の判断で実験的な科目が開設できることになったことは、カリキュラムを弾力化し、時代や学生のニーズにいち早く対応するという点では、大きな役割を果たすことになった。

特別講義として、たとえば「中国語情報処理入門」、「広東語入門」、「広東語初級」、「中国小説講読」などが、以降、単年次に設けられることになる。なお、平成9年度からは、「LL・ワープロ演習」を「中国語LL演習」、「中国語ワープロ演習」の2科目に分け、より実用的な中国語教育の充実を図ったカリキュラムになった。

⑷平成10年度のカリキュラムの特徴

従来「中国語基礎演習」として開設されていた科目を、「中国語基礎演習Ⅰ」、「中国語基礎演習Ⅱ」の2科目に分けたことが、この年のカリキュラム改正の大きな点である。これは、高等学校での中国語教育が広がりを見せている現実にいち早く対応したもので、「中国語基礎演習Ⅱ」は、高校での中国語既習者のための科目である。

こうした試みは他大学には見られないもので、このカリキュラム改正により、受験者にも変化が見られ、小杉高校や上市高校といった富山県内の高校のほか、辰巳丘高校(石川県)、足羽高校(福井県)といった、中国語学習時間の多い高校からの受験者が増加した。

⑸平成13年度のカリキュラムの特徴

この年のカリキュラムの改正は、故蠟山学長を中心に進められ、①ネーミングはわかりやすく、②発信型の授業も取り入れるという方針のもと、大幅な改正が行われ、基本的にはこのカリキュラムが現在まで続いている。おもな改正点としては、従来の「作文」「会話」「講読」といった科目名称を廃止し、それに代わって「中国語理解」「中国語表現」といった名称を採用したこと、「プ

レゼンテーション初級」、「プレゼンテーション中級」といった、発信型の授業を設けたことが上げられる。「プレゼンテーション初級」は、パソコンを用いて中国語で表現し、中国語運用レベルを向上させるだけではなく、積極的に発信する姿勢を涵養することを目的にしたもので、中国語ソフトの使い方、中国語のホームページの読み方、中国語メールの作り方なども学ぶ。また、「プレゼンテーション中級」は、コミュニケーション運用レベルを上げることと、中国語会話表現を積極的に展開させる姿勢の涵養も意図した。さらに、それまでの「中国語基礎演習Ⅰ」を「基礎中国語 A」、「基礎中国語 B」、「基礎中国語 C」の３科目に分け、「A」と「B」を同一の教員が、「C」を別の教員が担当するようにした。集中的な中国語の習得を意図し、従来同一の教科書を使っていたが、学習者の学習意欲を増すためには、異なる教科書を使う方がよいと判断したためである。同一の教科書を複数の担当者で教えるより、この方法による方がより学習効果が上がることは、学生による授業評価アンケート結果などからも明らかである。

（山田眞一）

2.6.3.4　専攻科のカリキュラム

2.6.3.4.1　専攻科の目標

本学のホームページでは、以下のように目標を掲げている。

専攻科は、短期大学における学科２年間の基礎の上に、地域社会と密接な関連をもつ専門分野（産業造形、産業デザイン、地域ビジネス）について、更に２年間の教育を行います。ここでは、精密さと拡がりを持つ高度の知識と技術を修得し、我が国とりわけ地域の産業の発展に積極的に貢献できる人材を育成することを目標としています。さらに、訴求点を３つ示している。すなわち、

⑴　より高度な研究・制作ができます：　短期大学の２年間で学んだ知識・技術を更に深く学び、高度の研究や制作ができます。

⑵　マン・ツー・マン方式の指導が受けられます：　指導教員からマン・ツー・マン方式で研究・制作の指導が受けられます。

⑶　学士の学位取得が可能となります：　専攻科で所要の単位を修得の上、大学評価・学位授与機構の審査に合格することにより、４年制大学卒業と同じ学士の学位を取得することが可能です。こうした、体制に至るまでの経過を若干振り返っておこう。

2.6.3.4.2　専攻科の歴史

本科の２年間に加えて１年制の専攻科が設けられていた期間は昭和63年から平成６年までの７年間である。定員10人の「地域産業専攻」は延べ60人の入学者を記録している。

平成５年に編纂された高岡短期大学十年史で記述されている専攻科の基本構想はその原点を示すものとして、引用しておきたい。「＜前略＞　地域の産業の要請に積極的に応える産業人の育成を目的としている。＜中略＞「産業造形」「産業情報」の両学科を基礎とし、この両学科が提携交流し、総合的効果を上げていくことの期待＜中略＞に応えるべく、総合的な専攻科は本学の完成度を高め、新しい領域を開拓し、その創造性を高める＜中略＞専攻科の名称も、地域産業に関する２つの学科を設置していることから考えて、必然的に「地域産業専攻」となった。」（P76より引用）また、構想段階から２年制への展開は構想されていた。融合教育の考え方は一つの専攻科段階で、すでに萌芽を宿していた。

平成７年より専攻科（１年制、１専攻）が２年制、３専攻（産業造形専攻：定員14人・産業デザイン専攻：定員５人・地域ビジネス専攻：定員６人）に再編改組されると共に、学位授与機構が定める要件を満たす専攻科として認定される。「産業デザイン専攻」は本科のデザインコースはまだ産業造形学科の中の１コースであったが、専攻科では先行的に独立した専攻となった。

平成10年には専攻科棟も完成し、研究・学習・演習の環境条件も向上した。

３.資料集の3.3.2.2で示したように、専攻科の入学志願者および入学者の時系列変化を示している。平成11年に倍率が２倍を超え、年々志願者数が増加傾向を示している。平成17年は平均で2.8倍となり、産業造形専攻では３倍を超える水準となった。本科の定員50人、専攻科の定員14人であるが、入学志願者のほとんどが内部からであり、平成17年度は44人の志願となっていることから、工芸分野での技術習得に経験を積もうとする根強い要望の現われと見られる。一方、地域ビジネス専攻は、本科の定員125人、専攻科の定員６人であり、平成17年度は志願者11人となっている。本科での就職率100パーセントがビジネス学科の訴求点であることを勘案しても、それぞれの学科に学ぶ人材に対する産業側の要請の特徴の違いを反映しているとの見方もできるであろう。

2.6.3.4.3　専攻科の開設授業科目

専攻科が２年制になった平成７年度の講義要項より、各専攻科の開設授業科目を振り返り、最近時点との比較を試みる。

１）平成７年度の開設授業科目

平成７年度の講義要項はＢ５版117ページの冊子で本科の１年生、２年生と合わせて25ページ分を占めている。専攻科名は現在のものと共通である。本科の呼称は産業工芸学科(金属工芸専攻、漆工芸専攻、木材工芸専攻、産業デザイン専攻)、産業情報学科(経営実務専攻、情報処理専攻､ビジネス外語専攻(英米コース・中国コース)）の２学科のままであった。

⑴産業造形専攻では、23科目(講義：７　演習：５　実習：11、通年４単位の実習は11科目と目立つ)。科目名を以下に示す。美術概論、現代科学技術論、CG 特論演習、外国語文献講読、人間工学、造形工学、造形工芸実習(金属)Ⅰ(３人の教員夫々が１つの授業を持つ)、造形工芸実習(漆)Ⅰ、造形工芸実習(木材)Ⅰ(３人の教員夫々が１つの授業を持つ)、造形材料学(金属)・(漆)・(木材)夫々の担当教員が通年４単位の授業を持つ。造形表現演習(平面)・(立体)、現代総合工芸実習、複合造形研究(金属・漆・木材の各教員の共同)、金属工芸制作法、漆工芸制作法、木材工芸制作法である。

⑵産業デザイン専攻では、19科目(講義：12　演習：５　実習：２。通年４単位の授業は５科目にとどまる)。科目名を以下に示す。美術概論、現代科学技術論、CG 特論演習、外国語文献講読、人間工学、造形工学、デザイン表現演習(平面)・(立体)、地域企業経営論、総合デザイン実習Ⅰ、形態発想特論、デザインリサーチ論、製品評価法、画像情報論、インテリア材料学、産業デザイン史特論、視覚デザイン論、設計製図、住居論　である。

⑶地域ビジネス専攻では18科目(講義：17　演習：１(４種類))。科目名を以下に示す。地域経済特論、時事英語研究、時事中国語研究、比較英語論、中国の言語と社会、英米文芸論、中国文芸論、地域ビジネス演習(３人、および、１チームの教員夫々が通年４単位の授業を持つ。経営情報論、経営システム論、財務会計論、企業財務、管理会計論、流通経済論、マーケティング・マネージメント、情報システム管理論、ビジネス・シミュレーション、オフィス・オートメーション　である。

２）講義要項にみる変遷

平成17年度の専攻科講義要項はＡ４版185ページに及ぶものである。11年度よりＡ４版となってシラバスも掲載され、12年度より本科とは別冊の扱いとなり、13年度より巻末には全教員のオフィスアワーと連絡方法を示し、修学、就職、正課外活動、その他の相談を受け付ける体制を示している。

授業科目は基礎科目と専門科目に分類され、修了するためには基礎科目を16単位以上、専門科目を46単位以上修得する必要がある。産業造形専攻は工芸を主として学修する場合と工学を主とする場合で履修科目の区別がある。また、他の大学(放送大学および富山大学)で履修した単位、本学学科で履修した単位等を本学の修了所要単位に含めることが出来る。平成17年４月に北陸地区国立大学における単位互換協定が締結された。17年度の後期から、北陸地区の国立大学をつなぐテレビ中継授業の実験を予定し、平成18年度から福井大学、金沢大学、北陸先端科学技術大学院大学等との単位互換の科目が追加できる予定である。

３）平成17年度の開設授業科目

⑴基礎科目

三専攻共通の基礎科目は25科目。全て２単位である。産業造形(工学)、産業デザイン、地域ビジネスの必修科目は　外国語文献購読Ａ・B(産業造形(工芸)では選択必修)。

さらに産業デザインにおける必修科目はCG 演習Ⅰ・Ⅱであり、産業デザインではこれらの必修４科目以外に選択必修科目を設けていない。産業造形、地域ビジネスにおける選択必修は科学技術論、知的所有権法規、ライフスタイルである。産業造形における選択必修科目は８科目で、美術概論　日本美術史　西洋美術史　色彩学　造形工学　地域企業経営　工学科教育法　美術科教育法　である。地域ビジネスにおける選択必修科目は10科目で、地域経済分析　時事英語研究　時事中国語研究　ビジネス中国語研究　世界の英語　英米文化研究　総合中国語初級　総合中国語中級中国語理解上級　中国語表現上級　である。

⑵専門科目

①　産業造形専攻

「終了制作・研究」は２年後期　必修８単位。これ以外の42の科目は工芸を主とするか、工学を主とするかにより区分が別れ留場合がある。金属工芸演習・漆工芸演習・木材工芸演習、造形工芸実習Ⅰ(２単位)・Ⅱ(４単位)は　金属・漆・木材それぞれの１年後期と２年前

期、造形材料学Ⅰ・Ⅱ(各２単位)は１年で金属・漆・木材それぞれに３分野から２分野を必修８単位、必修以外の分４単位を選択扱い、造形材料実験Ⅰ・Ⅱ(各４単位)は２年でそれぞれ金属・漆・木材の３分野から１分野を必修８単位、これ以外の分16単位を選択扱い。Ⅰ、Ⅱの組み合わせで履修し、Ⅱのみの履修はできない。

以下の科目は「工芸」「工学」の区別なく選択科目となる。

平面表現演習　立体表現演習　総合工芸演習　造形発想　複合造形　材料力学　人間工学　空間デザイン論　接着　姿勢保持のデザイン　家具の製造原価計算　現代の工芸　金属工芸制作法　漆工芸制作法　木材工芸制作法　特別講義(造形研究Ⅰ・Ⅱ、日本の伝統木工　、CAD入門、談話室の家具デザイン、電子出版)

②産業デザイン専攻

「特別研究」は２年後期　必修８単位。これ以外の必修科目は「総合デザイン実習Ⅰ・Ⅱ(各４単位)」、「デザイン表現演習(平面・立体)各２単位」である。残りの21科目は全て選択となっている。すなわち、形態発想特論(４単位)、以下は２単位の科目である。デザインリサーチ論　製品評価法　画像情報処理実習　音響情報処理実習　インテリア材料学　構造計画論　産業デザイン史特論　グラフィックデザイン論　グラフィックデザイン演習　材料力学　人間工学　設計製図　空間デザイン論　空間デザイン実習　デザイン法規　住居論　特別講義(造形研究Ⅰ・Ⅱ、CSD 入門、電子出版)

③　地域ビジネス専攻

「特別研究」は２年通期　必修８単位。これ以外の必修科目は「地域ビジネス演習」１年通期４単位。残りの29科目は全て２単位の選択となっている。すなわち、経営情報　地域企業経営論　経営システム　経営戦略　財務会計　企業財務　管理会計論　原価管理　流通経済　マーケティング・マネジメント　生産マネジメント　物流システム　知識ベース管理　応用ビジネス情報処理　ビジネス・リエンジニナリング　エンドユーザコンピューティング　インターネット技術　応用ソフトウエア開発　応用データベース　特定産業英語研究　検定英語中級　欧米のニュービジネス理解　英語によるアジア事情理解　中国経済　中国ビジネス概論　海外研修(英語・中国語)　特別講義(環境計画、電子出版)

(補遺)

産業造形、産業デザインの２つの専攻科は実技の修得に多大な時間と訓練を必要とし、上乗せ２年間、さらに、大学院や専門技術訓練機関等へと進んで技量を研鑽し続ける構造となっているようである。必然的に志願者の倍率も高くなっている。一方、２年間での就職を重視する学生が多い地域ビジネス学科からビジネスのための専攻科へと進む学生は相対的に少ない上に、４年制大学への編入と競合することになるなど、若干事情が異なる。

以下、情報と経営両コースでの取り組みの例を補論として示しておこう。

情報コースでの取り組み：

情報コース(元情報処理専攻)から専攻科への進学は、平成７年に２年制の専攻科が開設されたのに伴い、積極的に卒業生を送り出してきた。地域ビジネス専攻を修了して学位授与機構に申請できる資格は経営学士であることから、情報コース出身者の履修指導を工夫し、平成７年から平成16年までの10年間で地域ビジネス専攻への入学者総数55名のうち、情報コース出身者数28名(51%)を確保することができた。このように専攻科にコンスタントに進学者があり、地域ビジネス専攻科の運営を軌道に乗せることに貢献した。

専攻科地域ビジネス専攻の学生定員は６名である。学科では専攻科への進学希望者が少なく、長らく定員数をクリアすることに苦慮していた。当時は専攻科入学試験を１次は10月下旬、２次は１月下旬に実施していた。学生は進路を決めずに10月下旬を待つことに不安を感じている様子を知り、１次試験を夏期試験と名称を改め７月下旬に繰り上げた。これが功を奏し、その後は定員に穴があくことはなくなった。最近では定員オーバでも可能な限り多くの進学希望者の入学を認めるようにしているが、希望者全員を受け入れることは困難になっている。

経営コースでの取り組み：

経営コース(元経営実務専攻)から専攻科への進学は、平成７年に２年制となってからもきわめて少なかった。経営実務専攻・経営コースともに学生の意識は就職重視であり、富山大学への編入学、あるいは、中央大学や立命館大学への推薦の枠の中で進学志望者は納まる傾向にあり、簿記会計系の能力を向上させたい学生、私費留学生などを中心に専攻科に進学してきている。このことは、(情報コースや英語・中国語コースから地域ビジネス専攻に進学してくる学生が)専攻科に進学してから、新たに、経営や簿記会計系の学習に取り組み、経営学士取得を目指す学生の育成を担当する場合が多くなる。特に、学位授与機構に提出する特別研究を担当して、レポートおよび試験への取り組みを支援することは経営コース出身の学生を対象とするよりもはるかに負担が重いことも

事実である。経営コースはこの面でも貢献してきたが、経営コースの教官に特別研究を志望する学生が多くなり、全体バランスの中で調整を図る必要性もでている。

（吉田俊六）

2.7　研究活動

教員の平素からの研究活動は、教育活動の基本を築く重要な業務の一つである。教員個人の研究活動の主なものは、「高岡短期大学概要・研究者紹介」に詳細に掲載されているが、本学全体の研究活動を見渡すにあたり、次の３つの観点で整理して述べることとする。１）科学研究費補助金、民間等との共同研究、奨学寄付金２）文部科学省在外研究員・内地研究員、文化庁芸術家在外研修員、海外研究開発動向調査、３）高岡短期大学紀要の発行である。

2.7.1　科学研究費補助金および奨学寄付金

2.7.1.1　科学研究費補助金

科学研究費補助金は、人文・社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」（研究者の自由な発想に基づく研究）を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」であり、ピアレビュー（専門分野の近い研究者による学問的意義についての評価）による審査を経て、独創的・先駆的な研究に対する助成を行うもので、過去５年間の本短期大学教員の申請、採択状況は３.資料集の3.4.7に示す。

2.7.1.2　奨学寄付金

この制度は、産業界や個人篤志家など各方面から広く寄附金を受け入れて、大学の学術研究や教育研究の奨励に活用するものである。過去の受け入れ件数、金額等については３.資料集、3.4.8に示す。

2.7.2　民間等との共同研究および受託研究

この研究制度は、産業界等から委託を受けて、委託者が負担する経費を使用して本学の研究者が研究を実施し、成果を委託者へ報告するものである。過去の実施状況は３.資料集、3.4.5に示す。

2.7.3　文部科学省在外研究員･内地研究員、文化庁芸術家在外研修員、海外研究開発動向調査

教員の研究活動は、学内にとどまることなく、広く国内外に研究員、研修員として派遣され、活発になされている。そこでの経験や研究成果は、大学の教育活動や研究活動にとって大きな影響を与えるものと考えられる。派遣地、派遣者、期間等の派遣状況は３.資料集、3.4.6.1に示す。

2.7.4　高岡短期大学紀要の発行

「高岡短期大学紀要」は1990年３月の第一巻発行以来巻を重ね、2005年現在二十巻の発刊をするまでに至っている。一巻より十五巻まで紀要は高岡短期大学の研究を世に問うことを目的に、掲載論文には学内審査を経ることが義務づけられ、大学の研究水準の向上、維持の一端を担ってきた。十六巻より編集方針を転向し、一般論文の持つ役割はそのまま継続しつつ、地域との連携を強めることを目的に、その内容の多様化、平易化を図った。また、巻末に「高岡短期大学における研究・制作活動」として当該年の高岡短期大学教員の研究・制作活動を掲載することとなった。これにより、論文等の文字化される研究成果以外の、作品制作や口頭発表等の研究活動が概観できるようになった。

（高橋誠一）

2.8　学外教育活動、インターンシップ

2.8.1　課外活動

課外活動が学生諸君にとって、自主的に自分らしさを発揮できる大事な舞台となっていることは間違いない。２年間という限られた期間内に、取り組むべき課題や達成すべき目標が目白押しであり、課外活動に配分する時間、参加可能な仲間の数に限りがある。対比する４年制のマンモス大学では部やサークルの活動が中心となり学生生活の時間とエネルギーの多くを投じて卒業していく層が存在する。本学創設の頃の課外活動は５年目の記念誌に示されている段階で少人数ゆえの恵まれた面と制約された面とが既に浮き彫りにされている。体育系と文化系からなり、最近の公認されている課外活動は以下の表の通りである。

はじめに体育系から振り返ってみる。日ごろの活動の成果を問う場面は、対外的な試合、市民大会、県レベルの大会、北陸地区の国立大学の体育大会等がある。独立した国立短期大学である本学にとって、優先順位の高い北陸地区国立大学大会への参加に際し、チームプレイを必要とする種目では部員数が集まらなければエントリーできない。一方、個人として参加できる種目では、高校での経験のある選手がいる時に限り活躍してきた。個人とチームとの組み合わせになる　テニス、バドミントン、弓道など高岡短大としては参加しやすく、活躍の実績を挙げてきている。野球、サッカー、ラグビーなどチームの構成員の数が必要とされ、ある程度の経験者がそろわないと成立しない種目は、男子学生の絶対数が少ない中できわめて困難であった。これらと比べて相対的に人数を揃えやすいバスケット部の例をあげれば、筑波大学大学院を終了したばかりの加藤敏弘先生(現在、茨城大学)が開学当初に就任し、はじめに女子部を創設し、週に複数回数の練習、合宿から遠征まで身体で引っ張って育ててこられた成果は伝説的な存在となっている。一期生・二期生を始め、その後の卒業生達のつながりを生み、折に触れて後輩の世話をしてやろうとする原動力になっている。(縁は異なもの味なもので、加藤先生は現在、バスケット部顧問の筆者：吉田の卒業した都立高校バスケット部の後輩であり、吉田が部長のときに創設し

サークル、部活動一覧

平成17年度学生団体申請一覧					平成17年７月25日現在
系列	名　　称	顧問教員	会員数	設立年月日	備考
文化系 11団体	アート部	安達博文	22名	平成８年11月１日	継続
	茶道部	高橋誠一	5名	昭和62年５月１日	継続
	陶芸部	横田　勝	18名	平成10年４月30日	継続
	軽音部	林　　暁	11名	昭和61年６月26日	継続
	ガラス部(とんぼ玉)	前田一樹	6名	平成14年４月１日	継続
	ラボ部	沖　和宏	17名	平成14年６月１日	継続
	さんざし(和楽器)	森田　力	5名	平成14年６月４日	継続
	てつそん部	長山信一	4名	平成13年４月30日	継続
	劇団ラスタ	渡邉雅志	7名	平成17年５月19日	新規
	Club　－布－	沖　和宏	11名	平成17年５月24日	新規
	絵本部	安達博文	7名	平成17年６月23日	新規
体育系 14団体	弓道部	矢口忠憲	11名	平成11年10月29日	継続
	女子バスケットボール	吉田俊六	11名	昭和61年11月12日	継続
	プール運動部	中村滝雄	6名	平成10年５月８日	継続
	バドミントンサークル	藤田徹也	4名	平鹿13年５月１日	継続
	バレーボール部	矢口忠憲	15名	平成12年４月１日	継続
	ソフトテニスサークル	立浪　勝	3名	平鹿12年５月12日	継続
	フットサル部	三船温尚	15名	平成16年４月29日	継続
	野球部	藤田徹也	4名	平鹿14年７月１日	継続
	よさこい部	澤　聡美	11名	平成14年５月16日	継続
	男子バスケットボール	吉田俊六	6名	平成16年５月１日	継続
	ダンスサークル	澤　聡美	9名	平成16年４月19日	継続
	温泉卓球部“早(ツアオ)”	澤　聡美	6名	平成15年６月17日	継続
	サイクリング部	小川太郎	18名	平成17年５月19日	新規
	キャッチボール部	内藤裕孝	6名	平成17年５月19日	新規

た女子バスケット部がなければ奥様との邂逅はなかった。歳月を経て平成９年に赴任した後、久湊先生から譲り受けて現在に至った。歴代 OB/OG と知遇を得たことに感謝したい。加藤先生の記録を当時の課外活動の代表例として後掲する。）

北陸、特に富山で盛んなバドミントン部も歴史が古く、現在の藤田先生はじめ、顧問の先生方も熱心に取り組んでこられた結果､優秀な部員を輩出している｡バレー部も意気盛んな部員の集まりであり、弓道部も率いる矢口先生の包容力は良き先輩後輩の調和を醸し出している。これらの共通点となるが、スキルを伴う活動についてはコーチや指導者がいて力を注げば活動が活発化し、存続しやすくなることは明らかである。勿論、主体である学生諸君のやる気が鍵となっていることが大前提である。２年間のサイクルは引継ぎや伝承の面で工夫や努力が必要であり、存続させねばとする意識の薄い学年があれば簡単に部は消滅するなど厳しいものがある。過去、20年間は、国内の大学一般に、いわゆる体育会系のハードな体質の部活動は停滞し、同好会やサークルなどの軽い体質の組織が好まれた経緯がある。本学の構成員はどういうわけか女子学生の比率が高く、男子学生が学科を越えて仲間になり課外活動に取り組む例も少なくない。最近の例では、サッカーが好きだが人数が集まりきらないことで､「フットサル」の集まりを結成し、県立大学との交流を進めたりしている例もある。さらに、近年、組織離れがさらに進んできているようである。本学の課外活動も社会一般の趨勢と軌を一にしているように思われる。

周知のように、就職活動の早期化は、短期大学の部活動を存続させるには重いハンデとなった。過去、夏休み前から９月にかけてが就職活動の時期であった。少なくとも４月に新人の勧誘と同時に練習や歓迎会ができていたのであるが、新入生が入部したいと考えていても、２年生は揃って就職活動に動いていて部活動は休止状態となっていたりするのが実態である。専攻科に進学した部員がいる場合は新人の勧誘や最低限の活動を支えているので辛うじて存続することになる。また、本科３学部の授業時間帯の違いにより、実習時間の多い、産業造形や産業デザインの学生が課外活動に取り組める時間帯が19時前後となる場合が多い。バスの運行時間が18時台になくなることも障壁となっている。以前から、公的に曖昧となっていた“創己会”の立場を、手続きを踏みなおして正規の“学生会”として生まれ変わらせ、学生会の運営を円滑に進めるためにも木曜日は全学生が参加できるように４限以降は一切授業を設定しない仕組みをつくった。予備段階で学生生活委員長であった吉田と具現化に努めた現学生生活委員会委員長の立浪教授の尽力でこの体制に建て直し、故蠟山学長が望まれた課外活動の活性化に踏み出せた。課外活動の予算編成や配分等々を学生会の管轄で行えるようになった。もし、木曜日の４限以降の時間帯に課外活動を行うのであれば、学科間の活動時間帯の格差はない。しかし、この機会を外した場合は、地域ビジネス学科の学生にとっては、待ち時間が長くなるために、アルバイトに従事する選択も増加する。時間給と合わせて上手に労働力を取り込むために巧みにやる気を引き出すすべに長けた職場に組み込まれた場合、課外活動に参加すればよいと想定される裁量時間までアルバイトに投入するに至る例も多い。少子化社会で自分中心の感覚を強めたためか学生の気質も変化してきているようである。部活動の世話役を回避し、自己都合を優先して楽しみを享受しようとするお客様感覚の学生も珍しくない。大学を代表して大会に参加しようとする帰属意識は希薄化してきているようである。典型例として、本学の運動部の活動のレベルが低い現実に対して、入部してこれを高めようとする姿勢を取らず、出身高校の卒業生のクラブや地元のクラブチームなど相対的にレベルの高い活動場所への所属を図る例も少なくない。

社会変化の縮図でもある、個人志向、生活の多様化、など様々な要因を反映しての課外活動の状況であるが、同好の志を持つ学生が集まり、顧問を要請し相互の理解の下に活動が営まれる仕組みに変化はない。この２年間、学生諸君にとって気の毒であったのは、富山県内の国立高等教育機関の再編統合の動きに伴い、顧問の先生方にとって課外活動に参加する時間を割愛せざるを得ない事態に至ったのである。この新たな動きに伴う様々な打ち合わせ、会議、資料作成、など授業時間外の時間帯に解決すべき業務が追加されたために、課外活動への時間は物理的に制約された。顧問であり指導者でもある先生方の保有する広い意味の経営資源を活用している課外活動の例として、陶器の釉に含まれる金属成分の特性を測定する装置の有効活用の意味も重ねた､横田先生の｢陶芸部｣、代々、漆工芸の学生が中核的に活動を続けてきている「茶道部」は棗や菓子を盛り付ける器、水差しなどに先輩の漆作品をいつくしんでいる。漆コースの高橋先生を顧問に頂き、地元企業経営者の令夫人(北村様)のご厚意で茶道と作法のお稽古をつけて頂いている。本学で、唯一といって良い音の出せる部､「軽音部」は林先生のもと、お祭りとライブのひきたて役かつ主役として活躍してきた。

しかし、時代の変化に伴い誕生してくる課外活動も多く、ダンス部その他　身体を動かすのが好きな学生達は

複数の課外活動に参加し、重なりの最も多いのが「よさこい部」であり各地の行事に出向いて活躍している。ダンス部を中心としてバスケット部など数多くのクラブの指導を続けられた久湊先生を懐かしむ卒業生も多い。また、地域との連携を重視する姿勢は学科名の変更(産業情報学科から地域ビジネス学科へ)にも示されているが、授業の一環として金屋町の御印祭に参加するようになって新たな課外活動を産みだした。やがえ節の踊りのみならず囃子方の魅力に惹かれて三味線などの指導をいただくようになった「さんざし部」など、課外に加えて学外での活動が特徴となっている。軽さを反映したネーミング、プール部(水泳部とは呼ばない)温泉卓球部(部結成以来、温泉に出かけていないとの反省も)、キャッチボール部(野球部とは一線を画し、キャッチボールのコミュニケーション重視のコンセプトを主張)など、毎年入学してくる学生が自由にやってみたい同好会やサークルを立ち上げ、共鳴する後輩がいなければ、新陳代謝するところが、実は本学のしたたか、あるいは、しなやかな生き様を示していると受けとめられる。

2.8.2　インターンシップ

本学でインターンシップを採用したのは、平成13年からであり、歴史はまだ浅い。

富山県インターンシップ推進協議会(実質的な事務局機能は社団法人富山県経営者協会)が正式にインターンシップ事業を始めたのが平成12年度からとされており、本学の取り組みも富山県内高等教育機関としては決して遅れているわけではない。ちなみに、平成16年度には学生を受け入れる企業数も221社となり、参加した学生数は576名であり、県単位の経営者協会がやりインターンシップ事業の中では全国一の実績とされている。受け入れ企業にとっての負担が重いことや、学生にとって最適の参加時期など課題を抱えながらも、試行錯誤を重ねてきたようである。最近では企業にとっては自社の良い面をアピールする機会として積極的に捉える向きもみられ、大学側においても３年生を中心に据えた短期の体験学習的な位置づけを脱して、低学年から参加させる試み、事前のマナー研修やインターンシップ後のフォローなどの試みもなされてきているようである。企業の数が増えることで学生にとっての関心とマッチさせやすくなってきているのは好ましいことである。

さて、本学のインターンシップの位置づけは、⑴特別講義「インターンシップ」とする。⑵単位の換算は、１週間のコースで１単位、２週間のコースで２単位とする。

平成13年度：２人、平成14年度：９人、平成15年度：３人、平成16年度：３人、累計17人を数えている。受け入れ企業名、学生氏名、専攻(分野)、連絡・指導教員、実施時期・日数　等の詳細について、学生課、インターンシップを担当する二上専門官が３.資料集、3.3.7にまとめている。教員の専門分野との結びつきが強い実態がうかがわれ、神奈川県、埼玉県などの企業でのインターンシップの例もある。また、地域ビジネス学科の学生がインターンシップについて参加していないが産業造形、産業デザインに在籍する学生が演習・実習の時間が多く、社会体験に配分する時間が相対的に少ないこと、技術志向の職場について実態を知っておきたいとする潜在的なニーズがあると考えられるのに対し、地域ビジネス専攻の学生は本科の段階から多様なアルバイトを体験する機会が多いことなども影響している可能性がある。

(吉田俊六)

2.9　大学間友好協定国際交流

2.9.1　中国、大連外国語学院との交流

本学が最初に交流関係を結んだのは大連外国語学院である。大連外国語学院は、1964年創立の大連日本語専門学校がその前身で、現在では中国屈指の外国語大学に成長している。

本学と大連外国語学院との交流については、先ずその経緯を振り返った上で、概況をまとめることにする。

１．経緯

年表(後記の人員構成の表を参照されたい。)

・1996.２.29　本学視察団一行が大連外国語学院を訪問。(表中Ａ欄)一行は大連外国語学院応対者と学生の語学研修等について質疑応答をし、大連外国語学院における研修環境の調査を行った。

・1996.11.19　大連外国語学院と友好交流協定を締結。(Ｂ欄)大連外国語学院にて、「大連外国語学院と高岡短期大学との友好協力関係に関す協定書」・「高岡

短期大学学生の大連外国語院における短期語学研修事業に関する覚書」の調印式が挙行された。

・1997．2．22　第１回短期語学研修を実施。(C 欄)以来、同研修が毎年実施されてきた。

・1997．7．28　徐甲申漢学院院長を招請。(D 欄)徐氏は本学の教職員・中国語コースの学生と懇談した。翌日は、本学の講堂で行われたアジア環境国際フォーラムの「文化と環境［異文化理解］ワークショップ」にて基調講演した。

・1998．4．21　徐甲申漢学院院長が来訪。(E 欄) 2 日間の日程で、本学の教職員・中国語コースの学生と懇談した。

・2002．4．17　孫玉華院長一行が来訪。(F 欄) 2 日間の日程で、学内施設・授業風景を見学し、本学の教職員・中国語コースの学生と懇談した。

・2004．6．15　潘暁春漢学院院長が来訪。(G 欄)留学説明会を開き、学内施設・授業風景を見学し、本学教職員と懇談した。

⑵訪問者・応対者一覧

本　学		大　外
高橋一了副学長／倉橋睦夫会計課長 中国コース教員兼通訳	A	徐甲申漢学院院長＊／宗清泉外事処処長 他(役員・教員兼通訳)
宮本匡章学長／松田幹夫事業課長 中国コース教員兼通訳	B	江榕培院長／徐甲申漢学院院長 他(役員・教員兼通訳)
宮本匡章学長／高橋一了副学長 他の教職員	D	徐甲申漢学院院長
蠟山昌一学長／行田博副学長 他の教職員	E	徐甲申漢学院院長
蠟山昌一学長／水島和夫副学長 他の教職員	F	孫玉華院長／劉川平漢学院院長 蔡全勝日本語学院院長／于晶国際交流処処長
西頭徳三学長／水島和夫副学長 他の教職員	G	潘暁春漢学院院長 雀香蘭日本語学院講師

＊「漢学院」は大連外国語学院の対外中国語教育センター的な部門で、語学研修コースから修士課程まで設けられている。同院長は大連外国語学院副院長を兼ねる。

⑴短期語学研修参加者一覧(C)

回	開始日	研修者数	引率教員	同行職員
1	1997.2.22	17	岡田文之助	村田武事務部長／道林一郎資料調査係長
2	1998.2.21	18	岡田文之助	生永忠敏事務部長／舟見登庶務課長
3	1999.2.20	9	山田眞一	行田博副学長／佐藤健一学生課長
4	2000.2.19	14	磯部祐子	原田健事務部長／田中輝和専門職員
5	2001.2.17	20	岡田文之助	関賢一事業課長／谷口之武男庶務課長
6	2002.2.16	22	王大鵬	小野章事業課長／織田世起教務主任
7	2003.2.22	39	山田眞一／今淵純子	丸本理恵子企画調査主任／山田真帆看護師
8	2004.8.21	26	岡田文之助	島田勝弘人事係長／有沢隆一教務主任

２．概況

⑴教職員の相互訪問

前記にみる学長・副学長の相互訪問は、両大学間の理解・友好関係構築・交流事業発展に決定的役割を果たした。

本学事務部職員は短期語学研修の一部行程に同行し、主に表敬訪問・事務連絡・歓送会挨拶等を通じて、言わば親善大使の役目を果たしてきた。

本学引率教員は、事前に友好交流を保障するための研修規程を周知徹底させた。

滞在中には大連外国語学院側と協力し合って学生の研修生活全般を指導した。また、諸費用の納付・同行職員の紹介・歓送迎会挨拶の手配等をして、本学と大連外国語学院との橋渡しの任にあたった。従って、大連外国語学院の教職員と最も頻繁に、最も幅広く交流ができた。

⑵学生の短期語学研修

平日の午前中は、小人数(10人以下)編成のクラスで大連外国語学院教員による授業を３時間受けた。同授業はコミュニケーション能力の向上に力点を置いているため、それ自体が教員との交流になった。

教員のほか、日常的に学生の交流相手になったのは、大連外国語学院の食堂・売店・受付室の従業員たちであり、その人々は親身になって世話するだけでなく、根気良く話し相手にもなってくれた。また、タイミングがよい時、日本語学部生と互いに母国の言語や文化を教え合ったり、一緒に食事をしたりする交流もできた。参加

した学生の多くは、このような交流を通して相手の友情を実感したと感想を残している。

⑶大連外国語学院の対応

前述の往訪について、Ａの際、始業日の多忙な中、２時間を割いての丁寧な応対を受けた。調印式(B)の時は、心のこもった酒席の接待を受け、更に漢学院院長が市街案内をしつつホテルまで送る待遇を受けた。同行職員が訪れる(C)の際、空港までの出迎えや名所巡りの手配は元より、毎回、漢学院院長が自ら応対する機会を作ってくれた。

語学研修にあたっては、参加人数の多少に拘わらず、大連外国語学院は、本学の学生のみを対象に時間割を組み、経験豊富な教員を配してくれた。その上、引率教員の要望事項(苦情処理・日程の部分的変更・車両の手配など)をできる限り配慮してくれた。修了式・歓送会では、漢学院院長が学生一人一人に修了証書を手渡し、学生たちを感激させた。

また、毎回の語学研修に、世話係を１・２名付け、出迎えから見送りに至るまで、相談・連絡・生活案内・小旅行段取り等をしてくれた。その上、世話係は大連外国語学院日本語学部の卒業生か在学生なので、研修学生の格好の勉強相手・友達にもなってくれた。

大連外国語学院との出会いは、実は1988年５月27日に遡ることができる。その日、大連外国語学院の汪榕培院長・徐甲申漢学院院長・教員数名が本学を初に來訪したのであった。一行は横山保学長主催の昼食会・中国コース学生との交流会に出席し後、雨晴海岸で中国コース教官と懇談した。当時、本学は第１期卒業生を送り出したばかりで、国際交流うんぬんの時期ではなく、大連外国語学院の折角の来訪は惜しくも交流の切っ掛けにはならなかった。

大連外国語学院との友好交流は、短期語学研修だけでも、今年８月に第９回が予定されている。この交流史に徐甲申漢学院院長の名前が最も頻出した。それは、氏が両大学間の友好関係の確立に最も深く関与し、交流の発展に貢献した証に他ならない。このことをここに付記し、小文を結ばせて頂きたい。

（岡田文之助）

2.9.2　フィンランド、ラハティポリテクニクとの交流

本学では、国際化・情報化の急速な進展に伴い、国際的な教育交流の推進や国際社会で活躍できる優れた人材の育成などの社会的要請に応えるため、大学間友好交流協定をフィンランドのラハティポリテクニクと締結した。

ラハティポリテクニクは、デザイン学部を含めた総合的な高等教育機関として優れた実務教育を行っている。特にデザイン学部においては、各専門分野における高い職業意識を持たせるカリキュラムが多く、社会性を持った学生を多く輩出している。また本学は、多様な専門知識と技術を修得するカリキュラムが多く、高い技術を持った学生を多く輩出している。こうした実践教育を行う両校の友好協定は、相互の発展を図るものとして高く評価され、平成10年度からフィンランド・ラハティポリテクニクとの交流協定に基づき、学生の交換留学を相互に毎年実施している。また、相互の学生作品を、相互の大学で紹介する作品展も行っており、より良い友好関係を築いている。

＜ラハティポリテクニクに留学した高岡短期大学生＞

年度	派遣(人)	所　　属	留学中の主な希望研究分野
11	2	専攻科産業造形専攻(金属) 専攻科産業造形専攻(金属)	ゴールドスミス(ジュエリー) プロダクトデザイン
12	2	専攻科産業造形専攻(金属) 専攻科産業造形専攻(木材)	ゴールドスミス(ジュエリー) プロダクトデザイン
13	2	専攻科産業造形専攻(金属) 産業デザイン学科	ゴールドスミス(ジュエリー) プロダクトデザイン
14	3	専攻科産業造形専攻(金属) 専攻科産業造形専攻(木材) 産業デザイン学科	プロダクトデザイン プロダクトデザイン プロダクトデザイン
15	4	専攻科産業造形専攻(金属) 専攻科産業造形専攻(金属) 専攻科産業造形専攻(金属) 産業造形学科(金属)	ゴールドスミス(ジュエリー) ゴールドスミス(ジュエリー) プロダクトデザイン プロダクトデザイン
16	2	専攻科産業造形専攻(金属) 専攻科産業造形専攻(木材)	シルバースミス プロダクトデザイン

＜高岡短期大学に留学していたラハティポリテクニク学生＞

年度	受入（人）	所　　属	留学中の主な希望研究分野
10	2	パッケージデザイン専攻 パッケージデザイン専攻	視覚デザイン、CG、彫金 視覚デザイン、CG、彫金
11	2	デザイン学部 デザイン学部	木材工芸、漆工芸 木材工芸、漆工芸、金属工芸
12	0		
13	1	木工技術指導者	木材工芸
14	3	プロダクトデザイン専攻 プロダクトデザイン専攻 プロダクトデザイン専攻	木材工芸 木材工芸 木材工芸
15（前期）	1	ゴールドスミス専攻	金属工芸、漆工芸
15（後期）	1	パッケージデザイン専攻	パッケージデザイン
16	1	パッケージデザイン専攻	木材工芸

（今淵純子）

2.9.3　アメリカ合衆国、ウェスタンオレゴン大学との友好協定

高岡短期大学は、平成15年３月、アメリカ合衆国オレゴン州の州立大学の一つウェスタンオレゴン大学（Western Oregon University、以下 WOU）との間に大学間友好協定を締結し、15年度から同協定に基づく教育プログラムをスタートさせている。WOU と高岡短期大学間の友好協定は、さまざまな交流を展開できるよう包括的な学術交流協定とし、早期に実現可能な交流プログラムからスタートさせた。

WOU キャンパス正門にて

＜夏季英語研修の実施＞

WOU との交流プログラムのうち夏季英語研修から着手した。本学の学生の中には中学あるいは高校時代に短期語学研修やホームステイプログラムへの参加者も少なくなく、本学入学後さらに充実した海外語学研修の機会を求めることが多いためである。

WOU は外国人向けの短期集中英語教育の実施については長年の経験があり、また留学生受け入れにも、また同大学生の海外留学派遣にも十分な知識と経験の蓄積がある。本学の希望や事情を最大限取り入れた、「オーダーメイド型」プログラムを提供することができる大学である。WOU での英語研修の実施により、本学の教育需要に応えることが可能となった。第１回は15年に、第２回は16年に実施され、17年も第３回目の研修を実施した。

＜夏季英語研修の概要＞

ほぼ４週間にわたる WOU における夏季英語研修は、本学のカリキュラムの一部に組み込まれており、本学の英語の教員が事前研修を含めすべての過程に参画する。研修修了者については、研修期間中の意欲・活動貢献度、終了後のレポート、等により成績評価を行い、卒業要件単位の一部として認定している。またこの夏季英語研修は全学科・専攻の学生に開放されており、本学が目指す融合教育の実践例でもある。

WOU キャンパスでの少人数制の集中的な授業はコミュニケーションスキルに重点をおいたものである。大学の学寮でのキャンパスライフの経験、学外活動、レクリエーション、３回にわたる週末の地元家庭でのホームステイなど、語学教育に加え、異文化体験の機会も豊富に含まれた研修プログラムとなっている。オレゴンの人々、社会、自然も素晴らしく、参加者の満足度は例年極めて高い。

州立公園 Silver Falls への宿泊キャンプ

（小林和子）

2.10　社会貢献

2.10.1　高岡短期大学開放センター

高岡短期大学開放センターは、「地域社会に開かれた大学」、「生涯学習社会に対応した大学」を目指し、地域の多様な要望に積極的に応えることを目的として、昭和61年４月に設置された。全国の国立大学、短期大学において開学時から開放センターが設置されたのは本学のみである。

本センターでは、公開講座、展示公開、共同研究、施設開放などの開放事業を精力的に実施してきた。これまで、本学が大学開放センターの事業を通して地域社会の文化行政に大きな役割を果たしてきたものと自負している。特に近年は、地域との連携も深まり学外での活動が多くなってきている。本センターには、各学科コースから選出された教員によって構成された開放センター運営委員会が設置されており、また事務部を担当する事業課を持ち、運営に関する重要な事項を審議するとともに開放事業の企画立案と事業を実施する体制が整えられている。その他、学外の有識者で組織された開放センター特別委員会がある。年１回開催される特別委員の会合では、開放センター事業について学識者や経済界からの貴重な意見をもとに開放事業の企画に反映させている。

⑴公開講座

公開講座は、年を追って実施数、受講者数が増えてきている。ここ数年は、年間25講座以上が開催され社会貢献の一翼を担っている。しかも、その中には一般市民からの要望による企画もあり、発足当初には見られない状況を見せている。受講瀬の中には、同一講座を何回も受講するリピーターや複数の講座を受講する受講生等、本学の施設を十分活用しているものと考えられる。それでも他方、本学が公開講座を開催していることを知らない市民もあり、さらに広く広報活動が必要であることも痛感させられる。

⑵展示公開

本学は、教育・研究の成果を広く地域社会に展示公開するとともに、伝統産業との交流を深め新製品の開発を目指し、あわせて地域文化の向上発展を目標としている。

展示公開は、これらの目的を達成するため以下にあげるような企画をもとに展示を実施してきた。

○学生作品展

産業造形学科金属工芸コース、漆工芸コース、木材工芸コースおよび産業デザイン学科学生による作品展は、毎年１回以上開催している。学生は、演習・実習で習得した学習の成果を地域住民に発表する絶好の機会となり、一般住民からの貴重な意見をもとに新たな発想をまた作品展示の方法を学習する機会にもなっている。また、学生にとって作品展示は学習成果の発表とともに展示の企画から搬入・搬出の作業計画と実施することから展示方法についての学習の機会のもなっている。現在では、学生のグループによる作品展示や自主制作による作品の発表、クラブ活動における製品や作品の展示等も開催されている。

○卒業・修了制作展

産業造形学科、産業デザイン学科学生の卒業研究・制作および専攻科産業造形専攻、産業デザイン専攻学生による卒業制作展・修了制作展は、それぞれ２年間の学習の集大成として、毎年富山市(富山県民会館美術館)と高岡市(本学)の２カ所で開催している。この卒業制作展・修了制作展は、地域住民の多くの観覧者から貴重な意見が寄せられ、それをもとに学生の創作意欲の高まりを見ることができた。

○退官記念展・教官作品展

退官記念展は、創作活動を行っている教員が定年退官となる年度に開催する作品展である。これまでに平成２年　金属工芸の須賀正佐教授、平成４年　漆工芸後藤義雄教授、平成７年　金属工芸麻生三郎教授、平成14年漆工芸根本子教授、同じく平成14年　木材工芸谷口義人教授が開催した。

その他、退官する教員の作品展や在職教員の作品展が本学エントランスホールにおいて開催され、研究の成果が学生や一般市民に公開され感銘を与えている。

⑶共同研究

地域に開かれた大学を目指す本学にとって重要な課題である共同研究は、全教員の専門分野を掲載する「研究者紹介」発行することによって、県内企業等に幅広く広報活動を行っている。しかしながら、現在は工学系の分野において毎年数件の共同研究があると言う状況である。今後は、工芸系、デザイン系においても積極的に取り組む必要を感じている。

⑷施設開放

本学では、講堂、体育館、グラウンド、テニスコート等の諸施設を市民に開放することも重要な事業である。当センターでは、パンフレットの作成とともに、地域への広報活動により、年々利用率が増加している。特にテニスコートや講堂は、設備充実や規模の点で近隣の市町村にはない施設であり利用する住民が増えている。

⑸公開講演会

本学の公開講演会は、毎年11月頃に開催している。全国でも著名な講師による講演会は、地域住民に大きな感動をあたえ、地域文化の向上に寄与するものとなっている。特に立花隆氏、吉田蓑助氏、坂東三津五郎氏の講演は盛況で感銘を与えられた。

⑹放送公開講座

放送(テレビ)を利用して行われた公開講座は、昭和62年度から10年間実施された。文部省放送教育開発センターでは、大学教育の内容と方法等の研究開発と教育方法の改善および大学開放の促進を図ることを目的に全国の大学の12大学で実施された。

本学では、大学における教育と研究を一般市民に公開できる機会と捉え、地元の北日本放送との連携により、毎年10回の放送と２回のスクーリングを行った。講座の内容は、工芸・デザインのほかビジネス・外国語関係のもの、またIT関連の講座等であり、地域との連携を深める機会となった。

⑺ラハテイポリテクニクとの学生交流展

平成12年６月、フィンランド・ラハテイ市のラハテイポリテクニクの学生作品展が本学で開催され、優れたデザイン力とともに学生と企業のコラボレーションによる製品の展示から、本学が目指している方向性を見ることができ感銘を与えられた。その後、この作品展を契機に相互の学生の交流を進めること、また学生作品の交互開催を実施することとなった。

本学学生の第１回作品展は、産業造形学科、金属工芸コース・漆工芸コース・木材工芸コースおよび産業デザイン学科から各10点、合計40点の作品を展示することになり、平成14年９月25日から10月８日までラハテイポリテクニクで開催された。この展示に先立ちラハテイ市シベリウスホールでの金属工芸の作品ならびに漆工芸の作品の展示も開催された。ラハテイポリテクニクでの本学学生作品に対する反応は、漆工芸の作品や金属工芸の作品のうち特に日本的伝統技法を用いた作品に大きな関心が寄せられた。

2.10.2　地域活動

大学開放センターでは、学内で開催するものとして公開講座、展示公開、施設開放、公開講演会や企業との共同研究等があるが、学外では地域住民とともに活動し、地域の社会環境についての提案や文化活動を支援しいくことも地域貢献活動の一環として捉えている。

本学教員が、地域社会や地方自治体での各種委員会委員としての活動や各地のイベントへの参加による活動は地域文化の向上に寄与するものと考えられる。また、地域や企業からの要請も作品や製品の展示企画やイベントへの参加要請等が年々増加している。これらの要請依頼は、教員個人に直接依頼のあるものや大学開放センターに依頼が来るものなどがある。放送公開講座でのITの活用をもとにした高岡市金屋町との連携の発展、御印祭への参加や「さまのこアート」への学生作品や授業の成果の発表、路面電車をもととするイベントや製品の開発、販売等により地域の諸団体との連携が大きく広がりを見せている。

(宮崎雅司)

2.11　図書館

沿革

昭和61年４月に庶務課図書係が設置され、総務課総務係(昭61年４月庶務課庶務係に改称)で行っていた図書事務を引き継ぎ、第１期生の入学と同時に暫定図書室(現講義棟１階の製図室約200㎡)として開室した。図書館の建設は、昭和61年８月６日に着工され、翌年３月25日に竣工した。建物は、２階建て延べ1,078㎡で、閲覧席数86席となっており、図書収容能力は、４万６千冊であった。竣工後、暫定図書室から蔵書移動を行い、昭和62年４月15日から開館した。

蔵書の整備

開館当時の蔵書数は5,700冊あまりだったが、年次計画による購入と協力会等からの寄贈や各方面の篤志の恵贈も加わり、一般書及び専門書が着実に増加し書架の増設も行い、製本雑誌を合わせると平成16年３月現在の蔵書数は65,000冊に及んでいる。（資料編　参照）

寄贈文庫も「志村文庫」「南塚文庫」「関文庫」に、経済、金融関係を中心とした蠟山前学長の蔵書（蠟山文庫）も加わり学内外から利用されている。

蔵書の検索はカードによる目録を利用してきたが、大学図書館における目録作成や検索の方法は大きく変化して、本学図書館も平成６年から学術情報センター（現国立情報学研究所）が運用する目録システム（NACSIS－CAT）を利用して全国総合目録データベースの構築に参加することにより、図書館システムを導入し図書の目録作成を行うようになった。作成された本学の図書蔵書目録はインターネットを通じて学内外に公開され利用されている。

利用状況

昭和61年４月学生の入学とともに図書館の閲覧業務が始められ、学年進行及び専攻科の設置に伴う学生・職員数の増加や、平成９年４月から午後８時までの時間外開館と土曜日開館を開始したことも相まって図書館の利用者は年々増加した。

また、生涯学習気運の高まりと大学図書館の一般市民等への公開が強く求められるようになり、本学でも地域社会に開放する必要性が生じて、平成８年11月より図書館利用規定を整備し、学外者の図書館利用ができるようになった。平成16年度の学外者利用の人数は1,500名を超えている。

業務のシステム化

コンピュータを利用して図書館業務のシステム化を計ることは図書館の発足当初から検討されていた。平成７年に図書館業務合理化の一環として日本電子計算（JIP）の図書館システム INUS/U が導入され、閲覧業務、目録作成、目録検索業務が稼動した。その後、学術情報センター（現国立情報学研究所）ILL システムサービスに参加し利用者が求める文献複写や相互貸借サービスにも短時間で提供できるようになった。平成15年には新図書館システムを導入して、さらなる迅速化を図っている。平成９年には図書館入館管理システムが導入され、学生証及び閲覧証で入館することができるようになり利用者の利用状況の把握ができるようになった。

また、平成17年１月には自動貸出返却装置を設置し、図書の貸出、返却を利用者自身が行うことで、カウンターでの混雑を緩和して業務の効率化が図られ、図書館本来のレファレンス（参考業務）や利用者指導などの重要なサービスを充実させることができた。

館内設備

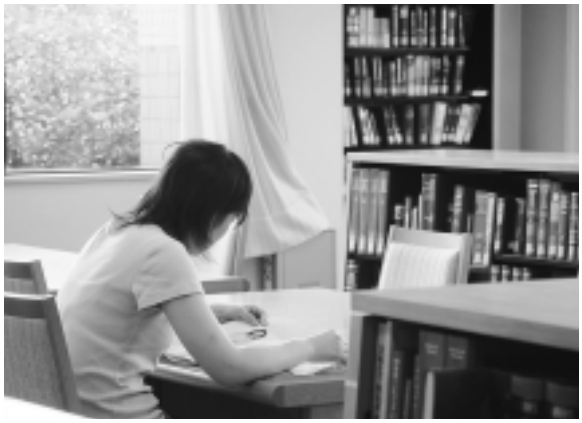
１階は、参考図書（辞書、事典、百科事典、年鑑、便覧、データ集、抄録・索引誌、地図等）及び雑誌を、２階は、一般の単行本、専門単行本及び大型美術工芸書を配架している。

また、施設面においては１階には正面玄関ホールに新聞を閲覧するブラウジングコーナーを設け、北側に雑誌のバックナンバーを収納する閉架書庫を置いている。２階は、視聴覚資料の保管と利用を目的とした情報資料室と少人数で利用できるグループ読書室を設けて、ゼミのグループ学習や授業にも利用されている。また、情報資料室の設備は平成13年３月に一新されて、DVD や MD にも対応できるようになった。これらの資料の目録も完了し、さらに各分野の計画的な購入を進めている。

業務の改善

学習や研究を支援し、資料を保存する図書館として運営されてきたが、今後はさらに電子図書館としてまた地域社会に貢献できる図書館としての機能が要求される。

現在、新大学の図書館サービスが充実したものとなるための話し合いが３大学で進められている。新学部の図書館の名称も「芸術文化図書館」と決まり、蔵書構成についても検討を開始した。



（栗林裕子）

2.12　保健管理センター

１．沿革

昭和61年４月開学当初は、学生課保健室として看護師１名が常駐していた。

平成13年４月より、日常診療・相談だけでなく健康教育も一貫しておこなう施設として、保健管理センターが開所された。所長（併任）１名、医師（内科）１名、看護師（保健師）２名（うち１名は学生課所属）、非常勤カウンセラー１名のスタッフ体制となった。

２．センター内設備

医療機器として、全自動身長体重計、体内脂肪計、視力検査器、オージオメーター、全自動血圧計、視力回復計、VDT 視力計、心電計、超音波診断装置を設置している。リラクゼーション機器として、健康マッサージ器、ボディソニックリフレッシュを配置している。また各種健康関連の書籍・ビデオ等も配置し、自由に閲覧可能である。

表１　保健管理センター年間行事

月	行　　事
4	新入生オリエンテーション／新入生・各学年オリエンテーション／新入生合宿研修／学内定期健康診断
5	定期健康診断事後措置／職員定期健康診断／保健管理センター運営委員会／小セミナー
6	新入生全員面接／特別健康診断（北陸地区国立大学体育大会出場者）／特別健康診断事後措置／第１回栄養セミナー／救急処置講習（木材１年）
7	講義（エイズについて）／全国大学保健管理協会東海北陸地方部会研修会
8	
9	公開講座（H14・H15）
10	全国大学保健管理研究集会／国立大学保健管理施設協議会／保健管理センター運営委員会
11	創記祭（健康・栄養相談、各種測定）／東海北陸地区メンタルヘルス研究協議会／第２回栄養セミナー／全国大学保健管理協会北陸地区保健婦看護班研究会
12	小セミナー
1	厚生補導研究会／講義（生活習慣病について）
2	小セミナー
3	保健管理センター運営委員会／小セミナー

3．業務内容

表１に保健管理センターの年間行事を示す。

１）健康管理の実施についての企画・立案

エイズ・生活習慣病・救急処置等についての講義を行っている。

また、自由参加型セミナーとして、年２～３回栄養セミナーを開催している。身近なテーマを選び、医学的な講義と栄養学的な講義を行い、栄養士が考えた、疾患改善を促すメニューを学生と共に調理実習している。

平成14年度からは、少人数を対象として小セミナーを開催している。ニーズの高い身近なテーマを選び、医学だけでなく、心理学・栄養学・体育学の専門家の協力を得て、健康教育を行っている。

学外者を対象として、平成15年度には、香川大学教育学部　小柳晴生教授をお迎えし、健康セミナーを開催している。「ひきこもる哲学者たちへ～不登校に学ぶ豊かさを生きる知恵～」また、シニア健康スポーツ健康大学・シニア健康スポーツ健康教室として、公開口座も開催している。

表２　栄養セミナー実施報告

講師　本学栄養アドバイザー（管理栄養士）　森本鈴子氏
　　本学健康管理医　宮元芽久美

年度	回	テーマ	疾患テーマ
13	第１回	手軽でおいしい、貧血によい食事	貧血
	第２回	野菜たっぷり、お手軽メニュー健やかな腸のために	便秘
	第３回	コツコツといまのうちから骨太メニュー	骨粗鬆症
14	第１回	コレステロールを減らして体の中からサラサラきれいにしよう	高脂血症
	第２回	体脂肪減量大作戦	体脂肪
15	第１回	コレステロールを減らして体の中からサラサラにしよう	高脂血症
	第２回	便秘解消！体内スッキリ、お肌つるつる	便秘
16	第１回	今度こそ！ダイエット～体脂肪バイバイメニュー～	体脂肪
	第２回	ミネラルたっぷり！～こころも、体も絶好調～	ミネラルと健康障害

表３　小セミナー実施報告

年度	回	テーマ	講　師
14	第１回	正しいストレッチ・筋力トレーニングでシィプアップ	保健管理センター所長　立浪勝教授
	第２回	劇症肝炎[肝移植]の体験-健康の大切さ	世界移植者水泳大会メダリスト太田友恵氏
	第３回	認知療法について	吉田病院院長吉田秀義氏
15	第１回	あなたはアルコールに強い？弱い？	保健管理センター医師宮元芽久美講師
	第２回	自分について知ろう～自己成長エゴグラムを用いて～	本学非常勤カウンセラー坂本美奈子氏
	第３回	マンスリービクスで生理痛なんて怖くない	保健管理センター医師宮元芽久美講師
	第４回	体をほぐして、シェイプアップ！	産業デザイン学科澤聡美助手
	第５回	社会不安障害と軽度うつ病の治療と対応について	吉田病院院長吉田秀義氏
16	第１回	どうしよう・・・。一人暮らしの食生活	本学栄養アドバイザー　森本鈴子氏
	第２回	体験する解剖学Ⅱ～日常生活におけるからだの手入れ～	佐賀大学文化教育学部　原田奈名子教授
	第３回	Let's Challenge！メール＆パッチで、気軽に禁煙にチャレンジしよう	保健管理センター医師宮元芽久美講師
	第４回	からだほぐし・ストレッチ	産業デザイン学科澤聡美助手
	第５回	未定	吉田病院院長吉田秀義氏

2）健康診断の実施及び事後措置

4月には学生定期健康診断を、6月には北陸地区国立大学体育大会出場予定の学生を対象に特別健康診断を実施している。5月の職員健康診断の実施補助も行っている。

3）日常診療業務

傷病者の応急手当及び看護を行っている。また、他の医療機関への紹介等も行っている。

4）健康・精神衛生に関わる相談・指導

新入生に対し医師による全員面接を実施している。定期健康診断結果・健康調査票・エゴグラムの結果等を元に助言・指導を行っている。

健康相談・学生相談に対し、医師･看護師･非常勤カウンセラーが直接来談の他､メール等にても対応している。

5）その他

健康診断書の発行・学生の保険加入及び保険金請求などの事務を行っている。

4．利用状況

利用状況を表4に示す。健康・心理・就業相談は年々増加傾向にあり、これに伴い平成17年度からは、非常勤カウンセラーを1名増員し、カウンセラーの複数化を計った。

表4　保健管理センター利用者実人数

（人）

		日常診療	健康･心理･就業相談
H13年度	学生	246	60
	職員	60	3
H14年度	学生	257	59
	職員	51	10
H15年度	学生	245	67
	職員	50	7
H16年度	学生	263	126
	職員	50	6

5．将来への展望

以前は、保健管理センター（または保健室）は健康診断や、病気になったときに訪れるところといった認識がされていたが、さまざまなストレスにさらされている現代社会においては、肉体だけでなく、こころが病んでいる学生も非常に多い。今後カウンセラーの増員を含めて、メンタルヘルスケアに力を入れていきたい。また、マスメディアでさまざまな健康に関する情報が氾濫している現在、正しい情報を選択して今後の疾病予防につなげることが重要である。セミナー等を通して、さらに健康教育を充実させていく必要がある。

（宮元芽久美）

2.13　その他

2.13.1　草創期の主な出来事

1986.06.28　高岡古城ライオンズクラブより、たぶの木が寄贈される。

11.21　工芸都市高岡‘86クラフト展が開催される。

11.30　高岡青銅会より、モニュメント「すばる」が寄贈される。

1987.03.10　高岡短期大学校友会が設立される。

1988.01.29　高岡短期大学同窓会が設立される。

1990.05.01　「研究交流等のための研究者紹介」が創刊される。

顧みれば、校舎の竣工で高岡短期大学の構想が具現されたのである。やがてこの斬新な校舎に第1期生を迎え入れ、高岡短期大学が教育施設として本格的に機能し始めた。

その後、環境（施設や樹木等）の更なる整備が進む中、高岡短期大学は学生の就職支援態勢を打ちたて、最初の卒業生を社会に送り出した。一方、学生たちは知識や技能の学習に励みつつ、自治会を結成して各種の課外活動を展開し、潤いのある学園生活の先例を作った。第1回卒業式をもって、高岡短期大学は新設大学としてその存在を世に示した。

また、高岡短期大学はこの草創期に、特色ある学科構成（産業工芸学科＋産業情報学科）の教育・研究を進めるだけでなく、公開講座の開設や「研究者紹介」の創刊を通じて、産学交流を図り、地域社会に開かれた新構想大学としてその基礎を固めたのであった。

願わくは、教職員みなが、今一度草創期を振り返り、誇りを持って第20期生を立派に育て上げて、高岡短期大学の歴史的使命を完遂したいものである。

2.13.2　校友会

概況

校友会は、言わば在学生の保護者の会である。

1987年３月10日、本学を軸に、在学生の保護者相互の交流を深めつつ、学生の課外活動・就職活動を積極的に支援することを趣旨として設立された。

以来、全体総会が毎年の初夏、本学の講堂にて開催された。会員の半数に当たる約100名が出席して、新役員の選出・前年度の事業報告・次年度事業計画案の議決を行った。総会終了後、出席者中の希望者が本学主催の学科・コース別進路懇談会に参会し、就職等に関する説明を受け、質疑をした。以降毎年、校友会総会を兼ねて就職に関する説明会、進路談話会を開催している。」

2.13.3　入学式･新入生合宿研修挙行日の変遷

入学式の挙行日は、最初の２回が４月15日、４回目～13回目は４月８日(休日を除く)で、14回目より４月５日(休日を除く)と早くなった。それは、前期の授業を中断せず、７月中に済ませるためであった。

新入生合宿研修は、日常と異なる環境で寝食を共にすることにより、学生と教職員及び学生間相互の理解と親睦を深める目的で、毎年１泊２日の日程で実施された。

同合宿研修の実施場所は国立立山少年自然の家で、第３回のみ国立乗鞍青年の家であった。開始日は、第１・２・３・４回目がそれぞれ入学式の約11ヶ月後・約２ヶ月後・11日後・６日後で、第５回～第14回が入学式の翌々日で、第15回より翌日であった。

(入学式、新入生合宿研修等の実施日については、３．資料集、3.3.12を参照)。

(岡田文之助)

第 3 章
資料集

3.1　高岡短期大学前期の年表

創設から開学まで

昭和39年	５.13　富山大学工学部教授会並びに昭和41年５月６日の富山大学評議会で、富山大学工学部を高岡市から五福地区へ移転することが決議される。
昭和52年度中	富山県及び高岡市が「高岡地域大学設置協議会」を設置し、富山大学工学部の富山市五福地区移転決議に伴う代替施設として、国立の高等教育機関を誘致する方向で検討が進められ、昭和52年12月に「高岡地域大学設置に関する陳情」が文部省に提出される。
昭和53年	１．　富山県及び高岡市が「富山県高等教育整備懇談会」を設置し、代替施設としての国立高等教育機関の具体的内容について検討が進められる。(同懇談会は、昭和54年２月に一応の結論をまとめ、地元としての要望を明らかにする。) ／３.23 「国立高岡産業短期大学設立に関する陳述書(富山県・高岡市)」が文部省に提出される。
昭和54年	１.１　昭和54年度予算案で「短期高等教育機関(高岡)設置調査経費」1,542千円が認められ、文部省において短期大学の設置調査についての具体的な検討が開始される。／４.17 「国立高岡産業短期大学設立に関する陳述書(富山県・高岡市)」が文部省に提出される。短期高等教育機関設置(高岡市)に関する調査研究について」(事務次官裁定)が制定される。／５.12　文部省の第１回「短期高等教育機関設置(高岡市)に関する調査会」において、地元側代表の参加を得て、短期高等教育機関設置(高岡市)の構想について検討が進められ、同年９月19日開催の第５回同調査会で一応の合意に達する。／12.29　昭和55年度予算案で「短期高等教育機関(高岡)創設準備調査会」5,922千円(創設準備調査要員　教授１)が認められる。
昭和55年	１.19　高岡市二上地区自治会は、富山県に対し同地区に小矢部川流域下水道を誘致することを条件付きで了解する。(その条件の一つに、同地区に短期大学を設置するという条項が盛り込まれる。) ／４．３ 「短期高等教育機関(高岡)創設準備調査室設置規則」が制定される。／５.23 「富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備調査室」が設置され、同室長に富山大学長柳田友道が併任発令される。／６．１ 「短期高等教育機関(高岡市)の創設準備調査室の実施について」(事務次官裁定)が制定される。／６.23　文部省の第１回「短期高等教育機関(高岡市)に関する創設準備調査会」において、地元側代表の参加を得て、短期高等教育機関(高岡市)の創設の構想について検討が進められ、昭和55年11月６日の第２回同調査会で伝統的工芸関係分野の教育課程について、昭和56年３月28日の第３回同調査会で実務関係分野の教育課程について了承される。／８.28　富山大学において、短大創設準備のための伝統工芸に関する教育課程等検討協力者会議が開催され、伝統工芸に係る教育課程等の試案がまとめられる。(～８.29)／12.19　富山大学評議会は、全会一致で工学部の五福地区移転と短大設置の促進について全学的協力体制で臨むことを確認し、富山大学長ほかが県副知事に移転統合の協力について要請する。／12.29　昭和56年度予算案で「短期高等教育機関(高岡)創設準備費」6,234千円(創設準備要員　教授)が認められる。
昭和56年	４．１　富山大学に「短期高等教育機関(高岡)創設準備室」が設置され、同室長に富山大学長柳田友道が併任発令される。／４.17 「富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備調査室」及び「富山大学短期高等教育(高岡)創設準備委員会規則」が制定される。／５．　富山県及び高岡市関係者が文部省において、二上地区に短期大学を設置するよう陳情し同地区の状況を説明する。／11.30　文部省大学局技術教育課長　佐藤次郎ほか係官３名が、高岡市二上地区及び富山大学工学部を査察する。(～12.１)／12.18 「短期高等教育機関(高岡市)の創設準備の実施について」(事務次官裁定)が制定される。／12.28　昭和57年度予算案で「短期高等教育機関(高岡)創設準備費」10,800千円(創設準備要員　教授２)が認められる。／12.30　二上地区地権者が富山県に対し、小矢部川流域下水道及び短期大学用地を譲渡することに同意し、この後個別の契約に入る。
昭和57年	２．９　文部省の昭和56年度第１回「短期高等教育機関(高岡市)に関する創設準備会議」が開催される。／３．２　高岡産業短期大学(仮称)の教育課程等に関する会議が開催される。／３．５　第１回「富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備委員会」が開催される。(以後、３回開催される。) ／４．１ 「短期高等教育機関(高岡)等の創設準備等組織要綱」(文部大臣裁定)が制定される。／５．１　富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備室助教授に麻生三郎(最初の専任教員)が発令される。／５．６ 「短期高等教育機関(高岡市)の創設準備の実施について」(事務次官裁定)が制定される。／８．　国立大学統合整備等連絡協議会で、短期高等教育機関(高岡)を高岡市二上地区に設置することが設定される。／８.31　文部省の昭和57年度第１回「短期高等教育機関(高岡市)に関する創設準備会議」で「短期大学(高岡)の基本構想」が了承される。〔３学科６専攻２コース、入学定員225人〕／12.30　昭和58年度予算案で「高岡短期大学(仮称)」が認められる。「短期高等教育機関(高岡)創設準備費(創設要員　教授２、事務官２)」及び「開学経費(学長１、産業工芸学科(金属工芸専攻)　教授１、事務官２)」の26,994千円
昭和58年	２.14　文部省の第２回「短期高等教育機関(高岡市)に関する創設準備会議」で「高岡短期大学(仮称)の基本構想」の一部修正が了承される。〔２学科７専攻２コース、入学定員200人〕／３.31 「国立大学設置法の一部を改正する法律」(昭和58年法律第14号)が公布され、昭和58年10月１日に高岡短期大学を設置し、昭和61年４月から学生を受け入れることが決定される。／４．１ 「高岡短期大学等の創設準備等組織要綱」(文部大臣裁定)が制定される。／富山大学高岡短期大学創設準備室長に富山大学長柳田友道が併任発令される。／文部省内に「富山大学高岡短期大学創設準備室東京連絡所」を設置する。／４．２　第１回「富山大学高岡短期大学創設準備委員会」が開催される。(以後、６回開催される。) ／４.15 「富山大学高岡短期

	大学創設準備委員会規則」及び「富山大学高岡短期大学創設準備室規則」が制定される。／８．１　富山大学高岡短期大学創設準備室長に大阪大学教授　横山　保が併任発令され、富山大学長柳田友道の併任が解除される。／８.31　財団法人高岡短期大学協力会が設立される。

開学から学生受入れまで

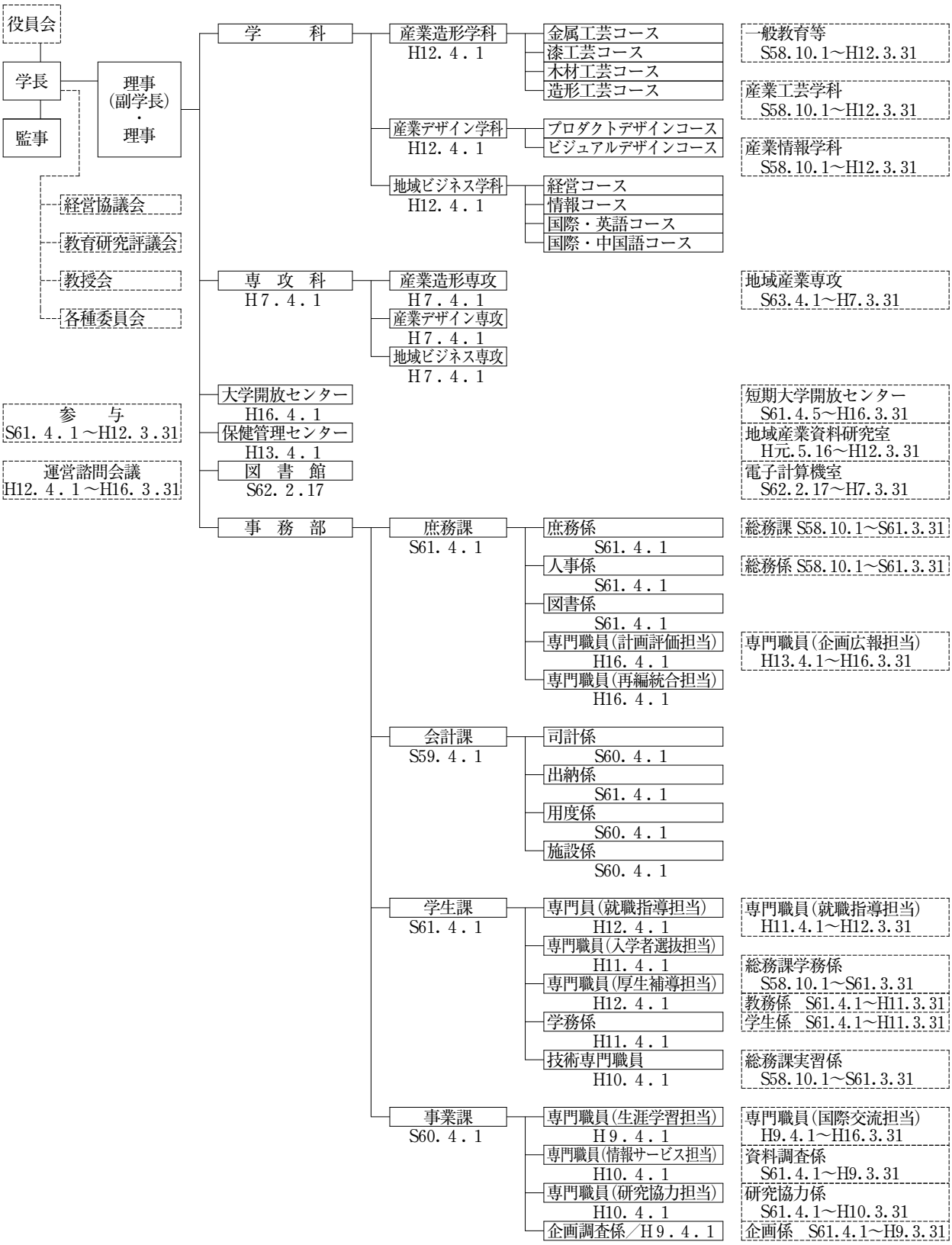
昭和58年10月１日	10．１　高岡短期大学(所在地　富山市五福(富山大学構内)) が開学する。／学長に横山　保(大阪大学教授)が発令される。／10．３　開学祝賀会を東海大学校友会館(霞ヶ関ビル)で開催し、文部大臣をはじめ文部省関係者多数が出席する。／10．６　開学記念祝賀会を高岡商工ビルで富山県、高岡市及び本学が主催し、文部省大学局斉藤審議官をはじめ中沖豊富山県知事、堀健治高岡市長、県選出国会議員等多数が出席する。
昭和59年１月25日	１.25　昭和59年度予算案で副学長１、産業情報学科教授１、事務官２、の整備が認められる。／５．８　高岡市役所において、「高岡短期大学に対する地域社会の要望等に関する懇談会」を開催する。／６.13　高岡市高等教育機関対策特別委員会において、本学の基本構想等を説明する。／７．１　副学長に徳平滋(公立学校共済組合理事)が発令される。／８.27　富山大学において、「高岡短期大学と地域社会との連携に関する懇談会」を開催する。／８．　建物等の基本設計が完成する。／９．７　大学設置審議会大会設置分科会常任委員会で、本学の教育課程、基本構想当が了承される。／12.12　建設地ボーリング工事が実施される。(～60．１.21)／12.29　昭和60年度予算案で産業工芸学科教授２、産業情報学科教授２、一般教育科目等教授１、事務官７、の整備が認められる。
昭和60年	３.20　高岡短期大学を富山大学工学部構内(高岡市中川園町)へ移転する。／４.11　高岡短期大学新営工事安全祈願祭が行われる。／５．７　富山県高等学校長会で本学の概要を説明する。／５.15　高岡市役所において、県下西部地区高校進路指導教諭と「入学者選抜方法等に関する懇談会」を行う。／５.23　富山県教育記念館において、県下東部地区高校進路指導教諭と「入学者選抜方法等に関する懇談会」を行う。／６.27　富山県高等学校長協会と懇談する。／７.18　地元の経済、教育関係者を招いて「開放事業に関する懇談会」を行う。／７.31　文部大臣あてに高岡短期大学設置計画書を提出する。／９.26　大学設置審議会の実地調査が行われる。／12.18　大学設置審議会総会(全体会議)で、高岡短期大学の設置計画が最終答申の中で提出される。／12.28　昭和61年度予算案で産業工芸学科教授５、助教授４、産業情報学科教授５、助教授４、一般教育科目等教授４、開放センター教授１、事務官11の整備が認められる。
昭和61年	１．７　高岡短期大学新営第一期工事(講義・管理棟、研究棟、講義演習棟、実験実習棟、エネルギー棟)が竣工する。／２.23　昭和61年度入学者選抜試験(一般試験)の学力検査を高岡市立志貴野中学校で実施する。(最初の学生受入れに伴う入学試験)／２.24　同試験の実技検査を富山大学工学部構内(高岡市中川園町)で実施する。／２.28 「高岡短期大学学則」を制定する。／３．２　昭和61年度入学者選抜試験合格者を大学建設地の高岡市二上町で発表する。／３．６　後者が竣工したことに伴い、高岡短期大学を高岡市二上町に移転する。／３.31　副学長　徳平　滋が退任する。

学生受入れから平成５年度まで(前期)

昭和61年	４．１　文部省高等教育局長から、高岡短期大学の設置計画について大学設置審議会において特段の意見がなかった旨の通知がある。／４.16　副学長に島田　治(国立科学博物館次長)が発令される。／５.31　開学記念式典・祝賀会を開催する。／６.28　高岡古城ライオンズクラブから「たぶの木」の寄贈を受ける。／11.30　高岡青銅会から、モニュメント「すばる」の寄贈を受ける。／12.30　昭和62年度予算案で産業工芸学科教授４、助教授４、助手４、産業情報学科教授２、助教授４、助手４、一般教育科目等助手１、事務官10の整備が認められる。
昭和62年	３.10　高岡短期大学校友会が設立される。／６．４　大学設置審議会の実地調査が行われる。／12.28　昭和63年度予算案で事務官９の整備が認められる。
昭和63年	１.18　学科主任の名称を学科長に改める。／２.16　校章を決定する。／３.18　校旗を作成し、その掲揚式を行う。／３.19　昭和62年度卒業証書授与式(第１回)を挙行する。／６.17　施設完工式を挙行する。
平成１年	３.20　昭和63年度卒業証書授与式並びに専攻科地域産業専攻修了証書授与式(第１回)を挙行する。／４．１　学科長会議の名称を総務会に変更する。／11．１　副学長　島田　治が退任する。／12．１　副学長に戸田成一(広島大学事務局長)が発令される。
平成２年	３．１　産業情報学科情報処理専攻を対象に、文部省短期大学視学委員に実地調査が実施される。／３.20　平成元年度卒業証書授与式並びに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙行する。／５．１ 「研究交流等のための研究者紹介」(創刊)を発行する。
平成３年	３.20　平成２年度卒業証書授与式並びに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙行する。／12.17　初の学長選挙を施行し、次期学長に大阪大学教授宮本匡章を選出する。／12.18　㈶高岡短期大学協力会が寄贈の本学名誉教授須賀正佐制作のモニュメント「玄黄」が完成し、その除幕式を挙行する。
平成４年	３.19　平成３年度卒業証書授与式並びに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙行する。／３.31　学長　横山　保が任期満了により退任する。／４．１　学長に宮本匡章(大阪大学教授)が発令される。(第２代学長)／４.29　前学長　横山　保氏が勲二等瑞宝章を受章する。
平成５年	１.28 「高岡短期大学における自己点検・評価のあり方(最終まとめ)」をまとめる。／３.19　平成４年度卒業証書授与式並びに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙行する。／３.31　副学長戸田成一が退任する。／４．１　副学長に大谷利治(岡山大学事務局長)が発令される。／８．３　前学長　横山　保氏から横山賞創設の寄附金が贈呈される。

3.2　庶務課

3.2.1　組織・機構



3.2.2　委員会

3.2.2.1　委員会等の名称及び設置年月日

委員会等の名称	設置年月日
役員会	H16.4.1
経営協議会	H16.4.1
教育研究評議会	H16.4.1
教授会	S61.4.1
計画評価委員会	H16.4.1
情報・広報委員会	H16.4.1
学科会議	H12.4.1
安全衛生委員会	H16.4.1
学長選考会議	H16.4.1
教務委員会	S61.9.16
入学試験委員会	S60.4.1
進路委員会	H14.4.1
学生生活委員会	S61.4.1
大学開放センター運営委員会	H16.4.1
保健管理センター運営委員会	H13.4.1
芸術文化学部設置準備委員会	H15.6.5
記念誌編纂委員会	H15.9.11

3.2.2.2　主な旧委員会等の名称及び廃止年月日

委員会等の名称	設置年月日	廃止年月日
運営委員会	S58.10.1	S61.4.1
運営委員会管理運営専門委員会	S58.10.1	S61.4.1
運営委員会教育課程専門委員会	S58.10.1	S61.4.1
運営委員会施設・設備専門委員会	S58.10.1	S61.4.1
運営委員会人事専門委員会	S58.10.1	S61.4.1
運営会議	H12.4.1	H16.3.31
運営諮問会議	H12.4.1	H16.3.31
紀要編集委員会	H1.4.1	H12.3.31
広報委員会	H6.4.1	H12.3.31
参与会	S61.4.1	H12.3.31
自己評価委員会	H4.5.14	H12.3.31
事務情報化委員会	H12.3.1	H17.9.30
事務電算化委員会	S61.12.12	H12.3.1
事務電算化委員会専門部会	S61.12.12	H12.3.1
就職委員会	S62.2.17	H14.3.31
情報委員会	H12.4.1	H16.3.31
情報ネットワーク委員会	H9.4.1	H12.3.31
将来構想検討委員会	S63.9.20	H12.3.31
専攻科運営委員会	H7.4.1	H12.3.31
専攻科地域産業専攻運営委員会	S63.4.1	H7.3.9
総務会	H1.4.1	H12.3.31
短期大学開放センター運営委員会	S61.4.5	H16.3.31
短期大学研究会	S62.9.24	H12.3.31
地域産業資料研究室	H1.5.16	H12.3.31
地域産業専攻科運営準備委員会	S63.1.14	S61.3.31
電子計算機室運営委員会	S62.4.1	H7.3.9
図書館委員会	S62.4.1	H12.3.31
入学者選抜方法改善研究会	S62.9.25	H12.3.31
施設設備委員会	H6.4.1	H9.3.31

3.2.3　歴代役職員および教職員(平成17年１月１日現在)

3.2.3.1　歴代役職員

学長

初代 横山　保	58.10.1～4.3.31(58.8.1～58.9.30 創設準備室長)	(代) 水島和夫	15．5．26～15．6．19
２代目 宮本匡章	４．４．１～10．３．31		
３代目 蠟山昌一	10．４．１～15．６．19 (H15．６．19～H15.10.31は水島副学長が学長事務取扱い	４代目 西頭徳三	15.11．１～17．９．30

※平成16年４月から「高岡短期大学」は「国立大学法人高岡短期大学」となる。

西頭徳三　16．４．１～

副学長

初代 徳平　滋	59．７．１～61．３．31	５代目 高橋一之	７．５．１～９．12.31
２代目 島田　治	61．４．16～元.11．１	６代目 行田　博	10．１．１～13．３．31
３代目 戸田成一	元.12．１～５．３．31	７代目 水島和夫	13．４．１～16．３．31 16．４．１～17．９．30
４代目 大谷利治	５．４．１～７．４．30	滝沢　浩	16．４．１～17．９．30

※平成16年４月から「高岡短期大学」は「国立大学法人高岡短期大学」となり、「副学長」は「理事・副学長」となる。

理事・副学長

水島和夫　16．４．１～（総務担当）　　滝沢　浩　16．４．１～（財務担当）

名誉教授　　【退職・退任時の役職又は所属】

島田　治	２．１．16	副学長	高橋一之	10．１．１	副学長
須賀正佐	３．４．16	産業工芸学科金属工芸専攻	宮本匡章	10．４．１	学長
中川　宏	３．４．16	産業工芸学科木材工芸専攻	小関利紀也	10．４．１	産業工芸学科産業デザイン
横山　保	４．５．14	学長	林　暢夫	12．４．１	産業情報学科ビジネス外語
城村良一	４．５．14	一般教育科目	行田　博	13．４．１	副学長
阿部　統	４．５．14	一般教育科目	黒岩靖司	13．４．１	産業デザイン学科
後藤義雄	４．５．14	産業工芸学科漆工芸専攻	木村幸信	13．４．１	地域ビジネス学科
澤本正巳	４．５．14	産業情報学科経営実務専攻	倉田久敬	14．４．１	産業造形学科
戸田成一	５．５．13	副学長	中野清治	14．４．１	地域ビジネス学科
麻生三郎	７．５．11	産業工芸学科金属工芸専攻	蜷川　彰	15．４．１	産業造形学科
大谷利治	７．５．11	副学長	谷口義人	16．４．１	産業造形学科
尾崎秀男	８．４．１	一般教育科目等保健体育科目	根本曠子	16．４．１	産業造形学科
石井榮一	８．４．１	産業情報学科経営実務専攻	林　哲三	16．４．１	産業造形学科
久保脩治	９．４．１	一般教育科目			

学長補佐

野瀬正照	15.4.1~16.3.31、16.4.1~	(富山県内３大学再編・統合担当)	小堀孝之	16.10.1～(教育 GP 担当)
秦　正德	15.4.1~16.3.31、16.4.1~	(富山県内３大学再編・統合担当)	前田一樹	16.10.1～(新学部広報担当)
佐藤孝紀	15.4.1~16.3.31、16.4.1~	(北陸地区国立大学連合協議会等担当)		

教育研究評議会委員

堀江秀夫	16．4．1～	林　曉	16．4．1～
森田　力	16．4．1～	前田一樹	16．4．1～
近藤　潔	16．4．1～	吉田俊六	16．4．1～
佐藤孝紀	16．4．1～	磯部祐子	16．4．1～
立浪　勝	16．4．1～	宮崎雅司	16．4．1～
野瀬正照	16．4．1～	三船温尚	16.11．1～
秦　正德	16．4．1～	安達博文	16.11．1～
小堀孝之	16．4．1～		

経営協議会委員

		【就任時の役職】			
大永尚武	16．4．1～	富山県副知事	木村光佑	16．4．1～	前京都工芸繊維大学長
佐藤孝志	16．4．1～16．5．24	高岡市長	末坂幸子	16．4．1～	高岡市デザイン・工芸センター所長
南　義弘	16．4．1～	高岡商工会議所会頭	橘　慶一郎	16．7．1～	高岡市長
楠　顕秀	16．4．1～	高岡市生涯学習センター所長			

学長選考会議委員

水島和夫	16．4．1～	大永尚武	16．4．1～
堀江秀夫	16．4．1～	佐藤孝志	16．4．1～16．5．24
森田　力	16．4．1～	南　義弘	16．4．1～
近藤　潔	16．4．1～	楠　顕秀	16．4．1～
佐藤孝紀	16．4．1～	木村光佑	16．4．1～
野瀬正照	16．4．1～	末坂幸子	16．4．1～
秦　正德	16．4．1～	橘　慶一郎	16．7．1～

参与

		【就任時の役職】			
大井信一	61．9．1～4．10.31	富山大学長	川上哲郎	2．2．1～10.10.31	関西経済連合会副会長
中沖　豊	61．9．1～12．3．31	富山県知事	佐藤孝志	2．2．1～12．3．31	高岡市長
原谷敬吾	61．9．1～10.10.31	北陸経済連合会会長	島田　治	2．2．1～4．1．31	国立劇場理事
堀　健治	61．9．1～63．8．31	高岡市長	小黒千足	4．11．1～10.10.31	富山大学長
竹平政太郎	61．9．1～2．8．31	高岡商工会議所会頭	南　義弘	4．11．1～12．3．31	高岡商工会議所会頭
大西正文	10.11．1～12．3．31	大阪ガス(株)相談役	時澤　貢	10.11．1～12．3．31	富山大学長
山田圭蔵	10.11．1～12．3．31	北陸電力(株)会長			

※国立学校設置法施行規則の一部を改正する省令により、平成12年３月31日をもって廃止となる。

運営諮問会議委員　　【就任時の役職】

飯田宗映	12.4.1～16.3.31	富山県民生涯カレッジ学長	大永尚武	12.4.1～16.3.31	富山県副知事
大西正文	12.4.1～16.3.31	大阪ガス(株)相談役	時澤　貢	12.4.1～14.3.31	富山大学長
佐藤孝志	12.4.1～16.3.31	高岡市長	小松嘸一	14.4.1～16.3.31	金沢卯辰山工芸工房館長
中川敏之	12.4.1～16.3.31	富山ガラス造形研究所所長	末坂幸子	12.4.1～16.3.31	高岡市デザイン・工芸センター所長、現　高岡市民文化振興事業団美術館副館長
中田善廣	12.4.1～14.3.31	富山県高等学校長協会会長	南　義弘	12.4.1～16.3.31	高岡商工会議所会頭
吉川　實	14.4.1～16.3.31	富山県高等学校長協会副会長			

※国立大学法人法等の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律の施行に伴う国立学校設置法の廃止により、平成16年3月31日をもって廃止となる。

3.2.3.2　歴代教員

一般教育科目

教授	城村良一	61.7.1～4.3.31	助教授	秦　正徳	10.1.1～11.3.31
教授	阿部　統	62.4.1～4.3.31	助教授	安達博文	6.3.1～12.3.31
教授	久保脩治	3.4.1～9.3.31	助教授	野瀬正照	6.4.1～12.3.31
教授	秦　正徳	11.4.1～12.3.31	講　師	伊東多佳子	9.3.1～12.3.31

外国語科目

教授	林　暢夫	61.4.1～3.3.31	講師	入江識元	8.10.1～9.3.31
助教授	小林和子	9.4.1～12.3.31	助手	入江識元	6.11.1～8.9.30

保健体育科目

教授	尾崎秀男	61.4.1～8.3.31	助手	加藤敏弘	61.4.1～2.3.31
助教授	立浪　勝	8.4.1～12.3.31	助手	久湊(内田)尚子	2.5.1～12.3.31

産業工芸学科

学科長	中川　宏	61.4.1～3.3.31	蜷川　彰	3.4.1～12.3.31

金属工芸専攻

教授	麻生三郎	60.4.1～7.3.31	助教授	三船温尚	3.4.1～12.3.31
教授	須賀正佐	61.4.1～3.3.31	助教授	石井克巳	4.12.1～12.3.31
教授	横田　勝	元.11.1～12.3.31	助教授	小堀孝之	7.4.1～11.3.31
教授	中村滝雄	11.4.1～12.3.31	講師	三船温尚	60.4.1～3.3.31
教授	小堀孝之	11.4.1～12.3.31	講師	石井克巳	62.4.1～4.11.30
助教授	麻生三郎	58.10.1～60.3.31	講師	清水克朗	7.8.1～12.3.31
(短期高等教育機関(高岡)創設準備室　57.5.1～58.3.31)			講師	伊東多佳子	9.3.1～12.3.31
(高岡短期大学創設準備室　58.4.1～58.9.30)			助手	清水克朗	3.4.1～7.7.31
助教授	中村滝雄	62.4.1～11.3.31	助手	今淵純子	10.4.1～12.3.31

漆工芸専攻

教授	後藤義雄	61.4.1～4.3.31	助教授	高橋誠一	9.8.1～12.3.31
教授	蜷川　彰	62.4.1～12.3.31	講師	高橋誠一	4.4.1～9.7.31
教授	宮崎雅司	3.4.1～6.2.28	講師	齊藤晴之	6.4.1～12.3.31
教授	横山幸文	4.4.1～12.3.31	助手	江尻良子	3.5.1～4.3.31
教授	根本曠子	9.4.1～12.3.31	助手	永田幸子	4.4.1～5.3.31
助教授	辻　賢三	61.4.1～7.3.31	助手	四日利香	5.4.1～6.3.31
助教授	宮崎雅司	61.4.1～3.3.31	助手	山内しのぶ	6.4.1～7.3.31
助教授	横山幸文	62.4.1～4.3.31	助手	猿倉薫子	7.4.1～10.3.31
助教授	林　　暁	7.4.1～12.3.31	助手	内多(岩峯)早織	10.4.1～12.3.31

木材工芸専攻

教授	中川　宏	60.4.1～3.3.31	助教授	丸谷芳正	11.4.1～12.3.31
教授	谷口義人	61.4.1～12.3.31	講師	小松研治	61.4.1～5.5.31
教授	倉田久敬	3.9.1～12.3.31	講師	秦　正徳	63.4.1～2.3.31
教授	林　哲三	9.3.1～12.3.31	助手	安井美樹	62.4.1～3.3.31
助教授	林　哲三	62.4.1～9.2.28	助手	秦　正徳	62.5.16～63.3.31
助教授	秦　正徳	2.4.1～9.12.31	助手	内藤裕孝	7.4.1～12.3.31
助教授	小松研治	5.6.1～12.3.31			

産業デザイン専攻

教授	黒岩靖司	59.4.1～12.3.31	助教授	武山良三	9.4.1～12.3.31
教授	小関利紀也	61.4.1～10.3.31	講師	安達博文	61.4.1～3.3.31
教授	南塚　豊	3.4.1～6.1.23	講師	矢口忠憲	2.4.1～12.3.31
教授	森田　力	6.7.16～12.3.31	講師	沖　和宏	10.4.1～12.3.31
助教授	南塚　豊	62.4.1～3.3.31	助手	矢口忠憲	63.5.28～2.3.31
助教授	安達博文	3.4.1～6.2.28	助手	沖　和宏	4.4.1～10.3.31
助教授	長山信一	7.1.1～12.3.31			

産業情報学科

学科長	澤本正巳	61.4.1～元.3.31	木村幸信	3.4.1～6.3.31
	石井榮一	元.4.1～3.3.31	佐藤孝紀	6.4.1～12.3.31

経営実務専攻

教授	澤本正巳	60.4.1～4.3.31	助教授	小郷直言	62.4.1～5.3.31
教授	中村　茂	61.4.1～62.9.16	助教授	田中晴人	6.3.1～12.3.31
教授	久保脩治	63.4.1～3.3.31	講師	田中晴人	4.4.1～6.2.28
教授	石井榮一	3.4.1～8.3.31	講師	市川直樹	4.4.1～8.3.31
教授	滝沢　浩	5.9.1～12.3.31	講師	上東正和	9.4.1～12.3.31
教授	鶴田彦夫	6.9.1～12.3.31	助手	室谷三千世	62.4.1～63.3.31
教授	木村幸信	7.4.1～12.3.31	助手	冨成　幽	63.4.1～2.4.5
教授	吉田俊六	9.9.1～12.3.31	助手	田中晴人	3.1.1～4.3.31
助教授	金井繁雅	61.4.1～2.3.31	助手	市川直樹	3.10.1～4.3.31

情報処理専攻

教授	木村幸信	60.4.1～7.3.31	講師	小松(浅井)裕子	2.4.1～12.3.31
教授	佐藤孝紀	61.4.1～12.3.31	講師	藤田徹也	8.3.1～12.3.31

教授	久保欣五	4．4．1～12．3．31	助手	浅井裕子	63.10．1～2．3．31
教授	近藤　潔	11．4．1～12．3．31	助手	大江礼子	4．1．1～7．3．31
助教授	久保欣五	61．4．1～4．3．31	助手	藤田徹也	7．6．1～8．2．29
助教授	平田道憲	61．4．1～4．3．31	助手	米川　覚	7．10．1～12．3．31
助教授	近藤　潔	7．3．1～11．3．31			

ビジネス外語専攻（英米コース）

教授	石井榮一	60．4．1～3．3．31	助教授	小林和子	3．4．1～9．3．31
教授	林　暢夫	3．4．1～12．3．31	講師	小林和子	63．4．1～3．3．31
教授	中野清治	5．3．1～12．3．31	講師	入江識元	9．4．1～12．3．31
教授	村上恭子	11．4．1～12．3．31	助手	小林和子	62．8．1～63．3．31
助教授	中野清治	61．4．1～5．2．28	助手	仲谷祥子	7．4．1～10．3．31
助教授	村上恭子	61．4．1～11．3．31	助手	齊藤（北村）歌子	10．4．．1～12．3．31

ビジネス外語専攻（中国コース）

教授	中野謙二	61.10．1～元．3．31	講師	磯部祐子	61．4．1～3．3．31
教授	関　憲三郎	元．8．1～6．3．31	講師	岡田文之助	62．4．1～2．3．31
教授	岡田文之助	11．4．1～12．3．31	講師	山田眞一	63．4．1～4．11.30
助教授	岡田文之助	2．4．1～11．3．31	講師	田中比呂志	7．10．1～10．9．30
助教授	磯部祐子	3．4．1～12．3．31	講師	諸星清佳	10.11．1～12．3．31
助教授	山田眞一	4．12．1～12．3．31	助手	金田（濱元）聡美	2．7．1～3．12.31
講師	伊原大策	61．4．1～62．9．30	助手	田中比呂志	6．4．1～7．9．30

※　学科再編改組により、平成12年度から産業工芸学科、産業情報学科、一般教育科目等は産業造形学科、産業デザイン学科、地域ビジネス学科の３学科体制となる。

産業造形学科

学科長	横田　勝	12．4．1～14．3．31		堀江秀夫	16．4．1～
	小堀孝之	14．4．1～16．3．31			

教授	倉田久敬	12．4．1～14．3．31	助教授	林　　曉	12．4．1～15．1．31
教授	蜷川　彰	12．4．1～15．3．31	助教授	小松研治	12．4．1～15．1．31
教授	根本曠子	12．4．1～16．3．31	助教授	三船温尚	12．4．1～15．1．31
教授	谷口義人	12．4．1～16．3．31	助教授	高橋誠一	12．4．1～
教授	横田　勝	12．4．1～	助教授	齊藤晴之	12.11．1～
教授	横山幸文	12．4．1～14.11.11	助教授	村田　聡	16．2．1～
教授	林　哲三	12．4．1～16．3．31	助教授	伊東多佳子	16．4．1～
教授	小堀孝之	12．4．1～	助教授	清水克朗	16．4．1～
教授	中村滝雄	12．4．1～	講師	齊藤晴之	12．4．1～12.10.31
教授	野瀬正照	13．4．1～	講師	伊東多佳子	12．4．1～16．3．31
教授	堀江秀夫	14．4．1～	講師	清水克朗	12．4．1～16．3．31
教授	林　　曉	15．2．1～	講師	鳥田稔弘	16．4．1～
教授	小松研治	15．2．1～	講師	河原雅典	16．4．1～
教授	三船温尚	15．2．1～	講師	渡邉雅志	16．4．1～
教授	丸谷芳正	16．4．1～	助手	内藤裕孝	12．4．1～
教授	貴志雅樹	16．4．1～	助手	今淵純子	12．4．1～
教授	竹村　譲	16．4．1～	助手	内多（岩峰）早織	12．4．1～13．3．31

助教授	丸谷芳正	12．4．1～16．3．31	助手	橋本千毅	13．8．1～
助教授	野瀬正照	12．4．1～13．3．31	助手	小川太郎	16．4．1～
助教授	石井克巳	12．4．1～14．7．9			

産業デザイン学科

学科長	森田　力	12．4．1～16．3．31、16．4．1～

教授	黒岩靖司	12．4．1～13．3．31	助教授	武山良三	12．4．1～15．1．31
教授	森田　力	12．4．1～	助教授	矢口忠憲	13．4．1～
教授	秦　正徳	12．4．1～	講師	矢口忠憲	12．4．1～13．3．31
教授	安達博文	12．4．1～	講師	沖　和宏	12．4．1～
教授	立浪　勝	12.12．1～	助手	久湊(内田)尚子	12．4．1～15．3．31
教授	前田一樹	13.10．1～	助手	玉井泰子	13．4．1～
教授	武山良三	15．2．1～	助手	澤(飯國)聡美	15．4．1～
教授	長山信一	16．4．1～			
助教授	長山信一	12．4．1～16．3．31			
助教授	立浪　勝	12．4．1～12.11.30			

地域ビジネス学科

学科長	佐藤孝紀	12．4．1～14．3．31
学科長	近藤　潔	14．4.11～16．3．31、16．4．1～

教授	中野清治	12．4．1～14．3．31	助教授	山田眞一	12．4．1～14．3．31
教授	木村幸信	12．4．1～13．3．31	助教授	磯部祐子	12．4．1～13．3．31
教授	滝沢　浩	12．4．1～16．3．31	助教授	C.R.コビー	12．4．1～
教授	佐藤孝紀	12．4．1～	助教授	小柳津英知	13．4．1～
教授	岡田文之助	12．4．1～	助教授	呉　在フォン	13．9.17～16．3．31
教授	久保欣五	12．4．1～	助教授	王　大鵬	14．4．1～
教授	吉田俊六	12．4．1～	助教授	藤田徹也	14．7．1～
教授	村上恭子	12．4．1～	助教授	入江識元	14．7．1～16．3．31
教授	近藤　潔	12．4．1～	助教授	高松朋史	16．4．1～
教授	小林和子	13．4．1～	講師	上東正和	12．4．1～
教授	磯部祐子	13．4．1～	講師	藤田徹也	12．4．1～14．6．30
教授	越野啓一	13．4．1～	講師	入江識元	12．4．1～14．6．30
教授	渡邉康洋	14．4．1～	講師	王　大鵬	12.11．1～14．3．31
教授	山田眞一	14．4．1～	講師	米川　覚	16．4．1～
助教授	小林和子	12．4．1～13．3．31	講師	深谷公宣	16．4．1～
助教授	田中晴人	12．4．1～13．3．31	助手	米川　覚	12．4．1～16．3．31
助教授	小松(浅井)裕子	12．4．1～			

外国人教師	C.R.コビー	5．10．1～12．3．31	C.J.ロペズ	12．4．1～16．9．30

大学開放センター(旧短期大学開放センター)

センター長	島田　治	61．4．16～元.11．1	センター教授　坂川幸雄	61．9．1～5．8．20
	戸田成一	元.12．1～5．3．31	センター教授　宮崎雅司	6．3．1～
	大谷利治	5．4．1～7．4．30	センター助手　大場範明	63．4．1～3．3．31
	高橋一之	7．5．1～9．12.31	センター助手　藤田徹也	3．4．1～7．5．31

行田　博　　10．1．1～13．3．31
水島和夫　　13．4．1～16．3．31

※　平成16年４月から「短期大学開放センター」は「大学開放センター」となる
荒井公夫　　(非常勤理事)16．4．1～

保健管理センター

センター所長　立浪　勝　　13．4．1～16．3．31
16．4．1～

センター講師　宮元芽久美　　13．4．1～

図書館長

石井榮一	62．2．17～元．2．16	小関利紀也	8．4．1～9．3．31
須賀正佐	元．4．1～3．3．31	倉田久敬	9．4．1～12．3．31
澤本正巳	3．4．1～4．3．31	滝沢　浩	12．4．1～14．3．31
石井榮一	4．4．1～8．3．31	佐藤孝紀	14．4．1～16．3．31、16．4．1～

地域産業資料研究室長

後藤義雄	元．6．1～4．3．31	横山幸文	7．4．1～11．3．31
麻生三郎	4．4．1～7．3．31	林　哲三	11．4．1～12．3．31

電子計算機室長

木村幸信	62．2．17～元．2．16	佐藤孝紀	5．4．1～6．3．31
木村幸信	元．4．1～5．3．31	久保欣五	6．4．1～7．3．9

3.2.3.3　歴代事務職員

事務部

事務部長

江田晴夫	58.10.1～61.5.31(58.4.1～58.9.30創設準備室総主幹)	村田　武	7.12.1～9.3.31
川崎　晃	61.6.1～63.3.31	生永忠敏	9.4.1～11.3.31
宮崎治彦	63.4.1～3.3.31	原田　建	11.4.1～13.9.30
山崎繁行	3.4.1～5.6.30	古屋　勇	13.10.1～16.3.31
木野光郎	5.7.1～7.11.30	籾山登志雄	16.4.1～

庶務課長(～61.3.31総務課長)

小林　武	58.10.1～60.3.31(58.4.1～58.9.30創設準備室総務主幹)	平山健一	3.12.1～6.3.31
與那原　進	60.4.1～61.3.31、61.4.1～63.3.31	住澤　久	6.4.1～8.3.31
白石明教	63.4.1～元.3.31	舟見　登	8.4.1～11.3.31
宇佐美政弘	元.4.1～3.11.30	谷口之武男	11.4.1～14.3.31
		深津一也	14.4.1～

庶務係長(～61.3.31総務課総務係長)

雁田　彰	59.4.1～60.3.31	宮尾幸一	10.4.1～13.3.31
本吉友治	60.4.1～61.3.31、61.4.1～5.11.31	田中輝和	13.4.1～16.9.30
門前剛二	5.12.1～10.3.31	長崎　悟	16.10.1～

人事係長(～61．3.31総務課人事係長)

雁田　彰　60．4．1～61．3.31、61．4．1～62．3.31
伊野不二夫　62．4．1～2．3.31
酒井利満　2．4．1～5．3.31
石坂淳子　5．4．1～9．3.31
道林一郎　9．4．1～11．9.30
島田勝弘　11.10．1～

図書係長

上龍敏章　61．4．1～元．3.31
四津忠一　元．4．1～11．3.31
畠山美苗　11．4．1～14．3.31
栗林裕子　14．4．1～

専門職員(企画広報担当)

小路　隆　13．4．1～16．3.31

専門職員(計画評価担当)

小路　隆　16．4．1～

専門職員(再編統合担当)

長崎　悟　16．4．1～16．9.30
武田正夫　16.10．1～

会計課長

吉田勝行　59．4．1～62．3.31
中林邦夫　62．4．1～元．3.31
佐藤　隆　元．4．1～3．3.31
柳橋恒久　3．4．1～5．3.31
倉橋睦雄　5．4．1～8．3.31
水内邦顯　8．4．1～10．3.31
落合博行　10．4．1～13．3.31
小野　章　13．4．1～

司計係長

桶　喜一　60．4．1～63．3.31
北川　功　63．4．1～元.10.31
東仙　博　元.11．1～4．3.31
羽広孝司　4．4．1～7．4．9
池上久晴　7．4.10～10．3.31
山田裕司　10．4．1～13．3.31
庄司正文　13．4．1～

出納係長

河上　孝　61．4．1～3．3.31
武田知己郎　3．4．1～5．3.31
牧石信康　5．4．1～7．3.31
塚田健夫　7．4．1～9．3.31
北川敬信　9．4．1～12．3.31
荒間　孝　12．4．1～14．3.31
片桐　茂　14．4．1～

用度係長

北川　功　60．4．1～63．3.31
東仙　博　63．4．1～元.10.31
西口一夫　元.11．1～5．3.31
新出信幸　5．4．1～9．3.31
荒間　孝　9．4．1～12．3.31
菅谷正清　12．4．1～15．3.31
寺脇誠一　15．4．1～

施設係長

小林　裕　60．4．1～9．3.31
渋谷省一　9．4．1～11．3.31
三浦伸幸　11．4．1～

学生課長

竹内利榮　61.4.1～63.3.31
佐藤　隆　63.4.1～元.3.31
坂部忠昭　元.4.1～4.3.31
岡山一雄　4.4.1～7.3.31
磯村　信　7.4.1～10.3.31
佐藤健一　10.4.1～12.3.31
水野勇治　12.4.1～14.3.31
野本文雄　14.4.1～

学生課専門員(就職指導担当)

竹下義美　12.4.1～14.3.31
高邑英市　14.4.1～

教務係長(～61.3.31総務課学務係長)

保正邦久　60.4.1～61.3.31、61.4.1～元.3.31
柳田邦雄　元.4.1～4.3.31
佐野　勤　4.4.1～6.3.31
濱屋隆二　6.4.1～9.3.31
荒田一成　9.4.1～11.3.31
大西光男　11.4.1～12.3.31
新井健二　12.4.1～

専門職員(入学者選抜担当)

荒田一成　11.4.1～13.3.31
林　茂美　13.4.1～

専門職員(厚生補導担当)

林　茂美　12.4.1～13.3.31
北野悦郎　13.4.1～14.3.31
寺脇誠一　14.4.1～15.3.31
辻澤良夫　15.4.1～

技術専門官

奥田　都　14.4.1～16.3.31

技術専門職員

畑　篤　10.4.1～11.3.31
砺波浩二　10.4.1～
奥田　都　11.4.1～14.3.31
二上正明　13.4.1～

実習係長(～61.3.31総務課実習係長)

二上正明　60.4.1～61.3.31、61.4.1～13.3.31

学生係長

竹下義美　61.4.1～2.1.15
佐野　勤　2.1.16～4.3.31
林　武　4.4.1～6.3.31
本吉友治　6.4.1～9.3.31
柴田利治　9.4.1～11.3.31

専門職員(就職指導担当)

林　茂美　11.4.1～12.3.31

事業課長

平岡幸一　60.4.1～62.3.31
白石明教　62.4.1～63.3.31
奥野正明　63.4.1～2.3.31
橋口勝善　2.4.1～5.3.31
鈴木昭美　5.4.1～7.3.31
松田幹夫　7.4.1～11.3.31
関　賢一　11.4.1～13.3.31
川久保　守　13.4.1～15.3.31

水野元洋　15．4．1～

企画調査係長（～10．3．31企画係長）

中村　進　61．4．1～63．3．31
中村信一　63．4．1～2．3．31
林　　武　2．4．1～4．3．31
西尾　久　4．4．1～7．3．31
牧石信康　7．4．1～8．3．31
出村昭宏　8．4．1～10．3．31
河西義一　10．4．1～13．3．31
近藤達也　13．4．1～

専門職員（生涯学習担当）

泉田享一　9．4．1～12．3．31
大西光男　12．4．1～14．3．31
笹岡博史　14．4．1～16．3．31
新井　浩　16．4．1～

専門職員（情報サービス担当）

小路　隆　10．4．1～13．3．31
高瀬範和　13．4．1～

専門職員（研究協力担当）

渡邉敬夫　10．4．1～11．3．31
近藤達也　11．4．1～13．3．31
笹岡博史　13．4．1～14．3．31
北野悦郎　14．4．1～16．3．31
濱野松男　16．4．1～

研究協力係長

稲垣市雄　61．4．1～元．3．31
西口一夫　元．4．1～元.10.31
武田知己郎　元.11．1～3．3．31
中越米雄　3．4．1～6．3．31
坂下吉宏　6．4．1～9．3．31
宮尾幸一　9．4．1～10．3．31

資料調査係長

中村信一　61．4．1～63．3．31
中野賢二　63．4．1～3．3．31
門前剛二　3．4．1～5.11.31
本吉友治　5.12．1～6．3．31
出村昭宏　6．4．1～8．3．31
道林一郎　8．4．1～9．3．31

専門職員（国際交流担当）

田中輝和　9．4．1～13．3．31
長崎　悟　13．4．1～16．3．31

3.2.4　教職員数

平成17年1月1日現在

教育職員						その他職員	
学長	副学長	教授	助教授	講師	助手	専門職	医療職
1	2	30	12	8	6	36	2
小計 59						小計 38	
計 97							

3.2.5　図書館

3.2.5.1　蔵書数

年度	区分	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	技術	産業	芸術	語学	文学	計	雑誌(受入) 国内	雑誌(受入) 外国
昭和58	和書	1	0	1	9	0	7	3	107	0	0	128	0	0
	洋書	0	0	0	4	0	0	7	0	1	0	12		
59	和書	87	843	878	2	26	40	2	51	857	842	3,628	0	0
	洋書	25	350	250	100	15	1	2	25	518	563	1,849		
60	和書	1,310	648	649	2,609	795	1,511	364	2,584	1,415	2,226	14,111	0	0
	洋書	633	53	72	457	117	262	72	698	129	94	2,587		
61	和書	681	262	395	1,085	452	384	170	1,006	212	587	5,234	203	105
	洋書	87	16	6	53	4	71	4	64	136	67	508		
62	和書	226	133	190	1,046	167	262	328	578	230	222	3,382	225	102
	洋書	79	20	15	72	8	92	21	135	68	34	544		
63	和書	108	53	39	405	52	186	59	191	79	147	1,319	226	99
	洋書	65	3	3	82	17	50	32	85	61	20	418		
平成元	和書	233	91	86	981	84	231	147	359	246	137	2,595	228	99
	洋書	42	2	3	70	10	15	39	100	49	20	350		
2	和書	128	46	90	323	103	153	129	312	98	107	1,489	234	98
	洋書	35	3	0	42	10	21	32	50	47	20	260		
3	和書	166	45	99	412	163	181	127	317	129	156	1,795	239	95
	洋書	39	1	0	36	10	17	30	53	42	31	259		
4	和書	104	34	127	308	57	101	109	215	128	86	1,269	248	87
	洋書	70	2	0	47	11	24	39	72	43	97	405		
5	和書	314	216	233	1,627	390	157	152	308	293	299	3,989	249	98
	洋書	58	56	44	360	25	20	10	60	84	144	861		
6	和書	204	140	230	307	141	84	55	2,501	185	209	4,056	259	94
	洋書	51	36	63	24	45	20	11	106	125	45	526		
7	和書	134	72	100	326	108	132	47	288	136	192	1,535	260	92
	洋書	59	26	21	67	16	29	16	75	66	55	430		
8	和書	105	37	49	198	51	92	31	146	50	71	830	264	90
	洋書	28	10	13	52	14	24	8	38	13	19	219		
9	和書	112	25	49	467	26	183	98	200	59	76	1,295	260	93
	洋書	10	25	3	140	5	48	4	52	29	45	361		
10	和書	99	35	70	406	49	117	118	158	80	91	1,223	259	85
	洋書	11	16	5	23	1	8	8	13	54	61	200		
11	和書	96	27	35	332	51	103	43	324	89	63	1,163	259	77
	洋書	81	40	1	67	3	15	10	125	72	31	445		
12	和書	60	17	69	275	44	83	51	225	65	76	965	231	48
	洋書	24	28	18	61	4	15	11	57	101	23	342		
13	和書	55	48	102	538	54	147	74	304	118	71	1,511	230	48
	洋書	15	7	8	74	2	23	16	73	91	377	686		
14	和書	98	29	87	447	35	148	71	272	99	70	1,356	224	49
	洋書	16	3	7	28	2	6	6	44	62	101	275		
15	和書	30	17	36	473	69	241	90	101	63	57	1,177	226	48
	洋書	34	8	8	72	1	76	3	35	95	43	375		
15(減)	和書	−499	0	−130	−173	−75	−12	−14	−2	0	0	−905	−	−
	洋書	−25	0	0	−11	0	0	0	0	0	0	−36		
16	和書	37	29	75	210	27	158	34	248	27	64	909	223	45
	洋書	0	1	2	11	2	6	1	39	34	19	115		
合計	和書	3,889	2,847	3,559	12,613	2,869	4,689	2,288	10,793	4,658	5,849	54,054	−	−
	洋書	1,437	706	542	1,931	322	843	382	1,999	1,920	1,909	11,991		

3.2.5.2　利用者数

年度区分	入館者数	貸出延人数	貸出冊数	開館日数
昭和61	−	735	1,120	263
62	10,527	2,394	4,016	282
63	15,899	2,919	5,063	281
平成元	11,501	2,693	4,628	281
2	12,515	2,474	4,034	273
3	7,477	1,989	3,047	277
4	8,636	1,729	3,035	239
5	9,158	1,911	3,286	222
6	8,766	1,868	3,212	224
7	9,649	2,055	3,532	224

年度区分	入館者数	貸出延人数	貸出冊数	開館日数
8	11,662	1,893	3,530	235
9	14,018	1,353	3,114	263
10	15,165	1,268	2,987	263
11	16,933	1,431	2,822	262
12	16,583	1,690	3,608	262
13	16,484	1,714	3,664	265
14	16,505	1,653	3,260	265
15	14,911	1,515	3,155	267
16	16,553	1,707	3,418	262

3.2.6　入学式および卒業式(後期)

・入学式

平成５年度	平成５年４月８日
平成６年度	平成６年４月８日
平成７年度	平成７年４月10日
平成８年度	平成８年４月８日
平成９年度	平成９年４月８日
平成10年度	平成10年４月８日
平成11年度	平成11年４月５日
平成12年度	平成12年４月５日
平成13年度	平成13年４月５日
平成14年度	平成14年４月５日
平成15年度	平成15年４月７日
平成16年度	平成16年４月５日
平成17年度	平成17年４月５日

・卒業式

平成５年度	平成６年３月18日
平成６年度	平成７年３月20日
平成７年度	平成８年３月19日
平成８年度	平成９年３月19日
平成９年度	平成10年３月20日
平成10年度	平成11年３月19日
平成11年度	平成12年３月17日
平成12年度	平成13年３月16日
平成13年度	平成14年３月20日
平成14年度	平成15年３月20日
平成15年度	平成16年３月19日
平成16年度	平成17年３月18日

3.2.7　国立大学法人化

１．法人化への対応

法人化に向けた準備の推進及び法人化への円滑な移行のため、法人化準備委員会を設置し、中期目標・中期計画、法人化に対応した管理運営組織、就業規則、その他諸規則等の検討を行った。また、新たな制度や実施体制等について、全職員を対象に「法人化に関する説明会」を開催し、各種説明、質疑応答を行った。

２．法人化準備委員会開催状況

年度	事　　項
平成14	10．１第１回法人化準備委員会／10.21第２回法人化準備委員会／10.28第３回法人化準備委員会／11．６第６回法人化準備委員会／11.14第５回法人化準備委員会／11.20第６回法人化準備委員会／11.22第７回法人化準備委員会／12．４第８回法人化準備委員会／２．３第９回法人化準備委員会／２．４第10回法人化準備委員会／２．５第11回法人化準備委員会
15	５.16第１回法人化準備委員会／９．２第２回法人化準備委員会／10.16第３回法人化準備委員会／11.19第４回法人化準備委員会／12．４第５回法人化準備委員会／12.18第６回法人化準備委員会／１.15第７回法人化準備委員会／２．５第８回法人化準備委員会／３．２第９回法人化準備委員会／３．８第10回法人化準備委員会／３.15第11回法人化準備委員会／３.22第12回法人化準備委員会／３.25第13回法人化準備委員会

３．法人化に関する説明会

16	２.12第１回法人化に関する説明会／３.24第２回法人化に関する説明会

3.2.8　富山県内国立３大学の再編・統合

平成13年 ６月	[６.14]平成13年度国立大学長会議において、文部科学大臣から「大学(国立大学)の構造改革の方針」が出された。(遠山プラン) [６.19]蠟山学長から、全教職員に、「平成13年度国立大学長会議」における大臣挨拶の要点、コメント等を関係資料と併せて送付した。
７月	[７.12]学長から、運営会議、教授会において資料「高岡短期大学の将来をどう描くか」について提案があり、意見交換がなされた。 [７.18]学長から、小澤富山大学長に「遠山プランに対する各大学のスタンス」についての、３大学長意見交換会を提案。 [７.26]学長から、資料「大学(国立大学)の構造改革の方針に対する本学の対応について」を全教職員に配付。
８月	[８.17]学長から、「高岡短期大学としての再編・統合構想」を全教職員に配布。 [８.27]学長から、全教職員に対し、本学と富山大学・富山医科薬科大学との再編統合についての資料配布。 ・富山県内国立３機関の再編統合推進に関する合意書(案) ・高岡短期大学としての再編・統合構想 [８.28]３大学長が文科省に工藤高等教育局長を訪ね、現況報告。
９月	[９．６]３大学長が中沖県知事を訪ね、再編統合を検討することを学内で正式決定する意向である旨を報告。 [９．６]教職員集会－学長から、再編・統合における概要説明及び出席者との意見交換。 [９.13]第６回教授会で、学長から、再編統合問題に対する本学の基本姿勢について提案があり、次の３原則が生かされることを前提に、３大学の協議に入ることを承認。 １.伝統工芸の継承、良き社会人の育成等、本学の果たしてきた使命を継続すること ２.高岡に高等教育機関を存続ないし拡大をはかること ３.短期の高等教育機関としての実績やニーズに基づき、準学士制度が生かされること [９.17]学長から、「再編統合検討のためのプロジェクトチーム・メンバー」の編成及び参加希望者の募集通知。(後に、このチームが project として発足) [９.21]第１回 project 検討会開催。
10月	[10．２]「第３回富山国立３大学長、副学長、事務局長意見交換会」開催／本学から、資料「高岡短期大学としての再編統合構想：富山総合大学(仮称)のイメージ」を提示。 [10．９]第２回 project 検討会開催。 [10.11]第８回教授会において、学長から、project メンバーの中から、３大学の意見交換会出席者の選出、及び３大学が検討に入ることへの合意ができ、協議を開始した後の学内等への情報公開について速やかに実施する旨の説明。
11月	[11．８]第３回 project 検討会開催。資料：「新大学のイメージ深化のために」配布。 [11.12]県主催の「国立大学の改革等に関する懇談会」に、県内３大学長が出席して状況説明／資料：「富山総合大学(仮称)の創設をめざして」：高岡短期大学からの再編統合構想(2001年11月)を提示。 [11.16]国立３大学再編統合に関する富山大学・高岡短期大学との第１回目の意見交換会開催／高岡短期大学から、資料：「富山総合大学(仮称)の創設をめざして」再編統合構想(2001年11月)を提示。 [11.19]金沢大学において、「北陸地区国立大学学長懇談会」開催(副学長出席)。 [11.26]県主催の「第２回国立大学の改革に関する懇談会」開催(於富山第一ホテル)。 [11.27]南日(国立大学の改革等に関する懇談会)会長が来学、県からの「国立大学の改革再編について」の中間提言書を受理。中間提言書は、県から文科省にも提出。
12月	[12．４]瀧澤富山大学長、風巻副学長来学、国立３大学の再編統合問題について懇談。再編統合プロジェクトチーム(スモール)による本学の対応を協議。 [12．６]「富山県大学長懇談会」開催。学長から、富山大学長に対し「富山大学長からの打診を受けて」を手渡し。 [12．７]学長、文科省に杉野室長、清木主任改革官、村田改革官を訪ね面談。 [12.12]学長、副学長、学科長、図書館長、再編統合プロジェクトチーム(スモール)による打合せ実施。 [12.13]第12回教授会で、学長から状況報告及び意見交換。学長から、富山大学長に「富山大学長書簡：県内３大学再編統合問題について(12月９日)を受けて」を送付。 [12.26]「国立３大学再編統合に関する富山大学・高岡短期大学との意見交換会」開催。本学から、資料「新大学における高岡キャンパス」を提示。
平成14年 １月	[１．８]「富山県内国立大学の再編・統合に係る懇談会」開催。富山医科薬科大学からの基本的要望事項及び合意書案について意見交換。

	[１．９]再編統合プロジェクトチーム(スモール)メンバーにて意見交換。 [１.10]第13回教授会において、学長から再編統合に係る状況説明及び本学としての対応等意見交換。(プロジェクトチームとの合同会議)　資料：１月８日の懇談会資料配付。 [１.15]「富山県内国立大学の再編・統合に係る懇談会」開催。富山医科薬科大学からの基本的要望事項及び合意書案について意見交換。本学から、資料「富山総合大学(仮称)の創設をめざして」：高岡短期大学からの再編統合構想再論(2002年１月15日)提示。 [１.18]臨時教授会を開催し、学長から状況説明及び本学としての対応等意見交換。(プロジェクトチームとの合同会議)　資料：１月15日の懇談会資料配付。富山医科薬科大学から提案のあった「富山県内国立大学の再編・統合に係る基本的確認事項(案)」及び合意書(案)について、項目、内容等については、本学としては基本的に合意。 [１.22]「富山県内国立大学の再編・統合に係る懇談会」開催。本学から基本的確認事項及び合意書案についての修正文を提出。 [１.23]富山第一ホテルにおいて、県内各界の有識者による「国立大学の改革等に関する懇談会」の小委員会を開催、３国立大学の副学長が出席し、状況説明後質疑応答。 ・それぞれのキャンパスを残し、県民にとって魅力ある大学にしてほしい。 ・短期大学を含む再編統合を創り上げれば、一段と特色ある大学が打ち出せるものと期待する。 ・その他、教員養成機能のあり方、地域貢献の視点などの要望、意見があった。 [１.26]「国立３大学再編統合に関する富山大学と高岡短期大学の見交換会」を開催。本学から資料「富山総合大学(仮称)の創設をめざして」：高岡短期大学からの再編統合構想再再論(2002年１月26日)提示。 [１.28]「富山県内国立大学の再編・統合に係る懇談会」開催。
２月	[２.19]「富山県内国立大学の再編・統合に係る懇談会」開催。 [２．２]学長、副学長、学科長、図書館長、再編統合プロジェクトチーム(スモール)による打合せ。 [２.22]国立３大学再編統合に関する富山大学と高岡短期大学の意見交換会を開催。富山大学から、新大学の学部構想(案)提示。
３月	[３．５]「富山県内国立大学の再編・統合に係る懇談会」開催。 [３．６]第11回運営会議において、再編統合プロジェクトチーム(スモール)＋α メンバーを加えて意見交換。 [３.11]「国立３大学再編統合に関する富山大学と高岡短期大学の意見交換会」を開催。／金沢大学において、「北陸地区国立大学学長懇談会」開催(学長出席) [３.19]「富山県内国立大学の再編・統合に係る懇談会」開催。基本的確認事項等について合意、26日に調印することになった。 [３.26]再編・統合への協議開始についての合意書及び基本的確認事項に調印。 [３.29]文部科学省において、再編・統合及び教育学部に関するヒアリングを受けた。
４月	[４．２]学長、副学長、学科長、図書館長、再編統合プロジェクトチーム(スモール)による打合せ。 [４．８]「富山県内国立大学の再編・統合に係る懇談会」開催。新大学構想協議会(仮称)を設置し、新大学のグランドデザイン等を話し合うことになった。 [４.10]第１回運営会議において、再編統合プロジェクトチーム(スモール)を加えて意見交換。 [４.11]第１回教授会終了後、教職員集会を開催し、再編･統合に関する現状等報告を行い、併せて意見交換を行った。 [４.15]学長、副学長、学科長、図書館長、再編統合プロジェクトチーム(スモール)＋α による打合せ。 [４.18]学長、副学長、学科長、図書館長、再編統合プロジェクトチーム(スモール)＋α による打合せ。 [４.22]第１回新大学構想協議会を開催し、各大学の構想案を提示しフリーディスカッションを行った。 [４.25]高志会館において、県内各界の有識者による「国立大学の改革等に関する懇談会」の第２回小委員会を開催、瀧澤富大学長、小林医薬大副学長、蠟山高岡短大学長が出席し、状況説明後質疑応答を行った。／学長、副学長、学科長、図書館長、再編統合プロジェクトチーム(スモール)＋α による打合せ。 [４.30]第２回新大学構想協議会を開催し、フリーディスカッションを行った。
５月	[５.14]第３回新大学構想協議会を開催し、富山大学から提示された新大学構想を中心にフリーディスカッションを行った。 [５.29]第４回新大学構想協議会を開催し、フリーディスカッションを行ったが、構想策定委員会を開催することは時期尚早であるので今後もフリーディスカッションを行うことになった。
６月	[６.25]第５回新大学構想協議会を開催し、フリーディスカッションを行った。教養教育については、各大学の意見も出そろい具体的な協議が可能と思われるので、各大学の副学長からなる議長団で教養教育に関するワーキンググループの設置の是非を協議し、併せて今後の検討事項の整理も行うことになった。なお、議長団の協議の結果、教養教育に関するワーキンググループを設置し、具体的に協議していくことになった。
７月	[７.10]学長、副学長、学科長、図書館長、再編統合プロジェクトチーム(ラージ)による打合せ。 [７.18]富山大学教育学部教官との懇談会。 [７.29]第６回新大学構想協議会を開催。教養教育 WG の他に大学院 WG を設置することになった。また、８月に、３大学長による教職員向けパネルディスカッションを開催することになった。

8月	[8．6]第1回教養教育ワーキンググループを開催。 [8．30]「富山県内国立大学の再編・統合に関する説明会」を富山大学黒田講堂で開催。三大学長をパネラーとするパネルディスカッション形式で行われ、三大学で合計471名の出席があった。(富大283名、医薬大125名、高岡短大63名)
9月	[9．17]第2回教養教育ワーキンググループを開催。 [9．24]富山大学教育学部長、教官2名と懇談会を実施。(学長出席) [9．25]第7回新大学構想協議会を開催。管理運営体制について及び大学院ワーキンググループの設置等について協議を行った。また、この協議会から、各大学の運営諮問会議委員及び県関係者がオブザーバー出席した。
10月	[10．7]第3回教養教育ワーキンググループを開催。 [10．21]金沢大学において、「北陸地区国立大学学長懇談会」開催。(副学長出席) [10．22]第8回新大学構想協議会を開催。教養教育、学部編成等について協議を行った。
11月	[11．5]第4回教養教育ワーキンググループを開催。 [11．11]第9回新大学構想協議会を開催。学部編成等について協議を行い、今後、構想策定委員会を開催し、学部、大学院、教養教育、管理運営について協議していくことになった。 [11．15]富山大学教育学部教官と懇談会を実施。 [11．18]第1回大学院ワーキンググループを開催。富山医科薬科大学教官との懇談会を実施。 [11．19]第5回教養教育ワーキンググループを開催。 [11．20]第1回構想策定委員会を開催。 [11．22]高岡市役所において「国立大学の再編・統合について聞く会」を開催。 [11．27]第2回構想策定委員会を開催。構想策定委員会終了後、経済学部教官及び教育学部教官と懇談会をそれぞれ実施。 [11．28]第2回大学院ワーキンググループを開催。
12月	[12．5]文部科学省　清水審議官及び村田大学企画調整室長と3大学(学長(副学長)、事務局長(事務部長)) で懇談会を実施。 [12．6]第3回構想策定委員会を開催。金沢大学において、「北陸地区国立大学学長懇談会」開催。(副学長出席) [12．10]学長、副学長、学科長、図書館長、再編統合プロジェクトチーム(ラージ)+αによる打合せ実施。 [12．11]第4回構想策定委員会を開催。 [12．18]副学長、学科長、図書館長、再編統合プロジェクトチーム(スモール)による打合せ。 [12．19]教職員集会を開催し、全教職員に経緯と今後の方向性について、学長から説明があった。 [12．24]第5回構想策定委員会を開催。 [12．25]富山県庁において、経営企画部長等への説明会を開催。新大学構想協議会の流れ及び状況について説明の後質疑応答を行った。 [12．27]第6回構想策定委員会を開催。
平成15年 1月	[1．7]第7回構想策定委員会を開催。 [1．9]学長、副学長、学科長、図書館長、再編統合プロジェクトチーム(スモール)+αによる打合せ実施。 [1．14]第8回構想策定委員会を開催。 [1．16]第1回任期制・評価体制ワーキンググループを開催。 [1．21]第9回構想策定委員会を開催。金沢大学において、「北陸地区国立大学学長懇談会」開催(学長出席) [1．23]第1回芸術文化学部ワーキンググループを開催。 [1．24]第1回研究所・センターワーキンググループを開催。 [1．28]富山県民会館において、県内各界の有識者による「国立大学の改革等に関する懇談会」の第3回小委員会を開催、瀧澤富大学長、高久医薬大学長、蠟山高岡短大学長、水島高岡短大副学長が出席し、状況説明後質疑応答を行った。 [1．30]第2回芸術文化学部ワーキンググループを開催。 [1．31]第2回任期制・評価体制ワーキンググループを開催。
2月	[2．6]第3回芸術文化学部ワーキンググループを開催。 [2．13]第10回構想策定委員会を開催／第2回研究所・センターワーキンググループを開催。 [2．14]第3回任期制・評価体制ワーキンググループを開催。 [2．17]金沢大学において、「北陸地区国立大学学長懇談会」開催。(副学長出席) [2．21]第3回研究所・センターワーキンググループを開催。 [2．26]第4回芸術文化学部ワーキンググループを開催。 [2．27]第1回文化創造科学部(仮称)懇談会を開催。 [2．28]金沢大学において、「北陸地区国立大学学長懇談会」開催。(学長出席)
3月	[3．4]第11回構想策定委員会を開催。

	[３．６]第２回文化創造科学部(仮称)懇談会を開催。 [３.11]第12回構想策定委員会を開催。 [３.18]第13回構想策定委員会を開催。 [３.24]第４回研究所・センターワーキンググループを開催。 [３.31]第14回構想策定委員会を開催。
４月	[４．８]第１回芸術文化学部(仮称)タスクフォースを開催。芸術文化学部(仮称)案を示し意見交換した。 [４.15]第２回芸術文化学部(仮称)タスクフォースを開催。 ・芸術文化学部(仮称)案について意見交換を行った。 ・教員移動について確認し、教員人事が決まるまでタスクフォースを存続することとした。 ・実質的な検討を学長を除くタスクフォース委員で行うこととした。 [４.17]教職員集会を開催し、全教職員に経緯と今後の方向性について、学長から説明。 [４.22]第15回構想策定委員会を開催。 [４.30]教職員集会を開催し、全教職員に経緯と再編・統合の合意を行うことについて、副学長から説明があった。
５月	[５．２]臨時教授会を開催し、３大学の再編・統合に合意することを機関決定。 [５．６]高岡市へ、３大学が再編・統合に合意する機関決定した旨を報告。 [５．７]第10回新大学構想協議会を開催し、３大学が再編・統合に合意することを了承し、併せて調印式も行った。 富山県知事へ、３大学が再編・統合に合意することについて報告。 [５．８]全学(職員・学生)集会を開催し、副学長から再編、統合に合意したことを報告。 [５．９]文部科学省へ、３大学が再編・統合に合意したことについて報告。 [５.12]富山県民会館において、県内各界の有識者による「国立大学の改革等に関する懇談会」の第４回小委員会を開催。 [５.15]再編統合 SP と関心のある教員に芸術文化学部(仮称)の考え方についての説明会を実施。 [５.30]第１回新大学創設準備にかかる懇談会を開催。
６月	[６．５]第４回教授会において、芸術文化学部(仮称)設置準備委員会の設置を承認。 [６.12]第１回芸術文化学部(仮称)タスクフォース小委員会を開催。 ・芸術文化学部(仮称)の素案は、小委員会メンバーで作成することとした。 ・新規採用教員について、今年中に人選も行なうことを確認した。 [６.13]第１回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [６.17]第２回新大学創設準備にかかる懇談会を開催し、創設準備委員会及び推進委員会を設立することに同意。 [６.17]芸術文化学部芸術文化学部(仮称)設置準備委員会ワーキンググループに関する説明会を開催。 [６.26]第３回新大学創設準備に係る懇談会を開催。設準備委員会及び推進委員会の任務及び部会の設置、創設準備室の設置を確認し、早急に第１回新大学設準備委員会を開催することとした。
７月	[７．１]富山大学内に創設準備事務室を設置。 [７．８]第１回新大学創設準備協議会を開催し、新大学創設準備協議会及び新大学創設準備推進委員会の設置並びに部会及びタスクフォースの設置を了承し、従前の新大学構想協議会を廃止することとした。 部会及びタスクフォース(８組織) 人間発達科学部(仮称)部会 芸術文化学部(仮称)タスクフォース 人文学部部会 経済学部部会 機構・センター部会 病院部会 事務組織部会 情報部会 [７.28]第２回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。芸術文化学部(仮称)設置の骨子(案)及び３大学統合のメリットについて提示し協議。 [７.29]第１回機構・センター部会を開催。部会の下に、４ワーキンググループを設けた。 ・図書館ワーキンググループ ・保健管理センターワーキンググループ ・地域連携推進機構ワーキンググループ ・大学教育・学生支援ワーキンググループ [７.30]第１回情報部会を開催。
８月	[８．５]第３回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。芸術文化学部(仮称)設置の骨子(案)を再検討し、企業や高校生へのアンケート調査を外部委託で実施することとした。 [８．６]第２回芸術文化学部(仮称)タスクフォース小委員会を開催。

	・芸術文化学部(仮称)設置の骨子(案)について意見交換した。 ・芸術文化学部(仮称)の開設科目の調整を行なうことを確認した。 [8.11]第1回人文学部部会を開催。第1回事務組織部会を開催。／第4回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [8.12]教職員へ芸術文化学部(仮称)の骨子に関する説明懇談会を実施。 ・芸術文化学部(仮称)設置の骨子(案)について ・各教員からの質問に関する回答 [8.18]第1回経済学部部会を開催。 [8.25]第1回病院部会を開催。 [8.27]第3回芸術文化学部(仮称)タスクフォース小委員会を開催。 ・芸術文化学部(仮称)の開設科目について、9月中には素案を作成することとした。 ・教養教育の実施体制等について、創設準備委員会又は、創設準備推進委員会へ申し入れることとした。 ・課程認定について意見交換した。 ・早急に新規教員の人選を進めることを確認した。 ・芸術文化学部(仮称)に関するアンケートについて確認した。 [8.28]第1回管理運営部会を開催。
9月	[9.1]第1回人間発達科学部(仮称)部会を開催。 [9.3]第1回入試部会を開催。 [9.17]第3回芸術文化学部(仮称)タスクフォースを開催。 ・芸術文化学部(仮称)設置の骨子(案)について確認した。 ・今後のスケジュールを確認した。 ／第2回入試部会を開催。 [9.24]文部科学省に芸術文化学部(仮称)設置の骨子(案)について、説明及び懇談 ・新大学像の全体像の早期提出 ・教養教育の全体の取り組み方や実施方法の検討 ・設置審査について助言 ／第2回機構・センター部会を開催。
10月	[10.9]第5回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [10.15]第4回芸術文化学部(仮称)タスクフォースを開催。 [10.16]第6回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [10.17]第2回事務組織部会を開催。 [10.20]第7回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [10.21]第1回創設準備推進委員会を開催。 [10.23]第2回人文学部部会を開催。 [10.29]第8回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [10.31]第2回情報部会を開催。
11月	[11.4]第2回人間発達科学部部会を開催。 [11.10]第3回入試部会を開催。 [11.17]第3回情報部会を開催。 [11.19]第2回経済学部部会を開催。 [11.21]第3回機構・センター部会を開催。 [11.25]第9回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [11.28]第1回中期目標・中期計画部会を開催。／第10回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。
12月	[12.1]第4回入試部会を開催。 [12.4]第1回教養教育部会を開催。／第4回情報部会を開催。 [12.5]第2回病院部会を開催。 [12.8]第2回創設準備推進委員会を開催。 [12.9]第11回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [12.11]第12回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [12.12]第13回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会(持ち回り)を開催。 [12.17]第14回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [12.18]第15回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [12.22]第4回機構・センター部会を開催。／第5回入試部会を開催。 [12.24]第3回人間発達科学部部会を開催。
平成16年 1月	[1.6]第16回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。

	[1.13]第17回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [1.20]第2回教養教育部会を開催。／第18回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [1.27]第19回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。
2月	[2.5]第20回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [2.12]第21回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [2.23]第22回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [2.27]第23回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。
3月	[3.2]第1回大学院部会を開催。／第24回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [3.4]第25回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [3.15]第4回人間発達科学部部会を開催。 [3.18]文部科学省に芸術文化学部(仮称)設置の骨子(案)について、説明及び懇談 ・前回(9.24)からの変更点及び宿題について説明 ・4月以降は国立大学法人支援課が対応すること ・今後のスケジュールの確認 ・設置の趣旨の内容について質疑応答 [3.22]高岡短期大学において、第5回芸術文化学部(仮称)タスクフォースを開催。 新規採用者の設置審査後の対応及び学部長の選出方法等について確認。 [3.23]第3回教養教育部会を開催。 [3.26]名鉄富山ホテルにおいて、第2回新大学創設準備協議会を開催。
4月	[4.9]第3回新大学創設準備協議会を開催。 [4.12]平成16年度第1回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [4.15]全教員を対象に芸術文化学部(仮称)に関する説明会を開催。現状及び今後のスケジュール等について説明。 [4.22]第4回教養教育部会を開催。 [4.26]平成16年度第2回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。
5月	[5.10]平成16年度第3回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [5.11]第5回人間発達科学部(仮称)部会を開催。 [5.14]第3回事務組織部会を開催。／第5回教養教育部会を開催。 [5.17]平成16年度第4回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。 [5.18]第6回芸術文化学部(仮称)タスクフォースを開催。 ・芸術文化学部(仮称)設置構想案について了承。 ・新学部の名称及び学位について了承。 ・移動教員の研究室等の確保についての配慮を確認。 [5.19]第2回管理運営部会を開催。 [5.20]第6回入試部会を開催。 [5.25]全教員を対象に芸術文化学部(仮称)に関する説明会を開催。 [5.27]第3回管理運営部会を開催。／平成16年度第5回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。移動教員の研究室等の確保、新学部の英語表記及び新学部のPR活動等について検討。 [5.31]平成16年度第6回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。
6月	[6.3]第5回機構・センター部会を開催。 [6.7]第3回新大学創設準備推進委員会を開催。 [6.9]第7回入試部会を開催。 [6.10]第6回教養教育部会を開催。 [6.11]第2回大学院部会を開催。 [6.14]第4回新大学創設準備推進委員会を開催。 [6.21]富山県民会館において、県内各界の有識者による「国立大学の改革等に関する懇談会」の第6回小委員会を開催。芸術文化学部及び人間発達科学部の検討状況を説明。 [6.22]平成16年度第7回芸術文化学部(仮称)設置準備委員会を開催。文部科学省との打ち合せの結果概ね了承を得たことの報告。 [6.23]第4回新大学創設準備協議会を開催。 [6.30]第7回教養教育部会を開催。／文部科学省に設置計画書(正本1部、抜刷3部)を提出。
7月	[7.23]全学(職員・学生)集会を開催し、学生を中心に芸術文化学部の内容等を説明。 [7.28]平成16年度第8回芸術文化学部設置準備委員会を開催。 [7.30]創設準備事務室から、文部科学省に新学部に関する大学設置・学校法人審議会大学設置分科会資料(10部)提出。
8月	[8.4]第8回入試部会を開催。

	［8．5］平成16年度第９回芸術文化学部設置準備委員会を開催。 ［8．9］文部科学省に設置計画書の残り（抜刷32部、個人調書等15部）を提出。／高岡市役所において、「新富山大学設置構想及び芸術文化学部の概要についての説明会」を開催。 ［8.11］第５回情報部会を開催。 ［8.27］第７回芸術文化学部（仮称）タスクフォースを開催。

3.2.9　年表（後期）

平成7	３月学内情報ネットワークシステム TNC－NET（Takaoka National College NETwork）が稼働する。／４月専攻科（１年制、１専攻）が２年制、３専攻（産業造形専攻・産業デザイン専攻・地域ビジネス専攻）に再編改組されるとともに、学位授与機構が定める要件を満たす専攻科として認定される。
9	３月専攻科棟が竣工する。
12	４月学科が、従前の２学科（産業工芸学科、産業情報学科）から、３学科（産業造形学科、産業デザイン学科、地域ビジネス学科）に再編改組される。
13	４月保健管理センターが設置される。
14	３月学内情報ネットワークシステム TNC－NET を高速キャンパス情報ネットワークシステムに更新する。
16	４月国立大学法人法の施行によって、国立大学法人高岡短期大学となる。
17	９月国立大学法人高岡短期大学閉学式を挙行する。

3.3　会計課

3.3.1　決算額

（単位：千円）

区分＼年度		昭和58	59	60	61	62	63	平成元
歳入	授業料及び入学検定料	－	－	36,294	99,393	123,347	139,181	142,019
	雑収入	－	－	0	107,669	1,570	1,369	1,852
	計	－	－	36,294	207,062	124,917	140,550	143,871
歳出	人件費	15,694	53,616	127,877	317,244	433,279	496,859	583,774
	物件費	9,700	40,342	525,452	2,061,471	1,432,793	1,021,480	208,227
	計	25,394	93,958	653,329	2,378,715	1,866,072	1,518,339	792,001

区分＼年度		平成2	3	4	5	6	7	8
歳入	授業料及び入学検定料	149,499	157,878	162,385	166,773	177,352	185,121	199,526
	雑収入	2,068	3,934	3,943	4,453	4,032	3,543	5,813
	計	151,567	161,812	166,328	171,226	181,384	188,664	205,339
歳出	人件費	593,918	723,326	614,187	668,007	703,323	843,248	763,430
	物件費	214,142	235,339	225,199	305,393	279,444	322,385	388,760
	計	808,060	958,665	839,386	973,400	982,767	1,165,633	1,152,190

区分＼年度		9	10	11	12	13	14	15
歳入	授業料及び入学検定料	206,353	219,671	221,402	215,341	234,433	243,275	249,313
	雑収入	6,179	9,913	10,054	14,596	9,816	13,752	13,043
	計	212,532	229,584	231,456	229,937	244,249	257,027	262,356
歳出	人件費	918,272	778,688	856,036	814,080	829,326	836,233	925,662
	物件費	328,173	369,155	361,404	319,555	383,519	348,827	370,731
	計	1,246,445	1,147,843	1,217,440	1,133,635	1,212,845	1,185,060	1,296,393

（単位：千円）

区分＼年度		16
収入	運営費交付金	1,162,461
	施設整備費補助金	13,000
	授業料及び入学金検定料収入	237,647
	雑収入	11,672
	産学連携等研究収入及び寄附金収入等	122,636
	計	1,547,416
支出	教育研究経費	762,851
	一般管理費	456,888
	施設整備費	13,000
	産学連携等研究経費及び寄附金事業費等	13,741
	計	1,246,480

3.3.2　施設の概要

区　　分	所　在　地	敷地面積	建物面積
高岡短期大学	高岡市二上町180番地	99,847㎡	18,934㎡
古府宿舎	高岡市伏木古府２－２－30	2,817㎡	1,822㎡
伏木宿舎	高岡市伏木矢田７－50	3,130㎡	1,277㎡
	合　　計	105,794㎡	22,033㎡

建物の概要

高岡短期大学

区　　分	名　　称　　等	構　　造	延面積	建設年度	位 置
講義・管理棟 （講義、管理部門）	管理部門、講義室、デッサン室、基礎デザイン室、彫塑室、製図室等	鉄筋コンクリート造２階建	3,337㎡	昭和60年度	①
研究棟 （研究部門）	教員研究室、CG ルーム、映像利用室、演習室等	鉄筋コンクリート造４階建	3,451㎡	〃	②
講義演習棟 （開放センター）	LL 教室、講堂、エントランスホール、演習室 食堂、談話室、売店、コンサルテーション室等	鉄筋コンクリート造２階建	3,508㎡	〃	③
実験実習棟	原型室、金属機械室、塗装室、木工機械室、鋳造室、木彫室、彫・鍛金室、漆実技室等	鉄筋コンクリート造平屋建	2,336㎡	〃	④
エネルギー棟	電気室、ボイラー室、ポンプ室等	鉄筋コンクリート造２階建	721㎡	〃	⑤
体育館	体育室、シャワー室、更衣室、課外活動室等	鉄骨鉄筋コンクリート造２階建	1,734㎡	昭和61年度	⑥
図書館	閲覧室、情報資料室、グループ読書室等	鉄筋コンクリート造２階建	1,078㎡	〃	⑦
洗心苑 （非常勤講師宿泊施設）	宿泊室、ラウンジ、和室等	鉄筋コンクリート造２階建	428㎡	昭和62年度	⑧
体育器具庫	器具庫、便所、シャワー等	鉄筋コンクリート造平屋建	84㎡	平成元年度	⑨
危険物倉庫		鉄筋コンクリート造平屋建	32㎡	平成２年度	⑩
専攻科棟	デザインモデリングルーム、漆素地造形室、ビジネス演習室、木材実験室２、金属実験室等	鉄筋コンクリート造４階建	2,225㎡	平成８年度	⑪

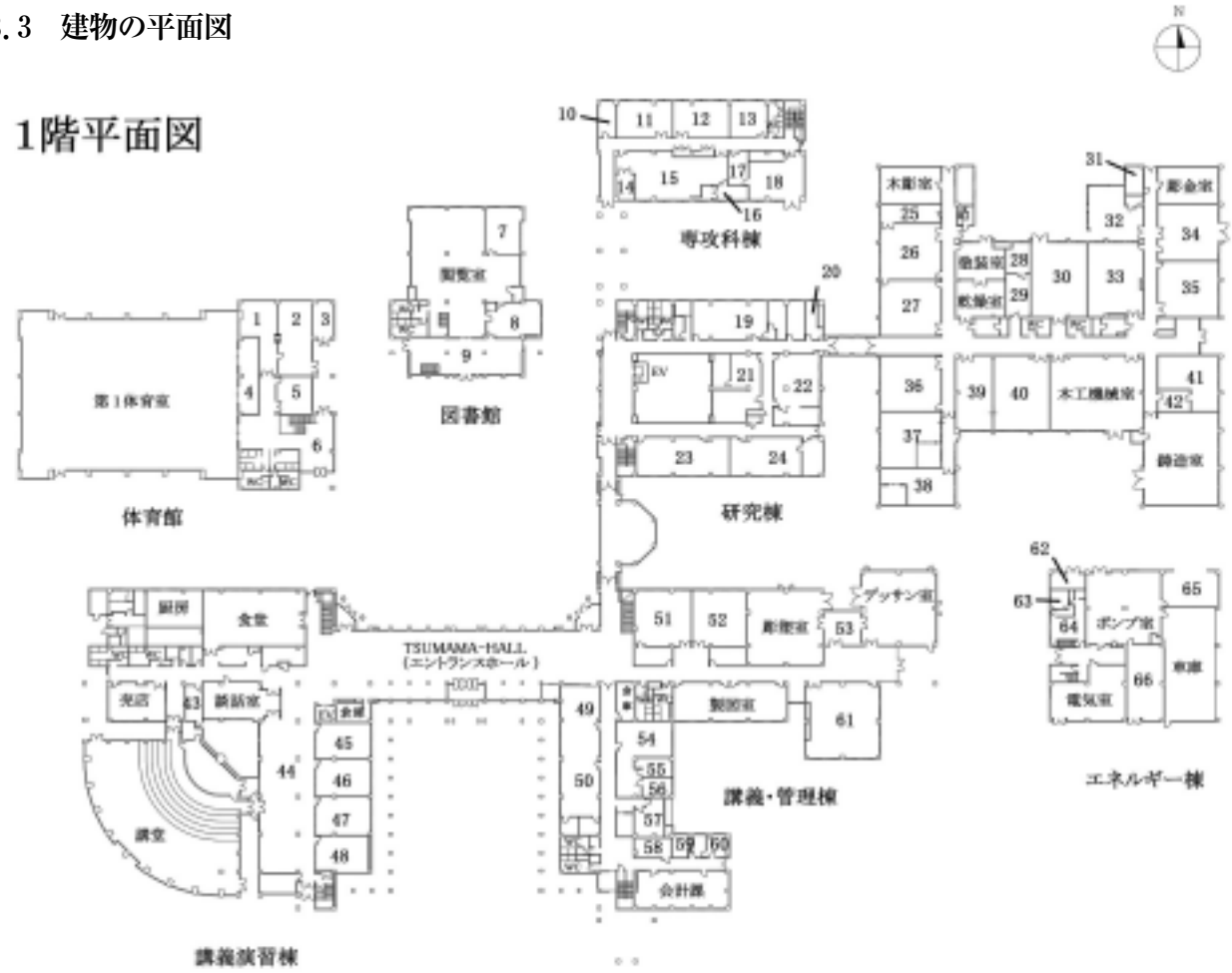
古府宿舎

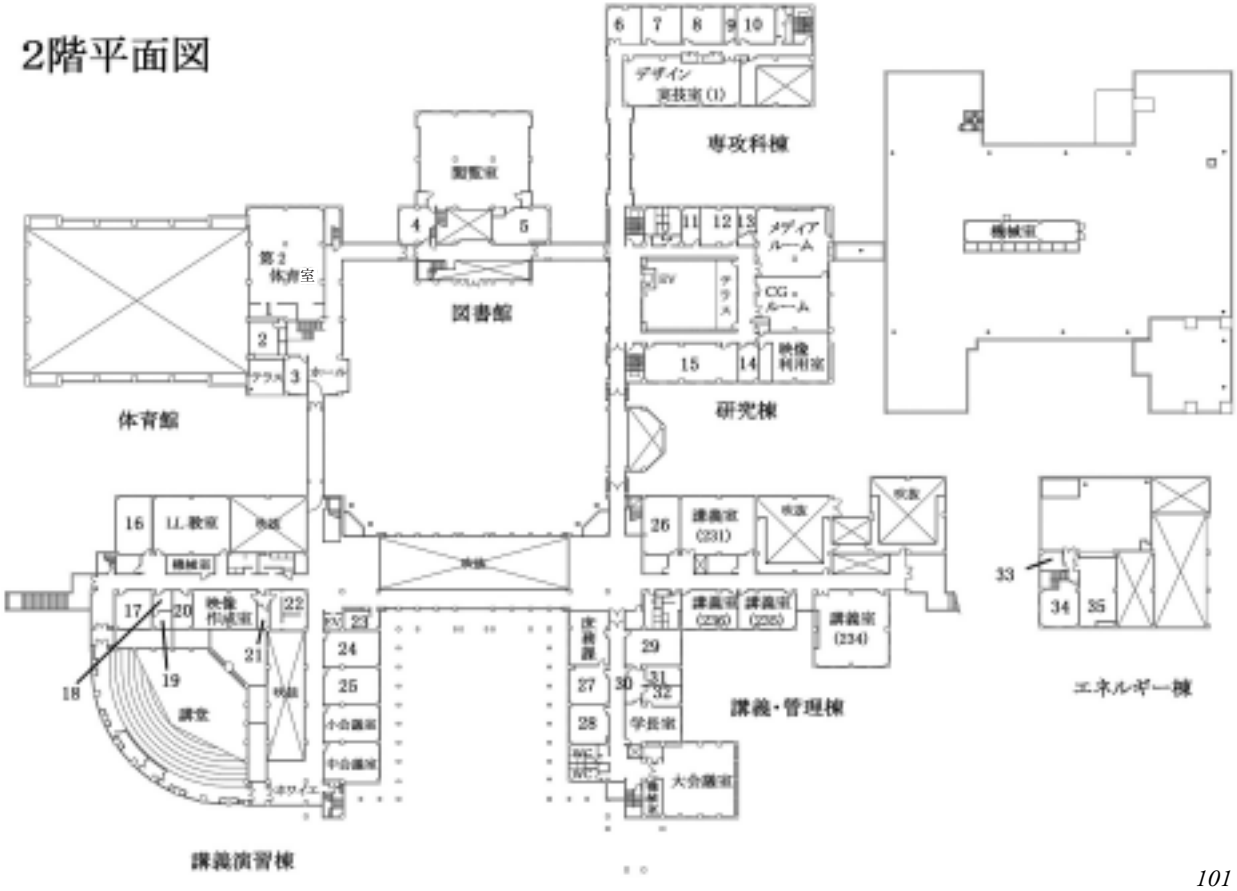
区　　分	名　　称　　等	構　　造	延面積	建設年度
宿舎（職員宿舎）	24戸	鉄筋コンクリート造４階建	1,767㎡	61年度
附属施設	自転車置場、ポンプ室、プロパン庫	－	55㎡	－

伏木宿舎

区分	名　称　等	構造	延面積	建設年度
宿舎（職員宿舎）	18戸	鉄筋コンクリート造３階建	1,218㎡	51年度
附属施設	LPG 庫、ポンプ室、自転車置場、物置	－	59㎡	－

3.3.3　建物の平面図


1階平面図
専攻科棟
図書館
体育館
研究棟
TSUMAMA-HALL
(エントランスホール)
講義・管理棟
エネルギー棟
講義演習棟


2階平面図
専攻科棟
図書館
体育館
研究棟
講義・管理棟
エネルギー棟
講義演習棟

1階

体育館
1.課外活動室
2.課外活動室
3.電気室
4.器具庫
5.更衣室
6.ホール

図書館
7.閉架書庫
8.事務室
9.ホール

専攻科棟
10.演習室 170
11.材料実験室
12.漆素地造形室
13.きゅう漆室
14.プラスチック加工室
15.デザインモデリングルーム
16.塗装室
17.データ解析室
18.デザイン実験室(1)

研究棟
19.漆工芸教員室
20.材料実験室
21.基礎専門教員室
22.木材工芸教員室
23.産業デザイン教員室
24.金属工芸教員室

実験実習棟
25.木材実験室1
26.接着成型室
27.木材実技室
28.廃水処理室
29.表面処理室
30.金属機械室
31.木材試験室
32.実習作業室
33.彫・鍛金室
34.金属立体造形室
35.金属実技室
36.漆実技室1
37.漆実技室2
38.漆実技室3
39.原形室
40.木材加工室
41.鋳造研究室
42.精密鋳造室

講義演習棟
43.ロッカー室
44.ホワイエ
45.工芸演習室(161)
46.工芸演習室(162)
47.工芸演習室(163)
48.展示室

講義・管理棟
49.学生課
50.事業課
51.講義室(130)
52.講義室(131)
53.倉庫
54.保健管理センター
55.医師室
56.相談室
57.事務電算室
58.機械室
59.休養室
60.守衛室
61.基礎デザイン室

エネルギー棟
62.ボンベ室
63.和室
64.管理室
65.ゴミ置場
66.ボイラー室

3階平面図

4階平面図

2階

体育館
1.器具庫
2.和室
3.体育教員室

図書館
4.グループ読書室
5.情報資料室

専攻科棟
6.リフレッシュルーム
7.デザイン実技室(2)
8.デザイン実技室(3)
9.保管室
10.デザイン実験室(2)

研究棟
11.資料室
12.ネットワーク管理室
13.機械室
14.機械室
15.自習・教材作成室
応用演習室

講義演習棟
16.会話演習室
17.平面造形室
18.教員準備室
19.録音室
20.個人実習室
21.映像調整室
22.暗室
23.コンサルテーション室
24.コンピュータ演習室
25.多目的講義室

講義・管理棟
26.講義室(230)
27.事務部長室
28.監事室
29.理事室副学長
30.秘書室
31.理事室
32.理事室副学長

エネルギー棟
33.倉庫(1)
34.倉庫(2)
35.送風機室

3階

専攻科棟
1.演習室(370)
2.ビジネス演習室
3.デザインCGルーム
4.デザイン実験室(2)
5.デザインビジュアル実験室(1)
6.ビジネス資料室
7.ビジネス実験室
8.造形計画室
9.暗室
10.写植印字室
11.デザインビジュアル実技室

研究棟
12.演習室(301)
13.演習室(302)
14.演習室(303)
15.演習室(304)
16.演習室(305)
17.演習室(306)
18.非常勤講師室
19.教員室(308)
20.教員室(309)
21.教員室(310)
22.教員室(311)
23.教員室(312)
24.教員室(313)
25.教員室(314)
26.教員室(315)
27.教員室(316)
28.教員室(317)
29.教員室(318)
30.教員室(319)
31.教員室(320)
32.教員談話室
33.事務室

4階

専攻科棟
1.演習室(470)
2.金属実験室
3.複合材料実験室1
4.講義室(471)
5.NMR室
6.漆実験室2
7.漆実験室1
8.木材実験室2
9.産業工芸資料室
10.複合材料実験室2

研究棟
11.演習室(401)
12.演習室(402)
13.演習室(403)
14.教員室(404)
15.教員室(405)
16.教員室(406)
17.教員室(407)
18.教員室(408)
19.教員室(409)
20.教員室(410)
21.教員室(411)
22.教員室(412)
23.教員室(413)
24.教員室(414)
25.教員室(415)
26.教員室(416)
27.教員室(417)
28.教員室(418)

3.3.4　年表(後期)

会計課

年　度	竣　工　日	工　　事　　名
平成５年度	Ｈ５.11.30	講義演習棟エレベータ設備工事が竣工する
	Ｈ５.12.20	実験実習棟デザイン実験室模様替工事が竣工する
平成６年度	Ｈ６．６.20	テニスコート夜間照明設備工事が竣工する
	Ｈ７．１.31	研究棟コンピュータ室模様替工事が竣工する
	Ｈ７．２.10	情報ネットワーク配線工事が竣工する
	Ｈ７．３.31	電話交換機設備更新工事が竣工する
平成７年度	Ｈ７．８.30	講義演習棟工芸演習室模様替工事が竣工する
平成９年度	Ｈ９.10.31	講義演習棟等自動ドア取設工事が竣工する
平成10年度	H10.12.22	体育館等屋上防水改修工事が竣工する
	H10.12.25	体育館課外活動室間仕切取設工事が竣工する
	H11．１.20	講義演習棟等屋上防水補修工事が竣工する
平成11年度	H12．３.30	講義棟大講義室等空調機取設工事が竣工する
平成12年度	H12.12.25	図書館防水改修工事が竣工する
	H13．３.30	講義演習棟談話室模様替工事が竣工する
	H13．３.30	講義管理棟保健管理センター模様替工事が竣工する
平成13年度	H13.12．７	講義演習棟等防水改修工事が竣工する
	H14．３.29	テニスコート改修工事が竣工する
	H14．３.29	高速キャンパス情報ネットワーク工事が竣工する
平成14年度	H14.12.19	実験実習棟等防水改修工事が竣工する
	H15．３.31	体育館課外活動室模様替工事が竣工する
平成15年度	H16．１.13	講義管理棟等防水改修工事が竣工する
平成16年度	H16.11.25	講義演習棟講堂空気調和機取替工事が竣工する
平成17年度	H17．９.26	校舎(芸術文化学部)改修工事が竣工する
	H17．９.26	校舎(芸術文化学部)電気設備改修工事が竣工する
	H17．９.26	校舎(芸術文化学部)機械設備改修工事が竣工する

3.4　学生課

3.4.1　大学説明会およびオープンキャンパス参加者数(後期)

平成年度	17		16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
参加者人数	83(注１)	518(注２)	478	607	556	523	269	266	323	302	324	286	349

注１：(新)富山大学芸術文化学部説明会(教員向け)
注２：(新)富山大学芸術文化学部オープンキャンパス

3.4.2　入学志願者および入学者

3.4.2.1　学科

	学科名	産業工芸学科					産業情報学科					合計
年度	専攻名	金属工芸	漆工芸	木材工芸	産業デザイン	計	経営実務	情報処理	ビジネス外語(英)	ビジネス外語(中)	計	
	入学定員	20	15	15	25	75	40	40	45		125	200
昭和61年	志願者	13	21	17	100	151	321	632	240	72	1,265	1,416
	受験者	13	21	17	96	147	311	604	230	71	1,216	1,363
	入学者	20	15	17	22	74	46	46	36	19	147	221
62	志願者	24	30	25	155	234	346	662	269	76	1,353	1,587
	受験者	24	28	25	146	223	317	615	241	72	1,245	1,468
	入学者	26	15	16	28	85	44	36	29	18	127	212
63	志願者	24	31	23	126	204	381	427	237	65	1,110	1,314
	受験者	24	30	21	118	193	369	382	217	61	1,029	1,222
	入学者	20	16	17	26	79	42	44	30	15	131	210
平成元年	志願者	29	34	38	115	216	396	497	238	65	1,196	1,412
	受験者	26	32	38	105	201	374	468	222	56	1,120	1,321
	入学者	20	15	17	25	77	48	40	30	17	135	212
2	志願者	28	35	45	98	206	332	422	235	72	1,061	1,267
	受験者	25	34	43	97	199	312	389	204	59	964	1,163
	入学者	21	15	15	26	77	45	40	33	17	135	212
3	志願者	26	19	28	88	161	279	353	208	71	911	1,072
	受験者	25	19	28	86	158	268	322	185	66	841	999
	入学者	20	18	16	24	78	43	40	30	17	130	208
4	志願者	32	27	16	83	158	252	357	164	56	829	987
	受験者	32	26	16	75	149	232	326	144	48	750	899
	入学者	20	15	15	26	76	43	40	32	15	130	206
5	志願者	32	23	40	65	160	169	226	150	55	600	760
	受験者	26	23	38	61	148	157	211	133	54	555	703
	入学者	20	16	15	26	77	47	41	34	15	137	214
6	志願者	39	22	33	61	155	190	254	115	41	600	755
	受験者	37	20	32	56	145	182	235	101	39	557	702
	入学者	22	16	15	25	78	41	40	31	15	127	205
7	志願者	47	16	23	59	145	130	163	122	51	466	611
	受験者	43	16	21	56	136	120	151	107	42	420	556
	入学者	20	15	15	25	75	40	40	30	16	126	201
8	志願者	35	25	36	78	174	142	132	125	44	443	617
	受験者	31	24	33	70	158	127	118	101	43	389	547
	入学者	22	15	15	25	77	43	40	30	15	128	205
9	志願者	35	28	33	75	171	135	133	115	38	421	592
	受験者	31	27	31	72	161	125	127	107	34	393	554
	入学者	20	16	15	25	76	46	48	33	17	144	220
10	志願者	38	28	24	58	148	110	141	108	50	409	557
	受験者	33	26	24	57	140	106	131	96	45	378	518
	入学者	23	18	16	25	82	41	40	33	15	129	211
11	志願者	46	31	33	78	188	124	163	139	36	462	650
	受験者	40	29	31	77	177	123	154	119	34	430	607
	入学者	20	15	15	25	75	40	40	30	15	125	200

	学科名	産業造形				産業デザイン	地域ビジネス					合計
年度	コース名	金属工芸	漆工芸	木材工芸	計		経営	情報	国際・英語	国際・中国語	計	
	入学定員	20	15	15	50	25	40	40	30	15	125	200
平成12	志願者	37	22	28	87	72	133	157	94	39	423	582
	受験者	36	20	27	83	66	121	149	90	35	395	544
	入学者	21	15	17	53	28	40	37	34	15	126	207
13	志願者	21	20	21	62	81	89	139	126	36	390	533
	受験者	17	19	21	57	79	88	130	120	35	373	509
	入学者	23	16	16	55	26	45	40	35	18	138	219
14	志願者	22	23	28	73	105	156	162	139	51	508	686
	受験者	19	23	28	70	103	153	155	135	48	491	664
	入学者	23	16	18	57	25	41	48	29	20	138	220
15	志願者	41	29	39	109	120	161	153	140	47	501	730
	受験者	40	28	37	105	118	156	150	127	42	475	698
	入学者	21	14	18	53	26	45	33	29	18	125	204
16	志願者	57	21	50	128	118	130	91	146	30	397	643
	受験者	55	20	50	125	115	125	87	138	28	378	618
	入学者	18	17	15	50	26	40	55	32	13	140	216
17	志願者	31	28	29	88	125	158	109	154	47	468	681
	受験者	30	28	29	87	115	149	105	147	44	445	647
	入学者	19	16	16	51	27	33	42	35	16	126	204

3.4.2.2　専攻科（1年制）（志：志願者、受：受験者、入：入学者を示す）

専　攻　名	入学定員	昭和63		平成元		2		3		4		5		6	
		志	入	志	入	志	入	志	入	志	入	志	入	志	入
地域産業専攻	10	14	11	4	4	10	7	13	8	8	8	13	10	13	12

専攻科（2年制）

専　攻　名	入学定員	平成7		8		9		10		11		12		13		14		15		16		17	
		志	入	志	入	志	入	志	入	志	入	志	入	志	入	志	入	志	入	志	入	志	入
産業造形専攻	14	22	17	22	16	29	18	24	18	30	20	32	20	30	21	32	21	31	20	38	23	44	23
産業デザイン専攻	5	6	6	9	7	7	5	6	6	11	7	8	7	11	8	13	8	10	8	9	9	14	8
地域ビジネス専攻	6	5	5	6	5	1	1	7	5	13	7	10	6	5	4	8	8	15	7	16	7	11	9
計	25	33	28	37	28	37	24	37	29	54	34	50	33	46	33	53	37	56	35	63	39	69	40

3.4.3　学生定員及び現員（後期）

学科／専攻科		学科												専攻科				
		産業造形				産業デザイン		地域ビジネス					計	産業造形	産業デザイン	地域ビジネス	計	総計
コース／専攻		金属工芸	漆工芸	木材工芸	小計	プロダクトデザイン・ビジュアルデザイン	小計	経営	情報	国際・英語	国際・中国語	小計						
入学定員		50			50	25	25	125				125	200	14	5	6	25	225
平成12年	学科、専攻科／1年	21(4)	15(3)	17(7)	53(14)	28(2)	28(2)	41(3)	38(0)	34(0)	15(1)	128(4)	209(20)	20(3)	7(2)	6(0)	33(5)	242(25)
	学科、専攻科／2年	20(4)	15(1)	15(4)	50(9)	24(5)	24(5)	39(1)	41(3)	30(0)	14(1)	124(5)	198(19)	22(6)	7(1)	7(2)	36(9)	234(28)
	合　計	41(8)	30(4)	32(11)	103(23)	52(7)	52(7)	80(4)	79(3)	64(0)	29(2)	252(9)	407(39)	42(9)	14(3)	13(2)	69(14)	476(53)
13	学科、専攻科／1年	24(8)	16(2)	16(2)	56(12)	26(4)	26(4)	47(3)	41(8)	37(0)	18(3)	143(14)	225(30)	21(5)	8(2)	4(2)	33(9)	258(39)
	学科、専攻科／2年	21(5)	15(3)	17(7)	53(15)	28(2)	28(2)	42(3)	39(1)	33(0)	14(1)	128(5)	209(22)	22(4)	7(2)	7(0)	36(6)	245(28)
	合　計	45(13)	31(5)	33(9)	109(27)	54(6)	54(6)	89(6)	80(9)	70(0)	32(4)	271(19)	434(52)	43(9)	15(4)	11(2)	69(15)	503(67)
14	学科、専攻科／1年	23(3)	16(5)	18(2)	57(10)	25(1)	25(1)	42(2) ①	49(6) ①	29(1)	20(2)	140(11) ②	222(22) ②	21(5)	8(1)	8(1) ②	37(7) ②	259(29) ④
	学科、専攻科／2年	26(9) ①	16(2)	15(2)	57(13) ①	27(4)	27(4)	47(3) ②	41(8) ①	38(0) ①	18(3)	144(14) ④	228(31) ⑤	21(5)	8(2)	4(2)	33(9)	261(40) ⑤
	合　計	49(12) ①	32(7)	33(4)	114(23) ①	52(5)	52(5)	89(5) ③	90(14) ②	67(1) ①	38(5)	284(25) ⑥	450(53) ⑦	42(10)	16(3)	12(3) ②	70(16) ②	520(69) ⑨
15	学科、専攻科／1年	22(1)	14(1)	18(4)	54(6)	26(5)	26(5)	47(1) ②	34(3) ①	29(1)	18(2)	128(7) ③	208(18) ③	20(1) ①	8(1)	7(2) ①	35(4) ②	243(22) ⑤
	学科、専攻科／2年	24(3)	16(6)	19(3)	59(12)	26(1)	26(1)	44(3) ③	48(7) ①	30(1)	20(2)	142(13) ④	227(26) ④	22(5)	8(1)	8(1) ②	38(7) ②	265(33) ⑥
	合　計	46(4)	30(7)	37(7)	113(18)	52(6)	52(6)	91(4) ⑤	82(10) ②	59(2)	38(4)	270(20) ⑦	435(44) ⑦	42(6) ①	16(2)	15(3) ③	73(11) ④	508(55) ⑪
16	学科、専攻科／1年	19(5) ①	17(3)	15(4)	51(12) ①	26(3)	26(3)	41(2)	55(8)	32(2)	13(2)	141(14)	218(29) ①	23(7)	9(1)	7(2) ①	39(10) ①	257(39) ②
	学科、専攻科／2年	23(1) ①	15(2)	18(5)	56(8) ①	27(4)	27(4)	47(1) ②	34(3) ①	29(1)	18(2)	128(7) ③	211(19) ④	24(3) ①	8(1)	7(2) ①	39(6) ②	250(25) ⑥
	合　計	42(6) ②	32(5)	33(9)	107(20) ②	53(7)	53(7)	88(3) ②	89(11) ①	61(3)	31(4)	269(21) ③	429(48) ⑤	47(10) ①	17(2)	14(4) ②	78(16) ③	507(64) ⑧
17	学科、専攻科／1年	19(1)	16(3)	16(4)	51(8)	27(8)	27(8)	35(5) ②	42(3)	35(3)	16(1)	128(12)	206(28) ②	23(3) ①	8(1)	9(1) ②	40(5) ③	246(33) ⑤
	学科、専攻科／2年	20(5) ①	17(4)	14(3)	51(12) ①	27(3)	27(3)	42(2)	54(8)	31(2)	13(2)	140(14)	218(29) ①	25(7)	9(1)	8(2) ①	42(10) ①	260(39) ②
	合　計	39(6) ①	33(7)	30(7)	102(20) ①	54(11)	54(11)	77(7) ②	96(11)	66(5)	29(3)	268(26) ②	424(57) ③	48(10) ①	17(2)	17(3) ③	82(15) ④	506(72) ⑦

（　　）内は男子で内数
○内は留学生数で内数

3.4.4　出身地別学生数(後期)

地域＼平成年度		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	合計
北海道			1	1		1	2	2			3	2	2	14
東北地方	青　森					2		1						3
	岩　手	1(1)	1				1	1	1(1)		2		2(1)	9(3)
	宮　城									2				2
	秋　田	1					1	2	1					5
	山　形			2(1)	1									3(1)
	福　島												1	1
関東地方	茨　城	1	1(1)			1			1					4(1)
	栃　木	2(1)							1(1)				1	4(2)
	群　馬			2(1)		1(1)					1(1)			4(3)
	埼　玉		2(1)	3(3)	2(2)	1		1(1)	1	1		2(1)	1	14(8)
	千　葉		1				1	1		2(1)	1	1		7(1)
	東　京	2(1)	3(1)	2(1)	1	3	3(1)	3	3(1)	3(1)	3(1)	3(1)		29(8)
	神奈川	1(1)	1			2(1)			2	1	2		2(2)	11(4)
中部地方	新　潟	3	4(1)	2(1)	2(1)	2	1	1		2	4(1)	1	4(1)	26(5)
	富　山	123(7)	115(5)	120(8)	126(4)	116(5)	109(8)	108(5)	124(10)	132(10)	95(5)	122(14)	116(14)	1,406(95)
	石　川	37(1)	38	42(3)	51(1)	43	43(2)	49(5)	46(2)	48(2)	59(5)	52(3)	47(3)	555(27)
	福　井	8	4	2	9	9	8	7	8(2)	3	4(1)	6(1)	3(1)	71(5)
	長　野	1	3	3		2	5(2)	7(1)		2(1)		2	1(1)	26(5)
	山　梨				1									1
	岐　阜	2(2)	6(1)	5(1)	4(1)	1			3(1)	2	2(1)	3(1)	1	29(8)
	静　岡	1	2		3	1				1	1	1		10
	愛　知	3	4(1)	7(1)	6(3)	3	5	1	5(2)	2	2		1	39(7)
近畿地方	三　重			2		3		1	1	1		1		9
	滋　賀		1(1)	1			1		1(1)			1	3	8(2)
	京　都	6(5)	1	3(1)	2(1)	2(2)	2(1)	1	2(2)	3	5(1)	4(2)	2(1)	33(16)
	大　阪	2(1)	3(1)	5	4(3)	7(1)	1	5(1)	5(1)	3(1)	2	6	4	47(9)
	兵　庫	1	2		1	1	3(1)	2(1)	3	2	8	1(1)	3(1)	27(4)
	奈　良						1			1	1	1	1	5
	和歌山													
中国地方	鳥　取			1					1					2
	島　根								1					1
	岡　山		2	1(1)		1(1)	2(1)			3(1)				9(4)
	広　島	2	1				2(1)				2	1(1)	1	9(2)
	山　口									1		2		3
四国地方	徳　島				1									1
	香　川	2	2	1	2(1)	2	3(1)	4(1)	2	3(2)	2(1)		2	25(6)
	愛　媛		1			2	1	1	1			1(1)		7(1)
	高　知													
九州地方	福　岡	3(1)				1(1)	1	5(4)	2(2)	2(2)	3(1)	1(1)	3(1)	21(13)
	佐　賀													
	長　崎													
	熊　本	1	1(1)		1	1	1	1	1(1)		1			8(2)
	大　分	1												1
	宮　崎								2				1(1)	3(1)
	鹿児島					3		3	1(1)		1	2(1)	1	11(2)
沖　縄					1									1
合計		204(21)	200(14)	205(22)	218(17)	211(12)	197(18)	207(19)	219(28)	220(21)	204(18)	216(28)	203(27)	2,504(245)

(　　)内は男子で内数

3.4.5　授業料免除および奨学金(後期)

3.4.5.1　授業料免除許可者数

授業料免除						
年度	前期		後期		合計	
	全額	半額	全額	半額	全額合計	半額合計
5年度	16	1	13	5	29	6
6年度	14	0	9	1	23	1
7年度	10	0	11	2	21	2
8年度	14	3	15	1	29	4
9年度	23	2	24	6	47	8
10年度	18	1	21	2	39	3
11年度	19	4	30	5	49	9
12年度	30	2	32	3	62	5
13年度	30	8	29	7	59	15
14年度	27	3	27	6	54	9
15年度	26	2	26	3	52	5
16年度	25	8	26	6	51	14
17年度	27	4	24	9	51	13
	279	38	287	56	566	94

3.4.5.2　日本育英会・日本学生支援機構奨学生採用数

奨学金		
年度	日本育英会	日本学生支援機構
5年度	25	
6年度	22	
7年度	35	
8年度	25	
9年度	33	
10年度	36	
11年度	37	
12年度	45	
13年度	58	
14年度	65	
15年度	61	
16年度		63
17年度		61
	442	124

注：日本育英会奨学金は、平成16年度から日本学生支援機構奨学金となった。

3.4.6　卒業生・修了生の進路(後期)

3.4.6.1　本科

区分 / 年度・学科名		卒業者	就職者	進学・研修等	自営・その他	就職者の内訳								
						公務	農林漁業	建設業	製造業	電気・ガス・水道	卸売・小売業	サービス	その他	計
平成5	産業工芸	80	46	26	8			1	26		6	11	2	46
	産業情報	122	110	8	4	10		3	21	4	19	37	16	110
	計	202	156	34	12	10		4	47	4	25	48	18	156
6	産業工芸	76	35	36	5			4	21		7	3		35
	産業情報	138	122	11	5	7		4	41	2	18	25	25	122
	計	214	157	47	10	7		8	62	2	25	28	25	157
7	産業工芸	70	34	29	7	1			25		3	4	1	34
	産業情報	126	118	6	2	5		6	39	3	14	25	26	118
	計	196	152	35	9	6		6	64	3	17	29	27	152
8	産業工芸	77	27	31	19			1	14		4	7	1	27
	産業情報	122	109	10	3	8		4	39	1	7	23	27	109
	計	199	136	41	22	8		5	53	1	11	30	28	136
9	産業工芸	74	29	27	18			1	17		3	7	1	29
	産業情報	125	112	11	2	6			39	4	15	24	24	112
	計	199	141	38	20	6		1	56	4	18	31	25	141
10	産業工芸	71	23	27	21			1	9	1	3	8	1	23
	産業情報	136	111	16	9	4		2	26	5	27	24	23	111
	計	207	134	43	30	4		3	35	6	30	32	24	134
11	産業工芸	80	21	40	19			1	8		3	9		21
	産業情報	126	106	15	5	2		2	27	1	22	19	33	106
	計	206	127	55	24	2		3	35	1	25	28	33	127
12	産業工芸	70	24	35	11			2	12		4	6		24
	産業情報	121	107	12	2	2			24	3	21	32	25	107
	計	191	131	47	13	2		2	36	3	25	38	25	131
13	産業造形	50	6	27	17				1		4	1		6
	産業デザイン	27	13	11	3			1	5		3	4		13
	地域ビジネス	127	105	18	4	1		2	19	2	29	24	28	105
	計	204	124	56	24	1		3	25	2	36	29	28	124

年度・学科名	区分	卒業者	就職者	進学・研修等	自営・その他	就職者の内訳								
						公務	農林漁業	建設業	製造業	電気・ガス・水道	卸売・小売業	サービス	その他	計
14	産業造形	54	14	27	13	1			2		5	6		14
	産業デザイン	24	11	9	4				4		2	3	2	11
	地域ビジネス	140	110	20	10	3		1	24	1	22	32	27	110
	計	218	135	56	27	4		1	30	1	29	41	29	135
15	産業造形	54	27	23	4				15		8	4		27
	産業デザイン	23	12	11					6		2	3	1	12
	地域ビジネス	138	109	23	6	3		4	17	1	29	23	32	109
	計	215	148	57	10	3		4	38	1	39	30	33	148
16	産業造形	54	19	29	6			3	8		5	1	2	19
	産業デザイン	25	11	12	2				5			4	2	11
	地域ビジネス	126	104	17	5			3	16	2	26	8	49	104
	計	205	134	58	13			6	29	2	31	13	53	134

3.4.6.2　専攻科

年度・専攻名	区分	修了者	就職者	進学・研修等	自営・その他	就職者の内訳								
						公務	農林漁業	建設業	製造業	電気・ガス水道	卸売・小売業	サービス	その他	計
平成5	地域産業	10	7	2	1			1	6					7
6	地域産業	12	4	2	6				4					4
8	産業造形	15	8	3	4				5		1	1	1	8
	産業デザイン	6	6						4		2			6
	地域ビジネス	4	4						3			1		4
	計	25	18	3	4				12		3	2	1	18
9	産業造形	17	8	1	8	1			4		2	1		8
	産業デザイン	7	6	1					5			1		6
	地域ビジネス	5	5									5		5
	計	29	19	2	8	1			9		2	7		19
10	産業造形	16	9	1	6				8			1		9
	産業デザイン	5	5						1			4		5
	地域ビジネス	1	1									1		1
	計	22	15	1	6				9			6		15
11	産業造形	17	10		7	1			6			3		10
	産業デザイン	6	4		2				2			2		4
	地域ビジネス	5	5						3			2		5
	計	28	19	0	9	1			11			7		19
12	産業造形	19	13	2	4	1			7		3	2		13
	産業デザイン	7	7						2			5		7
	地域ビジネス	6	5		1				2			3		5
	計	32	25	2	5	1			11		3	10		25
13	産業造形	21	11	1	9			1	3		4	3		11
	産業デザイン	7	5		2				5					5
	地域ビジネス	7	5		2	1		1	1			1	1	5
	計	35	21	1	13	1		2	9		4	4	1	21
14	産業造形	20	12	4	4				10		1	1		12
	産業デザイン	8	7		1			1	6					7
	地域ビジネス	4	3		1				1			2		3
	計	32	22	4	6			1	17		1	3		22
15	産業造形	18	9	3	6			1	5		1	2		9
	産業デザイン	8	8						7			1		8
	地域ビジネス	8	5		3			1	1		1		2	5
	計	34	22	3	9			2	13		2	3	2	22
16	産業造形	21	13	3	5				9		1	1	2	13
	産業デザイン	8	7		1				6		1			7
	地域ビジネス	6	3	1	2								3	3
	計	35	23	4	8				15		2	1	5	23

3.4.6.3　専攻科修了者「学士」学位取得状況

平成17年４月28日

専攻名	学士区分	年度	修了者数	申請者数	合格者数	合格率(%)
産業造形	芸術学	8	15	7	5	71
		9	17	17	14	82
		10	16	15	13	87
		11	17	15	15	100
		12	19	18	16	89
		13	21	21	21	100
		14	20	16	16	100
		15	18	18	18	100
		16	21	20	18	90
産業デザイン	芸術工学	8	6	2	2	100
		9	7	5	5	100
		10	5	5	4	80
		11	6	5	5	100
		12	7	6	6	100
		13	7	6	6	100
		14	8	8	8	100
		15	8	8	8	100
		16	8	8	8	100
地域ビジネス	経営学	8	4	4	4	100
		9	5	5	4	80
		10	1	1	1	100
		11	5	5	5	100
		12	6	5	5	100
		13	7	7	6	86
		14	4	4	4	100
		15	8	7	7	100
		16	6	4	4	100
合計		8	25	13	11	85
		9	29	27	23	85
		10	22	20	17	85
		11	28	25	25	100
		12	32	29	27	93
		13	35	34	33	97
		14	32	28	28	100
		15	34	33	33	100
		16	35	32	30	94

3.4.7　インターンシップ一覧

年度	専攻(分野)	人数
平成13	産業造形(木材)	1
	産業デザイン	1
14	産業造形(金属)	4
	〃　(漆)	2
	〃　(木材)	3
15	産業造形(木材)	1
	産業デザイン	2
16	産業造形学科木材コース	2
	産業造形(木材)	1
17	産業デザイン	1

注　専攻科は産業造形専攻(金属、漆、木材)、産業デザイン専攻、地域ビジネス専攻があります。
授業科目　特別講義「インターンシップ」
単位　１週間：１単位
　　２週間：２単位

3.4.8　留学生の交流状況 (平成17年７月26日現在)

・平成８年度から、大連外国語学院との友好協力協定に基づき、短期語学研修を行っている。
・平成10年度から、ラハティ・ポリテクニク(フィンランド)との友好協力協定に基づき、留学生の交流を行っている。
・平成15年度から、ウエスタンオレゴン大学(米国)との友好協力協定に基づき、留学生の交流及び短期語学研修を開始した。
・留学生に対する日本語教育を含む教育指導体制の充実が課題である。

１．受入外国人留学生数

区分／年度	学科学生	専攻科学生	特別聴講学生(ラハティポリテクニク)	研究生	計
平成９	1	1			2
10	2		2		4
11	1		2	1	4
12	2			1	3
13	6		1		7
14	2	2	3		7
15	3	2	2		7
16	1	1	1		3
17	2	3	4	1	10
備考	富山県国際交流奨学金月額１万円／富山県国際理解研究費月額５千円分図書券／私費外国人留学生学習奨励費月額５万２千円				

※全て私費留学生である。

２．大連外国語学院(中国)との交流

年度	履修者数(人)	備　　考
平成８	13	中国語コースのみ
9	15	中国語コースのみ
10	9	中国語コースのみ
11	14	中国語コースのみ
12	20	造形学科６名、中国語コース14名
13	22	造形学科２名、ビジネス学科20名(中国15名)
14	39	造形学科12名、デザイン学科２名、ビジネス学科24名(中国17名)、ビジネス専攻１名
15	0	中止(SARS 問題のため)
16	26	ビジネス学科24名(中国24名)、ビジネス専攻２名
17	14	ビジネス学科14名(中国14名)

大連外国語学院において、短期語学研修(19日間)を実施し、学科学生は、中国語海外研修(２又は４単位)、専攻科学生は、海外研修(４単位)として認定している。
・履修者数
※　16年度より、研修は８月～９月期で実施。

３．ラハティ・ポリテクニク(フィンランド)との交流

１年の期間内で相互に学生の派遣及び受入れを行っている(授業料等不徴収)。

・交流学生数

年度	派遣(人)	受入(人)	備　　考
10	0	2	
11	2	2	派遣：専攻科産業造形専攻
12	2	0	派遣：専攻科産業造形専攻
13	2	1	派遣：専攻科産業造形専攻 専攻科産業デザイン専攻
14	3	3	派遣：専攻科産業造形専攻　２名 産業デザイン学科　１名
15	4	2	派遣：専攻科産業造形専攻　３名 産業造形学科　１名
16	2	1 (1)	派遣：専攻科産業造形専攻　２名
17	3 (1)	4 (1)	派遣：専攻科産業造形専攻　３名

※(　)は、短期留学推進制度(受入・派遣)学生数

４．ウエスタンオレゴン大学(米国)との交流

・履修者数

年度	履修者数(人)	備　　考
15	14	デザイン学科２名、ビジネス学科９名(英語６名)、専攻科３名
16	16	地域ビジネス学科16名(英語10名)
17	13	地域ビジネス学科13名(英語11名､経営2名)

平成15年度から、ウエスタンオレゴン大学において、短期語学研修(26～27日間)を実施し、学科学生は特別講義「英語海外研修」(４単位)、専攻科学生は海外研修(４単位)として認定している。

3.4.9　学科教育課程

1　基礎教育科目（産業造形学科，産業デザイン学科，地域ビジネス学科共通）

◎：必修科目　　○：選択必修科目　　空欄：選択科目

科目のねらい		授業科目	授業方法	単位数	産業造形学科				産業デザイン学科		地域ビジネス学科			
					履修コース				履修コース		履修コース			
					金属工芸	漆工芸	木材工芸	（造形工学）	プロダクトデザイン	ビジュアルデザイン	経営	情報	国際・英語	国際・中国語
自分を知る	健康	スポーツ健康科学Ⅰ	講義・実技	1										
		スポーツ健康科学Ⅱ	〃	1										
	体育	体育Ⅰ（からだ育て）	〃	1	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎
		体育Ⅱ（からだ気づき）	〃	1	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎
	哲学美学	人と文化	講　義	2	○									
高短を知る		造形入門	〃	2					*◎		*◎	*◎	*◎	*◎
		デザイン入門	〃	2	*◎	*◎	*◎	*◎			*◎	*◎	*◎	*◎
		ビジネス入門	〃	2	*◎	*◎	*◎	*◎	*◎					
他を知る	言葉でもって	英語の読み方	〃	2	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎
		英語での表現	〃	2	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎
		英語会話入門	〃	2		○								
		インターネット利用のための英語	〃	2									○	
		工芸のための英語	〃	2										
		中国語入門	〃	2										
	コンピュータでもって	情報処理入門	〃	2	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎
		ビジネス情報処理入門	〃	2							○	○	○	○
		統計データ分析入門	〃	2								○		
		CG 入門	〃	2					◎					
社会を知る	政治	日本の政治	〃	2										
	法律	市民と法	〃	2							○			
	経済	経済システム	〃	2							○			
	文化	比較文化	〃	2			○						○	○
	環境	地球環境と人間	〃	2	○								○	○
	地域・経営	地域産業史	〃	2	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎
		生産管理	〃	2										
		まちづくり	〃	2										
モノを知る	工芸一般	工芸の世界	〃	2	○	○	○							
	材料	工芸材料	〃	2	○	○								
	色彩	色彩入門	〃	2			○		○					
	建築	人と空間	〃	2										
	技術	科学と技術	〃	2										
		産業デザイン史	〃	2			○		○					
自分を表現する	形態発想	形の発想法	〃	2					○					
	平面・立体表現	造形観察・表現（平面）	演　習	2	◎	◎	◎	◎	○					
		造形観察・表現（立体）	〃	2		○			○					
	図学	図法と製図	講　義	2	○	○								
		図　　学	〃	2			○		○					
		プレゼンテーション	〃	2	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎
自分を役立たせる	経営実務	企業経営入門	〃	2							○	○	○	○
	会計情報	企業会計	〃	2							○	○		
	経営情報	経営情報システム	〃	2							○	○	○	○
	マーケティング	マーケティング	〃	2			○				○	○	○	○
				必修	16	16	16	16	16		14	14	14	14
				選必	6	6	6	6	6		8	8	8	8
				選択	8以上	8以上	8以上	8以上	8以上		8以上	8以上	8以上	8以上
				計	30以上	30以上	30以上	30以上	30以上		30以上	30以上	30以上	30以上

（注）1　この表に掲げる授業科目のほか、「特別講義」を設けることができることとし、講義名及び単位数はその都度定める。
2　造形工学コースにおいては、入学時におけるコースがいずれであるかにより、選択必修科目が異なる。
3　選択必修科目において、卒業所要単位数を超えて履修した場合は選択科目として取り扱う。
4　＊造形入門、デザイン入門及びビジネス入門については、所属する学科以外の１科目を必修とし、他は選択科目として取り扱う。

2　専門教育科目

(1)産業造形学科

◎：必修科目　○：選択必修科目　空欄：選択科目

授業科目	授業方法	単位数	履修コース			
			金属工芸	漆工芸	木材工芸	(造形工学)
卒業研究・制作	実習	6	◎	◎	◎	◎
金属学入門	講義	2	◎			
鋳金加工法	〃	2	◎			
彫鍛金加工法	〃	2	◎			
込型鋳造	実習	2	◎			
彫金	〃	2	◎			
鍛金	〃	2	◎			
金属材料	講義	2	○			
金属工芸基礎加工	実習	2	○			
生型鋳造	〃	2	○			
蝋型鋳造	〃	2	○			
装身具入門	〃	2	○			
原型制作	〃	2	◎			
金属工芸史	講義	2				
金属加工法	〃	2				
金属表面処理	〃	2				
金属工芸研修	講義演習	2				
漆工芸史	講義	2		◎		
漆工制作法	演習	2		◎		
漆工素地制作	実習	2		◎		
漆塗装	〃	2		◎		
蒔絵	〃	2		◎		
螺鈿	〃	2		○		
漆工技法・材料	講義	2		○		
化学塗料	〃	2		○		
化学塗装	演習	2		○		
スクリーン印刷	〃	2		○		
変わり塗り	実習	2		○		
漆工芸研修	演習	2		○		
木材の性質	講義	2			◎	
家具構法	〃	2			◎	
手道具での加工	演習	2			◎	
木工機械での加工	実習	2			◎	
室内設計製図	〃	2			◎	
家具制作	〃	2			◎	
加工機械の安全操作	講義	2	○	○	○	
室内計画	〃	2			○	
製品計画	〃	2			○	
木材造形の基礎	講義	2			○	
挽物	実習	2			○	
木彫	〃	2			○	
木材実験	実験	2				
構造設計	講義	2				
建築計画	〃	2				
造形工学基礎	〃	2				◎
造形工学実験	実験	2				◎
卒業所要単位数		必修	20	16	18	18
		選必	6	10	8	8
		選択	8以上	8以上	8以上	8以上
		計	34以上	34以上	34以上	34以上

(注) 1　この表に掲げる授業科目のほか、「特別講義」を設けることができることとし、講義名及び単位数はその都度定める。
2　造形工学コースは、副として履修するコースであり、主として履修する金属工芸、漆工芸、木材工芸の各コースのいずれかにより、必修科目及び選択必修科目が異なる。
3　選択必修科目において、卒業所要単位数を超えて履修した場合は選択科目として取り扱う。

(2)産業デザイン学科

◎：必修科目　○：選択必修科目　空欄：選択科目

授業科目	授業方法	単位数	履修コース	
			プロダクトデザイン	ビジュアルデザイン
卒業研究・制作	実習	6	◎	◎
デザイン材料	講義	2	◎	◎
形の発想とデザイン	実習	2	◎	◎
デザイン基礎表現	演習	2	◎	◎
デザインプレゼンテーション	〃	2	◎	◎
製品デザイン	実習	2	◎	
CI デザイン	〃	2		◎
プロダクト基礎表現	演習	2	○	○
ビジュアル基礎表現	〃	2	○	○
広告デザイン	〃	2		○
製図	〃	2	○	○
タイポグラフィ	〃	2	○	○
リビングデザイン	〃	2	○	
CG デザイン	〃	2	○	○
CG 応用デザイン	〃	2	○	○
デザインの進め方	〃	2		
インターフェースデザイン	〃	2		
パブリックスペース	〃	2		
化学塗装	〃	2		
スクリーン印刷	〃	2		
木工機械での加工	実習	2		
構造設計	講義	2		
加工機械の安全操作	〃	2		
室内計画	〃	2		
装身具入門	実習	2		
造形工学基礎	講義	2		
造形工学実験	実験	2		
卒業所要単位数		必修	16	16
		選必	8	8
		選択	10以上	10以上
		計	34以上	34以上

(注) 1　この表に掲げる授業科目のほか、「特別講義」を設けることができることとし、講義名及び単位数はその都度定める。
2　選択必修科目において、卒業所要単位数を超えて履修した場合は選択科目として取り扱う。

（3）地域ビジネス学科

◎：必修科目　○：選択必修科目　空欄：選択科目

授業科目	授業方法	単位数	履修コース			
			経営	情報	国際・英語	国際・中国語
卒業研究	演習	4	◎	◎	◎	◎
国際ビジネス	講義	2	○			
企業分析	〃	2	○			
コンピュータ会計	〃	2	○			
需要予測	〃	2	○			
ビジネス法	〃	2	○			
社会環境と産業	〃	2	○			
簿記入門	〃	2	○			
中級簿記	〃	2				
経営管理	〃	2	○			
現代の企業経営	〃	2	○			
管理会計	〃	2	○			
国際経済	〃	2	○			
ビジネス情報処理	〃	2	○	○		
地域経済	〃	2				
中小企業経営	〃	2				
欧米企業の経営戦略	〃	2				
プログラミング基礎	〃	4		◎		
コンピュータの基礎	〃	2		◎		
コンピュータの処理機構	〃	2		◎		
情報ネットワーク	〃	2		○		
イントラネット	〃	2		○		
システム思考法	〃	2		○		
C プログラミング初級	〃	2		○		
C プログラミング中級	〃	2		○		
ビジュアルプログラミング基礎	〃	2		○		
ビジュアルプログラミング応用	〃	2		○		
ビジネスプログラミング	〃	2		○		
アルゴリズムとデータ構造	〃	2		○		
ソフトウェア開発技法	〃	2		○		
データベース設計	〃	2		○		
英語会話基礎	〃	2	○		◎	
英語会話中級	〃	2			◎	
英語講読基礎	〃	2			◎	
英語作文基礎	〃	2			◎	
時事英語基礎	〃	2			◎	
ビジネスライティング	〃	2			◎	
英語音声演習基礎	〃	2			◎	
英語会話上級	〃	2			◎	
英語講読上級	〃	2			◎	
英語作文上級	〃	2			○	
時事英語上級	〃	2			○	
英語音声演習上級	〃	2			○	
英米の社会と文化	〃	2			○	
検定英語	〃	2			○	
国際コミュニケーション	〃	2				
ポップスと映画の英語	〃	2				
基礎中国語 A	〃	2				*◎
基礎中国語 B	〃	2				*◎
基礎中国語 C	〃	2				*◎
中国語理解初級	〃	2				○
中国語理解中級	〃	2				○
中国語表現初級	〃	2				○
中国語表現中級	〃	2				○
応用中国語 A	〃	2				※◎
応用中国語 B	〃	2				※◎
応用中国語 C	〃	2				※◎
中国語プレゼンテーション初級	〃	2				○
中国語プレゼンテーション中級	〃	2				○
時事中国語	〃	2				○
中国文化史	〃	2				○
中国近代の歩み	〃	2				○
中国研究基礎Ⅰ	〃	2				
中国研究基礎Ⅱ	〃	2				
ビジネス中国語	〃	2				
中国語海外研修	〃	4又は2				
卒業所要単位数		必修	4	12	22	10
		選必	22	14	4	16
		選択	8以上	8以上	8以上	8以上
		計	34以上	34以上	34以上	34以上

(注) 1　この表に掲げる授業科目のほか、「特別講義」を設けることができることとし、講義名及び単位数はその都度定める。
2　中国語海外研修は、国際・中国語を履修コースとする学生は4単位、他の履修コースの学生は2単位として開講する。
3　選択必修科目において、卒業所要単位数を超えて履修した場合は選択科目として取り扱う。
4　＊「基礎中国語(A、B、C)」及び※「応用中国語(A、B、C)」は、どちらか一方を必修とし、他は選択科目として取り扱う。
5　※「応用中国語(A、B、C)」は中国語既習者を対象とする。

3.4.10　専攻教育課程

1　基礎科目（産業造形専攻、産業デザイン専攻、地域ビジネス専攻）

◎：必修科目　○：選択必修科目　空欄：選択科目

授業科目	授業方法	単位数	産業造形専攻		産業デザイン専攻	地域ビジネス専攻
			工芸を主として学習する場合	工学を主として学習する場合		
美術概論	講義	2	○	○		
日本美術史	〃	2	○	○		
西洋美術史	〃	2	○	○		
科学技術論	〃	2	○	○		○
知的所有権法規	〃	2	○	○		○
CG 演習Ⅰ	演習	2	○	○	◎	
CG 演習Ⅱ	演習	2	○	○	◎	
外国語文献講読 A	講義	2	○	◎	◎	◎
外国語文献講読 B	〃	2	○	◎	◎	◎
色彩学	〃	2	○	○		
造形工学	演習	2	○	○		
ライフスタイル	講義	2	○	○		○
地域企業経営	〃	2	○	○		
工芸科教育法	〃	2	○	○		
美術科教育法	〃	2	○	○		
地域経済分析	〃	2				○
時事英語研究	〃	2				○
時事中国語研究	〃	2				○
ビジネス中国語研究	〃	2				○
世界の英語	〃	2				○
英米文化研究	〃	2				○
総合中国語初級	〃	2				○
総合中国語中級	〃	2				○
中国語理解上級	〃	2				○
中国語表現上級	〃	2				○
修了所要単位数	必修	−	4	8	4	
	選必	10	6	−	8	
	選択	6 以上	6 以上	8 以上	4 以上	
	計	16以上	16以上	16以上	16以上	

（注）選択必修科目において、修了所要単位数を超えて履修した場合は選択科目として取り扱う。

2　専門科目

（1）　産業造形専攻

①　工芸を主として学修する学生対象の授業科目等

授業科目	授業方法	単位数	区別 必修	区別 選択	修了所要単位数
修了制作・研究	演習	8	8		46単位以上
金属工芸演習	〃	2	8 金属、漆、木材の3分野のうちから1分野を選択する	16	
漆工芸演習	〃	2			
木材工芸演習	〃	2			
造形工芸実習(金属)Ⅰ	実習	2			
造形工芸実習(金属)Ⅱ	〃	4			
造形工芸実習(漆)Ⅰ	〃	2			
造形工芸実習(漆)Ⅱ	〃	4			
造形工芸実習(木材)Ⅰ	〃	2			
造形工芸実習(木材)Ⅱ	〃	4			
造形材料学(金属)Ⅰ	講義	2		2	
造形材料学(金属)Ⅱ	〃	2		2	
造形材料学(漆)Ⅰ	〃	2		2	
造形材料学(漆)Ⅱ	〃	2		2	
造形材料学(木材)Ⅰ	〃	2		2	
造形材料学(木材)Ⅱ	〃	2		2	
造形材料実験(金属)Ⅰ	実験	4		4	
造形材料実験(金属)Ⅱ	〃	4		4	
造形材料実験(漆)Ⅰ	〃	4		4	
造形材料実験(漆)Ⅱ	〃	4		4	
造形材料実験(木材)Ⅰ	〃	4		4	
造形材料実験(木材)Ⅱ	〃	4		4	
平面表現演習	演習	2		2	
立体表現演習	〃	2		2	
総合工芸演習	〃	2		2	
造形発想	講義	2		2	
複合造形	実習	2		2	
材料力学	講義	2		2	
人間工学	〃	2		2	
空間デザイン論	〃	2		2	
接着	〃	2		2	
姿勢保持デザイン	〃	2		2	
家具の製造原価計算	〃	2		2	
現代の工芸	〃	2		2	
金属工芸制作法	演習	2		2	
漆工芸制作法	〃	2		2	
木材工芸制作法	〃	2		2	

(注) 1　専門科目のうちで、ⅠとⅡが開講される授業科目は、Ⅰを履修しその単位を修得しなければ、Ⅱを履修することはできない。
2　専門科目においては、この表に掲げる授業科目のほか、「特別講義」を設けることができることとし、講義名及び単位数はその都度定める。

②　工学を主として学修する学生対象の授業科目等

授業科目	授業方法	単位数	区別 必修	区別 選択	修了所要単位数
修了制作・研究	演習	8	8		46単位以上
金属工芸演習	〃	2		2	
漆工芸演習	〃	2		2	
木材工芸演習	〃	2		2	
造形工芸実習(金属)Ⅰ	実習	2		2	
造形工芸実習(金属)Ⅱ	〃	4		4	
造形工芸実習(漆)Ⅰ	〃	2		2	
造形工芸実習(漆)Ⅱ	〃	4		4	
造形工芸実習(木材)Ⅰ	〃	2		2	
造形工芸実習(木材)Ⅱ	〃	4		4	
造形材料学(金属)Ⅰ	講義	2	8 金属、漆、木材の3分野のうちから2分野を選択する	4	
造形材料学(金属)Ⅱ	〃	2			
造形材料学(漆)Ⅰ	〃	2			
造形材料学(漆)Ⅱ	〃	2			
造形材料学(木材)Ⅰ	〃	2			
造形材料学(木材)Ⅱ	〃	2			
造形材料実験(金属)Ⅰ	実験	4	8 金属、漆、木材の3分野のうちから1分野を選択する	16	
造形材料実験(金属)Ⅱ	〃	4			
造形材料実験(漆)Ⅰ	〃	4			
造形材料実験(漆)Ⅱ	〃	4			
造形材料実験(木材)Ⅰ	〃	4			
造形材料実験(木材)Ⅱ	〃	4			
平面表現演習	演習	2		2	
立体表現演習	〃	2		2	
総合工芸演習	〃	2		2	
造形発想	講義	2		2	
複合造形	実習	2		2	
材料力学	講義	2		2	
人間工学	〃	2		2	
空間デザイン論	〃	2		2	
接着	〃	2		2	
姿勢保持デザイン	〃	2		2	
家具の製造原価計算	〃	2		2	
現代の工芸	〃	2		2	
金属工芸制作法	演習	2		2	
漆工芸制作法	〃	2		2	
木材工芸制作法	〃	2		2	

(注) 1　専門科目のうちで、ⅠとⅡが開講される授業科目は、Ⅰを履修しその単位を修得しなければ、Ⅱを履修することはできない。
2　専門科目の「造形材料実験」は造形材料学で選択した2分野のうちから1分野を選択しなければならない。
3　専門科目においては、この表に掲げる授業科目のほか、「特別講義」を設けることができることとし、講義名及び単位数はその都度定める。

（2） 産業デザイン専攻

授業科目	授業方法	単位数	区別 必修	区別 選択	修了所要単位数
特別研究	演習	8	8		46単位以上
総合デザイン実習Ⅰ	実習	4	4		
総合デザイン実習Ⅱ	〃	4	4		
デザイン表現演習(平面)	演習	2	2		
デザイン表現演習(立体)	〃	2	2		
形態発想特論	講義	4		4	
デザインリサーチ論	〃	2		2	
製品評価法	〃	2		2	
画像情報処理実習	実習	2		2	
音響情報処理実習	〃	2		2	
インテリア材料学	講義	2		2	
構造計画論	〃	2		2	
産業デザイン史特論	〃	2		2	
グラフィックデザイン論	〃	2		2	
グラフィックデザイン演習	演習	2		2	
材料力学	講義	2		2	
人間工学	〃	2		2	
設計製図	演習	2		2	
空間デザイン論	講義	2		2	
空間デザイン実習	実習	2		2	
デザイン法規	講義	2		2	
住居論	〃	2		2	

(注)専門科目においては、この表に掲げる授業科目のほか、「特別講義」を設けることができることとし、講義名及び単位数はその都度定める。

（3）地域ビジネス専攻

授業科目	授業方法	単位数	区別 必修	区別 選択	修了所要単位数
特別研究	演習	8	8		46単位以上
地域ビジネス演習	〃	4	4		
経営情報	講義	2		2	
地域企業経営論	〃	2		2	
経営システム	〃	2		2	
経営戦略	〃	2		2	
財務会計	〃	2		2	
企業財務	〃	2		2	
管理会計論	〃	2		2	
原価管理	〃	2		2	
流通経済	〃	2		2	
マーケティング・マネジメント	〃	2		2	
生産マネジメント	〃	2		2	
物流システム	〃	2		2	
知識ベース管理	〃	2		2	
応用ビジネス情報処理	〃	2		2	
ビジネス・リエンジニアリング	〃	2		2	
エンドユーザコンピューティング	〃	2		2	
インターネット技術	〃	2		2	
応用ソフトウエア開発	演習	2		2	
応用データベース	講義	2		2	
特定産業英語研究	〃	2		2	
検定英語中級	〃	2		2	
欧米のニュービジネス理解	〃	2		2	
英語によるアジア事情理解	〃	2		2	
中国経済	〃	2		2	
中国ビジネス概論	〃	2		2	
海外研修	〃	4		4	

(注)専門科目においては、この表に掲げる授業科目のほか、「特別講義」を設けることができることとし、講義名及び単位数はその都度定める。

3.4.11 入試日程(後期)

年度／種類	H7年度(H6年度実施)	8(H7)	9(H8)	10(H9)	11(H10)		12(H11)	13(H12)		14(H13)	15(H14)	16(H15)	17(H16)	18(H17)
推薦、帰国・社会人	11月	11月	11月	11月	11月		11月	11月		11月	11月	11月	11月	
一般選抜・私費留学生	2月	2月	2月	2月	2月		2月	2月		2月	2月	2月	2月	
専攻科(一次)		11月	10月	10月	10月	専攻科(秋期)	10月	10月	専攻科(夏期)	7月	7月	7月	7月	7月
専攻科(二次)	2月	3月	1月	1月	1月	専攻科(冬期)	1月	1月	専攻科(秋期)	10月	10月			
									専攻科(冬期)	1月	1月	1月	1月	1月

3.4.12　行事日程(後期)

１．創己祭(学園祭)

創己祭は毎年10月下旬から11月上旬の土、日曜日の２日間で実施された。

回(平成年度)	テ　ー　マ	イ　ベ　ン　ト
8(5)		
9(6)	高岡の力こぶ	フリマ、仮装大会、模擬店、化粧講習会等
10(7)	青春チキンレース	フリマ、模擬店、チキンレース、ライブ等
11(8)	ハッスルスル	フリマ、ライブ、模擬店、作品展示等
12(9)		
13(10)	高岡ビックバン	ライブ、チキンレース、模擬店、ゲーム等
14(11)	たん・たん・たかたん♪～高短交響曲　序章～	ライブ、模擬店、ゲーム等
15(12)		
16(13)	響きだしたらとまらない	ライブ、劇、映画上映、模擬店等
17(14)	アレを超えろ	ダックレース、模擬店、サークル発表等
18(15)	花火	ライブ、模擬店、サークル発表等
19(16)	BROTHERS	ライブ、模擬店、サークル発表等
20(17)	創	ライブ、模擬店、サークル発表等

２．新入生合宿研修

新入生合宿研修は全新入生に対して、大学での学習計画、学生生活などに対するガイダンスを行うものであり、入学式後、国立立山少年自然の家で毎年実施した。

３．厚生補導研究会

厚生補導研究会は、学生たちが安全に、かつ快適な学生生活を過ごすにはどのような工夫が必要か、を多角的な見地から検討する研究会であり、毎年12月から１月の間に、１泊２日をかけて実施した。

４．サークルリーダー研修会

サークルリーダー研修会は、学生たちのサークル活動を正常かつ活性化させるために、各サークルのリーダーを集め、リーダーとしての自覚を高めさせ、また所属するサークルの活性化を図るための方策を話し合うものである。研修会は国立のと青年の家等で１泊２日をかけて実施した。

3.5　事業課

3.5.1　公開講座(後期)

年度	講　　座　　名	受講人員
平成五	造形研究Ⅰ　－人体をモチーフとして(骨格を意識する)－	15
	造形研究Ⅱ　－金属工芸の基本技法－(彫金)－	10
	小売業の経営戦略　−21世紀に向けての戦略事務−	5
	産業と教育　－教育の現場から－	23
	漢字新聞の読み方	22
	ワープロによる中国語講座(初級)	16
	「うるし」でもの造り　－木地溜塗り漆絵鉢を作る－	15
	クリェイティブ・ムーブメント　－障害者と共にからだを解き放し，心を遊ばせる－	24
	パソコン通信入門講座	24
	環境を考える	12
	イタリアの都市と広場・彫刻	23
六	造形研究Ⅰ　－人体をモチーフとして(人体の構成を考える)－	14
	造形研究Ⅱ　－金属工芸の基本技法(蝋型鋳造，コンピュータ・真鍮の鋳造)－	15
	中国語会話入門講座	20
	情報処理技術者養成講座	17
	暮らしの中のコンピュータ利用　－栄養管理－	18
	色彩学　－色彩学と現代生活の影響－	37
	わたしの生活に必要なもの　－木を使った制作－	10
	テンペラ画入門講座	15
	英語でアメリカ演劇を読む	11
	英語のファースト・ネーム　ＡｔｏＺ	20
	パソコン通信入門講座　－未経験者・初心者のための－	18
七	造形研究Ⅰ　－人体をモチーフとして(人体を量としてとらえる)－	28
	造形研究Ⅱ　－金属工芸のまとめ－	15
	シスアド技術者養成講座	19
	東アジアの女性観・子ども観　－主に中国の文学作品を通じて－	16
	木工ろくろと挽物技法　－木器－をつくる－	10
	「うるし」でもの造りパート３　−朱塗り漆椀を造る−	18
	中堅経理マンの経理の勘どころ	19
	テンペラ画入門講座	20
	インテリアデザイン入門講座	18
	英会話講座　－英会話と健康法－	23
	パソコンによるマルチメディア入門講座	15
八	造形研究　−人体をモチーフとして(感情と表現)−	17
	中国古代の鋳造技法を探る　(考察と鋳造実験)	12
	インテリアデザイン講座	23
	心地よいからだをつくろう　−ダンス･セラピー−	33
	わたしの生活に必要なもの　－木を使った制作－	11
	いんぐりっしゅ・わらえてぃ　－英語のジョークとことば遊び－	12
	「うるし」でもの造りパート４　－変わり塗りトレーを造る－	19
	楽しいパソコン入門講座	35
	中国語会話速修講座	25
	テンペラ画入門講座	15

年度	講　　座　　名	受講人員
	造形研究　－人体をモチーフとして(着衣の人体を制作する)－	15
	インターネットホームページ作成講座	24
九	伝統的蝋型鋳造による器　(香炉)制作	12
	造形研究　−人体をモチーフとして(座像をつくる)−	16
	UNIX 環境での画像処理基礎実験	6
	ビジネスにおける情報処理入門　－表計算・データベースの活用－	25
	水中運動とリラックス	17
	楽しいパソコン入門講座	29
	木工ろくろと挽物技法　－木器をつくる－	10
	高岡考現学	12
	簿記入門講座	23
	インターネットホームページ作成講座	23
	テンペラ画入門講座	14
	続・映画と英語	33
	原形制作Ⅱ	19
十	鍛金　－銀でカップを造る－	10
	造形研究　－人体をモチーフとして－	9
	木造建築(住宅)の基礎知識	10
	教員のためのパソコン初級講座	17
	ビジネスにおける情報処理入門　－表計算・データベースの活用－	10
	理解を得るためのマルチメディア・プレゼンテーション技法	10
	インターネットとホームページ　－地域活性への支援講座－	32
	木を使った制作　－身近な小物製作－	8
	「うるし」でもの造りパート５　－平蒔絵小皿を作る−	19
	テンペラ画入門講座	17
	インターネットホームページ作成講座	13
	アメリカ文学と文学理論への招待	4
	原形制作Ⅲ	21
十一	「うるし」でもの造りパート６　－曲輪造り弁当箱を作る－	14
	パソコンを活用したグラフィックデザイン	19
	中国語会話速修講座	34
	やさしい翻訳入門	13
	水中運動とリラックスⅡ	12
	装身具　－彫金－	10
	教員のためのパソコン初級講座	22
	木工の基礎技法　－木工ろくろ－	10
	テンペラ画入門講座	19
	理解を得るための　マルチメディア・プレゼンテーション技法	6
	Javascript プログラミング講座	9
	アメリカの日常生活に応じる英会話	15
	造形研究　－人体をモチーフとして－	18
	営業技術マンのための建築講座	15
	ビジネスにおける情報処理　－応用から始める表計算入門－	18
	原形制作Ⅳ	25

年度	講　　座　　名	受講人員
平成十二	「うるし」でもの造り　−乾漆技法で菓子盆を作る−	19
	パソコンを活用したグラフィックデザイン	24
	中国語で中国を知る	17
	健康水中ウォークとリラックス	15
	身近な木製小物の製作	11
	中高年のためのやさしいパソコン入門	20
	イタリア式石膏鋳造の基礎技法	10
	企業人のためのウインドウズ・プログラミング（VB基礎）	12
	イソップで英語のリフレッシュ	11
	教員のための Excel VBA プログラミング講座	10
	表計算応用講座	16
	鍛金　－器を造る－	7
	テンペラ画入門講座	21
	造形研究　－人体をモチーフとして－	18
	営業技術者のための建築講座	20
	彫刻を造る　－人体をモチーフとして－	24
十三	公開授業「ライフスタイル」　－ライフスタイルと価値観の研究－	9
	パソコンを活用したグラフィックデザイン	22
	市民が手がけるまちづくり	20
	「うるし」でもの造り　−自由な発想で漆小物を造る−	15
	バリアフリーからユニバーサルデザイン	6
	公開授業「経済システム」　－これからの暮らしと経済－	16
	シェイプアップスイミング　－あなたの泳ぎを磨いてみませんか－	10
	中高年のためのやさしいパソコン入門	26
	造形研究（前期）　－人体をモチーフとして－	21
	Windows プログラミング（VB 入門）	13
	木工の基礎技法　－木工ろくろ－	10
	テンペラ画入門講座	20
	装身具	10
	造形研究（後期）　－人体をモチーフとして－	13
	英語で語る身近な日本	15
	心地よいからだをつくろう　−ボディ・アウェアネス−	6
	機械金属工業のための表面改質	13
十四	公開授業「ライフスタイル」－ライフスタイルと価値観の研究	9
	メディア中国語	9
	パソコンを活用したグラフィックデザイン	18
	パッケージデザインとは	8
	利長が開き利常が育てた「高岡」	13
	ものつくりのための抽写教室	30
	デジタル・プレゼンテーション	22
	資産運用のすすめ	38
	造形研究（前期）　－人体をモチーフとして－	20
	中高年のためのやさしいパソコン入門	24
	デジタル・プレゼンテーション（速習版）	10
	小型木工機械による木工入門	19
	遠心精密鋳造で作る銀のアクセサリー	20
	デジタル・プレゼンテーション（速習版）	14
	「うるし」でもの造り　－堆朱の香合の制作－	11
	「鍛金」　－おもてなしの器を造る－	8
	シニアスポーツ健康大学	8
	「現代生活と著作権」　－著作権の基礎知識－	7
	テンペラ画入門	15
	造形研究（後期）　－人体をモチーフとして－	16
	アメリカの日常生活に応じる英会話	14
	Internet のための英語	7

年度	講　　座　　名	受講人員
	Excel VBA プログラミング講座	15
	公開授業「金属工芸史」	2
十五	ライフスタイル（公開授業）	5
	日商簿記検定１級入門講座	2
	海外旅行の英会話	12
	社会人のための英会話	8
	速修基礎中国語	19
	パソコンを活用したグラフィックデザイン	23
	小型木工機械による木工入門（続編）　－卓袱台（ちゃぶだい）に挑戦しよう－	14
	圧迫鋳造による銀の指輪作り　（小杉高等学校生徒対称）	11
	海外旅行の英会話（２）	11
	造形研究（前期）　－人体をモチーフとして－	18
	中高年のためのやさしいパソコン入門	20
	無鉛高錫青銅の熱処理技術実習　−ミソ焼き法による銀白色変化と焼入れ法による割れやすさの改善−	13
	遠心精密鋳造で作る銀のアクセサリー	11
	考古学のための青銅鏡制作	18
	教員のためのデジタル・プレゼンテーション（A 日程）	19
	教員のためのデジタル・プレゼンテーション（B 日程）	22
	木工の基礎技法　－木工ろくろ－	7
	生活に役立つ漆の技術　－金接ぎと摺り漆－	17
	木工「小棚の制作」　－暮らしを飾る－	5
	新聞・インターネットで学ぶ著作権	5
	シニアスポーツ健康教室Ⅱ	4
	医療従事者のための中国語入門講座	4
	テンペラ画入門	17
	造形研究（後期）　－人体をモチーフとして－	14
	Excel VBA プログラミング講座	12
	金属工芸史　（公開授業）	2
	海外旅行の英会話（３）	9
	アメリカ映画での語学習得と世界の文化の理解	4
	日商簿記検定３級受験講座	6
	金型の表面改質技術とその評価法	9
	日商簿記検定２級受験講座	7
十六	初心者のための CAD 入門	21
	小型木工機械による木工入門（続編その２）－椅子に挑戦しよう－	16
	木工の基礎技法講座　－トレー・器の制作－	15
	造形研究（前期）−人体をモチーフとして−（A コース）	6
	造形研究（前期）−人体をモチーフとして−（B コース）	16
	遠心精密鋳造で作る銀のアクセサリー	7
	うるしで絵を描く　－金胎漆パネルと額の制作－	10
	造形研究（後期）−人体をモチーフとして−（A コース）	1
	造形研究（後期）−人体をモチーフとして−（B コース）	17
	鍛金（手絞り）　－彫りと透かし模様の小物入れ－	9
	パソコンを活用したグラフィックデザイン	14
	中高年のためのやさしいパソコン入門	25
	Excel VBA プログラミング講座	14
	やさしい英会話　～海外旅行で使える英語～	18
	社会人のための英会話	9
	味読中国小説・獲得中国知識	12
	日商簿記検定３級受験講座	14
	日商簿記検定２級受験講座（工業簿記）	8
	日商簿記検定２級受験講座（商業簿記）	6
	高岡のまちづくり	13
	中国古代青銅器から学ぶもの　−三星堆青銅仮面の分鋳・青銅器金文の鋳造・青銅鏡の熱処理について−	27
	やさしい英会話（２）～海外旅行で使える英語～	17

年度	講　　座　　名	受講人員
平成十六	青銅のキーホルダーをつくろう　−蝋型鋳造の体験−	48
	圧迫鋳造による銀の指輪作り　(小杉高等学校生対称)	10
	中国語とその背景研究　(小杉高等学校生対称)	7
	デザイン　(富山北部高等学校生対称)	10
	情報処理　(高岡市立看護学校生対称)	47
十七	漆椀の制作	16
	富山のまちづくり	27
	小型木工機械による木工入門(続編その３)－照明器具に挑戦しよう－	15
	木製の北欧風カップ制作	25
	造形研究(前期)−人体をモチーフとして−(Ａコース)	7
	造形研究(前期)−人体をモチーフとして−(Ｂコース)	17
	精密鋳造で作る小物	8
	テンペラ画入門　Ａコース	9

年度	講　　座　　名	受講人員
十七	テンペラ画入門　Ｂコース	10
	造形研究(後期)−人体をモチーフとして−(Ａコース)	1
	造形研究(後期)−人体をモチーフとして−(Ｂコース)	16
	やさしい英会話～海外旅行で使える英語～	16
	中高年のためのCAD入門	17
	パソコンを活用したグラフィックデザイン	13
	初心者のためのCAD入門	17
	中高年のためのやさしい表計算入門	19
	日商簿記検定３級受験講座	未定
	日商簿記検定２級受験講座(工業簿記)	未定
	日商簿記検定２級受験講座(商業簿記)	未定
	圧迫鋳造による銀の指輪作り(小杉高等学校生対称)	11
	デザイン(富山北部高等学校生対称)	10
	情報処理(高岡市立看護学校生対称)	26

3.5.2　施設開放状況(後期)

(平成17年７月15日現在)

年　　度	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
テニスコート	98	118	231	210	339	310	357	356	354	476	723	801	374
グランド	39	57	134	79	88	106	151	120	44	50	17	12	6
体育館	4	4	8	24	88	77	16	35	11	10	15	20	5
講　　堂	5	2	3	4	6	14	11	8	12	11	12	10	5
講義室等	6	3	4	3	3	17	22	43	55	21	14	8	6
計	152	184	380	320	524	524	557	562	476	568	781	851	396

・グラウンドやテニスコートは、大会等のイベントの他、定期的な練習のために使用されています。
・講堂(定員406名)や講義室等も講演会や研修会のために使用されています。

3.5.3　展示公開事業(後期)

年 度	展　示　名　称	会　場	会　期
			平成　　平成
平成五	第８回産業デザイン専攻作品展(NEED'93－NICE なイスたち)		5．4．22　～　5．4．28
	高岡短期大学開学10周年記念展－教育とその成果－		5．10．1　～　5．10．5
	第９回金属工芸専攻作品展		5．10．8　～　5．10．13
	第７回漆工芸専攻作品展		5．10．15　～　5．10．20
	第９回木材工芸専攻作品展(樹木との語らい展)		5．10．22　～　5．10．27
	平成５年度常設展示		5．11．1　～　6．1．31
	第３回工芸三機関合同展－用と美の世界－		5．11．10　～　5．11．14
	清水克朗鋳金展		5．11．20　～　5．11．24
	デザイン技法Ⅲ(演習)評価展示		5．11．25　～　5．12．2
	第７回高岡短期大学産業工芸学科卒業制作展	学外展： 学内展：	6．2．10　～　6．2．14 6．3．12　～　6．3．18
六	第９回産業デザイン専攻学生作品展(NEED'94－いっしょにつれてっ展)		6．4．14　～　6．4．21
	ウィーン市集合住宅富山展		6．4．22　～　6．4．24
	金属工芸展		6．5．20　～　6．5．29
	平成６年度常設展示		6．6．1　～　6．8．31
	第10回木材工芸専攻学生作品展(樹木との語らい展)		6．10．7　～　6．10．12
	第10回金属工芸専攻学生作品展		6．10．14　～　6．10．19
	第８回漆工芸専攻学生作品展		6．10．21　～　6．10．26
	産業デザイン専攻デザイン技法評価展		6．10．28　～　6．11．7
	第４回工芸三機関合同展－芸術と技術の融和－		6．11．9　～　6．11．13

年度	展示名称	会場	会期		
			平成		平成
平成六	写真にみる木造体育館の温もり展		6.12.12	～	6.12.15
	麻生三郎教授退官記念作品展		7.2.8	～	7.2.14
	第8回高岡短期大学産業工芸学科卒業制作展	学外展： 学内展：	7.3.8 7.3.14	～ ～	7.3.12 7.3.20
七	第10回産業デザイン専攻学生作品展(NEED'95－カセットコンロ展)		7.4.14	～	7.4.21
	平成7年度常設展示		7.6.7	～	7.8.10
	第9回漆工芸専攻学生作品展		7.10.6	～	7.10.11
	情報処理基礎Ⅰ総合課題作品展		7.10.9	～	7.10.20
	第11回木材工芸専攻学生作品展(樹木との語らい展)		7.10.13	～	7.10.18
	第11回金属工芸専攻学生作品展		7.10.20	～	7.10.25
	伝統行事にみる盤持ちと力石展		7.11.13	～	7.11.17
	産業デザイン専攻デザイン技法評価展		7.11.28	～	7.12.5
	「人体をモチーフとして」展		7.12.4	～	7.12.15
	第9回高岡短期大学産業工芸学科卒業制作展	学外展： 学内展：	8.2.9 8.3.12	～ ～	8.2.13 8.3.19
八	第11回産業デザイン専攻学生作品展(NEED'96－ドライな幸せ展－)		8.4.12	～	8.4.19
	平成8年度常設展示		8.5.29	～	8.7.4
	専攻科学生作品展		8.7.8	～	8.7.15
	第10回漆工芸専攻学生作品展		8.10.4	～	8.10.9
	情報処理基礎Ⅰ総合課題作品展		8.10.7	～	8.10.18
	第12回木材工芸専攻学生作品展		8.10.11	～	8.10.16
	第12回金属工芸専攻学生作品展		8.10.18	～	8.10.23
	第5回工芸三機関合同展		8.11.15	～	8.11.19
	産業デザイン専攻デザイン技法評価展		8.11.26	～	8.12.3
	「人体をモチーフとして」展		8.12.2	～	8.12.13
	第10回高岡短期大学産業工芸学科卒業制作展・第1回高岡短期大学専攻科修了制作展	学外展： 学内展：	9.2.7 9.3.11	～ ～	9.2.11 9.3.18
九	第12回産業デザイン専攻学生作品展(NEED'97－ハンドDEクリーナー展－)		9.4.11	～	9.4.22
	産業工芸資料収蔵品展		9.7.1	～	9.7.31
	「文楽の魅力」展		9.8.21	～	9.8.28
	第13回樹木との語らい展		9.9.24	～	9.9.30
	第13回金属工芸専攻学生作品展		9.10.3	～	9.10.8
	第11回漆工芸専攻学生作品展		9.10.16	～	9.10.22
	第2回専攻科(産業造形専攻)展		9.10.25	～	9.10.31
	第6回工芸機関合同展		9.11.11	～	9.11.21
	視覚情報伝達法　評価展示		9.11.26	～	9.12.2
	国際共同課題作品展「5才児のための椅子展」		9.12.8	～	9.12.17
	第11回高岡短期大学産業工芸学科卒業制作展・第2回高岡短期大学専攻科修了制作展	学外展： 学内展：	10.2.7 10.3.13	～ ～	10.2.11 10.3.20
十	第13回産業デザイン専攻学生作品展(NEED'98－温風地帯－)		10.4.11	～	10.4.23
	産業工芸資料収蔵品展		10.4.1	～	10.9.25
	第14回樹木との語らい展		10.9.29	～	10.10.5
	第14回金属工芸専攻学生作品展		10.10.7	～	10.10.13
	第12回漆工芸専攻学生作品展		10.10.7	～	10.10.13
	第3回三造展(産業造形専攻)		10.10.24	～	10.10.30
	第7回工芸機関合同展		10.11.10	～	10.11.17
	視覚情報伝達法　評価展示		10.11.25	～	10.12.4
	中村富栄漆クラフト作品展		10.12.10	～	10.12.18
	第12回高岡短期大学産業工芸学科卒業制作展・第3回高岡短期大学専攻科修了制作展	学外展： 学内展：	11.2.5 11.3.12	～ ～	11.2.9 11.3.19
十一	第14回産業デザイン専攻学生作品(NEED'99－クリーンライフサポート－)		11.4.8	～	11.4.16
	産業工芸資料収蔵品展		11.4.21	～	11.6.30
	平成11年度公開講座受講者作品展		11.9.22	～	11.9.30
	第15回　金属工芸専攻学生作品展		11.10.6	～	11.10.12
	第15回　樹木との語らい展		11.10.14	～	11.10.20
	第13回　漆工芸専攻学生作品展		11.10.14	～	11.10.20
	第4回　三造展(産業造形専攻)		11.10.23	～	11.10.31
	産業デザイン学科学生作品展(新聞広告評価展示)		11.11.5	～	11.11.11
	第8回　工芸機関合同展		11.11.24	～	11.12.3
	産業デザイン専攻学生作品展示(高岡銅器の未来を探る)－デザインリサーチ－		11.11.24	～	11.12.3

年度	展示名称	会場	会期		
			平成		平成
十一 平成	第13回高岡短期大学産業工芸学科卒業制作展・第4回高岡短期大学専攻科修了制作展	学外展： 学内展：	12.2.10 12.3.10	～ ～	12.2.14 12.3.17
十二	第15回産業デザイン専攻学生作品(NEED2000HairDrier)		12.4.8	～	12.4.20
	平成11年度収蔵作品展		12.7.1	～	12.9.30
	第16回　樹木との語らい展		12.10.11	～	12.10.15
	第15回　漆工展		12.10.11	～	12.10.15
	第16回　金工展		12.10.17	～	12.10.22
	第5回　三造展		12.10.31	～	12.11.5
	平成12年度公開講座受講者作品展		12.10.31	～	12.11.5
	平成12年度「親子で体験　夢づくり・ものづくり」参加者作品展		12.10.31	～	12.11.5
	産業デザイン学科学生作品展(高岡銅器の未来を探る)		13.1.22	～	13.2.2
	産業デザイン学科学生作品展(新聞広告評価展示)		13.3.5	～	13.3.19
	第14回高岡短期大学産業工芸学科卒業制作展・第5回高岡短期大学専攻科修了制作展	学外展： 学内展：	13.2.9 13.3.9	～ ～	13.2.13 13.3.16
十三	産業デザイン学科学生作品展(CIデザイン・製品デザイン)	学外展： 学内展：	13.7.14 13.7.23	～ ～	13.7.18 13.7.31
	第17回　金工展		13.10.11	～	13.10.16
	第17回　樹木との語らい展		13.10.18	～	13.10.23
	第15回　漆工展		13.10.18	～	13.10.23
	第6回　三造展		13.10.30	～	13.11.4
	平成13年度公開講座受講者作品展		13.10.30	～	13.11.4
	平成13年度「親子で体験　夢づくり・ものづくり」参加者作品展		13.10.30	～	13.11.4
	産業デザイン学科学生作品展(Zip－Zip－Zip寒くてもTシャツ展)		13.11.2	～	13.11.6
	高岡短期大学地域をつなぐ特別展「まちをデザインするパブリックアート」		13.11.7	～	13.11.18
	産業デザイン学科学生作品展(高岡銅器の未来を探る)		14.1.21	～	14.2.6
	産業デザイン学科学生作品展(新聞広告評価展示)		14.3.4	～	14.3.28
	平成13年度高岡短期大学卒業・修了制作展 (第15回高岡短期大学産業工芸学科卒業制作展・第6回高岡短期大学専攻科修了制作展)	学外展： 学内展：	14.2.9 14.3.14	～ ～	14.2.13 14.3.20
十四	ふるさとみらい21高岡		14.4.28	～	14.4.29
	産業デザイン学科学生作品展(ビジュアル基礎表現展)		14.8.2		
	ラハティポリテクニクでの学生作品の相互交流展	シベリウスホール: ラハティポリテクニク:	14.9.19 14.9.25	～ ～	14.9.21 14.10.8
	第18回　樹木との語らい展		14.10.10	～	14.10.15
	第16回　漆工展		14.10.10	～	14.10.15
	さまのこアートインよっさ		14.10.19	～	14.10.20
	第18回　金工展		14.10.17	～	14.10.23
	第7回　三造展		14.10.29	～	14.11.3
	平成14年度公開講座受講者作品展		14.10.29	～	14.11.3
	平成14年度大学Jr.サイエンス＆ものづくり参加者作品展		14.10.29	～	14.11.3
	高岡短期大学地域をつなぐ特別展「素材と造形」		14.11.15	～	14.11.28
	産業デザイン学科学生作品展(CIデザイン・製品デザイン・CG演習)		14.12.2	～	14.12.13
	産業造形学科学生作品展(CG入門・CG演習)		15.1.20	～	15.2.3
	産業デザイン学科学生作品展(デザインの進め方)		15.1.20	～	15.2.3
	産業デザイン学科学生作品展(新聞広告評価展示)		15.3.1	～	15.4.15
	平成14年度高岡短期大学卒業・修了制作展 (第16回高岡短期大学産業工芸学科卒業制作展・第7回高岡短期大学専攻科修了制作展)	学外展： 学内展：	15.2.8 15.3.14	～ ～	15.2.12 15.3.20
十五	蜷川彰教授退官記念高岡短期大学漆工芸同窓生作品展		15.4.12	～	15.4.20
	金屋町「さまのこ」フェスタ		15.5.4	～	15.5.5
	産業デザイン学科学生作品展(ビジュアル基礎表現)		15.8.1		
	第19回　金工展		15.10.9	～	15.10.15
	第19回　樹木との語らい展		15.10.17	～	15.10.22
	第17回　漆工展		15.10.17	～	15.10.22
	さまのこアートインよっさ		15.10.18	～	15.10.19
	フランスのパブリックデザイン		15.10.22	～	15.10.28
	第8回　三造展		15.10.28	～	15.11.3
	平成15年度公開講座受講者作品展		15.10.28	～	15.11.2
	平成15年度大学Jr.サイエンス＆ものづくり紹介		15.10.28	～	15.11.2
	高岡短期大学地域をつなぐ特別展「高岡とその周辺の漆工芸」		15.11.5	～	15.11.18

年度	展示名称	会場	会期		
			平成		平成
平成十五	産業デザイン学科学生作品展(CIデザイン・製品デザイン・CG演習)		15.11.20	～	15.11.28
	ラハティポリテクニク学生作品の相互交流展		15.12. 2	～	15.12.15
	『フィンランドの現在と未来』パネル展		15.12. 2	～	15.12.15
	産業デザイン学科学生作品展(デザインの進め方)		16. 1.19	～	16. 2. 2
	谷口義人教授退官記念作品展		16. 2.10	～	16. 2.15
	産業造形学科学生作品展(CG入門・CG演習)		16. 2.13	～	16. 2.27
	根本曠子教授退官記念作品展・特別展示　奥出寿泉漆工技術調査記録		16. 2.25	～	16. 3. 1
	産業デザイン学科学生作品展(新聞広告評価展示)	氷見郵便局： 氷見伏木信用金庫本店：	16. 3. 8 16. 3.22	～ ～	16. 3.19 16. 4. 2
	平成15年度高岡短期大学卒業・修了制作展 (第17回高岡短期大学産業工芸学科卒業制作展・第8回高岡短期大学専攻科修了制作展)	学外展： 学内展：	16. 2. 7 16. 3.13	～ ～	16. 2.11 16. 3.19
十六	楽しいノーマイカーデーの提案	高岡市役所	16. 4. 5	～	16. 4. 9
	高岡短期大学　平成15年度寄贈作品展		16. 4.13	～	16. 4.19
	金屋町「さまのこ」フェスタ		16. 5. 2	～	16. 5. 3
	産業デザイン学科学生作品展(ビジュアル基礎表現)		16. 8. 2		
	研究成果パネル展 Part 1		16. 8. 2	～	16. 8.11
	金屋町のポストデザイン提案	金屋町公民館	16. 8. 7	～	16. 8. 8
	鳥田宗吾(稔弘)作品展		16. 9.14	～	16.10. 4
	宮崎雅司作品展		16. 9.28	～	16.10. 5
	第20回　樹木との語らい展		16.10. 6	～	16.10.12
	第18回　漆工展		16.10. 6	～	16.10.12
	高岡景観ポスター展示	三鷹産業プラザ	16.10. 9	～	16.10.10
	第20回　金工展		16.10.14	～	16.10.20
	さまのこアートインよっさ		16.10.16	～	16.10.17
	第9回　三造展		16.10.26	～	16.10.31
	平成16年度公開講座受講者作品展		16.10.26	～	16.10.31
	平成16年度小中学生ものづくり体験講座紹介		16.10.26	～	16.10.31
	高岡短期大学地域をつなぐ特別展「とやまの工芸と技術」	実演： 展示：	16.10.30 16.11. 2	～ ～	16.10.31 16.11. 8
	研究成果パネル展 Part 2		16.11.24	～	16.12.28
	日本ディスプレイデザイン協会・日本サインデザイン協会・日本商業環境設計家協会入賞作品パネル展		16.12. 2	～	16.12. 6
	学生作品によるクリスマス・ディスプレイ		16.12.13	～	16.12.24
	現代GP「連鎖授業」”高岡銅器・漆器の未来を探る！”パネル展		17. 1.17	～	17. 1.31
	現代仏具・偲ぶ空間の調度品のデザイン展(総合工芸演習)		17. 2. 4	～	17. 2. 9
	専攻科産業デザイン専攻学生作品展(グラフィックデザイン演習、総合デザイン実習Ⅰ)		17. 2.28	～	17. 3. 4
	産業デザイン学科学生作品展(新聞広告評価展示)	氷見中央郵便局： 氷見伏木信用金庫： ハートフル・スクエアーG(岐阜市)：	17. 3. 7 17. 3.21 17. 3.16	～ ～ ～	17. 3.18 17. 3.31 17. 3.21
	平成16年度高岡短期大学卒業・修了制作展(第18回高岡短期大学産業工芸学科卒業制作展・第9回高岡短期大学専攻科修了制作展)	学外展： 学内展：	17. 2.11 17. 3.12	～ ～	17. 2.15 17. 3.18
十七	金屋町「さまのこ」フェスタ		17. 4.30	～	17. 5. 1
	「地場産杉を使用したインテリア・家具の提案」展 （産学連携授業による成果発表会）	氷見市海浜植物園 本学ホワイエ ウイングウイング高岡	17. 6. 8 17. 7. 5 17. 8. 9	～ ～ ～	17. 7. 4 17. 8. 5 17. 8.21
	高岡短期大学の紹介	ウイングウイング高岡	17. 6.14	～	17. 6.26
	日本－フィンランド　響きあう心展		17. 6.15	～	17. 7. 8
	産業造形学科学生作品展(家具制作)「洗心苑」のための家具制作　作品展		17. 7.12	～	17. 7.15
	現代GP「炉端談義プロジェクト」展		17. 7.25	～	17. 8. 5
	ラハティポリテクニクとの学生作品相互交流展	フィンランド	17. 9. 9	～	17. 9.22
	「工芸都市高岡　伝統と革新」展	高岡市美術館	17. 9.16	～	17.10.16
	特別展「高岡短期大学展」		17. 9.17	～	17. 9.30
	第21回　金工展		17.10. 6	～	17.10.11
	第21回　樹木との語らい展		17.10.13	～	17.10.18
	第19回　漆工展		17.10.13	～	17.10.18
	第10回　三造展		17.10.20	～	17.10.30
	平成17年度公開講座受講者作品展		17.10.20	～	17.10.30

＊平成13年度より毎年収蔵品展を実施(企画展実施中を除く)

3.5.4　テレビ公開講座

年度	講　座　名	主任講師	放映日時	募集人員	受講者数	スクーリング状況 (　)内女性
平成五	企業経営とコンピュータ	産業情報学科 教授 木村幸信	毎週土曜日 10：30～11：00 9回放送	200人	146人	第1回　51名(7) 第2回　42名(9) 第3回　39名(8) 第4回　43名(10)
六	工芸の世界－身近な技法－	産業工芸学科 教授 麻生三郎	毎週土曜日 10：30～11：00 9回放送	200人	152人	第1回　37名(19) 第2回　24名(12) 第3回　24名(12) 第4回　19名(12)
七	英語で富山を語ろう	産業情報学科 教授 林　暢夫	毎週土曜日 9：30～10：00 9回放送	200人	218人	第1回　100名(57) 第2回　57名(38) 第3回　52名(31) 第4回　40名(24)
八	時代がみえる21・トヤマ －豊かさ，快適さを考える－	総合基礎グループ 教授 久保脩治	毎週土曜日 10：00～10：30 9回放送	200人	234人	第1回　19名(11) 第2回　11名(6) 第3回　9名(4) 第4回　11名(5)
九	創・クリエイトの時代 －とやまの工芸とデザイン－	産業工芸学科 教授 倉田久敬	毎週金曜日 10：30～11：00 9回放送	200人	213人	第1回　27名(13) 第2回　10名(4) 第3回　15名(7)
十	インターネット交・遊・学 －富山発、わたしとまちの情報新時代－	産業情報学科 教授 木村幸信	毎週金曜日 10：30～11：00 9回放送	200人	232人	第1回　97名(52) 第2回　72名(38) 第3回　64名(26)

3.5.5　民間との共同研究

年度	企業等名	研究者	研究期間	研究題目
昭和六十一	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 大楠安紀(生産管理部企画課)	61.12.22～ 62.3.31	多品種生産工場におけるストックレス生産の適用
	(株)タカギセイコー	木村幸信、久保欣五 児玉克己(コンピュータ室課長代理)	62.1.28～ 62.3.31	受注型プラスチック成形企業(金型内製)における総合的経営、生産管理システムの構築に係る調査
六十二	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 大楠安紀(生産管理部企画課)	62.4.1～ 63.3.31	多品種生産工場におけるストックレス生産の適用
	(株)タカギセイコー	木村幸信、久保欣五 児玉克己(コンピュータ室課長代理)	62.4.1～ 63.3.31	受注型プラスチック成形企業(金型内製)における総合的経営、生産管理システムの構築に係る調査
六十三	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 大楠安紀(生産管理部計画課)	63.4.1～ 64.3.31	多品種生産工場におけるストックレス生産の適用
平成元	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 大楠安紀(生産管理部計画課)	元.10.2～ 2.3.31	総合管理システムでの「ストックレス生産」の適用
	(株)竹中製作所	木村幸信 能登和敏(システム開発室課長)	元.11.13～ 2.3.31	地場産業の問屋型企業における物流及び在庫管理システムの研究
二	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 森田清明(福光工場管理部企画課)	2.4.23～ 3.3.31	ストックレス生産実施のための工場生産システムの研究
	(株)竹中製作所	木村幸信 能登和敏(システム開発室課長)	2.4.23～ 3.3.31	地場産業の問屋型企業における物流及び在庫管理システムの研究
三	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 森田清明(福光工場管理部企画課)	3.4.15～ 4.3.31	ストックレス生産実施のための工場生産システムの研究
	神岡部品工業(株)	横田勝 原章(開発部長)	3.4.15～ 4.3.31	焼結アルミニウム合金の材料特性に関する研究
	北陸電力(株)	南塚豊、矢口忠憲、橋本晃(技術研究所電気利用技術担当)	3.12.16～ 4.3.31	インダストリアルデザインによる太陽電池の用途開発
四	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 麻生博(生産管理部生産管理課)	4.5.18～ 5.3.31	ストックレス生産時における原材料(形材)の管理システムの研究
	神岡部品工業(株)	横田勝 原章(開発部長)	4.5.11～ 5.3.31	焼結アルミニウム合金の材料特性に関する研究
	北陸電力(株)	南塚豊、矢口忠憲、橋本晃(技術研究所電気利用技術担当)	4.5.11～ 5.3.20	配電設備機器の工業デザイン

年度	企業等名	研究者	研究期間	研究題目
平成五	日本非破壊検査(株)	横田勝 則俊雅春(水島事業所技術2課主任)	5.5.13～ 6.3.31	振動解析の非破壊検査技術への応用
	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 中島要(生産管理課副主幹)	5.5.26～ 6.3.31	ビル建材における生産期間短縮へのアプローチ
六	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 小山春木(生産情報システム課課長)	6.5.30～ 7.3.31	ライン部門主導による新しい概念の生産管理システム導入へのアプローチ
七	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 能勢正尚(生産設計課主事)	7.5.18～ 8.3.31	アルミ押出金型ストックレス生産
八	高岡市	近藤潔、藤田徹也、米川覚 山本真弘(企画調整部企画課主事)	8.4.1～ 9.3.31	インターネット上での調査に基づくホームページの改良及び適切なデータベースの構築
	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 野村雅孝(CR推進課副主幹)	8.5.1～ 9.3.31	部品調達の管理システムの研究
	(株)総合建設銀蜂	秦正徳 大倉幹順(開発担当)	8.5.15～ 9.3.31	木造住宅の合理化システム構法の開発に関する研究
九	高岡市	近藤潔、藤田徹也、米川覚 山本真弘(企画課主事)	9.4.1～ 10.3.31	簡易なイントラネットの構築及びイントラネットの可能性の検討
	(株)総合建設銀蜂	秦正徳 大倉幹順(開発担当)	9.5.15～ 10.3.31	木造住宅の合理化システム構法の開発に関する研究
	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 松田秀樹(購買管理部管理課主事)	9.7.22～ 10.3.31	購入品の調達管理システムの研究
十	岡本(株)	武山良三 倉富圭太郎(マーケティング部)	10.5.20～ 11.3.31	企業におけるマーケティング・コミュニケーションシステムの構築
	(株)総合建設銀蜂	秦正徳 大倉幹順(開発担当)	10.5.20～ 11.3.31	木造住宅の合理化システム構法の開発に関する研究
	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 上野敏一(福光工場管理課副主事	10.8.1～ 11.3.31	生産管理に於ける情報の共有化システムの研究
十一	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 阪田公治(CS推進部部長)	11.10.1～ 12.3.31	SCM(サプライ・チェーン・マネジメントシステム)の研究
十二	原野製材株式会社	秦正徳 二川昭成(生産管理係長)	12.6.1～ 13.3.31	木造軸組真壁耐力壁の構造評価システム開発に関する研究
	三協アルミニウム工業(株)	木村幸信 稲垣文夫(CS推進課長)	12.10.1～ 13.3.31	CS(顧客満足)の観点からのSCM(サプライ・チェーン・マネジメント)の研究
十三	原野製材株式会社	秦正徳 二川昭成(プレカット課生産管理係長)	13.6.11～ 14.3.31	木造真壁軸組構造の構造安定システムに関する研究
十四	原野製材株式会社	秦正徳 二川昭成(プレカット課生産管理課長)	14.6.3～ 15.3.31	木造軸組真壁パネル構法による住宅の構造安定性に関する研究
	(株)北熱	野瀬正照 新名奈穂(コーディング部門開発課)	14.6.3～ 15.3.31	金型の表面処理の耐熱性及び耐磨耗性向上に関する研究
十五	(株)北熱	野瀬正照 新名奈穂(コーディング部門開発課)	15.8.28～ 16.3.31	コーティング表面粗さ低減による精密加工用金型の開発(膜の物理的性質の解明)
	原野製材株式会社	秦正徳、二川昭成(住宅資材事業本部・生産管理課長)	15.9.30～ 16.3.31	木造軸組真壁パネル構法住宅の構造安定性能に関する研究
十六	(株)北熱	野瀬正照、政　誠一(コーティング部門開発課・特命社員)	16.6.7～ 17.3.31	TiAlN/h-BN膜およびTiAlN/DLC膜の精密加工用金型への適用
	原野製材株式会社	秦　正徳、二川昭成(住宅資材事業本部・製造部課生産管理課)	16.5.17～ 17.3.31	高性能高壁倍率プレカット工法パネルの研究開発
十七	ウッドリンク株式会社	秦　正徳、二川昭成(住宅資材事業部製造部生産管理課長)	17.7.15～ 18.3.31	木造住宅用軸組真壁パネル構面の高壁倍率化に関する研究

3.5.6　研究員等の派遣(後期)

3.5.6.1　文部省・文部科学省在外研究員

１．文部科学省在外研究員・短期

年度	氏　名	派遣期間	派　遣　先	研　究　題　目
平成五	中村　滝雄	5．8.20～5.11.20	ドイツ：工芸美術博物館　他	金属造型における加工法及び表面処理に関する研究
六	横田　　勝	6．7.10～6．9.26	ドイツ：エッセン大学　他	粉末冶金法による新素材の開発に関する研究
七	磯部　祐子	7．8.20～7.11.20	中華人民共和国： 中国社会科学院　他	中国戯曲理論の研究
八	村上　恭子	8．8．9～8.11．9	アメリカ合衆国： コーネル大学　他	ポストモダニズム文化におけるマスメディアの諸問題
九	小林　和子	9．8．1～9.12.20	連合王国：レディング大学応用言語学研究所　他	英語の地域的・社会的変種の教授方法に関する研究
十	山田　眞一	11．3.25～11．8.25	中国：中国社会科学院言語研究所	現代標準中国語の社会言語学的研究
十一	野瀬　正照	12．3．7～12．9．2	アメリカ合衆国： ノースウエスタン大学　他	材料表面の微細構造とナノインデンテーションに関する研究
十二	吉田　俊六	12．7．2～12.12.27	アメリカ合衆国：カリフォルニア大学サンディエゴ校　他	マーケティング・リサーチの理論および分析技術に関する研究
十三	近藤　　潔	13．4.20～13．9.30	アメリカ合衆国： ノースウエスタン大学	工芸教育におけるコンピュータの応用
十五	丸谷　芳正	15．9.12～15.12.13	連合王国： バッカムシャー・チルターン大学	ウィンザーチェアーに関する研究

２．文部科学省在外研究員・若手

年度	氏　名	派遣期間	派　遣　先	研　究　題　目
七	田中比呂志	8．2.26～8.12.25	中華人民共和国： 南京大学歴史研究所　他	近代中国における地方エリート
九	藤田　徹也	9．5.12～10．2.28	アメリカ合衆国： ノースウエスタン大学	材料系工学教育におけるデジタル映像処理技術の応用
十一	内藤　裕孝	11．8.21～12．6.23	スウェーデン：カール・マルムステン美術工芸学校	スウェーデンにおけるバリアフリーデザインに関する調査研究
十五	今淵　純子	15．8．1～16．7.31	フィンランド： ラハティ・ポリテクニク	英国における美術・工芸教育ならびにパブリック・アートに関わる動向調査

○文部科学省在外研究員・海外研究開発動向調査

年度	氏　名	派遣期間	派　遣　先	研　究　題　目
七	野瀬　正照	8．3．3～8．5.31	アメリカ合衆国： カリフォルニア工科大学　他	非平衡物質作製技術による新素材の開発と応用に関する研究
八	小松　研治	8.10．4～8.11.29	スウェーデン： カペラ・ゴーデン美術工芸学校	スウェーデンにおける美術工芸と工業との融合についての実態調査研究
九	小松　裕子	10．3．1～10．4.29	カナダ：ローランタン大学	地域社会における情報技術の導入と支援の在り方に関する研究
十	武山　良三	11．2．1～11．3.27	連合王国： ロイヤルカレッジオブアート　他	パブリックスペースにおける統合的情報環境のデザインに関する研究
十一	三船　温尚	12．2.13～12．4．2	中国：中国社会科学院考古研究所	中国古代青銅器の鋳造技法に関する研究開発動向の調査
十二	伊東多佳子	13．2.14～13．4.11	連合王国：ロンドン大学スレイド・スクールオブファインアート	環境美学・環境芸術に関する研究開発動向の調査
十三	矢口　忠憲	14．2.13～14．4．3	フィンランド共和国： ラハティポリテクニク	ユニバーサルデザインの研究
十四	齊藤　晴之	15．2.10～15．3.10	アメリカ合衆国：アートスチューデントリーグオブニューヨーク	現代美術とクラフトデザインの関連性と工芸素材に係る立体表現
十五	伊東多佳子	16．3.25～16．5.21	連合王国：セントラル･イングランド大学　バーミンガム･インスティテュート･アート･アンド･デザイン	英国における美術・工芸教育ならびにパブリックアートに関わる動向調査

3.5.6.2　文部省・内地研究員

文部省内地研究員派遣実績一覧

年度	所属(学科)	職名	氏　名	研究期間(月)	受　入　機　関	研　究　題　目
平成六	産業情報	教授	石井　榮一	6.10.1～6.12.31(3)	早稲田大学大学院教育学研究科	日本商業教育の成立期に関する研究
七	産業工芸	助教授	三船　温尚	7.8.1～7.10.31(3)	東京芸術大学美術学部鋳金研究室	鋳金における造型および技法の研究
十一	産業情報	講師	上東　正和	11.8.1～11.9.30(2)	愛知学院大学商学部藤田研究室	社会理論を援用した管理会計論の理論的、実証的研究

3.5.7　科学研究費補助金(後期)※研究代表者が本学教員のみを掲載

年度		研究種目	審査領域	研　究　課　題	所　属(学科等)	研究代表者	研　究　分　担　者	期間(年)	配分額(千円)
平成五	1	一般研究(C)	中国語・中国文学	中国瞼譜考	産業情報	磯部　祐子		1	900
六	1	一般研究(C)	材料加工・処理	機械振動の伝達関数解析による焼結材料の材料特性評価	産業工芸	横田　勝		2	1,800
	2	一般研究(C)(時限付)	文化財科学	漆に及ぼす微量金属成分の影響に関する研究	産業工芸	蜷川　彰		2	1,600
七	1	一般研究(C)(萌芽)	科学教育・教科教育学	教科用語に関する日中両言語の比較研究－理科を中心に－	産業情報	山田　眞一		1	1,500
九	1	基盤研究(C)(一般)	構造・機能材料	結晶粒度調整による装飾性アルミニウム系および銅系合金の光学的・材料学的研究	総合基礎	野瀬　正照	横田　勝	4	3,500
	2	基盤研究(B)(一般)	考古学	古代東アジアにおける青銅鏡の鋳造技法の変遷	産業工芸	三船　温尚		4	5,900
	3	基盤研究(C)(一般)	文学一般	中国煙粉小説の受容に見る情愛観の比較研究	産業情報	磯部　祐子		3	2,600
十	1	基盤研究(B)(展開)	材料加工・処理	新しい窒・酸化物薄膜による金属の表面改質とその分光学的評価に関する研究	総合基礎	野瀬　正照	横田　勝、中村滝雄、長柄毅一、佐治重興、前　健彦	4	10,700
	2	萌芽的研究	教育工学	地域情報化における社会的支援の調査研究－富山県山田村を題材に－	産業情報	小松　裕子		3	1,800
十一	1	萌芽的研究	美学(含芸術諸学)	環境美学研究－ロマン主義にもとづくあたらしい自然哲学の企て	総合基礎	伊東多佳子		3	2,200
	2	基盤研究(C)(一般)	中国語・中国語文学	中国語話者の理解語彙と使用語彙に関する研究	産業情報	山田　眞一		3	2,300
十二	1	基盤研究(B)(一般)	文化財科学	古代青銅器の熱処理を中心とした材料科学的研究	産業造形	横田　勝	菅谷文則、小堀孝之、野瀬正照、三船温尚、清水克朗、清水康二	3	13,000
	2	萌芽的研究	考古学	古代青銅鏡の割れ方に関する基礎研究	産業造形	三船　温尚	横田　勝、菅谷文則、小堀孝之、宮原晋一、清水克朗	3	2,100
十三	1	基盤研究(B)(展開)	材料加工・処理	PCPS法による複雑形状焼結体の新しいニアネットシェイプ加工法に関する研究	産業造形	横田　勝	野瀬正照、長柄毅一、大寺克昌	3	10,900
	2	一般研究(C)(一般)	科学教育・教科教育学	情報弱者への社会的支援に基づいた地域情報化の調査研究	地域ビジネス	小松　裕子		3	3,200
	3	特定領域(A)	東アジア出版	中国における才子佳人小説の出版と朝鮮・越南・日本への影響	地域ビジネス	磯部　祐子		2	4,700

年度		研究種目	審査領域	研　究　課　題	所　属(学科等)	研究代表者	研　究　分　担　者	期間(年)	配分額(千円)
平成十三	4	基盤研究(C)(一般)	材料加工・処理	低摩擦・高硬度セラミック材の作製とそれによる金属の表面改質に関する研究	産業造形	野瀬　正照	横田　勝、野城　清、冨田正吾	2	4,000
十五	1	基盤研究(B)(一般)	文化財科学	古代青銅器の熱処理と土中腐食を中心とした材料科学的研究	産業造形	横田　勝	菅谷文則、三船温尚、宮原晋一、清水康二、野瀬正照、小堀孝之、清水克朗	4	16,400
	2	基盤研究(C)(一般)	美術・美術史	自然・風景・環境ー環境芸術を手がかりにした環境美学の構築	産業造形	伊東多佳子		3	3,700
	3	特定領域	東アジア出版	中国における才子佳人小説の出版と朝鮮・越南・日本への影響	地域ビジネス	磯部　祐子		2	3,400
	4	萌芽研究	科学教育	特殊技能工芸職人の連携による循環型発想支援システムの調査研究	産業造形	小松　研治	内藤裕孝	3	2,500
十六	1	基盤研究(C)(一般)	科学社会学・科学技術史	伝統的鍛冶製品、種子鋏の製作工程・技術および材料工学的研究	産業造形	中村　滝雄	横田　勝、今淵純子	2	3,000
十七	1	基盤研究(B)(一般)	材料加工・処理	ナノコンポジット複合機能膜の形成機構解明とそれを応用した金属加工の新しい展開	産業造形	野瀬　正照	横田　勝、野城　清、池野　進、本保栄治	3	15,200
	2	基盤研究(C)(一般)	各国文学・文学論	中国民間演劇の再興―浙江省を中心として－	地域ビジネス	磯部　祐子		4	3,400
	3	萌芽的研究	文化財科学	近世の大仏鋳造技法に関する研究	産業造形	小堀　孝之	戸津圭之介、横田　勝、武笠朗、清水克朗、三船温尚、野瀬正照	3	3,500

3.5.8　奨学寄附金受入状況一覧(後期)

(金額は千円単位)

年度	寄　附　者	受入額	寄　附　目　的
平成五	㈶富山県高等教育振興財団	200	産業工芸学科教授　蜷川　彰　「アジアの漆」国際会議に出席のため
	神岡部品工業㈱	100	産業工芸学科教授　横田教授の粉末冶金研究に対する助成
	㈶富山第一銀行奨学財団	250	漆の機能性に関する研究に対する助成
	㈶富山第一銀行奨学財団	250	内発的発展に関する高岡市地域経済の分析に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	300	石井榮一　環境変動下における地場産業～漆器産業を対象として～の研究に対する助成
	北陸電力㈱技術研究所	300	産業工芸学科南塚教授・矢口講師に対する研究助成「太陽光発電システムのデザイン研究」
	㈶富山県高等教育振興財団	100	公開講座の開催その他教育研究に対する助成
	学校法人富山県自動車学園	300	高岡短期大学の学術研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	200	高岡短期大学の学術研究に対する助成
	㈶福武学術文化振興財団	800	産業工芸学科三船助教授の古代中国の青銅器文化における鋳造技法の独自性の研究に対す助成
	合　計	2,800	
六	㈶富山第一銀行奨学財団	500	北陸の伝統産業と地域経済
	㈶富山第一銀行奨学財団	250	日・中・韓三国における子供観の比較考察
	㈶富山第一銀行奨学財団	250	マルチメデイアによる中国語学習に関する実践的研究
	山天東リ㈱	500	産業工芸学科蜷川　彰教授の教育研究に対する助成
	(韓国文化研究振興財団)	1,000	産業情報学科磯部祐子助教授の「朝鮮半島における中国戯曲の受容と展開」の研究に対する助成
	合　計	2,500	
七	㈶富山第一銀行奨学財団	500	散居村の家屋と生活文化の研究
	㈶富山第一銀行奨学財団	250	ドライプロセスの金属工芸への応用に関する調査研究
	㈶富山第一銀行奨学財団	250	近代期における富山と中国
	㈶富山県高等教育振興財団	300	小林和子　東南アジア・中国における英語及び中国語の使用状況に関する調査
	㈱GA 開発研究所	350	産業工芸学科秦助教授の教育研究に対する助成
	漆を科学する会	100	産業工芸学科蜷川彰教授の教育研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	100	高岡短期大学の開放事業その他教育研究に対する助成

年度	寄　附　者	受入額	寄　附　目　的
	合　計	1,850	
平成八	㈶富山第一銀行奨学財団	500	木造軸組住宅の耐震性能向上に関する研究
	㈶富山第一銀行奨学財団	500	WWW システム上での JAVA 言語に関する調査・研究
	㈶富山県高等教育振興財団	200	山田眞一　産業情報学科山田眞一助教授の海外派遣に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	75	産業情報学科山田眞一助教授に対する研究助成
	日本電気㈱	700	産業情報学科久保欣五教授の EC に関するセキュリティ等の基礎研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	300	久湊尚子　総合基礎グループ久湊尚子助手の研究助成
	㈶富山県高等教育振興財団	200	高岡短期大学の開放事業その他教育研究に対する助成(特別講演会)
	㈶高岡短期大学協力会	600	高岡短期大学に対する国際交流助成のため
	㈱アピアスポーツクラブ	200	総合基礎グループ立浪助教授及び久湊助手の教育研究に対する助成
	合　計	3,275	
九	㈶富山第一銀行奨学財団	500	金属工芸品の表面着色とその色彩・光特性に関する工学的研究
	㈶富山第一銀行奨学財団	500	富山県における外国人研修生の文化適応に関する研究
	㈶富山県高等教育振興財団	500	高岡短期大学の開放事業その他教育研究に対する助成(特別講演会)
	㈶富山県高等教育振興財団	300	野瀬正照　鋳造用 Cu－Al 合金の結晶粒制御とその金属工芸への応用のための基礎的研究
	㈶富山県高等教育振興財団	200	矢口忠憲　産業工芸学科矢口忠憲講師の海外派遣に対する助成
	㈶高岡短期大学協力会	600	高岡短期大学に対する国際交流助成のため
	㈱アピアスポーツクラブ	200	総合基礎グループ立浪助教授及び久湊助手の教育研究に対する助成
	日本電気㈱	700	産業情報学科久保欣五教授の EC に関するセキュリティ等の基礎研究に対する助成
	合　計	3,500	
十	㈶富山第一銀行奨学財団	500	新しい金属窒化物薄膜の作製とその応用に関する研究
	㈶富山第一銀行奨学財団	500	2000年富山国体優勝を目指す競泳選手のレース分析
	㈶富山県高等教育振興財団	300	小松研治　北欧と日本における工芸品制作の社会文化的背景の比較
	㈶富山県高等教育振興財団	200	谷口義人　産業工芸学科谷口義人教授の海外派遣に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	360	産業工芸学科谷口義人教授の教育研究に対する助成
	大阪証券取引所	550	蠟山昌一学長の教育研究その他に要する経費を賄い奨励する
	旭プレス工業㈱	50	産業工芸学科横田勝教授の教育研究に対する助成
	乾庄貴金属化工㈱	100	産業工芸学科横田勝教授の教育研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	300	高岡短期大学の開放事業その他教育研究に対する助成(特別講演会)
	㈶富山県高等教育振興財団	200	産業情報学科吉田俊六教授の教育研究助成
	大阪証券取引所	550	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	㈶ホソカワ粉体工学振興財団	700	産業工芸学科　横田勝教授の「パルス通電加圧焼結による新しい粉末固化成形法と新素材の開発」
	㈱アピアスポーツクラブ	200	総合基礎グループ立浪助教授及び久湊助手の教育研究に対する助成
	㈶高岡短期大学協力会	405	高岡短期大学に対する国際交流助成のため
	合　計	4,915	
十一	株式会社シーデーエル	1,000	産業工芸学科武山助教授の教育・研究のため
	ファーストバンク青雲会	200	高岡短期大学の教育研究に対する助成
	㈱ジェック経営コンサルタント	500	産業情報学科木村教授への奨学寄附
	㈶富山第一銀行奨学財団	350	総合基礎グループ安達博文助教授の研究助成　研究題目：テンペラ画技法を主体とした人物表現及び画面の防黴について
	㈶富山第一銀行奨学財団	350	産業工芸学科三船温尚助教授の研究助成　研究題目：古代鋳造技法の応用による無鉛青銅器の研究
	㈶富山第一銀行奨学財団	300	産業工芸学科武山良三助教授の研究助成　研究題目：まちづくり景観エレメントのデザインに関する研究
	㈶富山県高等教育振興財団	350	入江識元　産業情報学科入江識元講師に対する研究助成
	大阪証券取引所	550	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	野瀬正照	100	野瀬助教授の教育・研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	120	産業情報学科小松裕子講師の教育・研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	200	久湊尚子　総合基礎グループ久湊尚子助手の海外派遣に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	150	総合基礎グループ久湊尚子助手の教育・研究に対する助成
	アルスホーム株式会社	150	総合基礎グループ秦正徳教授の研究に対する助成
	原野製材株式会社	150	総合基礎グループ秦正徳教授の研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	300	高岡短期大学の開放事業その他教育研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	200	吉田俊六教授の教育研究助成
	内島正雄	1,000	林曉助教授の研究に対する助成
	大阪証券取引所	550	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	㈶高岡短期大学協力会	600	高岡短期大学に対する国際交流助成のため

年度	寄　附　者	受入額	寄　附　目　的
平成十一	(社)富山県建設業協会	300	高岡短期大学の教育研究に対する助成
	㈱アピアスポーツクラブ	200	立浪助教授の研究に対する助成
	合　計	7,620	
十二	㈶富山第一銀行奨学財団	700	産業造形学科中村滝雄教授の研究助成　研究題目「種子島鋏における鍛冶技法の調査」
	㈶富山第一銀行奨学財団	300	産業造形学科伊東多佳子講師の研究助成　研究題目「環境美学研究」
	㈶富山第一銀行奨学財団	500	地域ビジネス学科磯部祐子助教授の研究助成　研究題目「外国人研修生，実習生の受入れ事業の現状と問題点」
	(TKD 研究会研究)	1,700	武山良三助教授の研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	200	野瀬正照助教授の研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	340	清水克朗講師の研究に対する助成
	㈱北日本新聞社	100	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	富山県化学工業会	50	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	富山企業懇話会	100	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	大阪証券取引所	550	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	300	高岡短期大学の開放事業その他教育研究に対する助成
	JTB 日本交通公社　高岡支店	150	沖和宏講師の研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	50	今淵純子助手の研究に対する助成
	㈱アピアスポーツクラブ	200	立浪勝教授の研究に対する助成
	大阪証券取引所	550	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	㈶高岡短期大学協力会	600	高岡短期大学に対する国際交流助成のため
	合　計	6,390	
十三	大阪証券取引所	1,875	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	吉田俊六	400	地域ビジネス学科吉田俊六教授の研究に対する助成
	㈶富山第一銀行奨学財団	900	産業造形学科横田勝教授の研究助成　研究題目「普通科高等学校における美術・工芸教育の現状と動向調査」
	㈶富山第一銀行奨学財団	600	地域ビジネス学科山田眞一教授の研究助成　研究題目「異文化間コミュニケーション教育における映像利用に関する研究」
	芙蓉会	200	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	(TKD 研究会研究)	300	武山良三助教授の研究に対する助成
	小堀　孝之	200	産業造形学科小堀孝之教授の研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	300	三船温尚助教授の研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	200	産業造形学科小堀孝之教授の研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	200	高岡短期大学の開放事業その他教育研究に対する助成
	米田俊之建築設計事務所	400	秦正徳教授の研究に対する助成
	㈱アピアスポーツクラブ	150	立浪勝教授の研究に対する助成
	㈶ホソカワ粉体工学振興財団	700	産業造形学科野瀬正照教授の研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	600	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	合　計	7,025	
十四	矢口忠憲	225	産業デザイン学科矢口忠憲助教授の研究に対する助成
	㈶富山第一銀行奨学財団	1,000	産業造形学科小堀孝之教授への研究助成　研究題目「普通科高等学校における美術・工芸教育の現状と動向調査」
	㈶富山第一銀行奨学財団	500	保健管理センター宮元芽久美講師への研究助成　研究題目「小セミナー形式を取り入れた大学生の健康教育の取り組み
	(加越能鉄道・駅前再開発)	550	武山良三助教授の研究に対する助成
	㈶北陸産業活性化センター	2,500	産業造形学科野瀬正照教授への研究助成　研究題目「アルミ・マグネシウムダイカスト用金型の高性能化に関する研究」
	米田俊之建築設計事務所	200	秦正徳教授の研究に対する助成
	㈱ヒラキストア	120	高岡短期大学の教育研究に対する助成事業
	㈶富山県高等教育振興財団	230	産業造形学科今淵純子助手の研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	355	高岡短期大学の開放事業その他教育研究に対する助成
	㈱ニコンデジタルテクノズ	800	半導体産業機器分野の需要動向の統計的分析に関する研究　地域ビジネス学科助教授小柳津英知
	高岡短期大学校友会	100	高岡短期大学の就職指導に関する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	600	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	㈶福武学術文化振興財団	1,000	三船温尚教授の研究に対する助成
	㈱アピアスポーツクラブ	150	立浪勝教授の研究に対する助成
	合　計	8,330	
十五	㈱北熱	500	産業造形学科野瀬正照教授の研究助成
	㈱ジェック経営コンサルタント	500	吉田俊六教授への研究助成

年度	寄　附　者	受入額	寄　附　目　的
平成十五	㈶富山第一銀行奨学財団	1,500	産業造形学科小堀孝之教授への研究助成研究題目「高等学校における美術・工芸教育の現状と動向調査」
	㈶富山第一銀行奨学財団	500	地域ビジネス学科磯部祐子教授への研究助成研究題目「中国語・日本語に於ける同形異義語の研究」
	㈶富山県高等教育振興財団	500	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	1,000	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	450	産業造形学科堀江秀夫教授への研究助成研究題目「住宅解体材の工芸材料としての適性評価に関する研究」
	㈶富山県高等教育振興財団	390	高岡短期大学の教育研究活動に対する助成
	㈶北陸産業活性化センター	2,500	産業造形学科野瀬正照教授の研究に対する助成
	(京都市・山本文二郎漆科学研究)	400	橋本千毅助手の研究に対する助成
	高岡短期大学校友会	150	高岡短期大学の就職指導に関する助成
	㈱アピアスポーツクラブ	150	立浪勝教授の研究に対する助成
	北陸電機製造㈱	300	産業デザイン学科矢口忠憲助教授の研究に対する助成
	合　計	8,840	
十六	石油資源開発株式会社	1,000	村田聡助教授の学術研究助成
	㈶富山県高等教育振興財団	1,500	高岡短期大学大学開放センターの事業に対する助成
	㈶富山第一銀行奨学財団	350	産業造形学科　村田聡助教授への研究助成　研究題目　漆の乾燥に関する研究
	㈶富山第一銀行奨学財団	300	産業造形学科　河原　雅典講師への研究助成　　研究題目　富山県の人力運搬具の人間工学的研究
	㈶富山第一銀行奨学財団	350	地域ビジネス学科　山田眞一教授他１名への研究助成　　研究題目　漆工芸に関する日中対訳用語集作成のための研究
	㈶富山第一銀行奨学財団	200	地域ビジネス学科　コビー　クリストファー助教授他５名への研究助成　　研究題目　新大学芸術文化学部における「イングリッシュ・コミュニケーション中級」テキストの制作と富山県内の外国人観光者サポート事業への展開研究
	㈶富山第一銀行奨学財団	300	地域ビジネス学科　王大鵬助教授への研究助成　　研究題目　中国における日系企業の現地調達に関する研究
	㈶富山県高等教育振興財団	500	ウエスタンオレゴン大学への短期語学研修事業に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	500	大連外国語学院への短期語学研修事業に対する助成
	UROJI「ザッカ　カフェ知生庵棚担当」　小田敏明	3.95	インキュベーション教育事業に関する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	220	産業造形学科　丸谷芳正教授への研究助成　　研究題目　高齢者福祉施設における椅子(車椅子)による姿勢保持の現状調査
	UROJI「高岡市役所アンケートBOX 担当」　熊谷弘毅	7.2	インキュベーション教育事業に関する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	500	大学開放センターの開放事業(特別公開講演会)に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	260	産業デザイン学科　沖和宏講師への研究助成　　研究題目　商店街活性化とデザイン系実習教育の相互充実を図った地域との協働授業開発
	高岡短期大学校友会	100	高岡短期大学の就職指導に関する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	2,600	戦略的キャンパス・アイデンティティ推進事業に対する助成
	㈶ホソカワ粉体工学振興財団	800	産業造形学科　野瀬正照教授の研究に対する助成
	UROJI「創己祭担当」小田敏明	3.025	インキュベーション教育事業に対する助成
	メタルエンジニアリング	60	産業造形学科　野瀬正照教授の研究に対する助成
	北陸電機製造㈱	300	産業デザイン学科矢口忠憲助教授の研究に対する助成
	産業デザイン学科　武山良三	500	武山良三教授の研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	400	教材用工芸品等購入事業に対する助成
	アピアスポーツクラブ	150	立浪　勝教授の研究に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	109,379	芸術文化学部立ち上げ・発展に対する奨学助成
	合　計	120,283.175	
十七	定塚小学校 PTA	10	渡辺雅志講師の研究に対する助成
	銅及び銅合金技術研究会	300	産業造形学科　野瀬正照教授への研究助成　研究題目　青銅の表面改質による高濃度錫合金層の生成メカニズム解明と銅器産業への応用展開に関する研究助成
	特定非営利活動法人建設環境情報センター	200	産業デザイン学科　武山良三教授への研究助成　研究題目　都市景観の研究に対する助成
	㈶富山第一銀行奨学財団	390	産業造形学科　野瀬正照教授への研究助成　研究題目　セラミックスと金属を複合化した装飾用保護膜の研究
	㈶富山第一銀行奨学財団	365	産業造形学科　今淵純子助手への研究助成　研究題目　大学の工芸教育に関する調査研究および資料収集

年度	寄　附　者	受入額	寄　附　目　的
平成十七	㈶富山第一銀行奨学財団	445	産業デザイン学科　安達博文教授への研究助成　研究題目　絵画制作における基底材と地塗り(under ground)，下塗り(under painting)効果についての研究及び研究製作品の発表
	㈶富山第一銀行奨学財団	300	保健管理センター　宮元芽久美講師への研究助成　研究題目　大学生の血清脂質値と生活習慣との関連についての研究
	高岡短期大学　産業デザイン学科　講師　西島治樹	21.5	産業デザイン学科　西島治樹講師への研究作品の展示・発表に対する助成
	㈶富山県高等教育振興財団	350	産業デザイン学科　玉井泰子助手への研究助成　研究題目　日本モダニズム建築における技法と意匠に関する研究
	㈶富山県高等教育振興財団	500	産業造形学科　横田　勝教授への研究助成　研究題目　高錫青銅の熱処理と新しい表面処理技術の開発による鉛レス青銅の実用化と銅器産業の活性化
			７月末現在
	合　計	2,881.5	

3.5.9　年表(後期)

平成二	3.30　高岡短期大学紀要創刊号を発行する。
三	7.5　富山県工業技術センター、高岡市工芸デザイン指導所との工芸三機関合同展を開催する。(平成11年度まで原則毎年開催)
五	10.2　放送(テレビ)公開講座「企業経営とコンピュータ」を開講する。(～11.27)
六	7.18　米長邦雄氏(前将棋名人)による特別公開講演会「運を育てる」を実施する。／10.1　放送(テレビ)公開講座「工芸の世界－身近な技法－」を開講する。(～11.26)
七	2.10　学内情報ネットワークシステム TNC－NET(Takaoka National College NETwork)が稼働する。／2.24　SI-NET 加入機関(富山県立大学)への IP 接続を開始する。／10.7　放送(テレビ)公開講座「英語で富山を語ろう」を開講する。(～12.2)
八	10.5　放送(テレビ)公開講座「時代がみえる21・トヤマ－豊かさ、快適さを考える－」を開講する。(～11.30)／10.28　立花隆氏(評論家・東京大学客員教授)による特別公開講演会「インターネットは社会を変えるか」を実施する。／11.19　大連外国語学院との友好協力関係に関する協定書を締結する。／大連　短期語学研修事業に関する覚書を締結する。／大連　短期語学研修事業に関する覚書を締結する。／12.25　インターネットでホームページを開設し学内情報の発信を開始する
九	1.27　産業工芸資料収集第２次５ケ年計画を策定する。／7.1　SINET 加入機関(富山県立大学)から金沢大学ノード校に変更する。／7.29　アジア環境国際フォーラムの文化交流ワークショップを開催する。／7.29　アジア環境国際フォーラムの文化交流ワークショップを開催する。／8.28　吉田簑助氏(文楽人形遣い・人間国宝)による特別公開講演会「女を表現する」を実施する。／10.3　放送(テレビ)公開講座「創・クリエイトの時代－とやまの工芸とデザイン－」を開講する。(～11.28)／11.5　ラハティ・ポリテクニクとの友好協力関係に関する協定書を締結する。／11.27　過去の公開講座受講生に対し「高岡短期大学開放センターに関するアンケート」調査を実施する。
十	6.26　ラハティポリテクニクデザイン学部学生作品展を開催する。(～7.2)／本学にてラハティ・ポリテクニク学生の作品展開催する。(～7.2)／9.17　ラハティ・ポリテクニク　学生の交流に関する覚書を締結する。／10.5　中村美佐保氏より中村富栄作品の寄贈を受ける。／10.19　小沢昭巳氏(童話「とべないホタル」作者)による特別公開講演会「現代若者気質－若者にみる生きるとは－」を実施する。／10.28　クラフトデザインフォーラムを開催する。／12.10　米中村桂子氏(JT 生命誌研究館副館長)による特別公開講演会「21世紀を生きる知恵－生きものとしての人間40億年の生命の歴史から－」を実施する。
十一	2.「高岡短期大学開放センターの課題と展望」を発行する。／3.15　工芸品等の展示企画に関する懇談会を開催する。／9.22　公開講座受講者作品展を開催する。(～30)(以降毎年開催)／10.31　親子で体験夢づくりものづくり「パソコンでオリジナル T シャツを作ろう」を実施する。／12.10　米中村桂子氏(JT 生命誌研究館副館長)による特別公開講演会「21世紀を生きる知恵－生きものとしての人間40億年の生命の歴史から－」を実施する。
十二	7.25　短期大学開放センターに資料収集展示専門委員会を設置する。／7.28　親子で体験夢づくりものづくり「蝋型鋳造でオリジナルグッズ制作」を実施する。(7.29、8.4・5)／9.25　大連　短期語学研修事業に関する覚書の一部変更(学科名等)する。／9.30　2000国際経済フォーラム高岡ワークショップ「人を繋ぎ、都市を編む」を開催する。／11.16　山崎正和氏(劇作家・評論家・東亜大学長)による特別公開講演会「情報化時代の大学」を実施する。
十三	7.31　紀要第16巻から従来の研究論文等に加えて地域に向けた情報等を掲載する。(現在に至る)／8.3　親子で体験夢づくりものづくり「親子で野鳥観察と巣箱づくり」を実施する。(～5)／10.30　フィンランド　デュオコンサートを開催する。／11.7　第１回地域を繋ぐ特別展「まちをデザインするパブリックアート」を開催する。(～18)

平成十四	1.30　ラハティ・ポリテクニク　学生の交流に関する覚書の一部変更(受入学生数)する。／2.7　産業工芸資料収集第3次5ケ年計画を策定する。／3.1　学内情報ネットワークシステム TNC－NET をギガビットネットワークシステムに更新する。／3.18　大田弘子氏(政策研究大学院大学教授)による特別公開講演会「日本経済のゆくえ」を実施する。／3.29　教育用電子計算機を更新する。／4.15　公開授業「ライフスタイル－ライフスタイルと価値観の研究－」を開講する。(～6.3)／7.1　高等学校生徒を対象とした高岡短期大学の授業公開に関する高岡短期大学と富山県立となみ野高等学校との協定書を締結する。(～平成16年3月末日まで有効)／9.18　ラハティ・ポリテクニク　教員の交流に関する覚書を締結する。／9.25　ラハティ・ポリテクニク　学生作品の相互交流展に関する覚書を締結する。／ラハティ・ポリテクニクにて本学学生の作品展開催する。(～10.8)／10.4　大学 Jr.サイエンス＆ものづくり「シンプルなものづくり silver ring & silver spoon」を実施する。(～5)／10.8　公開授業「金属工芸史」を開講する。(～H15.1.28)／11.15　第2回地域を繋ぐ特別展「素材と造形」を開催する。(～28)／12.3　大原謙一郎氏(大原美術館理事長・倉敷商工会議所会頭)による特別公開講演会「地方の視点で『文化の世紀』を考える」を実施する。
十五	3.5　地域貢献について富山県、高岡市と協議する「富山コラボレーション」推進連絡会議を開催する。／ウエスタンオレゴン大学との友好協力関係に関する協定書を締結する。／ウエスタンオレゴン大学　教職員の交流に関する覚書を締結する。／ウエスタンオレゴン大学　短期語学研修事業に関する覚書を締結する。／3.28　高等学校生徒を対象とした高岡短期大学の授業公開に関する高岡短期大学と富山県立小杉高等学校との協定書を締結する。(～平成16年3月末日まで有効)／4.14　公開授業「ライフスタイル」を開講する。(～5.26)／5.24　富山県立小杉高等学校生徒を対象とした公開講座「圧迫鋳造による銀の指輪作り」を開講する。(～6.14)／8.1　SINET ノード校を金沢大学から富山大学に変更する。／8.2　大学 Jr.サイエンス＆ものづくり「粘土で動いている人物を作ろう」を実施する。(～3)／大学 Jr.サイエンス＆ものづくり「粘土で動いている人物を作ろう」を実施する。(～3)／8.23　大学 Jr.サイエンス＆ものづくり「こまと竹とんぼを作ろう」を実施する。(～24)／10.1　創業を目指す学生(卒業生)を支援するインキュベーション教育事業を開始する。／10.7　公開授業「金属工芸史」を開講する。(～H16.2.3)／10.24　山口昌伴氏(GK デザイン機構・道具学研究所長)による特別公開講演会「和風ものづくりの21世紀展望」を実施する。／12.2　本学にてラハティ・ポリテクニク学生の作品展開催する。(～12.15)
十六	4.1　独法化を期に短期大学開放センターを大学開放センターに名称変更し、同センターの事業に国際交流及び知的財産の取り扱いを加える。／GLOVIA　会計情報システム　Campus 及び物品請求システムが稼働する。／4.7　平成15年度寄贈作品展を開催する。／4.9　公開授業(前期：105科目、後期：85科目)を開講する。(～H17.2.3)／4.15　大学開放センターに職務発明専門委員会を設置する。／4.23　高等学校生徒を対象とした高岡短期大学の授業公開に関する高岡短期大学と富山県立小杉高等学校との協定書を締結する。(～平成17年3月末日まで、ただし、申し出がない限り毎年延長)／4.24　ラハティ・ポリテクニク　学生作品の相互交流展に関する覚書の一部変更(期間)する。／5.20　エントランスホールの愛称を TSUMAMA－HALL に決定する。／5.29　富山県立小杉高等学校生徒を対象とした公開講座「圧迫鋳造による銀の指輪作り」を開講する。(～6.26)／6.12　富山県立小杉高等学校生徒を対象とした公開講座「中国語とその背景研究」を開講する。(～7.31)／7.13　民間等の研究者を受け入れる受託研究員制度を制定する。／8.19　小中学生ものづくり講座「青銅のキーホルダーをつくろう－蝋型鋳造の体験－」を実施する。(8.19－20、8.23－24)／高岡市立看護専門学校生を対象とした公開講座「情報処理」を開講する。(～8.27)／10.19　坂東三津五郎氏(歌舞伎俳優)による特別公開講演会「江戸文化の華　歌舞伎における粋と意匠」を実施する。／12.14　富山県立富山北部高等学校生徒を対象とした公開講座「デザイン」を開講する。(～H17.1.19)
十七	4.11　公開授業(前期：106科目、後期：82科目)を開講する。(～H18.2.3)／5.28　富山県立小杉高等学校生徒を対象とした公開講座「圧迫鋳造による銀の指輪作り」を開講する。(～6.25)／6.10　国立大学法人新富山大学芸術文化学部創設記念東京シンポジウム「日本の未来と、地方・芸術文化・教育」－文化と自然の融合で－を開催／7.11　富山県立富山北部高等学校生徒を対象とした公開講座「デザイン」を開講する。(～H17.7.15)／8.8　小中学生ものづくり講座［金属をとかしてみがいて新発見」を実施する。(8.8、8.9)／9.30　国立大学法人新富山大学芸術文化学部創設記念フォーラム［世界が注目する日本の芸術文化］を開催。

補遺　学部長就任の挨拶にかえて

「日本も世界も、もっと美しさが必要だと思ったら」

―富山大学　芸術文化学部は知性と感性を融合します―

富山大学　芸術文化学部長　前田一樹

芸術文化学部は、我が国でも有数の伝統的工芸の本拠地である、工芸都市高岡にキャンパスを置いています。高岡は日本の歴史や文化が、長く息づいている町であり、様々な行事や祭事が続けられています。それらを支えてきたのは地域の人々であり、技術や知恵の伝承者としての、作家や職人達でもあります。今も多くの人々がその一流の技術を活かし制作を続けています。またその反面、個人の活動とは違い、世界から注目を浴びる企業があります。ニューヨークの近代美術館から出品依頼を受けるエポックメイキングな製品開発をする企業や、世界のＦ１のレーシングチームから、アルミホイルの製造開発を依頼される国際的な技術力を持った、トップメーカーも存在しています。発想力や技術力を有するオンリーワン企業は、いまや世界とダイレクトに繋がり更なるビジネスや技術開発が行われています。これらの企業は伝統の継承と共に、知や夢の拡大とその実現化に向けて革新的な挑戦と努力を続けています。これらの企業や職人の現場を数多く持つ「町に学び」「人に学び」ながら、創り手として、また使い手として幅広く海外の大学や異文化と連携しながら、学際的研究と国際的視野に立ち、明日の日本の文化を創新する個性豊かな「人材」の育成に努めたいと考えています。

「富山県や高岡市が学生を育てるキャンパスです」

都市には様々な「時代の文化」があります。建築、アート、メディア、ファッション、食、文化イベント等、毎日見たり、聞いたり、触れたり五感から直に刺激を受けており、クリエーターを志す人達にとっては、とても大事な要素であると思います。また、新しい技術、新しい素材、時代の先端を行く様々な文化活動にも参加できます。残念ながら地方都市にあっては、この様なものに直に触れ体感し、感動する機会は少なく、本物とはかけ離れたバーチャルな世界からの知識が主な情報源になりがちです。一方、クリエーターとして育つためには、何が必要な要素で、創作意欲をかき立てるものとは何か、発想の源になりうるものは何か、を考えてみたいと思います。

それは決して都市で人が創り出した人工的世界だけではないように思えます。地方都市では自然の現象や伝統文化の世界を五感で体感でき、それが心の中に創造性を育む要素として徐々に蓄積されます。四季が作り出す景色、季節の暮らしの変化、手にとり、口にする事が出来る食材、その新鮮な姿、厳しい気候・風土から生まれた生活の知恵、観光目的のイベントではない暮らしに即した行事など、これらをリアリティーのある形で実感できます。

この様な立地を持つ本学部は、日本の原風景を直に感じる事ができる数少ない総合大学の中の芸術文化学部と言えます。

「ローカルこそグローバル」

世界が日本の芸術文化を取り入れはじめています。長い歴史の経過が地に着いた日本の職人文化を進化させ、その道程はいつしか地域の自然と共生し、限りある資源の循環を取り込んだ機能美を生み出しました。今これらの日本文化の考え方が世界にとって大きな価値を持ちはじめています。ファーストからスローへの新しい価値の創造に見られるように、自然のリズムを超えた加速の時代から、大きく逆方向に時代の振り子が振れ始めています。

芸術文化学部は今後の日本の発展に、これらの推進役としての責務を負っているように思えます。世界が求める新しい価値の創造と、地域の国際化の両面を当面の目標と考えています。人と文化を育む芸術文化学部のキャンパスは、大学であり、工芸都市高岡であり、富山県です。都会が創る感性とは違う、「地方がチャーミング」に感じられる、生活者の新たな価値の創造こそ、今後の日本の発展を支える重要な柱の一つと考えています。

編集後記

高岡短期大学が創設されてから平成17年で満22年間が経ちました。平成17年９月30日に高岡短期大学はその看板を下ろし、10月１日から富山大学芸術文化学部として再出発することになりました。これを機会に記念誌「高岡短期大学22年の歩み」を編纂することになりました。その趣旨は、西頭徳三学長が本誌の巻頭言で述べておられる通りであります。

記念誌は第１部―回想編、第２部―資料編の２分冊にすることが決定されました。第１部「回想編―二上キャンパスへの想い―」は関係各位のご協力の下に平成17年９月30日付けで無事刊行することが出来ました。また、第２部「資料編―創設から芸術文化学部の開設まで―」も予定通り平成18年３月１日に発刊することが出来ました。第２部―資料編の各項目について解説を分担執筆していただきました教職員の皆様、そして編纂作業に携わられた編纂委員各位の積極的なご協力に心から感謝申し上げます。

高岡短期大学の閉学と新しい富山大学芸術文化学部への移行を契機に編纂いたしました、この記念誌を末永く皆様方のお手元にお留め頂き、高岡短期大学時代の歴史とその思い出を懐かしんで頂けましたならば記念誌編纂委員一同この上ない喜びといたすところであります。

学内外にわたる多方面の多くの方々、西頭学長を初めとする教職員の皆様、そして卒業生や在学生の皆様からのご協力とご支援を頂きましたことに心から感謝いたしております。

なお、至らぬところが今後多々出てくるかと存じますが、これ全て委員長の責任に帰するところであります。その節はどうかご叱咤の後、寛容なご配慮とご容赦を頂戴いたしたいと切に願っております。

これをもちまして、記念誌編纂委員会を解散させていただきます。有難うございました。（横田記）

記念誌編纂委員会

（委　　員）　安達博文　磯部祐子　沖　和宏　久保欣五　高橋誠一　立浪　勝
堀江秀夫　○宮崎雅司　村上恭子　◎横田　勝　吉田俊六
（◎委員長、○副委員長）

（編集補佐員）　川上涼子

高岡短期大学二十二年の歩み

第２部　資料編― 創設から芸術文化学部の開設まで―

平成18年３月１日発行

編集　記念誌「高岡短期大学二十二年の歩み」編纂委員会
発行　国立大学法人　高岡短期大学
〒933-8588　富山県高岡市二上町180番地
電話　0766-25-9111（代表）

印刷　能登印刷株式会社

表紙デザイン　専攻科　産業デザイン専攻１年生　岸本万由子